

活動報告 2011

2012 年 3 月 31 日

東北大学東北アジア研究センター

活動報告 2011

2012 年 3 月 31 日

目 次

巻頭言	1
2011 年度行事表	2
総合的自己評価	3
(1) 基本理念	4
(2) 概念図	4
(3) 組織運営活動	5
(4) 研究活動	14
(5) 教育活動	20
(6) 社会貢献活動	21
(7) 外部評価・自己評価	25
組織運営活動	27
(1) 人員配置と業務分担	28
(A) 教員等の配置、研究組織構成状況	28
(B) 現職専任教員等の年齢、勤続年数、博士号取得状況	29
(C) 専任教員の最終出身大学院	29
(D) 研究支援組織の整備・機能状況	29
(E) 教育研究支援者受け入れ状況	30
(F) 客員教授（海外）受け入れ状況	30
(G) 兼務教員受け入れ状況	35
(H) 非常勤講師受け入れ状況	35
(I) 東北アジア研究センターフェロー	36
(J) その他研究員	36
(K) センター内委員会構成図	37
(L) 委員会名簿	38
(2) 研究資金	43
(A) 経費総額	43
(B) 歳出決算額（国立学校特別会計／大学運営資金・寄付金）	44
(C) 科研費の申請・採択状況	44
(D) 外部資金受入状況	45
研究活動	51
(1) プロジェクト研究ユニット	52
(A) 2011 年度センター・プロジェクト部門研究ユニット一覧	52

プロジェクトユニット研究年度報告書	
歴史資料保全のための地域連携研究ユニット	53
リモートセンシング研究ユニット	64
東アジアにおける移民の比較研究ユニット	73
シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット	79
21世紀東北アジア地域像の構築に関する研究ユニット	84
東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット	92
東アジア出版文化研究ユニット	96
森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット	102
(2) 共同研究	106
(A) 2011年度センター共同研究課題一覧	106
共同研究報告書	
北アジアにおける帝国統治とその遺産に関する研究	107
客家研究の総括と展望	111
地域社会の人材としての「外国人花嫁」の共同調査	115
展示実践を通じた北方人類学における社会還元の可能性の探求	119
栗原市一迫 川口地区の歴史資料の所在調査と保全事業	125
仙台市沿岸津波被災地の歴史・文化・景観の記録化	131
東アジア近世社会における出版文化の意義	135
氷融洪水とその社会的対応からみる極北圏地域社会の比較研究	140
東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究	146
東日本大震災の被災地における民俗文化の復興をめぐる地方行政と その支援にかかわる方法論の探求	153
(B) 過去に実施した共同研究・プロジェクト一覧	157
(3) 研究紹介発表	160
(4) 学術協定	161
(A) 学術協定による海外の学術機関等との連携強化	161
(5) 研究成果公開	163
(A) 既刊の刊行物	163
(B) 2011年度に実施された公開講演、共同研究会等	171
(C) センターが作成し公開中または公開予定のデータベース	176
教員の研究活動(2011年度分)	177
ロシア・シベリア研究分野	
寺山 恭輔	178

高倉 浩樹	180
塩谷 昌史	186
徳田由佳子	188
モンゴル・中央アジア研究分野	
栗林 均	190
岡 洋樹	193
柳田 賢二	196
中国研究分野	
磯部 彰	200
瀬川 昌久	205
明日香壽川	208
上野 稔弘	211
日本・朝鮮半島研究分野	
平川 新	214
石井 敦	220
地域生態系研究分野	
鹿野 秀一	225
地球化学研究分野	
石渡 明	228
後藤 章夫	234
宮本 毅	236
平野 直人	238
地域計画科学研究分野	
奥村 誠	242
大窪 和明	246
環境情報科学研究分野	
工藤 純一	250
資源環境科学研究分野	
佐藤 源之	254
横田 裕也	262
防災科学研究拠点	
佐藤 大介	265

巻頭言

3.11 東日本大震災により本センターが活動拠点とする川北合同研究棟は屋上棟が崩壊し、5階建ての建物本体への危険性から2011年10月まで全面的に建物使用を禁止してきた。さらに追い打ちをかけるように、4月に屋上の破壊部分から大量の雨水が建物内部に進入し、資料室、教員室、会議室の一部に到達した。地震の強振動によりほとんどすべての部屋で書棚から書籍が飛び出したり書棚が崩壊するなどの被害があった上、資料が水をかぶり、その後建物内部全体がカビ蒸される状態に陥るなど、間接的な被害は震災後も拡大した。暫定的に危険箇所を除去したので川北合同研究棟の本センター使用部分については、2011年10月以降、研究居室に戻りはじめたが、本質的な建物の耐震強化工事が2012年夏以降に予定されている。

約半年間、研究本拠を失った本センターの教員、学生ならびに事務室、図書室は川内、片平そして青葉山の各キャンパスに分散して研究活動の維持に努めた。本活動報告書はこうした多難な時期にセンター教員が続けてきた研究成果をまとめたものである。

東北アジア研究センターでは東日本大震災発生の数年前に、「防災科学研究拠点」として東北アジア研究センターと学内の多数の部局教員が参加する研究組織を立ち上げた。従来の理系だけにとらわれず、文系の特色を生かした防災のための研究を発展させる努力を行ってきており、定期的な研究交流活動を進めてきたところであった。文部科学省より概算要求が認められ、活動が活発化してきたところで今回の震災が発生した。

文化財保護活動等はただちに被災地での活動を開始し、センター内多くの教員が震災の検証と復興のための科学・学術研究を進めた。こうした活動の一部は2012年に東北大学に設立された災害科学国際研究所の研究活動に引き継がれていく。「地域研究」とはどのような学問であるべきかを問いかけつつ、災害を通じて強く社会との結びつきを感じながら過ごした1年であったように思う。

本活動報告を多くの方にご覧いただき、私たちの研究成果と、その進め方について、外部から多くのご意見を賜れることを期待しております。

2012年3月
センター長 佐藤 源之

2011 年度行事表

期 日	行 事
2011 年 4 月 7 日	センター運営会議
2011 年 4 月 18 日	臨時センター全体会議
2011 年 4 月 25 日	センター運営会議
2011 年 5 月 23 日	センター運営会議
2011 年 6 月 27 日	センター運営会議
2011 年 7 月 19 日	センター運営会議
2011 年 8 月 10 日	センター研究紹介発表会
2011 年 9 月 26 日	センター運営会議
2011 年 10 月 24 日	センター運営会議
2011 年 10 月 26 日	部局評価ヒアリング
2011 年 11 月 28 日	センター運営会議
2011 年 12 月 3 日	センター公開講演会「途絶する交通、孤立する地域～人と地域の対応」
2011 年 12 月 26 日	センター運営会議
2012 年 1 月 23 日	センター運営会議
2012 年 1 月 30 日	臨時センター運営会議
2012 年 2 月 19 日	センターシンポジウム「聖典とチベット－仏のことは求めて」
2012 年 2 月 27 日	センター運営会議
2012 年 3 月 18 日	センター公開講演会 伊達市噴火湾文化研究所・東北大学東北アジア研究センター第 3 回学術交流連携講演会「仙台・亘理と伊達市との連携を強める」
2012 年 3 月 26 日	センター運営会議

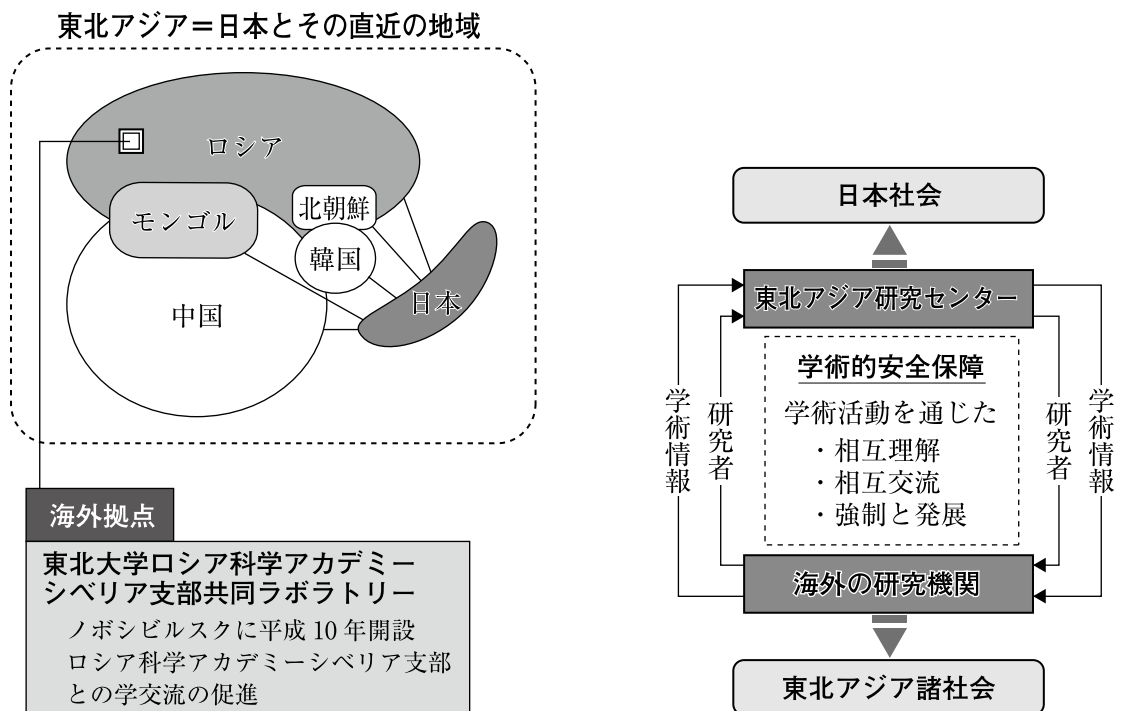
総合的自己評価

(1) 基本理念

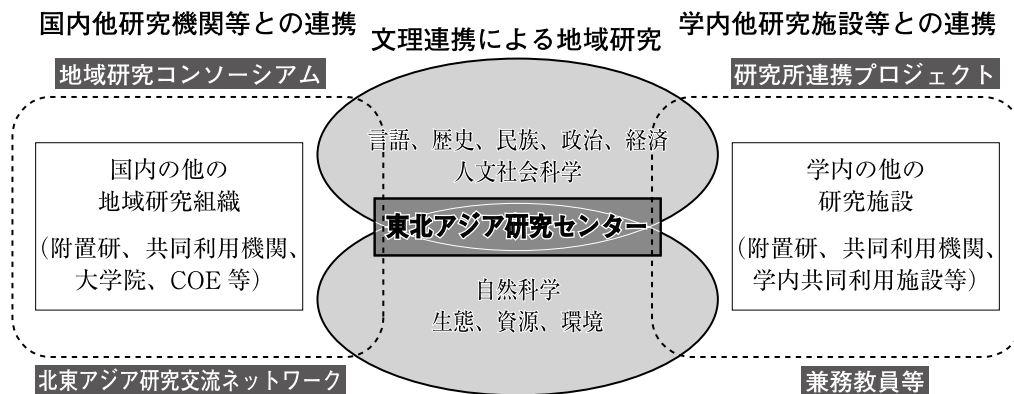
東北アジア研究センターは、東北アジア地域（東アジア・北アジア・日本）の文化・社会・自然・環境などの諸問題を学際的・総合的に研究することを目的とし、研究成果の社会的還元及び地域の共生実現に寄与すること、並びにそのための人材を育成することを使命としている。東北大学の研究所・研究センターの中では唯一人文社会科学系分野を主体としている本センターは、本学の人文社会科学の研究水準をより一層高める重要な任務を負うと同時に、等しく大きな比重を占める理系諸分野と連携し、総合的な地域研究の確立と推進をその主要な目標としている。そして、こうした特色を活かしつつ、東北アジア地域研究において国内はもとより国際的な一大研究拠点となることを目指している。方法論的には、人文社会科学のアプローチに加え、自然科学の方法を有効に連携させた学際的・総合的な研究方法の開発を志向しており、そのために文系・理系双方の研究者が共通の評価を下し得るような領域の研究の推進に努めている。また、その研究成果については、学会報告や学会論文等としてだけではなく、本センターの広報誌や成果刊行物、公開講演会、公開シンポジウム、ホームページによる研究成果・データ公開などを通して広く社会に還元することに努めている。

(2) 概念図

〔東北アジア研究センターの地域研究理念〕



〔東北アジア研究センターの研究戦略〕



(3) 組織運営活動

文系・理系の研究者の連携による東北アジア地域研究を目的とする本センターでは、文理それぞれの研究・教育文化を十全に活かしながら、効果的な研究遂行環境を整備することが極めて重要である。現在の組織態勢は、平成 20 年度に実施した組織改編に基づいている。以下、本年度のセンターの組織運営について報告を行う。

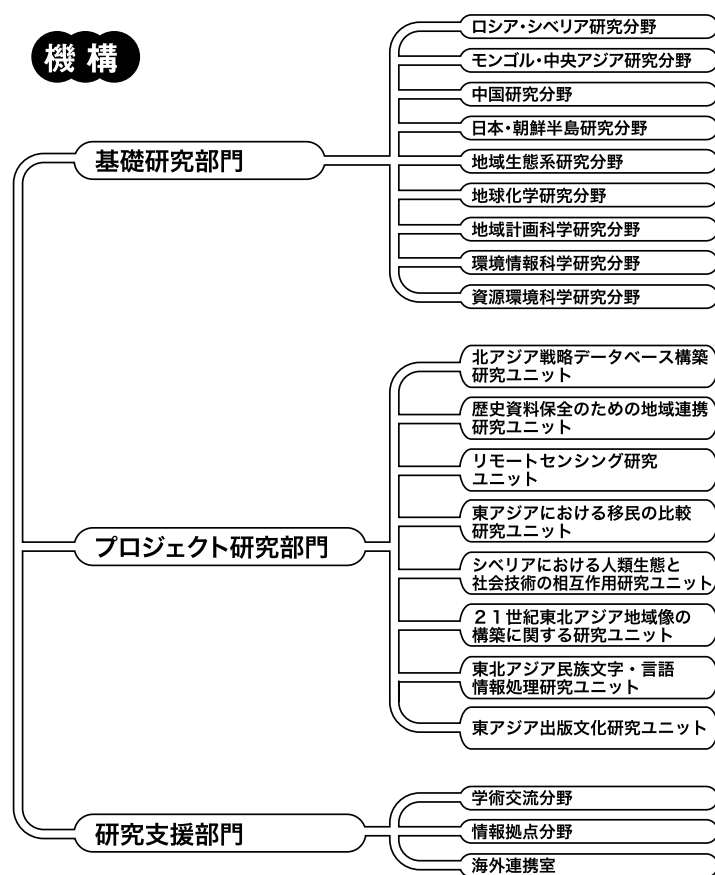
教授、准教授の選考は、センター長を委員長とする選考委員会を設置して選考し、教授・准教授から構成される運営会議に候補者を提案し、可否を決議している。助教・助手については、分野教授からの推薦にもとづいてセンター長が運営会議に提案して可否を決議している。本センターでは教授、准教授人事については公募制を原則とし、人事選考過程について外部からの開示請求があった場合にも対応できるよう、透明性の確保に心がけている。

本センターには、教授・准教授・助教・助手が設置されている（助教 6 ポストの内、4 人は任期なし、2 ポストは任期付き）。助手 1 ポストについては、平成 19 年 4 月以降の任用者を任期付き（最初の任用時 2 年、1 年ずつ二回更新可）とし、人事の活性化と人材の高度化を目指した措置が行われている。また教授・准教授にテニユア制度を導入を検討している。

人事採用面では男女共同参画体制実現に向けての取組に引き続き努力している。教授・准教授の選考委員会委員長であるセンター長は、応募者の男女のうち、研究業績が対等であれば女性を優先的に候補とすることを心がけている。また助教・助手の人事は、分野の教授の推薦にもとづいてセンター長が運営会議に提案するが、その選考にあたってセンター長は担当教授に対して、応募者の内研究業績が対等であれば女性を優先的に候補とするよう要請している。また常時 2 名の外国人客員研究員（客員教授・客員准教授）を招聘し、国際的レベルの研究水準の確保に努めており、本年度は中国 4 名、モンゴル 1 名、アメリカ 1 名を外国人客員研究員として招聘した。

本学中期計画における「基盤研究の重要性及び基盤研究と応用研究の不可分性に照らし、各部局・研究者の自由な発想と独創性のある研究を支援、推進する」ための措置として、研究センターの研究目的をより高度に達成し、社会に対する学術的貢献機能を高める目的で、平成19年4月1日より実施した基礎研究部門、プロジェクト研究部門、研究支援部門から成る組織編成により活動を行っている。また、センター教員及び学内文系諸部局との研究協力を支援するために、コラボレーション・オフィスを設置し、職員2名を雇用し、業務に当たらせている。

センターの事務組織は、文学研究科事務機構の所管となっており、文学研究科事務長がセンター事務長を兼ねるほか、専門員1名、事務職員（主任）2名、事務補佐員4名、技術補佐員1名、図書室事務補佐員2名を置き、教員の研究活動を支えている。



基礎研究部門

基礎研究部門は9分野からなり、文系については研究対象とする地域別に「ロシア・シベリア」「モンゴル・中央アジア」「中国」「日本・朝鮮半島」の4分野を、理系についてはディシプリン・ベースに「地域生態系」「地球化学」「地域計画科学」「環境情報科学」「資源環境科学」の5分野をもって構成している。かかる編成をとるのは、文系は専門分野・使用言語などの研究技術・方法が地域に即して共有されているのに対して、理系諸分野はむしろ研究ディシプリンに即した研究室態勢を維持することがより効果的との判断によるものである。

センターの専任スタッフは、基礎研究部門のいずれかの分野に所属して、各人の専門分野に関する研究を行う一方で、センターの他分野教員や学内外の研究者と共同研究を組織して日常の研究活動を展開している。また、外部資金による大型プロジェクトを実施する場合には、プロジェクト研究ユニットを組織し、内外の研究者・研究機関と組織的に連携した共同研究による研究活動を展開している。

また学内他部局の研究者との研究協力・連携のために、兼務教員を設けている。平成23年度はロシア・シベリア研究分野に文学研究科から教授1名、助教1名、中国研究分野に教育学研究科から准教授1名、地域生態学研究分野に学術資源研究公開センターと生命科学研究科から教授各1名、地球化学研究分野に理学研究科から教授1名を、そしてプロジェクト研究部門「シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット」に文学研究科から准教授1名を迎えている。

個々の分野の専任教員の研究活動の詳細は「教員の研究活動」の項目で詳述されるが、その概略をまとめると、以下のごとくである。

「ロシア・シベリア研究分野」は、ロシア近現代史、文化人類学、ロシア経済史とロシアの科学技術に関わる研究を行う研究者を擁している。ロシアは、本センターにおける研究の主要なターゲットであるが、ロシア側の協力機関との交流では、本分野の教員が主導的な役割を果たしている。平成20年度からノボシビルスク国立大学で実施している「日本・アジア学講座」の運営では、幹事役の役割を果たしているほか、全学のロシアとの交流活動にも積極的に貢献している。全学のロシア交流推進室へは同分野准教授2名、助教1名、助手1名が室員として参加している。また、中国研究との共同研究や環境研究など、学際的なプロジェクトを実施している。「モンゴル・中央アジア研究分野」は、言語学と歴史学の教員から成り、それぞれモンゴル・中国・中央アジアなどでの調査や、モンゴル科学アカデミーや内蒙古大学・内蒙古師範大学など現地研究機関の研究者との研究協力やシンポジウムを積極的に開催している。「中国研究分野」には、文学・文化人類学・環境研究の研究者がおり、東アジアの出版文化・宮廷演劇の研究や、環境問題の研究、中国南部のエスニシティーに関する研究などを行っている。ここでは、

国内外の研究者を集めた大規模な研究プロジェクトが外部資金により運営されているほか、行政・民間と連携した環境研究の面では、マスコミなどを通じた積極的な発信を行っている。「日本・朝鮮半島研究分野」では、昨年に引き続き歴史資料保全に関わる活動を行う一方で、全学の研究者を糾合した防災拠点構築を進めている。歴史資料保全・防災に関わる実践的研究活動は、新聞などでも報道され、社会の注目を集めている。平成 23 年度には、学内で災害科学国際研究所の設置準備が進められ、平成 24 年度からの発足が決まったが、防災拠点の研究グループはその中核となっている。地域生態系研究分野は、国内での研究とともに、とくにロシア科学アカデミーシベリア支部の研究者との共同研究を進めている。地球化学研究分野は、地質学を中心として、東北アジア大の規模での地質構造の研究を行い、ロシア・中国・モンゴルの研究者との連携を行っている。地球計画科学研究分野は、土木計画学分野で都市間の交通システムに関する研究を行っている。この分野ではシベリアに関してロシア・シベリア分野との共同研究を行っている。環境情報科学研究分野は、情報科学の分野で NOAA 画像データベースの構築を担っており、またロシアとの研究協力を積極的に進め、本分野教授はロシア交流推進室の副室長となっている。資源情報科学研究分野は、電波応用工学分野において、地中レーダやリモートセンシング技術を駆使した災害救助、地雷探知、地下水、遺跡探査などの応用研究を国際的な協力により進めている。

いずれの分野においても、それぞれの専門分野の研究をベースに東北アジア諸地域に関わる研究を推進しながら、これを東北アジア大の視野へと接続する研究を進めている。換言するならば、基礎研究部門の各分野は、東北アジア地域理解を導出する上で不可欠となる各分野の実証的研究が国際的・学際的に展開される場として機能している。

また、学内研究所群の研究協力として実施されている研究所連携プロジェクトでも、「スマートエイジングを支える社会システムテクノロジー」研究を進めている。

センターでは、専任スタッフ以外に産学官連携研究員（1 名）、専門研究員（7 名）、教育研究支援者（8 名）を設置しているほか、学振特別研究員（2 名）、客員研究支援者（3 名）、リサーチアシスタント（5 名）、客員研究員（2 名）を置き、若手・外部の研究者に研究の場を提供している。また本年度は、中国政府派遣研究員として 1 名を受け入れている。

プロジェクト研究部門

その一方で、分野間の横断的な研究組織の編成を可能とし、かつ大型資金獲得の受け皿とするために、「プロジェクト研究部門」が設置されている。これは、従来の共同研究に研究ユニットとしてのより組織的な裏付けを与えることによって、より大規模な学際的研究の組織化と遂行を可能とすることを目指したものである。平成 23 年度には、八つの研究ユニットが活動している。

プロジェクト研究部門の各ユニットの意義は、個人の研究では不可能な大規模な共同研究とこれを可能とする国際的・分野横断的研究者ネットワークの構築にあり、その組織的な基盤として機能している。例えば磯部彰教授を代表とする「東アジア出版文化国際拠点の形成研究ユニット」は国内研究者の広い協力態勢を構築するばかりでなく、中国・韓国の研究者と恒常的に研究交流を組織している。また平川新教授を代表とする「歴史資料保全のための地域連携研究ユニット」はその名のとおり宮城地域の民間に所蔵される歴史資料の保全のために、大学・行政・民間を大規模に連結した態勢を構築した。これは研究者の史料への関心と、文化財保護という観点を結びつけたものであり、大学における社会貢献を強く意識したものである。また、瀬川昌久教授を代表とする「東アジアにおける移民の比較研究ユニット」は、教育学研究科准教授で、センター兼務教員でもある李仁子准教授と連携したもので、学内における部局間研究協力のモデル・ケースと言える。また岡洋樹教授を代表とする「21世紀東北アジア地域像の構築に関する研究ユニット」は、東北アジア研究者データベースの構築や、国内研究機関との組織的連携を行い、富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センターとの部局間協定を締結している。

このように研究ユニットは、特定の課題の研究を進めると同時に、研究ネットワーク・交流連携態勢構築を意識した仕掛けとして機能するものである。

研究支援部門

研究支援部門は、客員研究員（客員教授）として国内からの教員5ポスト、外国人研究員2ポストからなる学術交流分野と、協定組織であるロシア科学アカデミー・シベリア支部と相互設置した共同ラボの運営などの国際的活動を支援する海外連携室（国際交流委員長兼務、助手1名配置）が設置されている。客員研究員のポストは、必要に応じてセンターの各分野・ユニットが研究連携を創出するために活用するもので、センターの国際的研究活動にとって重要な意義を有している。そこでは、これまで欧米の研究者招聘の実績もあるが、大多数は東北アジア諸国の研究機関に所属する研究者であり、地域研究にとって不可欠な現地研究者との協力による双方向的な地域理解の創出に寄与する制度となっている。

情報拠点分野（海外連携室）は、主としてロシア科学アカデミー・シベリア支部との研究交流に関わる業務を行っているほか、センターが実施するさまざまな企画の運営に協力している。平成23年度、本分野は、昨年度に引き続いてノボシビルスク国立大学における「日本・アジア講座」の実施や、全学のロシア交流推進室の活動への参画などの業務を行った。

またこの部門には、防災科学研究拠点事務局が置かれ、本センターでは助教1名、教育研究支援者1名が配置されている。この拠点は、本センターの平川新教授が世話役を

つとめ、文学研究科・経済学研究科・法学研究科・工学研究科・理学研究科・医学系研究科・情報科学研究科・加齢医学研究所と連携して組織したものであるが、平成 24 年度から本学に設置されることになった災害科学国際研究所の中核となった。センターが推進した活動が、全学的組織として研究所設置の基盤となったことは、たいへん喜ばしい。

コラボレーション・オフィス

平成 21 年 4 月から文系部局が行う人文社会系の研究活動支援のためにコラボレーション・オフィスを設置した。このオフィスは、東北大学の文系振興策の一環として、文系七部局（文学研究科・経済学研究科・法学研究科・教育学研究科・国際文化研究科・東北アジア研究センター・教育情報学研究部・教育部）が組織する文系部局長協議会が運営するもので、協議会の下にコラボレーション・オフィス運営委員会が設置されている。オフィスには職員 2 名が勤務している。

継続して実施しているリベラルアーツサロンの運営や、片平まつり、公開講演会、シンポジウムなどの東北アジア研究センター内部の業務支援のほかに、法学研究科、文学研究科、国際文化研究科など文系他部局が企画運営する催し物への支援業務を行った。これは、文系部局の連携、人文社会科学振興を唱った「井上プラン」への貢献にほかならない。

また東北アジア研究センター・ニューズレターや学術刊行物・機関誌『東北アジア研究』の出版、公開講演会・東北アジア研究センターシンポジウムの開催支援など、センターの業務を行っている。

コラボレーションオフィスの活動は、大学から高く評価されているとともに、次第に文系諸部局の認知を受けて具体的な業務依頼を受けるようになっており、部局横断的な研究支援組織としての実績を上げている。

国内の研究教育機関との交流・連携

センターは、国内の研究教育機関との連携のために、部局間学術協力協定を締結している。これまで、伊達市噴火湾文化研究所（2006 年 2 月）、北海道立北方民族博物館（2008 年 9 月）、富山大学極東地域研究センター（2010 年 5 月）、島根県立大学北東アジア地域研究センター（2010 年 5 月）と学術交流協定を締結し、研究協力を行っている。またセンターは、全国的な研究コンソーシアムにも積極的に参加している。すなわち地域研究コンソーシアム（JICAS）では、2004 年の設立以来、幹事組織に名を列ねている。本年度は、上野稔弘准教授がコンソーシアム運営委員として、2011 年度コンソーシアム年次大会で一般公開シンポジウム「『情報災害』からの復興：地域の専門家は震災にどう対応するか」でセッションを企画している。また、北東アジア研究交流ネットワー

ク（NEASE-Net）でも幹事組織として、副代表幹事を出しているほか、ネットワーク広報委員会の役割を果たし、ニューズレター、年報の編集刊行を行っている。

また本センターは、附置研究所長会議第三部会に参加しているが、本年度は部会長をつとめている。

また本センターの教員は、それぞれの分野での学会でも重要な役割を果たしている。教員が理事・評議員などの役職についている学会は、日本文化人類学会、内陸アジア史学会、日本モンゴル学会、日本道教学会、東方学会、環境経済政策学会、日本地質学会、日本地球惑星科学連合、日本都市計画学会、IEEE Geoscience and Remote Sensing Society など、東北アジアや個別分野に関わる学会に及んでいる。

国際的交流・連携

本学の中期計画は、「国際的ネットワークの構築による国際共同研究の推進」をうたっている（本学中期計画「2. 研究に関する目標を達成するための措置」の③－1）。センターでは、地域研究に不可欠な国際的研究交流・連携態勢の整備を引き続き進めている。創設以来、センターが目指してきたのは、本センターが研究対象とする東北アジア諸国（ロシア、中国、モンゴル、韓国など）の研究機関との研究交流の推進である。地域を対象とした研究においては、対象とする国々の研究者との連携が不可欠だからであり、本センターが構築する国際的ネットワークの特色であると考えている。これまで、ロシア科学アカデミー・シベリア支部（1992年8月）、モンゴル科学アカデミー（2000年8月）、ノボシビルスク国立大学（2003年7月）、モンゴル科学技術大学（2001年11月）、イタリア・フィレンツェ大学との大学間学術交流協定の世話部局となり、アメリカ合衆国アラスカ大学、中国吉林大学（世話部局：大学院理学研究科、2001年3月）、タイ・アジア工科大学院（1998年11月）との大学間学術交流協定の協力部局となっている。また部局間協定としては、中国広東省民族研究所（2001年6月）、ロシア連邦ユゴラ情報技術研究所（2002年10月）、ロシア科学アカデミー・シベリア支部スカチョフ森林研究所（2002年10月）、ロシア科学アカデミー極東支部経済研究所（2005年9月）、国際技術投資振興財団（IFTI）（2005年10月）、ロシア科学アカデミー・シベリア支部人文学北方民族問題研究所（2007年3月）、中国内蒙古師範大学蒙古学学院（2008年4月）、韓国高麗大学校中国学研究所（2008年4月）、同日本学研究センター（2008年4月）、中国内蒙古大学蒙古学学院（2008年9月）と協定を締結している。本年度には、あらたに内蒙古師範大学旅游学院との間に部局間学術交流協定を締結した。このように、センターでは、ロシア連邦、中国、モンゴル、韓国との研究交流を可能とする態勢構築を進めている。

これまでセンターで実施してきたロシア科学アカデミー・シベリア支部との研究交流に関しては、平成21年度から本部にロシア交流推進室が設置され、全学態勢での交流

展開が図られている。これにともないノボシビルスク・アカデムゴロドク内と東北アジア研究センター内に設置された共同ラボを通じた活動なども同室が管轄することとなった。ロシア交流推進室には、本センターから六名の教員が参加し、全学的な交流に貢献している。

ロシアとの交流に関して、平成 20 年度から 5 年の期間で、ロシア連邦ノボシビルスク国立大学東洋学部での訪問講座「日本とアジア」を実施している。本年度は 4 年目で、9 月 19 ～ 23 日に学内他部局教員 1 名（高等教育開発推進センター佐藤勢紀子教授）によるレクチャーを実施し、同時に本学木島明博理事と国際教育院ザンベイソフ・ノルボシン准教授による東北大学の紹介が行われた。このことは、本学中期計画が唱う本学の教育の国際化における「受入れ留学生の増員」にあたり、センターが作り上げてきた国際的ネットワークが貢献しうるものであることを示している。

また本学中期計画は、「研究実施体制等に関する目標を達成するための措置」として「外国人研究員・教員の受入れ環境の整備を進める」（本学中期計画「(2) 研究実施体制等に関する目標を達成するための措置」②－1）ことを唱っている。本センターでは、外国人研究員（客員教授）2 ポストを有するが、これを活用して、主として東北アジア地域諸国の研究者を招聘しているが、研究室の提供、受入教員との交流を通じた日本の該当分野の研究者へのアクセスの確保など、さまざまな便宜を提供している。また、国際交流基金などの外部組織の資金による招聘にも実績を有している。その際、国際的言語としての英語ばかりでなく、センターの教員が研究遂行上身につけているロシア語、中国語、モンゴル語などの言語を用いた交流が行われており、東北アジア地域の指導的研究者の日本での研究を容易なものとしている。

研究活動の発信・広報

本センターのスタッフや研究会・講演会・シンポジウムなどの開催情報は、随時ホームページ（<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>）上で公開している。

広報情報委員会は、「東北アジア研究センター・ニューズレター」を刊行している。平成 23 年度には、49/50 合併号、51、52 号を刊行した。刊行されたニューズレターは、センターホームページで公開している（<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/handbook.html>）。またセンターが開催するセミナー、シンポジウム、公開講演会などの企画は、随時ホームページ上に掲載されている。

センターの研究成果発表の場として機関誌『東北アジア研究』を刊行している。本年度は、第 16 号を刊行し、論文 12 本を収録した。その内訳は、日ロ関係に関するもの 1 件、モンゴル語・文献に関するもの 3 件、中国史 1 件、日本史 1 件、モンゴル史 2 件、人類学・民俗学 3 件、中国文学 1 件である。『東北アジア研究』掲載論文は、ネット上で閲覧することが可能となっている（<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/publication01.html>）。

東北アジア研究センターが行う、東北アジア地域の学術機関および科学技術機関等との交流を助成し、その発展に寄与することを目的として、東北アジア学術交流懇話会を組織している。懇話会は、ニューズレター「うしとら」を刊行している。平成 23 年度には、48、49、50、51、52 号が刊行された。会員には、「うしとら」の外、東北大学出版会から刊行した東北アジア読本が配布されている。

センターの運営

日常のセンターの運営は、センター長・副センター長（2 名）・総務委員（2 名）からなる執行会議を中心に行っている。その下に 15 の委員会が組織され、執行会議メンバーを委員長として業務を分担して活動している（ページ「センター内委員会構成図」参照）。これらの委員会の中には、「地域研究コンソーシアム委員会」や「北東アジア研究交流ネットワーク委員会」が含まれる。この両委員会は、学外の地域研究の横断的組織に関わる活動を任務とするものであり、国内の研究者コミュニティとの連携を組織的に進めようとするものである。このようにセンターの委員会は、内部運営のみならず、学外・国外との研究連携・交流を組織的に進めることを視野に入れて組織されている。

本センターでは、各種ハラスメントの防止・対策のために、平成 17 年度よりセンター内に連絡ボックスを設置している。連絡ボックスが設置されてから現在にいたるまで、実際に連絡票が当センターのハラスメント防止対策委員宛に投函されたことはない。とはいえ、センター内の 3 カ所にわたってボックスが設置されていることは、各種ハラスメントの被害が発生した際の相談・連絡支援態勢をより効果的にしたと考えられる。また連絡ボックスには各種ハラスメント用であることが明記されており、ハラスメントの防止に対する恒常的注意の喚起に貢献していると思われる。

外部資金

平成 23 年度の外部資金獲得状況は、以下の通りである。

科学研究費補助金

特別推進	1 件	(27,700,000 円 間接 8,310,000 円)
新学術領域	1 件	(1,400,000 円 間接 420,000 円)
基盤 A	2 件	(8,800,000 円 間接 5,550,000 円)
基盤 B	5 件	(14,500,000 円 間接 4,350,000 円)
基盤 C	3 件	(3,100,000 円 間接 1,350,000 円)
挑戦萌芽	2 件	(2,000,000 円 間接 600,000 円)
若手 B	6 件	(5,900,000 円 間接 1,770,000 円)
学術図書		(1,400,000 円)

特別研究員奨励費 2 件 (1,300,000 円)

合計 77,200,000 円 間接 22,350,000 円

その他の外部資金

寄付金 1 件 (300,000 円)

共同研究 2 件 (7,100,000 円)

受託研究 8 件 (29,085,000 円)

合計 36,485,000 円

平成 23 年度のセンターの研究資金の内、競争的資金は 113,685,000 円であり、経費総額 588,000,000 円の内 19%を占めている。昨年と比較してほぼ横ばいである。

(4) 研究活動

研究の理念・目標実現のための研究推進企画・立案の組織的な取組としては、本センターの目標とする学際的・総合的研究を推進するために、総務担当副センター長のほか、研究戦略担当の副センター長を置き、同副センター長が研究推進委員会と国際交流委員会の委員長を兼務して、国の内外に目配りをした研究を推進する態勢をとっている。また将来計画委員会などにおいて将来的な研究展開のあり方に関する検討を行っている。

センターの研究活動は、スタッフがそれぞれの専門分野で個別に実施している研究と、研究グループを組織して行う共同研究、プロジェクト・ユニットとがある。特に後者では、成果・進捗状況報告の場として年一回の発表会を実施している。プロジェクト・ユニットの活動は、すべてが十分な研究資金獲得に成功しているわけではないものの、それぞれ全国的・国際的な研究協力態勢の構築を急速に進めており、論文等の形で成果が現れている。

研究推進委員会は、これらセンター教員・研究員等の研究を相互に理解し、関連情報を交換するために、毎月 1 回 1 人ずつ（持ち時間 20 分）、センター全体会議（構成員は教授・准教授・助教・助手・教育研究支援者）後に研究紹介を行っている。

〔東北アジア地域の全体に関わる研究〕

センターでは、例年春に東北アジア研究センター・シンポジウムを実施し、東北アジアの全体に関わるようなテーマで議論を行ってきた。これは、平成 14 年度から 18 年度まで実施した共同研究「東北アジア世界の形成と地域構造」（研究代表山田勝芳教授）の枠で企画した一連のシンポジウムを引き継いだものである。この共同研究では、以下

のシンポジウムを開催した。

平成 13 年度「東北アジア地域論の可能性：歴史学・言語学・人類学・政治経済学の視座」

平成 14 年度「東北アジアにおける民族と政治」

平成 15 年度「『中国研究』の可能性と課題」

平成 16 年度「開国以前の日露関係」

平成 17 年度「地域協力から見えてくる地球温暖化」

平成 18 年度「内なる他者＝周辺民族の自己認識のなかの『中国』 — モンゴルと華南の視座から」

共同研究終了後の平成 19 年度には、有志により次のシンポジウムが開催された。

平成 19 年度「帝国の貿易 — 18 ～ 19 世紀ユーラシアの流通とキャフタ」

平成 20 年度からは、新たに設置された公開講演会・シンポジウム企画委員会がシンポジウム企画業務を継承し、以下のシンポジウムを開催している。

平成 20 年度「ノマド化する宗教 浮遊する共同性 現代東北アジアにおける『救い』の位相」

平成 21 年度「歴史の再定義 旧ソ連圏アジア諸国における歴史認識と学術・教育」

平成 22 年度「歴史遺産を未来へ」

平成 23 年度「聖典とチベット 仏のことばを求めて」

これらのシンポジウムは、いずれも歴史学(東洋史・西洋史・日本史)、文化人類学、宗教学、民俗学、環境研究などの複数の学問領域や複数の国・民族にまたがる問題を、それぞれの分野のスタッフと国内外の研究者の講演・報告を通じて議論したものであり、分野横断的研究関心の創出と東北アジア地域概念の構築に大きく寄与するものと考えている。平成 23 年度のシンポジウム「聖典とチベット 仏のことばを求めて」ははじめて大学院文学研究科の後援で開催されたものである。これまでのシンポジウムの成果は、論文集として刊行されている。

〔ロシア・シベリア研究〕

ロシア関係では、ソ連史の寺山恭輔准教授が科研費によりモスクワのロシア連邦国家アルヒーフおよびロシア国立政治社会史アルヒーフでソ連の対新疆政策に関する史料を調査し、また旧レーニン図書館で論文・書籍を収集した。中国史の上野稔弘准教授と進めている共同研究「二十世紀の東北アジアをめぐる中国、ロシア史の課題と展望」の成果として、『スターリン、蒋介石と中国新疆』の刊行を準備中である。また論文として、「日

本・アジアから見たスターリン体制のソ連」(『新しく学ぶ西洋の歴史』)、書評「島田顕『ソ連・コミンテルンとスペイン内戦』れんが書房新社、2011 年」を発表している。

一方社会人類学の高倉浩樹は、「シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット」の代表を務め、二つの共同研究を運営した。共同研究「展示実践を通じた北方人類学における社会還元の可能性の探究」は、展示を用いた研究成果の社会還元の人類学の方法への効果を理論的に検討するもので、展示実践としてサハ共和国で民俗写真の展示を行った。また共同研究「氷融洪水とその社会対応から見る極北圏地域社会の比較研究」は、文化人類学、環境リモートセンシング、土木計画学、河川工学の研究者が参加した文理連携型の共同研究であり、ロシア・シベリアおよびアラスカ、カナダをもフィールドとして比較研究を行うものである。本年度は二回の研究会を開催するとともに、メンバーによる論文 7 件、発表 11 件の成果を出している。高倉は、2000 年以降行ってきたサハ人の生態人類学的研究の成果を『極北の牧畜民サハ — 進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌』、『シベリアとアフリカの遊牧民 — 極北と砂漠で家畜とともに暮らす』(曾我亨と共著)にまとめている。また高倉は、学内の教員学生とともに、東日本大震災の体験記録プロジェクトを運営し、成果を『聞き書き 震災体験 東北大学 90 人が語る 3.11』として刊行した。さらに、宮城県の委託事業として「東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査」を実施している。

またロシア経済史の塩谷昌史助教(ロシア経済史)は、19 世紀ロシア経済史の分野で研究を行い、「ロシア イヴァノヴォ市における産業構造転換」「19 世紀前半におけるロシアの綿織物輸出とアジア承認のネットワーク」「ロシアの製造業の競争力 — 輸入浸透率と輸出依存度 —」を発表した。

工藤純一教授(情報基礎科学)はロシア交流推進室副室長として本学とロシアの研究インフラの創出に関わる活動を行った。またロシア科学アカデミーと本学が開催したセミナーで森林火災で発生する CO2 削減システムに関する報告を行った。

奥村誠教授(交通工学)は、共同研究「氷融洪水とその社会対応から見る極北圏地域社会の比較研究」および総合地球環境学研究所のプロジェクト研究として、ロシア連邦サハ共和国における調査に基づき、冬季の道路への温暖化の影響を論じた論文を発表している。

石渡明教授(地質学・岩石学)は、平成平成 22 年 12 月に開催された公開後援会の内容を『東北アジア 大地のつながり』として刊行した外、ロシア極東のオフィオライトに関するロシアとの共同研究の成果を日本地質学会や日本地球惑星科学連合大会で報告し、また Geochemistry International 誌上で論文を発表した。

鹿野秀一准教授(微生物生態学)は、昨年度に引き続きシベリア・チャニー湖の生態学的研究を進め、安定同位体比を天然のトレーサーとして用いた食物網構造解析により、西シベリアのチャニー湖に生息する多様な宿主-寄生虫についてそれぞれ炭素・窒素安

定同位体比を測定し、濃縮係数を推定した。

徳田由佳子助手は、昨年度に引き続き、ロシアの新聞などを利用したデータベース作成を進めた。

〔モンゴル・中央アジア研究〕

モンゴル関係では、栗林均教授（言語学・音声学）が代表を務める「東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット」が、昨年度開催の国際ワークショップ「モンゴル語の辞書」に関わる論文2篇を『東北アジア研究』に掲載した。またユニットの研究成果として『「達斡爾語詞彙」蒙古文語索引』『「元朝秘史」傍訳漢語索引』を刊行した。

岡洋樹教授（東洋史学）は、「21世紀東北アジア地域像の構築に関する研究」ユニットが運営する科研費による共同研究により、モンゴルでの文書館調査を実施した。また近年の清代モンゴル社会に関する研究成果を総括する報告を内蒙古師範大学で行った。さらに内蒙古大学蒙古学学院開催のセミナーにおいて、報告を行っている。また共同研究「北アジアにおける帝国套地とその遺産に関する研究」研究会において、清初の盟に関する報告を行った。

中央アジアに関しては、柳田賢二准教授（スラヴ語学）が、中央アジアのロシア語教育において「誤り」とされてきた現象と現在の「民族間共用語」としてのロシア語の特徴との関係の解明のために、ウズベキスタンのタシケントのウズベキスタン科学アカデミー付属基板図書館で史料収集を行った。

〔中国研究〕

中国に関しては、磯部彰教授（中国文学）のプロジェクト・ユニット「東アジア出版文化研究」は、科研費特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」を資金として、共同研究「東アジア近世社会における出版文化の意義」を運営し、引き続き活発な活動を行っている。11月に第8回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会を東京で、第9回研究会を9月に神奈川で、第10回研究会を東京で、第11回研究会を富山でそれぞれ開催した。研究の成果として、磯部彰『旅行く孫悟空 — 東アジアの西遊記』、磯部彰編著『《西遊記》画三種の原典と解題』を刊行している。

文化人類学分野では瀬川昌久教授のプロジェクト・ユニット「東アジアにおける移民の比較研究ユニット」が、共同研究「地域社会の人材としての「外国人花嫁」の共同調査」（平成23年度）を立ち上げ、結婚によって日本に移住した韓国人・中国人女性を対象としたフィールド調査を行った。また同ユニットでは、科研費基盤研究(B)「被災地の民族誌 — 東日本大津波の被災者とそのコミュニティに関する人類学的研究」が採択されている。瀬川は、センター共同研究「中国の民族理論とその政策邸実践の文化人類学的検証 — 中華民族多元一体構造論を中心に —」の研究成果として、『近現代中国におけ

る民族認識の人類学』を刊行した。また瀬川は共同研究「客家研究の総括と展望」で研究会を開催、成果論文数として『客家の創生と再創生』を刊行した。また、『東北アジア研究』第16号に「氏姓のポリティクス — 現代中国における文化資源としての族譜とその活用」を発表している。

明日香壽川教授は、アジア地域の環境問題における国際協力の可能性に関する研究を進めているが、とくに中国の温暖化政策の評価や国際交渉の展開について、文章を発表している。

上野稔弘准教授（中国現代史）は、引き続いて海外での史料調査を進めている。本年度は、英国国立公文書館で新疆・モンゴルをめぐる中ソ関係関連の英国政府外交文書を、米国国立公文書館では戦後中国の辺疆民族問題に関する公文書を、議会図書館ではオーウェン・ラティモア文書の調査を行っている。研究成果としては、「中国の国歌 民族論の系譜における中華民族多元一体構造論の位置づけについて」（『近現代中国における民族認識の人類学』第II部第9章）がある。

〔日本・朝鮮半島研究〕

平川新教授（日本近世政治経済史）は、本年度も研究ユニット「歴史資料保全のための地域連携研究ユニット」の活動を進めている。震災後各地で34回に及ぶ講演・シンポジウムのパネルを行った。平川教授の講演活動は、仙台、京都、東京、高知、落合、石巻、岩沼、岡山、大阪、神戸、弘前、奈良、三重、浜松など、全国各地に及んでいる。また学界においても、『歴史学研究』に「東日本大震災と歴史の見方」を発表したほか、昨年度開催された東北アジア研究センターシンポジウムの報告論文集『歴史遺産を未来へ』を刊行している。同時に平川教授は、東北アジア研究センターのユニットと、東北大学防災科学研究拠点、宮城歴史資料保全ネットワークおよび文化庁内の委員会と連携して被災地で歴史資料・文化財のレスキュー事業を行っている。また歴史研究の面では東北アジア研究センター報告4号として『よみがえる町の記憶 — 通町・堤町・北山界隈の歴史 —』（共編）を刊行した。

日本の歴史遺跡に関わっては、佐藤源之教授（電波応用工学）が、高精度な位置制御を行う事で、従来より鮮明な地下構造可視化を行う3DGPRシステムを遺跡調査に適用する研究を積極的に推進、宮崎県西都原遺跡での地下式墓地の発見、埼玉県さきたま古墳での古墳墳丘内部の石室構造の発見等の成果を挙げる一方、奈良県明日香村の道路建設に伴う遺跡保護への技術供与を準備している。

石井敦准教授（国際関係論）は、捕鯨問題や生物多様性をめぐる国際関係に関する著書として『解体新書 「捕鯨論争」』、『生物多様性をめぐる国際関係』（共著）や、Global Environmental Change 誌などに論文を発表している。

石渡明教授（地質学・岩石学）は、東日本大震災に際する墓石の転倒率に関する調査

の結果を、『日本地質学会 News』誌上で報告している。また仙台周辺の放射線量を測定してホームページ上で公表した。

鹿野秀一准教授（微生物生態学）は、宮城県伊豆沼において、ゼニタナゴとタイリクバラタナゴの飼育実験により、食性の重なり度を推定した。

宮本毅助教（火成岩岩石学）は、これまでの白頭山の研究をまとめて博士論文「白頭山火山の噴火史」を提出した。

平野直人助教（地球宇宙化学）は、三陸沖の日本海溝や北西太平洋のプチスポット火山の世界的普遍性および成因解明に関する研究を進めており、小笠原諸島やチリ沖での海底調査の成果を論文として発表した。

奥村誠教授（土木計画学）は、最適施設配置問題に用いられている、離散的な変数を含む数理最適化問題（特に求解がやさしい混合整数計画法問題）の実際的な問題への適用に関する研究を継続している。本年度は昨年度の研究を適用して、企業の支店配置問題に関して複数の設定パラメータに対応する立地解を求め、社会の従業者分布と賃金分布のモデル開発を行った。また、既存の都市間交通サンプル調査の問題点と解決方法の提案、都市間交通量の時間的変動パターンに関する研究を発表している。

大窪和明助教（地域計画、土木計画学）は、社会的ネットワークにおける情報、形態情報端末と地図情報、リサイクル施設配置パターン、使用済み製品回収システム、都市間交通サンプル調査などに関する研究成果を論文として刊行した。また、東日本大震災に際する廃棄物処理における不確実性を災害発生物の頑健性に着目してその在庫管理方策分析枠組みを提示した。また大震災時のガソリン供給について、効率的・公平な配分の仕組みを検討した。

佐藤源之教授（電波応用工学）は、震災に際して、レーダ技術を用いて福島県いわき市での異常出水の原因究明を行った。また、さきの岩手・宮城内陸地震による被災車両の捜索に協力しており、栗原市が計画する大崩落現場のジオパーク化にかかわって二次災害防止のためのモニタリングの協定を締結、モニタリングシステムを設置した。また同じ技術を用いて、女川町の津波被災地域で地盤変位の計測を行った。佐藤教授とその研究グループは、「リモート・センシング研究ユニット」を運営しており、本年度は専門とするレーダ技術に関して、43 件の学術論文を発表している。佐藤教授は、レーダによる計測技術の開発を、これを被災地や文化財探査、地下水探査などの地域社会の実践的な課題に活用しながら進めており、技術の先端性と実践性を兼ね備えるばかりでなく、考古学・歴史学などの文系分野とも連携した文理連携的な研究活動である点を特色としている。これは本センターの文理連携研究の一つのモデルとなっている。

センターの研究成果発表の場として機関誌『東北アジア研究』を刊行している。本年度は、第 16 号を刊行し、論文 12 本を収録した。その内訳は、日ロ関係に関するもの 1 件、

モンゴル語・文献に関するもの3件、中国史1件、日本史1件、モンゴル史2件、人類学・民俗学3件、中国文学1件である。

(5) 教育活動

〔大学院教育・研究生〕

本センターは部局として学生定員を持たず、教育は学内の大学院に設置された協力講座と、全学教育において行っている。本センターの教員による協力講座は、大学院環境科学研究科、理学研究科、情報科学研究科、生命科学研究科、文学研究科および工学研究科に設置されている。全学教育については、24コマの負担原則に対して27.5コマを提供している。またセンターには少数の研究所等研究生が在籍している。

各研究科の大学院学生のうち、文系の学生に関しては合同棟内の三室を合同研究室として提供しているほか、理系の学生は各教員の実験室・学生室を利用し、指導を受けている。

生活支援等に関する学生のニーズの把握に関しては、学生の合同研究室担当教員（教務委員長兼務）を1名配置するとともに、学生側には各室1名の連絡係を設置し、随時そのニーズが教員側に伝わる態勢をとることで、ニーズ把握に万全を期している。

平成23年3月11日の震災によって合同棟が使用できなくなったことは、本年度の学生の研究条件を大きく制約することとなった。センター教員が講座を担当している研究科の学生には、学内他部局からスペースを借りることによって研究の場を確保した。

大学院生の履修指導や生活相談は、基本的に所属各研究科において個別的に行っている。また本センター教員の研究室ならびに実験設備等は、基本的には指導大学院生等が随時出入りできる体制をとっており、学習相談も適切に行われている。

学術振興会特別研究院（DC、PD）の受入れに関しては、本年度は2名を受け入れており、居室を提供している。これらの学生・研究員は、センターの教員が開催する共同研究やセミナー、シンポジウムに参加することで、専門的な研究環境に接することが可能となっている。震災後も学生・学振特別研究員には研究場所の確保に努めている。

平成23年度は研究所等研究生9名を受け入れている。指導には受け入れ教員が当たり、それぞれの専攻分野に関するきめ細かい指導を行っている。

毎年10月には学生による研究交流会を開催している。平成23年度は10月 日に川内北キャンパス内にマルチメディア棟2階大ホールを会場として14:00-16:00に口頭発表（件）、続いて16:20-17:20にセンターさくら棟1階でポスター発表（件）および懇親会が行われている。

東北アジア研究センター教員の協力先研究科

氏 名	役 職	協 力 期 間	協力先研究科
寺山 恭輔	准教授	2000 年 4 月 1 日～現在	文 学 研 究 科
高倉 浩樹	准教授	2003 年 4 月 1 日～現在	環境科学研究科
栗林 均	教 授	2003 年 4 月 1 日～現在	環境科学研究科
岡 洋樹	教 授	2003 年 4 月 1 日～現在	環境科学研究科
柳田 賢二	准教授	2003 年 4 月 1 日～現在	環境科学研究科
磯部 彰	教 授	1997 年 4 月 1 日～現在	文 学 研 究 科
瀬川 昌久	教 授	2003 年 4 月 1 日～現在	環境科学研究科
明日香壽川	教 授	2003 年 4 月 1 日～現在	環境科学研究科
明日香壽川	教 授	2000 年 4 月 1 日～現在	文 学 研 究 科
上野 稔弘	准教授	2003 年 4 月 1 日～現在	環境科学研究科
平川 新	教 授	2003 年 4 月 1 日～現在	環境科学研究科
石井 敦	准教授	2005 年 4 月 1 日～現在	環境科学研究科
石井 敦	准教授	2005 年 4 月 1 日～現在	文 学 研 究 科
鹿野 秀一	准教授	2001 年 4 月 1 日～現在	生命科学研究科
石渡 明	教 授	2008 年 4 月 1 日～現在	理 学 研 究 科
後藤 章夫	助 教	1999 年 8 月 1 日～現在	理 学 研 究 科
宮本 毅	助 教	2000 年 4 月 1 日～現在	理 学 研 究 科
平野 直人	助 教	2009 年 6 月 1 日～現在	理 学 研 究 科
奥村 誠	教 授	2006 年 4 月 1 日～現在	工 学 研 究 科
大窪 和明	助 教	2009 年 10 月 1 日～現在	工 学 研 究 科
工藤 純一	教 授	1996 年 4 月 1 日～現在	情報科学研究科
佐藤 源之	教 授	2003 年 4 月 1 日～現在	環境科学研究科
横田 裕也	助 教	2010 年 10 月 1 日～現在	環境科学研究科

〔全学教育〕

全学教育では、学務審議会より 24 コマを東北アジア研究センターの担当原則として求められている。これに対して、センターから本年度は基幹科目 4 コマ、展開科目 5 コマ、共通科目 18 コマ、合計 27 コマを担当している。いずれの講義でも担当教員は自分の専門分野をテーマとする講義を行うが、これを通じて東北アジアに関わる内容が全学教育の場で学生に教授されている。また本センターの教員は、全学教育において東北アジア言語の講義を提供しており、現在は中国語・ロシア語・モンゴル語の講義を担当し、本学における言語教育の多様化に貢献している。また基礎ゼミには本年度 1 コマを提供している。

(6) 社会貢献活動

研究内容の社会への還元に努めることにより、「東北アジア」という地域概念の普及と定着をはかり、同地域に対する認識の向上や人的交流の拡大を実現することこそが、

まずもって本センターの第一義的な社会貢献であると考え。また、国際的な学術交流活動の促進を通じ、相互理解を深めることが、我が国の安定した発展には不可欠であるとの立場から、共同ラボや大学間交流協定・部局間交流協定を活用しつつ、学術交流を積極的に展開している。さらに、こうした学術交流の結果得られた学術情報を、企業等のニーズに応じて提供するサービスにも取り組んでいる。

〔社会貢献を目指す研究活動〕

本学中期計画は、「社会との連携や社会貢献に関する目標を達成するための措置」として、「教育と文化への貢献活動として、社会の要望を取り入れた企画を実施する」ことを唱っている。本センターは、創設当初から、社会貢献を意識した活動を行っているが、単なる奉仕活動としてではなく、この分野の活動を積極的に「社会貢献研究」として位置づけ、プロジェクト研究部門に設置されたユニットを通じた研究活動を展開している。

本センターの社会貢献的性格の強い研究として、平川新教授による「歴史資料保全」のための活動があげられる。同教授が代表を務める「歴史資料保全のための地域連携研究ユニット」は、学内他部局や他大学、地方自治体などとの連携により、民間に保存されている歴史資料の災害や廃棄による喪失にたいして、平時の所在を把握、登録する作業を行っている。これは「宮城方式」と呼ばれ、注目されている。また平川教授は、全学的な研究組織としての「防災科学研究拠点」に結びつけている。この防災拠点を中心として、平成 24 年度から災害科学国際研究所の設置が決定されている。

また奥村誠教授とその研究室は、「最適施設配置問題」の研究において、震災負傷者最適搬送と道路、病院の耐震化を一元的に扱う数理計画問題を定式化して実用的な解を求める方法を開発し、道路点検時間を含むケースや、負傷者輸送に加えて医療チーム派遣を考慮する場合の適用方法を研究している。

さらに佐藤源之教授とその研究室は、防災・減災に資する科学技術開発を進め、2009 年から開始した人道的地雷除去技術のカンボジアでの ALIS の実証試験での地雷除去により 25,000 平米以上の農地を住民に返還する成果を挙げた。また 2008 年 6 月の岩手・宮城内陸地震に関して、宮城県栗原市と被災車両の検知に関して地滑りのモニタリングのため GB-SAR（地表設置型合成開口レーダ）の設置準備を進めた。さらに従来より鮮明な地下構造可視化を行う 3DGPR システムを遺跡調査に適用する研究を、宮崎県西都原遺跡や埼玉県さきたま古墳で行い、実用性を確認した。

これらの研究は、地域を研究する上で有効な資料の保全や観測技術の開発に関わっており、個々の分野における学術的価値や文理連携の実績となるとともに、社会への直接的な貢献を目指したものであることができる。

2011 年 3 月の東日本大震災に関しては、本学中期目標においても「東日本大震災に

よる被災からの復旧・復興支援の取組に努める」ことが唱われている（本学中期計画 3 頁「3. その他の目標を達成するための措置」）。上記の平川、佐藤両教授の研究は、文系・理系の研究者の連携によるものであるが、文系分野においても、2011 年度には震災に関わって社会貢献的な性格の研究が行われている。その一例は高倉浩樹准教授が文学研究科などの他部局研究者や学外の研究者と連携して行った二つの研究プロジェクトである。その一つ、「東北大学震災体験記録プロジェクト」は、社会人類学的観点からのエスノグラフィーとして東北大学関係者の震災の際の行動を記録することによって、さまざまな位置から震災の社会への影響を解明したものである。これは、高倉浩樹・木村敏明監修、とうしんろく編『聞き書き震災体験：東北大学 90 人が語る 3.11』（新泉社）として刊行されている。もう一つは宮城県の委託研究として進められた「無形文化財」保全に関わる「東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査」活動である。これは被災地において「無形文化財」が受けた被害を現地調査によって記録することを通じて、その復興・保全に貢献しようとするものである。

〔公開講演会など〕

センターでは、毎年 12 月に公開講演会を開催し、広く一般市民に対し東北アジア地域への関心の喚起に努めている。平成 23 年度は、12 月 3 日に仙台市戦災復興記念館を会場に、公開講演会「途絶する交通、孤立する地域～人と地域の対応」と題して、藤原潤子（総合地球環境学研究所）、植田今日子（東北学院大学）、奥村誠（東北アジア研究センター）の各氏による講演と、神谷大介（琉球大学）氏によるコメントが行われた。

また 10 月 9 日には片平まつり 2011 の東北大学主催記念講演会として、「海底ドリリングで地震・火山を調べる」が開催され、日野亮太（東北大学理学部）氏による講演「東北地方太平洋沖地震を掘れ」、平野直人助教（東北大学東北アジア研究センター）による講演「火山はどこで発生するの？～海底火山を掘って考える～」が行われている。

また 11 月 29 日には特別講演会「ロシア葬礼泣き歌に現れる他界観：北部地方とシベリア・レナ川地方の泣き歌をてがかりに」が開催され、3 月 10 日には講演会「文化財保護のための科学技術 ― 3.11 地震・津波、フィレンツェ洪水を乗り越えて」が開催されている。

このように本センターは、市民に向けた公開講演会を積極的に開催し、研究成果の社会への還元を積極的に行っている。本年度の公開講演会は、震災を意識した企画となったが、単に直接的な震災復興を問題にするのではなく、震災や開発がもたらす地域の途絶というへと敷衍することによって、より学術的な問題提起を行うものとなっている。

また昨年に引き続き、ロシア・ノボシビルスク国立大学東洋学部において講座「日本とアジア」を実施した。これは、同大東洋学部との協定により、平成 20 年度から 5 カ年の計画で実施しているもので、同大などで日本語・日本文化を学んでいる学生を対象

として、日本とアジアに関する講演を行うものである。平成 22 年度の協定締結、打ち合わせに続き、平成 21 年度に第一回（講師は、東北大学大学院文学研究科長岡龍作教授、尚絅学院大学千葉正樹教授、センターの岡洋樹教授）を、平成 22 年度には第二回（講師は大学院文学研究科阿子島香教授と本センターの高倉浩樹准教授）を実施したが、今年度は本学高等教育開発推進センターの佐藤勢紀子教授が講師を務めた。

また平成 21 年度以来学内文系七部局と連携して企画・実施している文系版サイエンスカフェ「東北大学リベラルアーツサロン」では、本年度第 10 回から第 15 回までの 6 回が開催された。第 10 回が 6 月 11 日、第 11 回が 7 月 15 日、第 12 回が 9 月 2 日、第 13 回が 11 月 18 日、第 14 回が 1 月 20 日、第 15 回が 3 月 16 日にそれぞれ開催された。このうち第 11 回は本センター高倉浩樹准教授が担当し、「極寒地で暮らす方法とは？北極圏トナカイ遊牧民の知恵と技術から学ぶこと」と題してせんだいメディアテークで行われている。リベラルアーツサロンの準備・運営は、東北アジア研究センターに設置されたコラボレーション・オフィスが大学広報課と連携しながら行っている。オフィスの運営委員会はセンター長佐藤源之教授を委員長として、文系七部局の委員によって構成されているが、ここでサロンの講師選定が行われている。

センターが行うこれらの活動は、地域の教育・文化への貢献として意義あるものと考えている。

〔行政への貢献〕

本学中期計画は「国家政策や地域政策の策定等にも積極的に貢献するため、国や地方公共団体に向けての政策提言や教職員の審議会等への積極的参画を推奨するとともに、東日本大震災による被災からの復旧・復興支援の取組に努める」としているが、本センターの教員も国や地方公共団体の審議会などへの参加を積極的に行っている。この中には、仙台市史編集専門委員会、仙台城跡調査指導委員会、宮城県地域伝統文化活性化推進委員会、文部科学省文化審議会文化財部会（以上平川教授）、国土交通省東北運輸局東北地方交通審議会、同省全国幹線旅客純流動調査委員会、同省社会資本整備審議会、同省東北地方整備局仙台空港復旧のあり方検討委員会、宮城県大規模公共事業評価委員会、仙台市都市計画審議会、同大規模小売店立地専門委員会（以上奥村教授）、宮城県自然環境保全審議会、石油天然ガス・金属鉱物資源機構金属資源探査技術開発研究会、環境省国内における毒ガス弾等に関する統合調査検討会（以上佐藤教授）、環境省中央環境審議会地球環境部会排出量取引制度小委員会、同柔軟性メカニズムプロジェクト支援委員会、同気候変動影響統計整備ワーキング・グループ、同特定者間完結型カーボン・オフセット検討会委員会、同地球温暖化問題将来枠組地球環境戦略機関（IGES）ワーキンググループ、同 CDM / JI プロジェクト支援委員会（以上明日香教授）が含まれる。

〔東北アジア学術交流懇話会〕

本センターの研究を社会に還元するための外部組織として、「東北アジア学術交流懇話会」が活動している。本センターは、懇話会ニューズレター「うしとら」を編集し（年4回刊行）の近刊の出版物とともに会員に配布することで、東北アジアに関する情報提供を行っている。本年度は、「うしとら」49～52号を刊行し会員に配布した。これまで配布してきた「アラカルト」は廃止されたが、あらたに東北アジア読本を配布している。今年度は、6月24日（金）に学術交流懇話会総会を東京の東北大学東京分室会議室で開催した。当日は山田勝芳氏（東北大学名誉教授）による講演「溥儀の忠臣・工藤忠と20世紀前半の激動」が開催されている。

(7) 外部評価・自己評価

東北大学の中期計画第93項目「各教育研究組織は、専門領域ごとに研究活動とその成果に関する定期的な自己評価・外部評価を通じて、国内及び国際的水準での成果の把握に努め、結果を公表するとともに、外部からの客観的意見等の把握に努める」に従い、本センターでも定期的自己評価・外部評価に基づいてその水準の維持・向上に努力している。これまで、2005年度、2008年度に外部評価を実施してきたが、本年度は震災による業務の困難もあり、実施されていない。来年度（2011年度）に実施の予定である。また自己評価報告として『活動報告2011』を刊行し、ホームページ上で公開した。

研究活動

(1) プロジェクト研究ユニット

東北アジア研究センターは、平成 19 年度の組織改編によって、新たに基礎研究部門とプロジェクト研究部門を設置した。プロジェクト研究部門は、センター専任・兼務教員によって構成されるプロジェクト・ベースの組織であり、これにより大規模研究プロジェクトを立ち上げるとともに、外部資金獲得の受け皿とすることを目的としたものである。

本年度は、以下の 8 研究ユニットが活動した。

(A) 2011 年度センター・プロジェクト部門研究ユニット一覧

〔ユニット名／(研究年度・代表者)〕

- 歴史資料保全のための地域連携研究ユニット
／ (2007 年度～ 2011 年度・平川新)
- リモートセンシング研究ユニット／ (2007 年度～ 2011 年度・佐藤源之)
- 東アジアにおける移民の比較研究ユニット／ (2008 年度～ 2011 年度・瀬川昌久)
- シベリアにおける人類生態と社会技術の相互研究ユニット
／ (2009 年度～ 2013 年度・高倉浩樹)
- 21 世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究
／ (2009 年度～ 2015 年度・岡洋樹)
- 東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット
／ (2010 年度～ 2012 年度・栗林均)
- 「東アジア出版文化」研究ユニット／ (2010 年度～ 2012 年度・磯部彰)
- 森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット
／ (2011 年度～ 2013 年度・工藤純一)

■ 東北アジア研究センター・プロジェクトユニット研究年度報告書

ユニット名	歴史資料保全のための地域連携研究ユニット			
認可期間	2007（平成 19）年度～2011（平成 23）年度（5 年間）			
組 織	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	(代表者) 平川 新	東北アジア研究センター 教授	天野真志 菊池勇夫	東北大学東北アジア研究 センター教育研究支援者 宮城学院女子大学人間文化 学部教授
	佐藤大介	東北大学東北アジア研究 センター助教	菊池慶子	聖和学園短期大学キャリア 開発総合学科教授
	蝦名裕一	東北大学東北アジア研究 センター教育研究支援者	斎藤善之 大藤 修	東北学院大学経済学部教授 東北大学大学院文学研究科 教授
研 究 モニター	氏 名	所 属		
	1 千葉正樹 2 菅野正道 3 籠橋俊光	尚絅学院大学 仙台市史編さん室 東北歴史博物館		
	外部評価会の実施	(中間)：2009 年 9 月 日 参加者：研究組織 2 名、モニター 3 名		
研 究 経 費	(研究支援者、RA などの配置) 教育研究支援者 1 名 (蝦名) (研究スペース配分など) 316 研究室 (その他の主たる外部資金) 科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額 500 万円〕 運営費交付金 (個人研究費)			
ユニットの 目標・目的	本ユニットの目的は、主に宮城県内に残されている歴史資料 (古文書、古美術品、民具及び生活用具など) を、行政および地域住民と協同して、災害やその他の事情による散逸・消滅の危機から保全することである。宮城県では、将来高い確率で宮城県沖地震が発生することが予想されており、防災対策として歴史資料を保全する活動が不可欠である。 日本においては、多くの歴史資料が個人宅などで未整理のまま保管されている。これらは災害に加え、所蔵者の事情や社会環境の変化などで瞬時に失われることもある。このような歴史資料を将来にわたって保全するとともに、歴史研究や地域文化の振興に活用できるような、実践的な地域資料保全学の構築を目指している。			

研究の目的と 本年度の成果 ならびに 研究成果の 重要性の概要	2011 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）では、本研究ユニットの活動対象地域となったかつての仙台藩領である宮城県全域と岩手県南部に広範な被害が及んだ。本研究ユニットでは、NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワークと協同で、被災直後から歴史資料レスキューに取り組んだ。被災直後の一ヶ月間はガソリン不足で被災地に赴いての活動が出来なかったが、今回の震災以前からユニットで歴史資料保全活動を実施してきた所蔵者、自治体関係者、地元郷土史サークルと連絡を取り合い、500 件を超える被災歴史資料の情報を入手した。 4 月以降は、宮城県など被災各地の教育委員会、文化庁が組織した東日本大震災における被災文化財等救援事業（文化財レスキュー）と協力関係を持ちながら被災地での歴史資料保全活動を展開した。主として個人が所蔵する未指定の歴史資料を被災地から搬出し、津波で海水を浴びた紙史料への乾燥や応急処置を進めた。11 ヶ月間に 87 回の現地調査を行い、44 件の歴史資料を搬出することが出来た。一連の活動については、報道や仙台市博物館での展示で広く紹介し、活動を秘録腐朽することが出来た。 一連の活動の中では、震災以前に保全活動を実施した古文書が、震災により消滅するという事態も起こった。しかし、震災以前の活動でデジタルデータにより文字記録としての情報は保全されていた。また、震災以前から地元と構築してきた交流関係が、震災後の情報収集や被災地の活動において極めて有効に機能することも明らかになった。ユニットの活動理念である「災害「前」の歴史資料保全活動」が、新たな歴史資料の防災対策と継承に大きな意義を持つことが証明された。
ユニットの成果を公表する URL	
東北アジア 地域研究 としての意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 今回震災の被害を受けた宮城県や岩手県の歴史資料は、多くが個人宅で未整理のまま保存されてきた。震災は、それ以前から進んでいた過疎化や世代交代などにより急速に進みつつあった歴史資料の散逸という事態を急加速させることになった。このような観点から、歴史資料を保全するための新たな学問体系を、実践に基づき提起することが喫緊の課題である。 また、当地域は、特に 16 世紀から現代にかけて、ロシアや朝鮮半島・中国大陸など東アジア地域との政治・経済・社会的関係が特に密接な地域であった。したがって、宮城県内の地方文書を調査することは、当該時期の日本の地域史を明らかにするだけにとどまらず、同時期の日ロ・日中関係を初めとする対外関係に関する新資料を発見する可能性もあり、東北アジア地域の歴史を日本の一地域から考えていく重要なアプローチとして位置づけている。 東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕 〈対象とした国・地域など〉 本事業で対象としているのは現在の宮城県および岩手県南が中心である。当該地域は 19 世紀初頭の蝦夷地をめぐる政治情勢の中でロシアとの接触を最初に行った地域の一つであり、この地域の歴史資料を分析することによって、その地域と関わりがあった日本以外の地域史が明らかにされる可能性

東北アジア 地域研究 としての意義	がある。このほか、中近世から近現代にかけての在地の資料には、中近世以降の蝦夷地や北方民族との交流に関する史料や、19世紀末から20世紀中頃における北太平洋と関連した生業活動の実態といった、東北アジア地域との関わりを示す歴史資料も多く確認されている。これらの資料を対象とする本研究は、東北アジア研究の一環として位置づけることが出来る。 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください 本事業では、主に宮城県内における歴史資料を調査することによって、災害などに備えた資料保全活動を展開している。宮城県では30年以内に99パーセントの確率で発生すると言われていた宮城県沖地震を念頭に置いて各種の活動がおこなわれている。このような活動は、昨年から今年にかけて日本列島各地で発生した地震や津波災害からも明らかなように、災害に直面する日本列島各地において不可欠な文化財の防災対策である。今後は東北アジア地域においても同様の対応が必要となってくると考えられる。 本ユニットの活動の中心は宮城県内であるが、これまで行ってきた活動の内容は、個別のケースに応じて多様な対応をとっている。各種の経験を蓄積するとともに、普遍的な原則に基づく調査モデルを提示することで議論の活性化をうながしているところである。 また、特に18世紀以降の宮城県の地域史は、ロシアや朝鮮、中国大陆などとの密接な関わりの中で展開していた。幕藩体制改革にともなう儒学の導入と新たな政治体制の模索、蝦夷地情勢をめぐるロシアとの接触、日清・日露戦争への地域住民の従軍、戦後植民地経営への資金・労働力を通じた関わりなど、多面的な問題を含んでいる。これらの問題について考察しうような歴史資料の所在について、本年度の活動でも数多く確認することができた。これらの歴史資料は、中近世から近現代にかけて、日本と深い関わりを有した東北アジア地域の歴史を考える上で新たな視点を提起する可能性があり、その点からも本ユニットによる研究活動は重要なものだといえる。
新 規 性	新規性の有無〔有〕 〈新規性の内容〉 災害「前」に歴史資料の所在を把握し、記録化を進めるという活動理念と、それに基づく一日型での悉皆調査、デジタルデータによる記録化は、地域の歴史資料を保全するための新たな方法論である。 従来、地域に遺されてきた歴史資料の災害対応は、発生「後」に被災した対象をレスキューする活動が主なものであった。しかし、一つの地域で歴史資料の所在が悉皆的に把握されている地域は、宮城県も含めほとんどない。本ユニットでは、2003年に発生した宮城県での北部地震において、文化財の所在自体をはあくするのにてまどり、多くの歴史資料を失った経験から、上記の理念と方法に基づく活動実績を積み重ねてきた。 東日本大震災の歴史資料レスキュー活動では、事前に撮影されたデジタルデータにより原本が失われた古文書の内容保全を行うことができた。それ以上に、地域との密接な関係が、被災地での調査や、災害を受けた個人所蔵の歴史資料を保全するうえで決定的な役割を果たすことがあきらかになった。

学 際 性	文理融合型の研究か〔はい〕 〈参加した専門分野〉博物館学、建築学、文化財保存修復科学、情報学 東日本大震災での被災地も含め、国際的に見た日本の地域における歴史資料の残存形態の特徴は、個人の所蔵者の下に、古文書や古美術品、かつての生活の道具といった様々な歴史資料が、土蔵や家屋などそれ自体歴史的価値を持つ建造物に保管されている事例が圧倒的多数だということである。これらの現物を保全し将来に継承するためには、モノを保管する博物館、モノの修復と安定的保存を専門とする保存修復分野、建造物が形成する伝統的景観の保全という点も含めた建築学との連携が必然である。さらに、内容情報の活用という点では、デジタルデータを活用した情報学との連携が不可欠である。 文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕 〈参加した専門分野〉博物館学、建築学、文化財保存修復科学、情報学 ○博物館学 被災した歴史資料現物の一時保管場所として、東北歴史博物館や仙台市博物館と連携した。 ○建築学 被災した伝統的建造物の記録と応急処置、修復アドバイスについて、一級建築士と連携して活動を展開した。 ○文化財保存修復科学 津波で被災した文書資料を中心に、現場で可能な応急処置の技術的指導を受けた。また、大量の文書資料の乾燥について、真空凍結乾燥処置の支援を受けた。 ○情報学 原本が消滅した古文書資料など、デジタルデータの中長期的保存と活用について連携した活動を行った。
専 門 性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉歴史学、史料保存学 〈内容〉 ユニットで保全対象とする歴史資料は、そのほとんどが従来の歴史研究において調査・分析がなされていない地域の古文書資料である。歴史学の基本となる新たな史料の発見という点で大きな意義を有している。 一方、既存の史料保存学においては、主に機関に収蔵されている歴史資料の管理と整理が主な課題になっており、地域に遺された歴史資料の保全は後景に退いている。地元と連携した形で展開するユニットの保全論は、独自の意義を有している。
国 際 性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕 ・アメリカ合衆国・議会図書館 津波など水損した歴史資料の応急処置や、2005年のハリケーン・カトリナ以降、アメリカでも課題になっている災害前の歴史資料所在把握の方法について意見交換を行った。 ・アメリカ合衆国・ハーバード大学ライシャワー研究所 ユニットで記録化した歴史資料データの国際関係による保全と、公開・

国際性	活用について意見交換を行った。 国外の研究者の参加の有無〔無〕 学術交流協定活用の有無〔無〕 外国語による成果公表の有無〔無〕
教育上の効果	学生の参加による教育上の効果〔有〕 〈参加学生の所属〉 東北大学文学部・理学部、東北学院大学、宮城学院女子大学、尚絅学院大学、東北芸術工科大学、米沢女子短期大学、一橋大学、首都大学東京、東京学芸大学、東京工業大学、東京農工大学、学習院大学、中央大学、早稲田大学、京都造形芸術大学、同志社大学、大阪市立大学、神戸大学。 歴史学や保存科学を専攻する学生を中心に、被災歴史資料の応急処置に多くの学生がボランティアで参加した。活動を通じて、地域の歴史資料を災害から守るという専門分野を生かした活動領域の存在、被災地や被災者にとっての歴史資料の意義などについて、実践から学ぶことが出来た。 〈学生による成果発表〉 無。
教育上の効果	ポスドクの活用の有無〔有〕 〈活用形態〉 教育研究支援者1名を配置している。 教育上の効果についてアピールしてください 歴史資料保全技術の習得に加え、歴史資料保全の現場での活動のとりまとめや、所蔵者および自治体との交渉など、地域の歴史資料保全のために不可欠な社会関係の形成のあり方について実地に学ぶ機会となっている。一連の活動については、講演や論文により公表し、研究者としての業績も積み重ねることが出来ている。
社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕 〈内容〉 ユニットで収集した歴史資料の記録は、関係自治体や機関にすべて無償で提供している。また、研究活動を通じて体系化した地域の歴史資料保全の方法を、自治体や郷土史関係者に提供し、地元住民自らが歴史資料を継承するための基盤作りにも努めている。 また、今年度は東日本大震災での歴史資料レスキュー活動自体の展示を実施し、活動自体の後方にも努めた。 社会への成果還元の有無〔有〕 ○東日本大震災における歴史資料レスキュー活動 - 東日本大震災で被災した歴史資料について、宮城県や被災自治体、住民との連携で実施した。44件の個人蔵の歴史資料を保全した。 ○東日本大震災における歴史資料レスキュー活動の展示 - 仙台市博物館（9月19-26日）、東北大学片平まつり（10月10・11日） ○宮城県白石市教育委員会博物館建設準備室による遠藤家文書整理事業への技術指導 ・白石市教育委員会と白石市古文書の会が進める遠藤家文書整理事業において、目録作成方法の助言を行った。

社会還元	○栗原市によるくりはら田園鉄道本社資料の整理事業に対する技術指導 ・栗原市観光振興課によるくりはら田園鉄道本社資料の整理事業に対し、技術的な指導を行った。
学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕 〈連携部局名〉 文学研究科 学内他部局教員の研究への参加の有無〔有〕 〈参加教員の所属〉 文学研究科
他組織との連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕 〈連携組織名〉 東北学院大学、宮城学院女子大学、尚絅学院大学、東北芸術工科大学、東京大学史料編纂所、国文学研究資料館アーカイブズ系、奈良文化財研究所、京都造形芸術大学、神戸大学 〈連携の形態〉 ○被災地での歴史資料レスキュー活動への人的支援／東北学院大学、宮城学院女子大学、東北芸術工科大学、京都造形芸術大学、神戸大学 ○被災した歴史資料の応急処置に対する技術交流／東北芸術工科大学、東京大学史料編纂所、奈良文化財研究所、京都造形芸術大学、神戸大学 ○被災歴史資料レスキューの広報活動に関する支援／尚絅学院大学 ○歴史資料デジタルデータの情報化に関する支援／国文学研究資料館アーカイブズ系 国内の研究機関研究者の研究への参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属〉 東北学院大学、宮城学院女子大学
成果発表	研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと） 研究会〔0回〕 公開の会議・シンポジウム〔0回〕 論文・著書 以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。 〔雑誌論文〕 計（6）件 1 天野真志「被災資料保全活動の現在 — 宮城歴史資料保全ネットワークによる水損資料への対応 —」『歴史評論』740、2011年12月、査読無（依頼原稿）。 2 平川新「古文書を千年後まで残すための取り組み」、平川新・佐藤大介『歴史遺産を未来へ』所収、5-18頁、2011年12月、査読無。 3 佐藤大介「歴史学における過去の清算 — 仙台版「古文書返却の旅」」、平川新・佐藤大介『歴史遺産を未来へ』所収、19-30頁、2011年12月、査読無。 4 蝦名裕一「「学・官・民」連携による資料保全 — くりでん資料保全の現在 —」、平川新・佐藤大介『歴史遺産を未来へ』所収、31-38頁、2011年12月、査読無。

成果発表

- 5 佐藤大介「歴史遺産を未来へ — 東日本大震災における歴史資料レスキュー」、『歴史学研究』884号、27-29頁、2011年9月、査読無（依頼原稿）
 - 6 蝦名裕一「東日本大震災における歴史資料保全活動 — 三. 一以降の宮城資料ネットの活動を中心に」、『日本歴史』759、99-107頁、2011年7月、査読無（依頼原稿）
- 〔学会発表〕計（11）件
- 1 蝦名裕一「東日本大震災における歴史資料保全活動」、全国歴史研究会東日本復興支援研究発表会 於／仙台市太白区中央市民センター、2011年12月10日（招待）
 - 2 蝦名裕一「東日本大震災と歴史資料の保全 — 宮城資料ネットの活動をととして —」、関東政治研究学会第8回研究会、於／石巻専修大学、2011年12月4日（招待）
 - 3 佐藤大介「3.11 大震災と宮城資料ネットの歴史資料レスキュー — 活動から見てきたこと —」、文化財保存修復学会シンポジウム「文化財をまもる — 災害から文化財をまもる — 大規模自然災害における文化財レスキュー 阪神・淡路から東日本大震災」基調講演、2011年12月3日、国立民族学博物館（招待）。
 - 4 平川新「歴史資料の救済と保存科学の接点 — 宮城資料ネットの活動をととして —」、平成23年度保存科学研究集会研究発表、奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂、2011年12月21日（招待）
 - 5 平川新「歴史資料保全のための国家的課題 — 古文書を千年後まで残すために —」、人間文化研究機構第6回人間文化研究情報資源共有化研究会「人間文化研究情報資源の保全と資源共有化の課題」、人間文化研究機構立川事務所、2011年12月16日（招待）
 - 6 佐藤大介「3.11 大震災と宮城資料ネットの歴史資料レスキュー — 被災地から見てきたこと —」、2011年度福大史学会大会、コラッセふくしま 4F 中会議室（福島県福島市）、2011年11月23日（招待）
 - 7 平川新「東日本大震災と歴史資料のレスキュー」、地域研究コンソーシアム・平成23年度JCAS年次集会シンポジウム、於／大阪大学、2011年11月5日（招待）
 - 8 平川新「被災史料のレスキュー」、東日本被災文化資料救援活動「水損資料の取扱いに関するワークショップ」、仙台市埋蔵文化財センター（向田文化財整理展示室）、2011年7月2日（招待）
 - 9 平川新「東北関東大震災と歴史資料の救出」史料保存利用問題シンポジウム、日本歴史学協会・日本学術会議史学委員会主催、学習院大学、2011年6月25日（招待）
 - 10 佐藤大介「歴史遺産に未来を — 東日本大震災における歴史資料レスキュー」、歴史学研究会大会緊急集会、2011年5月22日、青山学院大学青山キャンパス（招待）。
 - 11 平川新「歴史と伝統文化の立場から」、東日本大震災『森は海の恋人運動』を緊急支援する研究会、一関ホテルサンルート、2011年5月1日（招待）
- 〔図 書〕計（2）件
- 1 平川新編 東北大学東北アジア研究センター報告4号『よみがえる町の記憶 — 通町・堤町・北山界隈の歴史 —』、2012年2月、全〇〇頁、査読無。

成果発表

- 2 平川新・佐藤大介編 東北大学東北アジア研究センター報告3号 『歴史遺産を未来へ』 2011年12月、全99頁、査読無。

〔その他の公表〕 計（27）件

■講演

- 1 平川新「歴史資料と災害への備え」人間文化研究機構・国立民族学博物館公開シンポジウム「文化遺産の復興を支援する ― 東日本大震災をめぐる活動」、2012年3月18日、国立民族学博物館講堂
- 2 平川新「歴史文化をめぐる多様性の危機 ― 震災の衝撃 ―」、グローバルセミナー東北「震災復興と生態適応」、2012年2月16日、東北大学・片平さくらホール。
- 3 平川新「歴史資料のレスキューと東北大学の取り組み」、国立大学附置研究所・センター長会議特別シンポジウム「創造的復興に向けた未来都市のあり方」、2012年2月10日、ウェスティンホテル仙台2Fグラントボールルーム竹、
- 4 佐藤大介「3.11大震災 ふるさとの歴史を守る－宮城県での歴史資料レスキューから」大学コンソーシアムひょうご神戸設立5周年記念シンポジウム 震災と復興「人と文化が支える震災復興」、於・神戸大学百年記念館、2012年2月10日
- 5 平川新「歴史資料を守るための取り組み」、史料保存・活用研究会講演会（三重県歴史文化資産保存活用連携ネットワーク）、2012年1月20日、三重県総合文化センター、
- 6 蝦名裕一「大規模災害と歴史資料の保全活動 ― 東日本大震災における宮城資料ネットの活動 ―」、愛知教育大学「平和と人権」、2011年12月20日、愛知教育大学、
- 7 平川新「東日本大震災と歴史資料の救出」、弘前学院大学講演会、2011年12月17日、弘前学院大学、
- 8 平川新「地域の歴史文化と学官民による資料保全活動」、国公立大学フォーラム「地域歴史文化の育成支援拠点としての国公立大学 ― 地域歴史遺産の保全・活用と防災 ―」、2011年12月11日、神戸大学瀧川記念学術交流会館。
- 9 平川新「大震災を越えて ― 歴史遺産を後世に残すためには ―」、東北学院大学アジア流域文化研究所学術公開シンポジウム、2011年12月3日、東北学院大学押川記念ホール、
- 10 平川新「東日本（東北・関東）大震災と歴史資料の救出」、資料を語り継ぐ ― 平時も、非常時も ―（情報保存研究会）、2011年10月25日、江戸東京博物館、
- 11 佐藤大介「3.11大震災での歴史資料保全活動」、平成23年度白石市民大学、2011年10月18日、白石市中央公民館、
- 12 平川新「大震災から歴史遺産を守る!」、東北大学大学院環境科学研究科震災フォーラム、2011年10月8日、仙台国際センター、
- 13 佐藤大介「歴史遺産を未来へ 3.11大震災での歴史資料保全活動」、せんだい豊齢学園ふるさと文化コース第1学年「社会貢献活動へ向けて」、於／仙台市シルバーセンター、2011年9月30日

成果発表

- 12 平川新「土蔵を残す意義について」、土蔵メモリアル交流会 石巻震災土蔵メモリアル基金中間報告会、2011年9月24日、石巻市門脇町・本間家土蔵、
 - 13 平川新「歴史資料の保存はなぜ必要か」、仙台市史セミナー「特別企画 地域の歴史資料を救え」、2011年9月18日、仙台市博物館講堂、
 - 14 佐藤大介「3.11震災から文化財を守る — NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワークの活動 —」、鮎立港まちづくり百年会（気仙沼市唐桑町鮎立）、2011年8月27日、鮎立老人憩いの家、
 - 15 平川新「東日本大震災から古文書を守る！ — 史料保全の現場から —」、こうちミュージアムネットワーク研修会、2011年8月5日、高知県立文学館。
 - 16 蝦名裕一「東日本大震災における宮城資料ネットの活動」、MULU 第17回茶話会「震災後開館第1号の図書館にて、震災に強い図書館を考える」、於／岩沼市図書館、2011年7月30日
 - 17 佐藤大介「歴史遺産レスキューの3か月 — 被災地での活動と所蔵者・地域 —」、東北大学による東日本大震災3か月後報告会、2011年6月10日、仙台国際センター会議室「橘」
 - 18 佐藤大介「3.11大震災での歴史遺産レスキュー — NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワークの活動」、大崎家供養会、2011年6月26日 於・加美町長興寺
 - 19 佐藤大介「東日本大震災と歴史資料保全」、山梨県ミュージアムネットワーク会議研修会、於・山梨県立博物館、2011年6月2日
 - 20 平川新「大震災から歴史遺産を守る」、東北大学サイエンスカフェ、河北新報社1階ホール、2011年5月13日
 - 21 平川新「3.11大震災と歴史遺産の被害」、東北大学による東日本大震災1ヶ月後緊急報告会、2011年4月13日、トラストシティカンファレンス仙台 5F 会議室
- 公開行事
- 22 シンポジウム「南奥羽の戦国世界 新発見！遠藤家文書に見る戦国大名の外交」、白石市教育委員会などと共催、2011年12月10日、白石市ホワイトキューブ、来場者385名。
 - 23 グローバルセミナー東北「震災復興と生態適応」展示、「災害から「ふるさとの歴史」を守る」・「ふるさとの歴史を未来へ」、2012年2月16日、東北大学・片平さくらホール、来場者150名。
 - 24 メッセナゴヤ2011展示、「災害から「ふるさとの歴史」を守る」・「ふるさとの歴史を未来へ」、2011年11月9日～12日、ポートメッセナゴヤ、来場者数1090名。
 - 25 仙台市広瀬文化センターホール展示「3.11地球が震えた日 歴史遺産に未来を」、2011年10月29日～11月4日、仙台市広瀬文化センター、来場者数300名。
 - 26 東北大学片平まつり展示「3.11地球が震えた日 歴史遺産に未来を」、2011年10月10日・11日、東北大学生命科学研究科棟、来場者数1300名。
 - 27 仙台市博物館での展示「3.11地球が震えた日 歴史遺産に未来を」、2011年9月17～25日、来場者731名。

共同研究の 全般的成果の アピール	ユニットでは、近い将来の発生が確実視されていた宮城県沖地震に備え、地元に未整理のまま遺されている歴史資料の保全活動を推進してきた。17世紀から19世紀の文書記録を中心に、地域社会に歴史資料が大量に残っていることは日本の文化的特徴ともいえるが、通常の文化財行政において、これら未指定の文化財は制度的にも、また人員面においても十分な保護が及んでいない。これらを保護するには、災害「前」に所在を把握し、さらに所蔵者や地元との連携により実施することが不可欠だと考えていた。 東日本大震災における歴史資料レスキュー活動では、所在調査による記録化、さらには行政や市民との連携が、被災「後」の活動において有機的に機能し、多くの歴史資料を保全することが出来た。そのことはユニットの研究活動における成果の「最も悲しい実証」となった。とはいえ、技術と組織の両面において、本ユニットで推進してきた活動の画期性は、国内外から注目されることにもなった。関東以西で懸念されている「次の大災害」に備えた歴史資料の防災対策として、本ユニットの実践的な成果は大きな意義を持っていると確信する。
第三者による 評価・受賞・報道 など	○受賞 ・第12回和島誠一賞（団体部門） NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク（理事長／平川新） ○報道 ・2012年3月7日 読売新聞 東京朝刊 25面文化 [災後の風景] (3) 歴史 災害史 世間に伝える努力（連載） ・2012年3月3日 河北新報朝刊 社会面 土蔵から司馬江漢の油彩 仙台市博物館へ寄贈へ ・2011年1月28日 静岡新聞朝刊 特集 東日本大震災 平時の古文書調査が奏功 ・2012年01月11日 朝日朝刊 宮城全県・2地方 （宮城文化）南奥羽の武将、緩やかに連帯 遠藤家古文書でシンポジウム／宮城県 ・2011年11月25日 読売新聞朝刊 文化面 被災の蔵 古文書救出 ・2011年11月15日 産経新聞夕刊 記録守る 地震大国の団結／文化財レスキュー ・2011年10月6日 産経新聞 総合面 被災地の文化財 救われた110件／レスキュー活動半年 阪神大震災の4倍 ・2011年9月19日 新潟日報朝刊 文化面 津波被災の古文書保全 すすむ全国的な技術交流 ・2011年08月20日 日本経済新聞 朝刊 36ページ 文化資産保全へ、市民や大学連携―岩手・茨城・千葉…震災機に各地で（文化） ・2011年08月17日 読売新聞東京朝刊 宮城2 津波被害 女川の古文書 奈良での応急処置終える＝宮城 ・2011年08月12日 読売新聞東京朝刊 宮城2 仙台市史編さん委員 震災資料の保存提案＝宮城 ・2011年07月21日 河北新報夕刊 東日本大震災 夕刊編集部 記者ブログ／旧岩切郵便局の解体に思う

第三者による 評価・受賞・報道 など	・ 2011 年 7 月 5 日 河北新報朝刊 第二社会面 ふんばる 3.11 大震災／宮城歴史資料保全ネットワーク＝NPO 法人、 仙台市＝／地域の歴史を未来へ 津波被害の古文書救う ・ 2011 年 06 月 29 日 読売新聞東京朝刊 多摩 2 [たま史料快読] 番外編 古文書 災害に備えを＝多摩 ・ 2011 年 06 月 28 日 朝日新聞朝刊 阪神 34 面 (被災地を歩いて) 耐えた古土蔵、支えに 復興の背骨を探す商港／兵庫県 ・ 2011 年 06 月 25 日 読売新聞東京朝刊 宮城 2 仙台的 NPO 古文書救出に奔走 洗浄、消毒し返却＝宮城 ・ 2011 年 06 月 18 日 朝日新聞朝刊 宮城全県 31 面 津波に耐えた土蔵、復興のシンボルに 石巻、住民ら保存へ動き／宮城県 ・ 2011 年 06 月 15 日 読売新聞東京朝刊 文化面 被災文化財 救出に地域差 事前の所在確認調査生きる 原発や避難所 支援へ人手 ・ 2011 年 5 月 29 日 読売新聞 第三社会面 津波流失の古文書 1 か月半後に発見 宮城・女川町 東京朝刊 3 社 37 頁 ・ 2011 年 5 月 9 日 朝日新聞朝刊 文書救出、時間との闘い 仙台的 NPO、休日返上 ・ 2011 年 5 月 7 日 日本経済新聞朝刊 文化面 古被災文化財 保全に苦闘／郷土守る東北人の思い ・ 2011 年 4 月 17 日 河北新報朝刊 東日本大震災／歴史資料、散逸させぬ／仙台的 NPO が現地調査 石巻 の旧家訪問、古文書を搬出
本年度の ユニット活性化 のための具体的 な取り組み	科研費申請（課題名、種目、目的の概要） ・ 文部科学省科学研究費補助金・基盤研究 S（課題番号 21222002）「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」（研究代表者：奥村弘神戸大学教授／研究分担者・平川新） コミュニティの崩壊や頻発する大規模災害などにより散逸の危機にある地域の歴史資料について各地域での保全活動を実施し、それを通じて緊急の課題となっている地域歴史資料を次世代に引き継ぎ、地域住民の歴史認識を豊かにしうる地域歴史資料学を構築することを研究目的とする。 ・ 文部科学省科学研究費補助金・基盤研究 B（課題番号 22320125）「仙台藩と仙台領の新研究」（研究代表者・平川新） 2003 年宮城県北部連続地震以後、本プロジェクトユニットを中心に行われた旧仙台藩領での歴史資料保全活動では、これまで全く知られていなかった古文書資料が多数確認された。その史料を用いて、従来は消極的な評価が多かった仙台藩・仙台領の歴史的イメージの一新を図る。
来年度のユニッ ト活性化のため の具体的な取り 組みの予定	プロジェクト研究の最終年に、予測されていた宮城県沖地震をはるかに上回る巨大災害に直面した。そこでの活動は、これまでのプロジェクト研究で行ってきた実践が生きて、地域の歴史資料を多く保全する事が出来た。プロジェクトでのノウハウは、災害科学国際研究所・歴史資料保存研究分野に引き継がれる。被災地での活動を継続するとともに、関東以西の「次の災害」に備えた文化財防災に資する歴史資料保全学の体系化に努めてゆく。 また、地域の歴史叙述に対する被災地の要請が、今後多くなっていくと考えられる。この点は、新年度より発足する上廣倫理財団寄附講座と連携しながら、保全した被災歴史資料の活用と情報の共有化に努めていきたい。

■ 東北アジア研究センター・プロジェクトユニット研究年度報告書

ユニット名	リモートセンシング研究ユニット			
認可期間	2007（平成 19）年度～ 2011（平成 23）年度（5 年間）			
組 織	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	(代表者) 佐藤源之	東北アジア研究センター	城戸 隆	東北アジア研究センター
	横田裕也	東北アジア研究センター		
研 究 モニター	氏 名		所 属	
	1 島田正信 2 飯倉善和 3 内田利弘		宇宙航空研究開発機構（JAXA）地球観測センター 弘前大学 理工学部 知能機械システム工学科 産業技術総合研究所 地圏資源環境研究部門 物理探査研究グループ	
	外部評価会の実施		(中間・最終)：2010 年 4 月 1 日 参加者：研究組織 2 名、モニター 2 名 (最終評価を準備中)	
研 究 経 費	(研究支援者、RA などの配置) RA 1 名 (研究スペース配分など) 320 号室 科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額 1200 万円〕 センター長裁量経費〔金額 30 万円〕 民間の研究助成〔金額 100 万円〕 運営費交付金（個人研究費） その他〔資金名：防災科学拠点プロジェクト経費 50 万円〕			
ユニットの 目標・目的	東北アジアを中心とするアジアを主体とした、世界的規模での環境問題に対処するため、リモートセンシング技術の開発並びに現地環境問題への応用を目的とした研究・教育を効率的に行うための拠点を形成する。 JSPS アジア教育研究拠点、科学研究費補助金特定研究などの大型プログラムを通じた資金の獲得と、研究グループの形成を行う。また JAXA など外部研究機関との強力な連携を進める。更に東北アジア地域のリモートセンシング技術の中核とする国際研究拠点としての活動を進め、国際研究ネットワーク形成を推進し、新たな組織を構成するための研究拠点形成を 5 年以内に実現する。また東北大学および東北地域におけるリモートセンシング研究の拠点形成をめざす。			

研究の目的と 本年度の成果 ならびに 研究成果の 重要性の概要	我が国の地球観測衛星 ALOS に搭載されたマイクロ波ポーラリメトリック合成開口レーダ PALSAR を利用して偏波情報使う高度なリモートセンシング情報の利用に関して一連のデータ応用研究を行った。本年度は特に東日本大震災の被災状況をリモートセンシング技術でいかにとらえられるかという視点で、国際会議（IGARSS）における特別講演会、特別展示会の企画などを行った。また国際会議、国際学術雑誌での積極的な発表を行った。 また佐藤研究室で開発した地表設置型合成開口レーダ（GB-SAR）を利用し宮城県栗原市荒砥沢地域における崖崩れをモニタリングするシステムの設置と運用について栗原市と連携協定を締結し、11 月から試験運用を開始した。一方、我々が開発した地雷検知装置 ALIS をカンボジアの実地雷原における継続的な評価試験を 2009 年 3 月より CMAC（カンボジア地雷除去センター）との共同事業として開始した。 地中レーダーのより広範な実用化をめざし、社会人向けの一般公開講座（リカレント教育）を実施した。また外国人短期留学生に対する集中講義を JASSO の支援で実施し、中国人学生 7 名を招へいした。 ・東北地方の農業試験試験場ならびに東北大学農学部と共同で、果樹への施肥について地中レーダーを利用する共同研究実施 ・国立環境研究所と樹根のバイオマス評価に地中レーダーを利用する共同研究実施 ・奈良県と遺跡周囲の道路建設に伴う遺跡調査に地中レーダーを利用する共同研究実施
ユニットの 成果を公表 する URL	http://cobalt.cneas.tohoku.ac.jp/users/sato/index-j.html http://magnet.cneas.tohoku.ac.jp/satolab/satolab-j.html http://www.igarss11.org/ http://www.ALIS.jp
東北アジア 地域研究 としての 意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 環境計測の対象地域としてアジアを主体に考えるが、地域研究に当てはまるか否かは状況や具体的なテーマや問題設定に依存する。本プロジェクトの研究の本質は工学上の新しい手法開発にある。 具体的なアジアにおけるテーマとしては森林、草原、土壌、地下水のモニタリング、都市開発など東北アジアの地域に根ざす内容ならびへそこへの貢献を視野に入れている。 東北アジア地域を対象とする研究か〔ある程度〕 〈対象とした国・地域など〉 ・中国の石油開発、環境モニタリング ・モンゴル環境モニタリングなど 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください リモートセンシングの立場からアジア地域における広域的な環境計測と、精密な計測を目的とする現地計測の融合的な利用を行っている。 現地計測の回数、経験は非常に多い。

新 規 性	新規性の有無〔有〕 〈新規性の内容〉 地中レーダの精密計測、ポーラリメトリック SAR を利用した定量的計測へのレーダ技術の応用は、従来の検知技術を超える重要性をもつ。
学 際 性	文理融合型の研究か〔はい〕 〈参加した専門分野〉 遺跡探査 文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕 〈参加した専門分野〉 遺跡探査
専 門 性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉 電波応用計測 〈内容〉 レーダ技術による環境計測技術 アジマス制御によるレーダイメージング精度の向上
国 際 性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕 〈国名・研究機関名〉 中国 吉林大学：ボアホールレーダの環境計測、石油・資源探査への利用 中国 復旦大学、精華大学：レーダポーラリメトリ、特に ALOS/PALSAR のデータ利用 韓国 KIGAM、KIST：ボアホールレーダの環境計測への利用 モンゴル モンゴル科学技術大学、科学アカデミー：GPR による地下水計測 米国 マイアミ大学：3DGPR の開発 ドイツ Geocenter, Hannover：地雷検知技術 エジプト 天文・地球物理学研究所：3DGPR 利用による地下水動態計測 イタリア フィレンツェ大学：GB-SAR による地滑りモニタリング技術 国外の研究者の参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属・参加形態〉 現地実験への参加（上記のすべて） フィレンツェ大学：栗原市地滑りモニタリングの設置、モニタリング作業 学術交流協定活用の有無〔有〕 〈協定の名称〉 大学間協定（吉林大学、モンゴル科学技術大学、モンゴル科学アカデミー、フィレンツェ大学） 部局間協定（栗原市） 外国語による成果公表の有無〔有〕 国内で行われる国内学会における口頭発表では日本語を使うが、それ以外はすべて英語による発表。 〈言語〉 英語
教育上の効果	学生の参加による教育上の効果〔有〕 〈参加学生の所属〉 （学生の留学支援）いずれも共同研究実施機関 ・ドイツ政府奨学金 (DAAD) により大学院学生 1 名をドイツ航空宇宙センター (DLR) に留学

教育上の効果	・GCOE（地球変動科学）により大学院学生1名をフィレンツェ大学に留学 （留学生の受け入れ） 環境科学研究科における留学生受け入れ（エジプト2、中国4、インドネシア1） 吉林大学（中国）、同済大学（中国）の学生7名に対するJASSO短期招へいプログラムを利用した地中レーダ集中講義を実施した。 10月20日 SEG-J 国際会議 GPR セッションに参加。事前に集まり、聴講のポイントを指示。 21日 SEG-J 国際会議参加、ポスター発表 22日 SEG-J 国際会議参加 23日 GPR チュートリアル コースに参加（奈良文化財研究所にて） 24日 地下電磁計測ワークショップ（奈良文化財研究所にて）に参加。各自発表 25日 地下電磁計測ワークショップ（奈良文化財研究所にて）に参加。各自発表 26日 奈良・京都見学 27日 仙台へ移動、仙台市内見学 28日 10:30-12:00 東北大学環境科学研究科にて GPR 信号処理に関する講義（佐藤） 13:00-14:30 東北大学環境科学研究科にてリモートセンシングに関する講義（佐藤） 29日 9:30-13:00 各自研究成果の報告と討論 14:00-15:00 各自研究成果の報告と討論 16:00-17:30 研究室実験施設見学 30日 9:00-18:00 多賀城、塩釜、松島など津波被災地域の見学 11月1日 9:30-11:00 GPR 計測実習 11:00-13:00 GPR 信号処理演習 14:00-16:30 GPR 信号処理演習 16:00-17:30 研究室実験施設見学 〈学生による成果発表〉 国外における国際会議 発表（7件、1つの国際会議） 国内における発表 総計14件 ポスドクの活用の有無〔無〕 教育上の効果についてアピールしてください 指導する研究室においてすべての教育を基本的に英語で行っている。 修士以上の学生はすべて英語によるプレゼンテーションを行うことができる。
社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕 〈内容〉 （岩手・宮城内陸地震に伴う地滑りモニタリング） 栗原市荒砥沢地区では大規模な地滑りが発生しているが、地滑りの状態を常時モニタリングするためのレーダー計測について、栗原市と協議を進め、モニタリングを開始した。

社会還元	(人道的地雷除去活動) 科研費、JST 資金を元に 2002 年来継続している地雷除去技術を地雷被災国であるカンボジアへ供与した。本活動は 2009 年より、実地雷除去活動として継続中であり、既に 80 個以上の地雷除去に成功している。 (遺跡探査) 高精度地中レーダ計測法 3dGPR をマイアミ大学と共同開発中であるが、実践的な研究とするため、遺跡調査への利用を試みている。 奈良県からの要請により、奈良県・明日香村における道路開発に伴う遺跡調査のフィジビリティ・スタディを行った。2012 年 2 月に本格的な調査を実施した。 また、東大寺からの依頼により、法華堂、大仏殿における地下計測を実施した。本研究は今後も継続する見通しである。 松島・瑞巖寺の改修工事について、松島町教育委員会より調査依頼があり、地中レーダ計測を実施。1m 程度の深部に石組みを発見した。この成果を調査委員会に報告し、発掘の計画立案の資料とした。 社会への成果還元の有無〔有〕 〈還元の形態〉 (1) 中・高校生への講義 ・新潟県立柏崎翔洋中等教育学校 出前講座「東北活性研ユニバーサイエンス」『地雷検知用センサーの開発とカンボジアでの除去活動』(8 月 26 日) ・夢ナビライブ 東京ビッグサイトリモートセンシング「電波で見る地球環境、災害、遺跡、地雷」(7 月 16 日) ・出前授業 地雷を捜す方法 仙台市立鶴谷中学校 (12 月 21 日) (2) 一般公開展示会 ・片平祭り GB-SAR、ALIS 動態展示 (10 月 8、9 日) ・メッセ名古屋 GB-SAR 動態展示 (11 月 7～10 日) ・東北大学イノベーションフェア GB-SAR、ALIS 動態展示 (3 月 15 日東京フォーラム) (3) 一般講演会 ・文化財保護のための科学技術 仙台商工会議所 (3 月 10 日) ・伊達市噴火湾文化研究所・東北大学東北アジア研究センター 第 3 回学術交流連携講演会 (1 月 18 日) 「震災と電波科学 ― 防災・減災技術と遺跡調査への応用 ―」 (4) 研究活動による ・カンボジア政府機関 (Cambodia Mine Action Center CMAC) への機器供与、技術供与 ・岩手・宮城内陸地震による地滑りのモニタリングに関する活動 栗原市、女川町 ・遺跡調査技術 - 明日香村 (奈良県土木部) - 東大寺 (東大寺、奈良文化財研究所) - 瑞巖寺 (松島町教育委員会) ・東日本大震災に伴う緊急測定 - 福島県いわき市役所の要請による、地盤陥没等の地中レーダーによる緊急測定
-------------	---

学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕 〈連携部局名〉 農学研究科 電気通信研究所 学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕 〈参加教員の所属〉 農学研究科 電気通信研究所
他組織との連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕 〈連携組織名〉 奈良文化財研究所 情報通信総合研究機構（NICT） 北見工業大学、国立極地研 JAXA ドイツ航空宇宙センター（DLR） 〈連携の形態〉 被災した建造物の電波技術による損傷評価計測実験。 国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕 〈参加教員の所属〉 山形県、福島県、秋田県農業試験場
成果発表	研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと） 研究会〔1回〕 地下電磁計測ワークショップ 公開の会議・シンポジウム〔1回〕 国際会議〔1回〕 論文・著書 以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。 〔雑誌論文〕計（9）件 〔学会発表〕計（37）件 〔図 書〕計（1）件 〔その他の公表〕計（ ）件 （学術雑誌） [1] Ahmed Gaber, Magaly Koch, Motoyuki Sato, and EL-BAZ, Farouk, "ALOS/PALSAR Subsurface Imaging of A Buried Foundation in the Western Desert, Egypt," Geological Society of America, Abstracts with Programs. Vol. 43, No. 5, p.140., 2011 [2] Ahmed Gaber, Magaly Koch, M. Helmi and Motoyuki Sato, "SAR Remote Sensing of Buried Faults: Implications for Groundwater Exploration in the Western Desert of Egypt," Sensing and Imaging: An International Journal. Vol. 12. No. 3/4, pp. 133-151., 2011 [3] S.Endo, J.Sonoda, M. Sato, and T. Aoki, "Acceleration of FDTD Method Using a Novel Algorithm on the Cell B.E.," IEICE Trans. Inf. & Syst., vol.E94-D, no.12, pp.2338-2344, Dec. 2011. [4] Xuan Feng., Motoyuki Sato, Cai Liu, "Hand-Held GPR Imaging Using Migration for Irregular Data.," IEEE Journal of Selected Topics in Applied Earth Observations and Remote Sensing, 4 (4), 799-803, 2011. [5] 及川貴瑛, 園田潤, 佐藤源之, 本間規泰, 池川豊年, "3次元 MW-FDTD 並列計算を用いた大規模地形モデルにおける雷放電電磁界解析," 電気学会論文誌 A, vol.132, no.1, pp.44-50, Jan. 2012. [6] T. Oikawa, J. Sonoda, M. Sato, N. Honnma, and Y. Ikegawa, "Analysis of Lightning Electromagnetic Field on Large-scale Terrain Model using Three-dimensional MW-FDTD Parallel Computation," IEEEJ Trans. On Fundamentals and Materials, vol.132, no.1, pp.44-50, Jan. 2012.

- [7]Manabu Watanabe, Chinatsu Yonezawa, Joji Iisaka & Motoyuki Sato, "ALOS/PALSAR full polarimetric observations of the Iwate Miyagi Nairiku earthquake of 2008," International Journal of Remote Sensing, 33 (4), 1234-1245, 2012.
- [8]K. Mansour and M. Sato,"Subsurface fracture characterization using full polarimetric borehole radar data analysis with numerical simulation validation,"Journal of Exploration Geophysics, in Press.
- [9]Motoyuki Sato, Yuya Yokota, ALIS : GPR System for Humanitarian Demining and Its Deployment in Cambodia, Journal of the Korean Institute of Electromagnetics Engineering and Science,, 2012.
- (国際会議など口頭発表) (査読あり)
- [1]A.Gaber, Y. Yokota, M. Masayoshi, and M. Sato, "Near-Surface 3D Imaging of Buried Metallic Objects Using Real-Time Data Fusion of GPR and IGPS," JpGU International Symposium, 25 May, 2011.
- [2]A.Gaber, M. Koch, and M. Sato, "Assessing The Potential of Groundwater Resources West of Aswan, Egypt, Using ALOS/PALSAR Polarimetric Information," IEEE International Geoscience and Remote Sensing Symposium, 10.1109/IGARSS.2011.6049786, pp. 2761-2764. , 2011.
- [3]Y. Yokota, M. Matsumoto, A. Gaber, M. Grasmueck, M. Sato, "Estimation of Biomass of Tree Roots By GPR With High Accuracy Positioning System," IEEE International Geoscience and Remote Sensing Symposium, 10.1109/IGARSS.2011.6048924, pp. 190-193., 2011.
- [4]A.Gaber, Y. Yokota, and M. Sato, "Land subsidence damage detection and imaging using 3D-GPR in Iwaki city, Japan," Proceedings of the 10th SEGJ International Symposium, 20-23 Nov. Kyoto, Japan, pp. 380-383., 2011.
- [5]K. Mansour and M. Sato,"Characterizing subsurface fractures based on forward modeling of EM scattering from synthesized fractal fractures," Japan Geoscience union meeting, Tokyo, Japan, May, 2011.
- [6]Si-Wei Chen, Motoyuki Sato, "Model-based polarimetric decomposition using PolInSAR coherence," IEEE Int. Geosci. Remote Sens. Symp., Vancouver, Canada, pp. 1087-1090, Jul 2011.
- [7]Motoyuki Sato, Si-Wei Chen, "March 11th Japan earthquake and tsunami, beyond the frontiers: what we observed by radar polarimetry," IEEE Int. Geosci. Remote Sens. Symp., Vancouver, Canada, Jul 2011.
- [8]Si-Wei Chen, Motoyuki Sato, "Scattering mechanism analysis and deorientation effect investigation for oriented built-up areas using ALOS/PALSAR PolInSAR data sets," in 3rd ALOS-2/3 Workshop. Tsukuba, Japan, Nov 2011.
- [9]R. Karlina, and M. Sato, "Compressive Sensing Applied to Imaging by Ground Based Polarimetric SAR," Proceedings of 2011 IEEE International Geoscience and Remote Sensing Symposium (IGARSS), Vancouver, Canada, pp 2861-2864, July 2011.
- [10] H. Liu and M. Sato, "Robust estimation of dielectric constant by gpr using an antenna array", Proceeding of IGARSS 2011, Vancouver, Canada, pp. 178-181, July, 2011.
- [11] S. Kusano, M. Sato, Y. Yokota, "Data interpolation and resampling for a synthetic aperture radar data," Proceeding of IGARSS 2011, Vancouver, Canada, pp. 652-655, July, 2011.
- [12] M. Matsumoto, M. Sato, "Analysis of electromagnetic wave scattering from a dielectric dihedral structure by polarimetric GB-SAR", Proceeding of IGARSS 2011, Vancouver, Canada, pp. 1417-1420, July, 2011.
- [13] Motoyuki Sato, (Invited) "New challenges of Ground Penetrating Radar for Archaeological Survey, "Proc. The Safeguard of Cultural Heritage: A Challenge from the Past for the Europe of Tomorrow, pp189-191, Firenze, Italy, 11-13 July, 2011,

成果発表

- [14] Motoyuki Sato, Humanitarian demining sensor ALIS and its deployment in Cambodia, (Key Note Speech), International Conference on Microwaves, antenna, propagation & remote sensing, December, pp6, 2011.
(国際会議など口頭発表) (査読なし)
- [1] Y. Yokota, A. Gaber, M. Masayoshi, and M. Sato, "Estimation of Biomass of Tree Roots by High Accuracy Ground Penetrating Radar," proceeding of the 124th SEGJ Conference, Tokyo, Japan. pp. 291-294, May, 2011.
- [2] Gaber, Y. Yokota, and M. Sato, "3D GPR Signal Processing for Detecting Natural Disaster Damages," IEICE Technical Report, Vol. 111, No. 312. SANE 2011-125, pp. 71-75., 2011.
- [3] H. Liu and M. Sato, "Robust estimation of dielectric constant and layer thickness by gpr antenna array", Proceeding of the 124th SEGJ Conference, Tokyo, Japan, pp. 143-146, May, 2011.
- [4] H. Liu and M. Sato, "New gpr system for accurate velocity and thickness estimation of snow and ice on a frozen lake", Proceedings of the 10th SEGJ International Symposium, Kyoto, Japan, pp. 147-150, Nov, 2011.
- [5] H. Liu, Y. Yokota and M. Sato, "Velocity spectrum analysis for dynamic groundwater level detection by gpr", Proceeding of the 11th Workshop on Subsurface Electromagnetic Measurement, Nara, Japan, pp. 59-64, Nov, 2011.
- [6] 小関勇気, 園田潤, 昆太一, 佐藤源之, "FDTD 法における丸め誤差伝播の定量化," 電学研資 EMT-11-107, pp.7-11, Nov. 2011.
- [7] J. Sonoda, Y. Koseki, T. Kon and M. Sato, "Quantification of Rounding Error Propagation on FDTD Method," Papers of technical meeting on electromagnetic theory, IEEJ, Toyama, Japan, pp.7-11, Nov. 2011.
- [8] 藤原脩, 園田潤, 金澤靖, 佐藤源之, "SfM システムを用いた実環境 FDTD 数値モデルの構築," 電子情報通信学会ソサイエティ大会講演論文集, p.225, Sept. 2011.
- [9] 園田潤, 小野和宗, 佐藤源之, "IPv6 ユビキタス PC クラスタ自動再構成システムの開発と評価," 電子情報通信学会ソサイエティ大会講演論文集, p.234, Sept. 2011.
- [10] 小関勇気, 園田潤, 昆太一, 佐藤源之, "Fermi GPU を用いた GPR シミュレーションの高速化の検討," 電子情報通信学会ソサイエティ大会講演論文集, p.49, Sept. 2011.
- [11] 園田潤, 佐藤源之, "Fermi GPU を用いたディレクティブによる FDTD 高速計算," GTC Workshop Japan 2011, P07, July 2011.
- [12] 小関勇気, 園田潤, 昆太一, 佐藤源之, "FDTD 法を用いた地中レーダシミュレーションの GPU 実装による高速化," GTC Workshop Japan 2011, P08, July 2011.
- [13] 小関勇気, 園田潤, 昆太一, 佐藤源之, "FDTD 法を用いた GPR シミュレーションの GPU 実装による高速化," 信学技報 EMCJ2011-50, pp.37-42, July 2011.
- [14] J. Sonoda, Y. Koseki, T. Kon and M. Sato, "Acceleration of GPR Simulation by FDTD Method on Graphics Processing Unit," IEICE Technical report EMCJ2011-50, Tokyo, Japan, pp.37-42, July 2011.
- [15] 園田潤, 佐藤源之, "コンパイラディレクティブを用いた FDTD 法の GPU 実装による電波伝搬散乱解析の高速化," 計算工学講演会論文集, vol.16, pp.5-8. May 2011.
- [16] 園田潤, 丹治紀彦, 海野啓明, 佐藤源之, 林直樹, 小幡常啓, 若原昭浩, "フラクタル構造における電磁波透過特性の実験的検証," 信学技報 AP2011-12, pp.37-42, May 2011.
- [17] 園田潤, 小関勇気, 昆太一, 佐藤源之, "GPU クラスタにおけるモデル分割を用いた FDTD 法による地中レーダシミュレーションの高速化," 電子情報通信学会総合大会講演論文集, pp.S10-S11, March 2012.
- [18] 及川貴瑛, 園田潤, 本間規泰, 佐藤源之, "3次元 MW-FDTD 並列計算を用いた雷放電電磁界における放電路角度依存性の解析," 電子情報通信学会総合大会講演論文集, p.335, March 2012.
- [19] 小関勇気, 園田潤, 金澤靖, 佐藤源之, "GPU を用いた FDTD 法によるポインティングベクトル分布のリアルタイム可視化," 電子情報通信学会総合大会講演論文集, p.356, March 2012.

成果発表	[20] 嶺岸琢磨, 小関勇気, 園田潤, 金澤靖, 佐藤源之, "Kinect による室内電波環境解析のための FDTD 数値モデル構築," 電子情報通信学会総合大会講演論文集, p.357, March 2012. [21] 園田潤, 佐藤源之, "GPU を用いたディレクティブによる FDTD 法の高速度と室内電波環境解析への応用," 信学技報 EMCJ2011-114, pp.19-24, Jan. 2012. [22] 及川貴瑛, 園田潤, 本間規泰, 池川豊年, 佐藤源之, "3 次元 MW-FDTD 並列計算を用いた大規模都市モデルの雷放電電磁界解析," 信学技報 EST2011-86, pp.17-22, Jan. 2012. [23] 小関勇気, 藤原脩, 園田潤, 金澤靖, 佐藤源之, "SfM システムで構築した実環境 FDTD 数値モデルと GPU による高精度高速電波環境解析," 信学技報 PRMU2011-162, pp.167-172, Jan. 2012. (図書) [1]Motoyuki Sato, Subsurface Sensing Ch.11.8 758-769. Wiley, September, 2011																							
共同研究の 全般的成果の アピール	5 年以上交流を続け、相互学生交換を行っていたフィレンツェ大学と共同で栗原市に地滑りモニタリング用の GB-SAR 装置を設置した。																							
第三者による 評価・受賞・報道 など	3 月 10 日に開催した文化財保護のための科学技術講演会について、地中レーダによる高台移転と遺跡保護の重要性を指示する意見が示された。 2012 年 03 月 22 日木曜日 河北新報／河北抄 http://www.kahoku.co.jp/column/khkksyou/20120322_01.htm																							
本年度の ユニット活性化 のための具体的 な取り組み	<table><tr><td>制 度 名</td><td>課 題 名</td><td>実施期間・規模</td><td>状況</td></tr><tr><td>科研費基盤 (A)</td><td>「最適空間サンプリングによる地雷検知用レーダイメージングの効率化」</td><td>H23 ～ H25 1000 万円／年</td><td>継続採択</td></tr><tr><td>科研費特別推進研究</td><td>減災をめざす電波イメージング科学</td><td>H24 ～ H26 3000 万円／年</td><td>不採択</td></tr><tr><td>JSPS 二国間共同事業</td><td>地中レーダによる環境計測</td><td></td><td>不採択</td></tr><tr><td>三井物産環境基金</td><td>GB-SAR による地滑り計測</td><td></td><td>不採択</td></tr></table>				制 度 名	課 題 名	実施期間・規模	状況	科研費基盤 (A)	「最適空間サンプリングによる地雷検知用レーダイメージングの効率化」	H23 ～ H25 1000 万円／年	継続採択	科研費特別推進研究	減災をめざす電波イメージング科学	H24 ～ H26 3000 万円／年	不採択	JSPS 二国間共同事業	地中レーダによる環境計測		不採択	三井物産環境基金	GB-SAR による地滑り計測		不採択
制 度 名	課 題 名	実施期間・規模	状況																					
科研費基盤 (A)	「最適空間サンプリングによる地雷検知用レーダイメージングの効率化」	H23 ～ H25 1000 万円／年	継続採択																					
科研費特別推進研究	減災をめざす電波イメージング科学	H24 ～ H26 3000 万円／年	不採択																					
JSPS 二国間共同事業	地中レーダによる環境計測		不採択																					
三井物産環境基金	GB-SAR による地滑り計測		不採択																					
来年度のユニッ ト活性化のため の具体的な取り 組みの予定	1. 特別推進研究など大型研究への展開 2. JAXA などと協力した、衛星データ、特にポーラリメトリック SAR データのアジア、シベリア地域での有効利用をめざした教育、若手研究者養成制度の確立。そのためにロシア科学アカデミー・ブリアート科学センターから研究者招へい。 3. 乾燥地域のリモートセンシング応用を推進するため、ボストン大学からの研究者招へい、鳥取大学乾燥地研究センターとの共同研究開始。																							

■ 東北アジア研究センター・プロジェクトユニット研究年度報告書

ユニット名	東アジアにおける移民の比較研究ユニット			
認可期間	2008（平成 20）年度 ～ 2011（平成 23）年度（4 年間）			
組 織	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	(代表者) 瀬川昌久	東北アジア研究センター・教授	王 柳蘭	京都大学地域研究統合情報センター・学振 RPD
	李 仁子	教育学研究科・准教授（センター兼務）	陳 天璽	国立民族学博物館・准教授
	渋谷 努	中京大学国際教養学部・教授	キム ヨンス	韓国西江大学政治外交学科・教授
	工藤正子	京都女子大学現代社会学部・准教授	ユ チョリン	韓国済州大学人文学科・教授
			チョン ビョンホ	韓国漢陽大学文化人類学科・教授
			ジョン ウテック	韓国延世大学医学部
研 究 モニター	氏 名	所 属		
	1 中牧弘允	国立民族学博物館・教授		
	2 嶋陸奥彦	ソウル大学人類学科・教授		
	3 高村竜平	秋田大学教育文化学部・准教授		
	外部評価会の実施	(中間・最終)：2011 年 月 日 参加者：		
研究経費	(研究支援者、RA などの配置) 研究支援者 1 名 (計 9 時間／週) 10 月まで			
ユニットが 主催したセン ター共同研究	地域社会の人材としての「外国人花嫁」の共同調査			
ユニットの 目標・目的	移民とその受け入れ先との接触や交渉の過程を、日本・中国・韓国という東アジアの 3 カ国で調査研究すると同時に、移民や地域ごとの違いを共同で比較分析することを通して、新たな視点から移民研究の理論を練り直すとともに、グローバル化の進む日本社会における多文化共生の実現に必要な、具体的な実践や施策のあり方を模索する。そのために、日中韓 3 カ国における移民政策、移民支援団体の活動等の文献の比較考察を行ったうえで、各フィールドのコンタクト・ゾーンにおける摩擦や協調に関する調査を行い、多文化共生を推し進めるための実践的な方策を見出していくことを目的とする。			

研究の目的と 本年度の成果 ならびに 研究成果の 重要性の概要	本ユニットの活動は、大別して、比較移民研究を推進するための研究会等の開催と東アジア地域間の移民の調査研究である。そのため毎年度、(1)本ユニット主催の「比較移民研究会」の開催、(2)移民やその日本人支援者を招聘し、移民研究者と共同討議を行うワークショップの開催、(3)日本に暮らす東アジア出身移民のコンタクト・ゾーンに関するフィールドワークを行なってきた。しかし、今年度は、東日本大震災の影響が大きく、予定していた研究会やワークショップのほとんどを開催できず、そのためこれまでの共同討議の総括などが行えなかった。しかし、その分、日本や韓国における移民のフィールドワークに多くの資源を振り向けることができた。日本での調査は、山形県や宮城県をはじめとする東北地方の女性移民や都市部の移民家族を対象に、彼(女)らの生活の現場で参与観察および聞き取り調査を行った。東日本大震災の被災地においても、従前のネットワークをいかして調査を行い、震災によってかえって活動の範囲拡大やコミュニティ内の地位上昇に成功した女性移民の姿を明らかにした。また、各地で地域の「人材」にまでなった女性移民の被災地支援活動の参与観察も行い、その成果をまとめることができた。東北地方の女性移民との比較のために行った都市部の移民家族の調査研究も、その一部を論考にまとめた。移民の日韓比較研究として行った韓国での現地調査では、中国やベトナム、さらに日本からの国際結婚移民女性に聞き取りを行うと同時に、韓国の移民研究者たちと研究交流を深めることができた。具体的な成果は調査結果の分析をしてからになるが、間違いなく言えることは、移民は比較研究をしなければその実像は見えてこないということである。今後も比較の視点から調査研究を進めながら実証的なデータを収集し、多文化共生の真の実現に必要な実践や施策のあり方について、現状に即した形で模索していく。
ユニットの成果を公表する URL	
東北アジア 地域研究 としての 意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 研究会による研究活動は移民の国際的な比較に重点を置いており、発表内容は東北アジア地域に限定されない。しかし、調査研究の面においては、東北アジアの中でも経済的先進地域である日中韓の間の人口移動を、移民者自身の生活経験次元から調査分析し、摩擦や葛藤、適応や定着の過程として分析しようとするものであり、東北アジアの経済的コアにおける人の移動の実態を解明することを目指している。 東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕 〈対象とした国・地域など〉 日本、中国、韓国 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください 東アジアの主要国家である日中韓の間の人口移動をテーマとしたものであり、東北アジアの中でも経済的先進地域であるこれらの地域に生じている最もホットな社会の動きを、その現場に身を置いて解明しようとする研究である。これは、東北アジア地域全体の現在と未来を考察する上で必要欠くべからざる研究である。

新 規 性	新規性の有無〔有〕 〈新規性の内容〉 これまでの移民研究では、移民側または受け入れ先社会のどちらかに重点を置いた研究が多かったため、現実には起きている両者間の摩擦やせめぎ合い、さらには安定や協同に至る交渉過程といった動きを取り上げることが少なかった。本研究では、移民と受け入れ先との動的な関係に注目し、両者間のせめぎ合いや交渉がまさに繰り広げられている「コンタクト・ゾーン」をフィールドワークの主眼に置き、両者からの聞き取りを重ね、国際結婚をした女性移民たちの中から地域の人材が生まれるプロセスを立体的・複眼的に調査研究しようとしている点に新規性がある。
学 際 性	文理融合型の研究か〔いいえ〕 文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕 〈参加した専門分野〉 文化人類学、社会学、国際政治学、教育学
専 門 性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉 文化人類学、社会学等における移民研究 〈内容〉 文化人類学や社会学における移民研究の蓄積はかなりのものがあるが、残念ながら日本国内における移民、特に女性移民に関するフィールドワークや聞き取り調査は非常に少ない。また、これまでの女性移民研究では、主としてジェンダー論的なアプローチが採用されており、女性移民を社会的弱者もしくは周縁的存在として捉える傾向が強かった。それに対し、本研究は国際結婚をした女性移民が地域の人材になっていく過程に着目し、それを可能にした諸条件と障碍の乗り越え方を、現地調査によって明らかにするものであり、従来の移民研究に新たな境地を切り開くと同時に、その欠落部分を補うものである。
国 際 性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔無〕 国外の研究者の参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属・参加形態〉 韓国ソウル大学人類学科・調査協力 韓国済州大学人文学科・調査協力 学術交流協定活用の有無〔無〕 外国語による成果公表の有無〔有〕 〈言語〉 英語

教育上の効果	学生の参加による教育上の効果〔有〕 〈参加学生の所属〉 教育学研究科 〈学生による成果発表〉 なし ポスドクの活用の有無〔有〕 〈活用形態〉 教育研究支援者として雇用、ワークショップの企画・参加。 教育上の効果についてアピールしてください 実際に移民が定着しようとして葛藤しているコンタクト・ゾーンに関する調査研究や当事者参加型のワークショップは、社会学、教育学、文化人類学の学生にとって実践的な研究の場を提供することになる。
社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕 〈内容〉 少なくとも日本国内のコンタクト・ゾーンにおける摩擦や軋轢を軽減し、多文化共生を推し進めるための実践的な方策を見出していくことを目的の一部としている。 社会への成果還元の有無〔有〕 〈還元の形態〉 東北地方の移民に関する調査研究から得られた知見をもとに、財団法人宮城県国際交流協会の評議員として県内の多文化共生事業に助言を与えると同時に、宮城県の多文化共生社会推進審議会の委員として国際交流協会や県の多文化共生事業の運営に関して提言を行った。また、平成 24 年度に仙台市で開催される日本女性会議の多文化共生分科会の部会長に選出されたため、その準備段階から仙台市ならびに宮城県の女性移民の地位向上に向けた取り組みを行なっているところである。（李仁子）
学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕 〈連携部局名〉 教育学研究科 学内他部局教員の研究への参加の有無〔有〕 〈参加教員の所属〉 教育学研究科
他組織との連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔無〕 国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属〉 国立民族学博物館 京都大学地域研究統合情報センター 京都女子大学現代社会学部 ノートルダム清心女子大学文学部 慶應義塾大学文学部 大東文化大学環境創造学部 中京大学国際教養学部 中京大学国際教養学部

成果発表	論文・著書 以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。 〔図 書〕 計（２）件 李仁子「外国人妻の被災地支援 ― 被災地の民族誌に向けた一素描」、川村千鶴子編著『3.11 後の多文化家族 ― 未来を拓く人びと』明石書店、2012、139-161 頁 Inja LEE, “The Development and Use of Resources in Educating Immigrant Children” pp. 196-211 in Naoki Yoshihara (ed.), Global Migration and Ethnic Communities: Studies of Asia and South America. Trans Pacific Press. 2012
共同研究の全般的成果のアピール	東北地方は、いわゆる「外国人花嫁」受け入れの最先端地域であった。その地域の中核研究機関が国際結婚移住を経て長期間日本に暮らしてきた外国人女性たちの現地調査研究を担い、彼女らの半生を跡づけ今を記録することには、歴史的にも大きな意義があろう。また、調査の対象を地域社会の人材になった女性移民に置くことによって、移民たちが地域コミュニティにおいて果たし得る役割や社会貢献の可能性を見出せたことは、多文化共生社会の実現に向けて確実な一歩を進めることに他ならない。さらに、東日本大震災の被災地に暮らす女性移民たちの復興に向けた取り組みをリアルタイムで記録に残すことができたことも、特筆すべき成果である。平常時と非常時との比較調査は、今年度に行えた韓国での現地調査に基づく移民の二国間比較と同様に、移民の比較調査研究に新たな視角をもたらすに違いない。
第三者による評価・受賞・報道など	特になし
本年度のユニット活性化のための具体的な取り組み	〈科研費申請〉（課題名、種目、目的の概要） 課題名：被災地の民族誌―東日本大津波の被災者とそのコミュニティに関する人類学的研究（研究代表者・李仁子） 種目：基盤研究（B） 目的の概要：本研究では、被災地を、災害という大規模な環境変化が生み出した局地的異文化として見る。その上で本研究は、3.11 東日本大津波の被災地において文化人類学的調査を行うことによって、被災者やそのコミュニティが被った環境変化と、そこからの再生・復興の初期過程を民族誌的に記述し、後世に記録として残すことを目的とする。そのために、被災地域から 5 カ所の調査地を選び、9 ヶ月の予備調査を含む 4 年以上の期間にわたって、繰り返し現地調査を行うことにより、被災者の移動に伴う生活相の変化や、被災者をとりまく社会的環境や条件の変化、さらには被災したコミュニティが再生・変容していくプロセスを、ホリスティックに記録し続け、本研究の成果が被災地の民族誌として、今後の震災時や学際的な災害研究に貢献することを目指す。（本ユニットにおける調査活動の過程で着想した研究課題であり、被災地のコミュニティにはアジア各地からの女性移民が暮らしている。大枠としては被災地研究だが、復興プロセスにおける移民の変容にも

本年度の ユニット活性化 のための具体的 な取り組み	調査のウェイトを置くものである。)(結果:採択) (その他資金への申請) 中島平和財団「アジア地域重点学術研究助成」への申請(結果:不採択) (その他ユニットの機能を展開するための具体的な活動内容) これまでも韓国のソウル大学・済州大学との調査連携を行ってきたが、今後の研究協力拡大に向けて、漢陽大学の文化人類学科とも研究交流を深めた。また、広義の移民に数えられる北朝鮮からの脱北者の調査研究にも再び着手し、世界各地に再移住している彼(女)らの調査研究ネットワークに参加し、比較移民研究の基盤を準備した。
来年度のユニッ ト活性化のため の具体的な取り 組みの予定	ユニット研究終了のため、特になし。 一定の成果をおさめることができ、また社会的意義も大きいプロジェクトであったので、新たに採択された科研費を財源に、後継のプロジェクトユニットの申請を模索したい。ただし、代表者の瀬川は平成24年4月よりすでに別テーマのユニットの代表者となっているので、これまで実質的にこのプロジェクトを運営してきた副代表者の李仁子准教授を代表者として申請したいと考えるが、そのためには兼務教員に申請資格がない現在の制度がネックである。

■ 東北アジア研究センター・プロジェクトユニット研究年度報告書

ユニット名	シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット			
認可期間	2009（平成 21）年度～2013（平成 25）年度（5 年間）			
組 織	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	(代表者) 高倉浩樹	東北アジア研究センター	山口未花子 山田仁史	東北アジア研究センター 文学研究科(兼務教員)
	奥村 誠	東北アジア研究センター		
	石井 敦	東北アジア研究センター		
研 究 モニター	氏 名	所 属		
	1 岸上信啓	国立民族学博物館教授		
	2 吉田睦	千葉大学文学部教授		
	3 加藤博文	北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授		
	外部評価会の実施		(中間)：2012 年 2 月 8 日 参加者：研究組織 5 名, モニター 3 名, その他 0 名	
研 究 経 費	(研究支援者、RA などの配置) 教育研究支援者 (2011.4～2012.3) (研究スペース配分など) 研究室 1 スパン (その他の主たる外部資金) 科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額 410 万円〕 センター長裁量経費〔金額 50 万円+ 60 万円 (共同研究* 2)〕			
ユニットの 目標・目的	自然科学の観点からみれば、シベリアは極寒の気候を伴う脆弱な生態系であるとされています。しかし社会科学はむしろそこに、歴史的にも政治的にも独自の多民族的な社会構造と特異な都市－農村インフラを備えた空間を見だし、研究の対象としてきました。本研究ユニットの目的は、食糧生産、住居、水道設備、輸送システムなど関わる伝統的な文化、および地域に特有な形で近代化された技術システムに着目しながら、ミクロ環境と人間の社会文化的適応との相互作用を明らかにすることにあります。具体的には文化人類学と土木計画学が連携することで新しいシベリア地域像を解明するとともに、その成果を調査地域に対して還元する方法の開発を目指しています。			

研究の目的と 本年度の成果 ならびに 研究成果の 重要性の概要	2011年度の目標は、前年度から立ち上げた二つの共同研究を本格的に実施し、研究成果を具体的にあげる体制をつくることである。東日本大震災のため研究運営体制のはじまりは若干おそくなったが、二つの共同研究に必要な現地調査の支援、および研究会活動の運営を充実させること、さらに研究交流事業活動を本格的におこなうことで、本ユニットの活動を社会的に発信させていく事を目的とした。 その成果であるが、双方の共同研究においてそれぞれ二回の研究会を実施できた。その詳細はそれぞれの共同研究報告で述べるが、双方ともメンバー間の相互の役割分担が明確になり、研究体制の充実した構築となった。さらに今年度は、昨年度以上に、充実した研究交流事業をおこなうことができた。特に連続実習講座の民族誌映像ビデオ実習講座、シベリアの口承文芸に関わる公開講演会、さらに東北大学図書館における写真展の開催と、シベリア現地での写真展の開催は、本ユニットの重要な成果である。 また、2010年度をもってユニットメンバーの渡邊学氏が異動となったが、シベリアの民族学・神話研究を行う東北大学文学研究科の准教授山田仁史氏を、センター兼務教員として迎えことで本ユニットのメンバーになってもらい、シベリア研究を学際的に行う体制を整えた。 年度末の2月にはユニットの中間評価もおこなったが、そこでの外部評価はおおむね好評で、むしろこの種の活動をセンターにおいてより拡大展開できるような基盤整備が必要であるとの評価を得た。
ユニットの成果を公表する URL	http://www.cneas.tohoku.ac.jp/unit/siberia/html/unit/siberia/mysitel/exchange.html
東北アジア 地域研究 としての 意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 北米極北圏もふくめてシベリアの寒冷地としての自然環境に対して人類学・土木計画学・リモートセンシング・博物館学などの学際アプローチによってシベリア研究を更新する。 東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕 〈対象とした国・地域など〉 ロシア・シベリア 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください シベリア地域を文化人類学と土木計画学さらに環境リモートセンシングの手法をつかって解明することは、国内はもとより国外でも例がなくきわめて独自性が高い。また研究成果を現地に還元するという応用地域研究としての側面ももっており、シベリア地域研究においてこのような試みは我が国にあっては初めてのものである。また今年度から本格的におこなった展示実践にかかわる応用人類学的研究によって、研究成果を調査地および我が国の市民社会に対して提示することをおこなった。このことで基礎学問としての地域研究の発展のみならず、応用的・実践的分野としての可能性を新に開拓するものとなった。
新 規 性	新規性の有無〔無〕 〈新規性の内容〉 シベリア研究を文理連携で行う点。従来の文系的な地域研究に加えて、土木計画という社会的インフラについての研究を行う事。

学 際 性	文理融合型の研究か〔はい〕 〈参加した専門分野〉 文化人類学、生態人類学、神話学、土木計画学、環境リモートセンシング、河川工学、博物館学 文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕 〈参加した専門分野〉 文化人類学、生態人類学、神話学、土木計画学、環境リモートセンシング、河川工学、博物館学
専 門 性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉 〈内容〉 ＊ユニットの主催した共同研究報告書において記載する
国 際 性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕 〈国名・研究機関名〉 ロシア ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学北方民族問題研究所（ヤクーツク市） 国外の研究者の参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属・参加形態〉 ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学北方民族問題研究所・現地コーディネーター 学術交流協定活用の有無〔有〕 〈協定の名称〉 ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学北方民族問題研究所と東北アジア研との部局間協定 外国語による成果公表の有無〔有〕 〈言語〉 ロシア語
教育上の効果	学生の参加による教育上の効果〔有〕 〈参加学生の所属〉文学部・文学研究科・環境科学研究科 〈学生による成果発表〉 なし ポスドクの活用の有無〔無〕 〈活用形態〉 教育上の効果についてアピールしてください 後述するが公開連続企画として民族誌映像実習講座をおこなったが、これには学生が参加した。ビデオでの撮影と動画編集実践をおこなうことで、フィールド調査における記録手段・方法について授業とは異なる形で教育する事ができた。

社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔いいえ〕 社会への成果還元の有無〔有〕 〈還元の形態〉 (1) 連続講座：民族誌映像ビデオ実習講座 趣旨：文化人類学やその隣接分野でのフィールドワークに必要な映像記録（ビデオ）の技術・実践についての講習会。 概要：撮影技術のベースを基本にして、トピックを選び、それに応じた動画を作ってもちより、合評会及び講師のコメントで構成する。生のフィルムではなく、動画編集ソフトによって編集済みの番組（各自 10 分程度）を持ってくるのが前提。 受講資格：ビデオ機器をもち、撮影・編集することが自分でできる初学者（ビデオはカメラのものでもかまわない）。また原則として以下の 6 回の講座にすべて参加出来る人（応相談）。 日時：2011 年 6 月 22 日、7 月 13 日、8 月 24 日、9 月 11 日（合同撮影会・仙台市ジャズフェス）、10 月 26 日、1 月 25 日の午後 4 時から 6 時 場所：東北大学川内キャンパス内 定員：8 名ほど (2) 公開講演会：「ロシア葬礼泣き歌に現れる他界観：北部地方とシベリア・レナ川地方の泣き歌をてがかりに」講師：中堀正洋（慶応義塾大学 非常勤講師） 日時：2011 年 11 月 29 日（火）18:00 ～ 19:30 会場：東北大学文学部 315 室 (3) 展示：写真展「北にくらす子どもたち」 ユーラシアおよび北米大陸の極北世界を調査研究する人類学・言語学者達が、フィールドワークのなかで撮影した民俗写真のうち、とりわけ子どもの写真を集めて紹介する。厳しくも美しい自然環境や伝統的文化から、現代の子どもをめぐる環境までさまざまな側面の日常が写されている。 場所：東北大学附属図書館本館一階常設展会場 日時：2012 年 1 月 17 日～ 3 月 1 日 8:00 から 22:00（ただし土日は 10 時開館） 共催：北海道立北方民族博物館 (4) 展示：写真展「日本人のみたトナカイ遊牧民：シベリア民俗写真を現地に戻して展示する試み」 日時：2012 年 3 月 22 日から 24 日 午前 10 時から午後 5 時半 場所：ロシア連邦サハ共和国エヴェノ・ブイタンタイ郡サクリール（バタガイ＝アリタ）村文化センター
学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕 〈連携部局名〉 東北大学総合図書館 学内他部局教員の研究への参加の有無〔有〕 〈参加教員の所属〉 文学研究科

他組織との連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕 〈連携組織名〉北海道立北方民族博物館・地域研究コンソーシアム 〈連携の形態〉 写真展示における共催・オンデマンドセミナー共催 国内の研究機関の研究への参加の有無〔無〕
成果発表	研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと） 研究会〔 回〕 公開の会議・シンポジウム〔 回〕 国際会議〔 回〕 *ユニットが主催する共同研究の報告書に記載 論文・著書 以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。 〔雑誌論文〕 計（ ）件 〔学会発表〕 計（ ）件 〔図 書〕 計（ ）件 〔その他の公表〕 計（ ）件 *ユニットが主催する共同研究の報告書に記載
共同研究の全般的成果のアピール	共同研究の報告書で記載
第三者による評価・受賞・報道など	・写真展「北にくらす子どもたち」について仙台のカフェモンサンクルーのブログに掲載 http://monstloul.blogspot.jp/2011/12/blog-post_617.html ・シベリアの調査地において民俗写真展開催した高倉准教授に現地行政府から感謝状（http://www.cneas.tohoku.ac.jp/news/2012/news120404.html）
本年度のユニット活性化のための具体的な取り組み	〈科研費申請〉（課題名、種目、目的の概要） 〈その他資金への申請〉 ・資金的な体制はすでに充実している 〈その他ユニットの機能を展開するための具体的な活動内容〉 ・シベリアの民族学・神話研究を行う東北大学文学研究科の准教授山田仁史氏を、センター兼務教員として迎えことで本ユニットのメンバーになってもらい、シベリア研究を学際的に行う体制を整えた。
来年度のユニット活性化のための具体的な取り組みの予定	特になし

■ 東北アジア研究センター・プロジェクトユニット研究年度報告書

ユニット名	21 世紀東北アジア地域像の構築に関する研究ユニット			
認可期間	2009（平成 21）年度～2015（平成 27）年度（7 年間）			
組 織	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	(代表者) 岡 洋樹	東北アジア研究センター		
	佐藤源之	東北アジア研究センター	栗林 均	東北アジア研究センター
	奥村 誠	東北アジア研究センター	工藤純一	東北アジア研究センター
	石渡 明	東北アジア研究センター	鹿野秀一	東北アジア研究センター
	瀬川昌久	東北アジア研究センター	高倉浩樹	東北アジア研究センター
研 究 モニター	氏 名		所 属	
	1 林 裕明		島根県立大学総合政策学部	
	2 華 立		大阪経済法科大学	
	3 下倉 渉		東北学院大学文学部	
	外部評価会の実施		(中間・最終)：2010 年 月 日 参加者：	
研 究 経 費	(研究支援者、RA などの配置) 研究支援者 1 名 (研究スペース配分など) 客員研究室 (その他の主たる外部資金) 科学研究費補助金ほか政府関係資金 センター長裁量経費〔金額 500,000 円〕			
ユニットの 目標・目的	本プロジェクトは、東北アジア研究センター及び内外の研究者・機関が展開する個別課題に関わる共同研究やプロジェクトの成果を統合し、「東北アジアとは何か」という問いに対する回答を準備し、当該地域像を研究者コミュニティや社会に向けて発信することをミッションとする。具体的には、東北アジアを視座として分野横断的に個別研究成果を組み合わせながら、統合的地域像を創出するために一連の研究集会やシンポジウムを企画・運営する。同時に地域研究が不可欠の要素として要求する研究対象地域の研究者コミュニティとの国際的連携を確保しながら、地域理解・地域像の共有を目指す。			

研究の目的と 本年度の成果 ならびに研究 成果の重要性 の概要	本ユニットでは、東北アジアの地域像を導出することを目的として、共同研究を運営するとともに、東北アジア地域研究者データベースを構築している。かかる目的の下に、国内の東北アジア地域研究組織である富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センターと部局間学術交流協定を締結した。平成23年度は、科学研究費補助金基盤研究(A)「 」が採択されたことから、共同研究として「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」を立ち上げ、調査研究を開始することができた。この共同研究は、19世紀末～20世紀初頭と20世紀末～21世紀初頭を東北アジアにおける二つの変動期として捉え、二つの時期に生じた変動の特質を比較検討しようとするものである。すなわち、第一変動期は清朝とロシアという東北アジアを統治した二つの帝国支配が動揺・解体したことによって生じた東北アジア内陸部、とくにモンゴル高原を中心にした流動的状况し、第二変動期では、中国における改革・開放政策の進展や市場経済の発展、ロシアにおける社会主義体制の解体と市場経済への移行に伴って生じた社会変動を、現地資料調査及びフィールド調査に基づいて進めている。この共同研究は、上記の学術交流協定に基づき、本センターと富山、島根の両組織が中心となり組織されている。また東北アジア研究者データベースは 名分のコンテンツを持つに到っており、現在試験的にセンター内で公開している。
ユニットの成果を公表する URL	
東北アジア 地域研究 としての 意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 本研究は、東北アジアを地域概念として構築することを目的として、内外の研究を統合的に結びつけながら実施される。それゆえ、東北アジア地域研究としての位置づけは明確である。また本年度からは、本ユニットが運営する共同研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」（平成23～26年度）を立ち上げ、ロシア、中国、モンゴルを対象とする科学研究費補助金による調査研究を開始している。 東北アジア地域を対象とする研究か〔はい いいえ〕 〈対象とした国・地域など〉 中国、ロシア、モンゴル、朝鮮半島、日本 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください 本ユニットでは、東北アジアを視野とする研究枠組を確立するという目的の下に活動を行っている。本年度からは外部資金を得て、共同研究が立ち上げられた。本ユニットが運営する共同研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」は、ロシア、中国、モンゴルの変動期における動向を東北アジア大の視野を確保しながら研究することによって、地域社会のさまざまな動向を、東北アジア地域の課題として把握しようとする点で、東北アジア地域研究の研究枠組みとしての有効性を導き出そうとしている。共同研究では、19世紀末～20世紀初頭を第一変動期、20世紀末～21世紀初頭を第二変動期として捉えているが、これらはいずれも第一変動期では清朝と帝政ロシア、第二変動期では中国・ソ連という広域の巨大国家の統治の変容・解体という特色を共有している。このことは、東北アジア地域を理解する上で、広域国家の変容という視点が不可欠であることを示している。かかる視野を確保した上で、本共同研究は現地地域社会に焦点を当てたミクロな調査研究を実施している。第一

東北アジア 地域研究 としての 意義	変動期に関しては、清朝統治の弛緩によって生じた中国からの人口流出が、流出先のモンゴル高原で発生せしめた流動的状況や、カザフなどの民族移動の様相が取り上げられる。第二変動期では、ソ連社会主義体制の解体と中国の改革・開放政策による市場経済への移行がもたらす人口流動によって、シベリア、極東に生じた経済的諸条件や社会構成の変化を取り上げて調査研究を進めている。このようなアプローチは、地域の現場のミクロな状況を、東北アジア大のマクロな視野のもとに位置づけることを目指すものであり、東北アジア研究に方法的・実証的な基礎を打ち立てるものと言える。
新 規 性	新規性の有無〔有〕 〈新規性の内容〉 東北アジアを研究上の視野として設定して導出した問題意識に基づき、中国・モンゴル・ロシアを対象として現地調査を踏まえた実証的研究を行おうとする点で新規性を有する。また一昨年度から、国内の東北アジア地域研究組織と学術交流協定を締結して、学際的な研究協力態勢を構築した。かかる試みも国内では例がなく、新規性をもつと言える。
学 際 性	文理融合型の研究か〔はい〕 〈参加した専門分野〉 ユニットの組織にはセンター内の文系・理系の研究者が参加しており、今後文理の連携による活動を進めていく所存である。 文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕 〈参加した専門分野〉 ユニットの研究組織は、東北アジア研究センター内の文系・理系の研究者をとりこんでおり、個別の共同研究成果をより高いレベルで統合しながら、東北アジア地域研究の確立を目指している。ユニットに参加した研究者の研究分野は、歴史学、言語学、リモートセンシング、地質学、文化人類学、社会人類学、生態学である。
専 門 性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉 経済学 〈内容〉 20 世紀末～ 21 世紀初頭のロシアシベリア、極東の労働力移動や現地の社会状況の変化を、現地調査に基づいて実証的に解明しようとする点に、経済学的立場からの地域研究の事例としての意義がある。 〈専門分野名〉 歴史学 〈内容〉 東北アジア史上、近代の歴史展開の基盤となった帝国統治の意義を、その解体局面において解明し、20 世紀末以後の第二変動期における諸状況と類比的に考察することで、歴史研究の現在的意義を強く意識した研究を展開することが可能となる。また従来我が国では充分解明されていない清末のモンゴル地域の歴史解明という点での意義も有する。

国際性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕 〈国名・研究機関名〉 中国：内蒙古師範大学、内蒙古大学 モンゴル：モンゴル科学アカデミー歴史研究所 ロシア：ロシア科学アカデミー・シベリア支部 国外の研究者の参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属・参加形態〉 研究分担という形での参加はないが、調査・研究時の支援は随時得ている。 また今後研究集会やシンポジウムなどへの参加を得ようと考えている。 学術交流協定活用の有無〔有〕 〈協定の名称〉 大学間学術交流協定：ロシア科学アカデミー・シベリア支部、モンゴル科学アカデミー 部局間学術交流協定：内蒙古師範大学旅游学院、同蒙古学学院、内蒙古大学蒙古学学院、ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方先住民民族研究所 外国語による成果公表の有無〔有〕 〈言語〉 英語、ロシア語、モンゴル語
教育上の効果	学生の参加による教育上の効果〔無〕 ポスドクの活用の有無〔有〕 〈活用形態〉 教育研究支援者1名
社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕 〈内容〉 共同研究の成果は、今後公開の研究会やシンポジウムなどの形態で社会に還元していく予定である。 東北アジア地域研究者データベースを作成することによって、東北アジア研究の進展に寄与することで社会貢献を行うことを目指す。 社会への成果還元の有無〔有 無〕
学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔無〕 学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕
他組織との連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕 〈連携組織名〉 富山大学極東地域研究センター 島根県立大学北東アジア地域研究センター 〈連携の形態〉 共同研究への参加、調査・研究の実施 国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属〉 早稲田大学文学学術院、山形大学人文学部、富山大学極東地域研究センター、島根県立大学総合政策学部（北東アジア地域研究センター）、松山大学経済学部、一橋大学経済研究所

成果発表	研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと） 研究会〔0回〕 公開の会議・シンポジウム〔0回〕 国際会議〔0回〕 論文・著書 以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。 〔雑誌論文〕計（8）件 〔学会発表〕計（12）件 〔図 書〕計（1）件 〔その他の公表〕計（ ）件 共同研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」の調査実施状況と関連する成果 岡洋樹 1. 本年度の調査：調査地、調査期間、調査内容 モンゴル（ウランバートル）、2012年3月8日～19日、国立アーカイヴで清末モンゴル北部国境地帯に関する文書史料の調査 2. 本科研費に関わる論文・研究発表 内蒙古師範大学「庆祝内蒙古师范大学建校六十周年蒙古学研究系列学术活动蒙古历史文化研讨会」2012年3月6日「关于清代蒙古基层社会研究相关问题」 井上治 1. 本年度の調査：調査地、調査期間、調査内容 (1) モンゴル（ウランバートル、バヤンウルギー）、20110905-20110914、国立アーカイヴで清代カザフ関連公文書資料の調査とバヤンウルギー県ウルギー市と同県アルタンツグツ郡でのインタビュー調査 (2) モンゴル（ウランバートル）、20111219-20120108、国立アーカイヴで清代カザフ関連公文書資料の調査とウランバートル在住カザフ人へのインタビュー 2. 本科研費に関わる論文・研究発表 北東アジア研究会第3回例会、2001年11月17日、「モンゴル人とムスリムとの共生関係」 中村篤志 1. 本年度の調査：調査地、調査期間、調査内容 3月15日～16日：北京、民族大などでの史料収集 2. 本科研費に関わる論文・研究発表 論文：「清朝治下モンゴル社会におけるソムをめぐる～ハルハ・トシェートハン部左翼後旗を事例として」東洋学報 93-3, pp.1-25, 2011, 12 研究発表：「清朝宮城空間とモンゴル王公」近世東アジア比較都城史研究会第4回、平成23（2011）年6月25、26日 於：山形大学人文学部 柳澤明 1. 本年度の調査：調査地、調査期間、調査内容 3月：モンゴル国立中央アルヒーヴで清代文書調査 堀江典生 1. 本年度の調査：調査地、調査期間、調査内容 調査地：タジキスタン、調査期間：11月22日～12月3日
------	---

成果発表

調査内容：ロシアへの移民送出地域の変容を小規模村落において調査するために、タジキスタンのソグド州の農村においてインタビュー調査を行うとともに、現地で文献収集を行った。

2. 本科研費に関わる論文・研究発表

堀江典生・V. レイマー (2011.10) 「アムール州に見る中ロ経済関係：強まる中国依存に活路はあるか？」『ERINA REPORT』No.102、pp. 14-25.

研究発表

堀江典生、2012.3、「ロシア極東地域農業開発にみる共生の期待と不安」、シンポジウム「中ロ国境地域：共生への期待と不安」、富山大学。

今村弘子

1. 本年度の調査：調査地、調査期間、調査内容

2011年8月7日～12日 中国（ハルビン、瀋陽） 黒竜江社会科学院、遼寧社

会科学院，黒竜江省世興貿易有限公司にてヒアリング

2011年11月22日～26日 中国（北京、延吉） 中国社会科学院、北京大学、

中国国際問題研究所、延辺大学にてヒアリング

2. 本科研費に関わる論文・研究発表

「中露の経済交流」を「東アジア共生学創成プロジェクト」にて発表

雲 和広

1. 本年度の調査：調査地、調査期間、調査内容

(1) 2012.2.27-3.7. ペテルブルク・モスクワ（ロシア連邦）. ロシアにおける家計内分業と出生行動の分析.（予定）

2011.11.24-12.2. モスクワ（ロシア連邦）・フジャンド（タジキスタン）. World Value Surveys による価値観の決定要因分析，タジク労働移民の海外送金と家計所得との関係の分析.

2011.9.4-8. ウラジオストク・ハバロフスク（ロシア連邦）. ロシアにおける出生率の決定要因とロシア極東地域における人口動態の特質の分析.

2011.8.26-29. 北京（中華人民共和国）. ロシアにおける出生率の決定要因分析.

2011.7.28-8.23. モスクワ・エカテリンブルク・ペテルブルク・モスクワ（ロシア連邦）. ロシアにおける出生率の決定要因分析と将来人口予測.

2. 本科研費に関わる論文・研究発表

著書（単著）

『ロシアの人口問題－人が減りつづける社会－』，東洋書店 ユーラシア・ブックレット No.167, 2011年10月.

査読付学術論文

1. Demographic Situations and Development Programs in the Russian Far East and Zabaikalye, in Studies on Russia: Time and Space of Risks and Opportunities, Kyong-Wan Lee et al. eds., LIT-Verlag, to be published in 2012.

2. Tajik Labor Migrants and Their Remittances: Is Tajik Migration Pro-Poor?, Post-Communist Economies, vol.24, no.1, February 2012, pp.87-109.

3. 「ロシア長期家計モニタリング調査 (Russia Longitudinal Monitoring Survey) からみた居住環境と住宅政策の問題」, 『ロシア・ユーラシアの経済と社会』, 第 952 号, 2011 年 12 月, pp.2-22. (道上真有との共著)
4. 「タジキスタンの国際労働移民と海外送金: タジク移民は貧困削減に親和的か?」, 『経済研究』, 第 62 巻第 2 号, 2011 年 4 月, pp.113-128.

招待論文及び書籍分担執筆

1. Голоса женщин: гендерные исследование в Таджикистане (Women's Voices: Gender Survey in Tajikistan) // Миграционный мост между Центральной Азией и Россией (Migration Bridge between the Central Asia and Russia), Рязанцев, С.В. и Каримов, О.К. ред., Москва, Экон-информ, Oct.31, 2011, стр. 222-230. (五十嵐徳子との共著)
2. Таджикские трудовые мигранты и их денежные переводы (Tajik Labor Migrants and Their Remittances) // Миграционный мост между Центральной Азией и Россией, Рязанцев, С.В. и Каримов, О.К. ред., Москва, Экон-информ, Oct. 31, 2011, стр. 308-315.

Working Papers

1. 「ロシアの死亡動態再考: サーベイ」, Russian Research Center Working Paper No.35, January 2012.
2. 「タジキスタンのジェンダー状況 — タジク女性の声: タジキスタンミクロサーベイより —」, Discussion Paper A-554, Institute of Economic Research, Hitotsubashi University, Tokyo, October 2011. (五十嵐徳子との共著)

成果発表

学会・学術研究集会報告

- (* denotes invited speeches: airfare or accomodation or both were born by the external [non-Japanese] organizer[s])
- *1. Таджикские трудовые мигранты и их денежные переводы, The 3rd International Symposium "A Role of Migration in Modernization and Innovative Development of Economy of the Countries Sending and Accepting Migrants" (Invited Speech), Khujand, Tajikistan, Nov 28, 2011.
 - *2. Tajik Labor Migrants and Their Remittances: Is Tajik Migration Pro-Poor? Comparative Sociology in Quantitative Perspective, Reporting Conference of the Laboratory for Comparative Social Research, Higher School of Economics, Moscow, Russia (Invited Speech), Nov 25, 2011.
 3. Tajik Labor Migrants and Their Remittances: Is Tajik Migration Pro-Poor?, Association for Slavic, East European and Eurasian Studies, Omni Hotel Washington DC, US, Nov 20, 2011.
 4. 「ロシアの人口問題: 人が減りつづける社会」, 比較経済体制学会第 10 回秋期大会, 一橋大学, 2011 年 10 月 8 日.
 5. 「ロシアにおける出生規定要因・マイクロデータによる接近」, 比較経済体制学会第 51 回全国大会, 神戸大学, 神戸, 2011 年 6 月 5 日.
 6. "Tajik Labor Migrants and Their Remittances: Is Tajik Migration Pro Poor?", 比較経済体制学会第 51 回全国大会, 神戸大学, 神戸, 2011 年 6 月 5 日.
 - *7. "Tajik Labor Migrants and Their Remittances: Is Tajik Migration Pro Poor?", 2011 WCU Young Researchers' Workshop on Economic Transition and Development, Seoul National University, Seoul,

成果発表	Korea (Invited Speech), May 20, 2011. 馬紅梅 1. 本年度の調査：調査地、調査期間、調査内容 3月13日～25日、中国哈爾濱、黒河、綏芬河、煙台、ロシア・ブラゴヴェシチェンスクでの貿易、投資、労務関係と旅行関係の調査
共同研究の 全般的成果の アピール	本ユニットが運営する共同研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」は、科学研究費補助金基盤研究(A)(研究期間:平成23～25年度)により、平成23年度から調査研究を開始している。本年度は初年度で、研究態勢の構築の年として位置づけ、研究分担者がそれぞれのフィールドにおいて現地協力機関の支援を確保しつつ、現地でのフィールド調査を行った。この内、第一変動期班は、モンゴル国立歴史中央アルヒーフにおいて調査を実施し、第二変動期班はロシア、中国でのフィールド調査を実施している。
第三者による 評価・受賞・報道 など	ユニット三年目にあたるので、外部評価委員による評価を実施した。研究グループとしての受賞はとくになし。
本年度のユ ニット活性化 のための具体 的な取り組み	(科研費申請 (課題名、種目、目的の概要) 科学研究費補助金基盤研究(A)「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」(課題番号 23251003) 本研究は、ロシア・中国という二つの巨大国家の辺境としての特質を持つ東北アジアにおいて人の動きがもたらす地域社会再編を国際情勢が最も激しく変動した二つの時代で比較検討することにより、大国の利害が絡む辺境地域の共生のあり方を考察するプロジェクトである。ふたつの時代とは、19世紀末から20世紀初頭におけるロシアと清の帝国統治崩壊期、20世紀末から21世紀初頭における社会主義体制の崩壊と市場経済化の時期であり、両時期において最も大国の辺境において諸民族の国境を越えた移動が活発になった時期である。国境を越える人の移動に伴い、大国間の国際政治に揺れながら、地域住民の入植者・移民への反発・警戒、そして異質な入植者や移民を受け入れることで形成した新たな地域社会・コミュニティ構築のあり方などが模索された時期である。従来、共時的にしか捉えてこなかった東北アジアという辺境の地域社会・コミュニティ構築のあり方を通時的に捉えなおし、北東アジアの共生社会のあり方を考察する試みを、当該地域の歴史学、社会人類学、経済学を含む学際的体制で取り組む。
来年度のユ ニット活性化 のための具体 的な取り組み の予定	昨年度は、東日本大震災の影響もあり、研究集会を充分に開催することができなかった。本年度は集会を開催することによって研究成果の共有と活性化を図る。

■ 東北アジア研究センター・プロジェクトユニット研究年度報告書

ユニット名	東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット			
認可期間	2010（平成 22）年度 ～ 2012（平成 24）年度（3 年間）			
組 織	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	(代表者) 栗林 均	東北アジア研究センター	斯琴巴特爾	中国内蒙古大学蒙古学研 究院教授
	斯欽巴図	センター教育研究支 援者	敖特根	中国西北民族大学蒙古語 言文化学院教授
	哈斯巴特爾	中国黒竜江大学満族語 言文化研究中心教授		
研 究 モニター	氏 名	所 属		
	1 橋本勝 2 二木博史 3 フフバートル	大阪外国語大学名誉教授 東京外国語大学教授 昭和女子大学教授		
	外部評価会の実施	(中間・最終)：2013 年 1 月（予定） 参加者：研究組織 3 名、モニター 3 名		
研 究 経 費	(研究支援者、RA などの配置) 教育研究支援者 1 名 (研究スペース配分など) プロジェクト研究室 (432) 科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額 50 万円〕 センター長裁量経費〔金額 50 万円〕 運営費交付金 (個人研究費)〔金額 30 万円〕			
ユニットの 目標・目的	本研究ユニットは、東北アジア地域に居住する諸民族が現在使用している、 そして過去に使用した文字および言語を対象として、言語学、文献学、文字 学の観点から研究するとともに、言語情報処理学の観点からそれらをコン ピュータ、インターネットで利用する技術の開発と応用を研究することを目 的としている。 東北アジア地域の多くの言語・文字のうち、本研究では、特にモンゴル族、 満洲族、漢族が使用してきた文字と文献資料、具体的にはモンゴル文字、満 洲文字、漢字、さらにパスパ文字、女真文字、契丹文字等の資料・文献を研 究する。			

研究の目的と 本年度の成果 ならびに 研究成果の 重要性の概要	本年度は、研究成果として『東北アジア研究』に論文を1本掲載した。これは、前年度に行われた国際ワークショップ「モンゴル語の辞書」における報告発表を論文にしたものである。『道北アジア研究』には、同ワークショップにおける報告発表がもう1篇掲載された。 また、東北アジア研究叢書として、研究成果を2点出版した。これに加えて、本ユニットに教育研究支援者として参加している斯欽巴図は、科学研究費補助金（若手）と出版助成を得て、東北大学出版会から『三合語録』における満洲文字表記モンゴル語の研究』と題する著書を出版した。 このほか、栗林は内蒙古大学、内蒙古師範大学、内蒙古社会科学院、中央民族大学、中国社会科学院を訪問し、北京で開催されたモンゴル学国際学術会議に出席・発表するとともに、中央民族大学で2回の講義を行い、研究機関との協力関係を深めた。 プロジェクトユニットのスタッフとして、黒竜江大学満族語言文化中心、中国内蒙古大学蒙古学学院、西北民族大学蒙古語言文化学院から客員教授を迎え、研究機関と研究者間の交流と協力関係を推進した。
ユニットの成果を 公表する URL	http://www.cneas.tohoku.ac.jp/staff/hkuri/sympo.htm http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/FullTextSearch/_19.html (制作した電子化辞書データの公開)
東北アジア 地域研究 としての意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 「東北アジア民族」は、中国・モンゴル・ロシアをカバーする地域に分布している諸民族を指しており、まさに東北アジア地域そのものを研究の対象としている。 東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕 〈対象とした国・地域など〉 現在の国家としては、中国・モンゴル・ロシアの3国にまたがる。歴史的にはモンゴル帝国の版図およびそれを継承する地域を研究の対象としている。 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください 東北アジア地域には歴史的に多くの民族が居住し、自らの言語を様々な文字で記録してきた。それらの文献資料を言語資料あるいは歴史史料として扱う際には、それぞれの言語の特徴・特殊性に合わせた処理の仕方とそれに基づいた研究が必要である。本研究では、民族文字資料を言語資料として利用する際の問題点を明らかにし、それらの解決を図りながら、同時にそれによって言語学・文字学、特殊言語の情報処理一般の問題解決に貢献することをめざしている。
新 規 性	新規性の有無〔有〕 〈新規性の内容〉 これまで計算機処理のおよばなかった、東北アジアの様々な民族文字・言語の資料をコンピュータによって処理することにより、入力した大量のデータを正確かつ高速に処理できること。 同時に関連する複数のテキストデータ間のリンク、画像データとのリンク、動画データとのリンクを行なうことにより、それらを統合した研究であること。
学 際 性	文理融合型の研究か〔いいえ〕 文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕 〈参加した専門分野〉 情報処理科学

専 門 性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉言語学、モンゴル学 〈内容〉 コンピュータの処理能力を最大限に生かしたデータの活用、具体的には大量データの高速処理により、正確な出力が可能となる。 歴史学、民族学、文化人類学等、他の分野においても、民族文字資料における自由な検索が可能となる。
国 際 性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕 〈国名・研究機関名〉 中国・内蒙古大学蒙古学研究院 中国・内蒙古師範大学蒙古学研究院 中国・中央民族大学 中国・黒竜江大学 中国・西北民族大学 国外の研究者の参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属・参加形態〉 中国・黒竜江大学満族語言文化研究中心・客員教授 中国・内蒙古大学蒙古学研究院・客員教授 中国・西北民族大学・客員教授 学術交流協定活用の有無〔有〕 〈協定の名称〉 1. 東北大学東北アジア研究センター、中国内蒙古師範大学蒙古学研究院間の部局間協力協定（2008年） 2. 東北大学東北アジア研究センター、中国内蒙古大学蒙古学学院間の部局間協力協定（2008年） 外国語による成果公表の有無〔有〕 〈言語〉中国語
教育上の効果	学生の参加による教育上の効果〔有〕 〈参加学生の所属〉大学院環境科学研究科、東北アジア研究センター（研究生） 〈学生による成果発表〉 学生学術交流会における発表（1） ポスドクの活用の有無〔無〕 教育研究支援者として採用 教育上の効果についてアピールしてください スタッフの客員教授の講演・講義により、専門性を進化させた。研究で制作した電子化データ、特に電子辞書を利用することができるようになり、学習と研究の効率を上げた。
社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕 〈内容〉文字資料データベースの応用 社会への成果還元の有無〔有〕 〈還元の形態〉 横浜ユーラシア文化館における「オロンスム文書データベース」構築に対する協力 http://www.eurasia.city.yokohama.jp/olconsume/ にて公開中。
学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔無〕 学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕

他組織との 連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕 〈連携組織名〉 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 〈連携の形態〉 共同研究 国内の研究機関の研究への参加の有無〔無〕
成果発表	研究会議開催回数 （プログラム・メール連絡など添付のこと） 研究会〔0回〕 公開の会議・シンポジウム〔0回〕 国際会議〔0回〕
成果発表	論文・著書 以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。 〔雑誌論文〕計（1）件 栗林均「近代モンゴル語辞典の成立過程」『東北アジア研究』第16号、127-148頁。 〔学会発表〕計（1）件 栗林均「近代蒙古語詞典的演変と発展」第2回蒙古族民族文化研究国際会議、2011年10月、北京。 〔図 書〕計（3）件 栗林均『「達斡爾語詞彙」蒙古文語索引』東北アジア研究叢書第46号、2012年、300頁。 栗林均『「元朝秘史」傍訳漢語索引』東北アジア研究叢書第47号、2012年、582頁。 スチンバト『「三合語録」における満洲文字表記モンゴル語の研究』東北大学出版会、2012年、548頁。 〔その他の公表〕計（ ）件
共同研究の 全般的成果の アピール	外国、特に中国内の北京、フフホト、ハルビン、蘭州等各地の研究機関・研究者との連携と協力関係を積極的に推進して
第三者による 評価・受賞・報道 など	なし。
本年度の ユニット活性化 のための具体的 な取り組み	
来年度のユニッ ト活性化のため の具体的な取り 組みの予定	国際ワークショップの開催を予定している。

■ 東北アジア研究センター・プロジェクトユニット研究年度報告書

ユニット名	東アジア出版文化研究ユニット			
認可期間	2010（平成 22）年度～2012（平成 24）年度（3 年間）			
組 織	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	(代表者) 磯部彰	東北アジア研究センター	黄霖	(中国)復旦大学中国古代文学研究センター
	渡邊健哉	東北大学大学院文学研究科(院生)・RA	崔溶澈	(韓国)高麗大学校中語中文学科
	熊静	東北大学東北アジア研究センターRA(9月まで)	石昌淦	(中国)中国社会科学院文学研究所
研 究 モニター	氏 名	所 属		
	1 高橋智 2 小川陽一 3 曾根 理	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 東北大学名誉教授 東北大学学術資源研究公開センター史料館・助教		
	外部評価会の実施			
研 究 経 費	(研究支援者、RA などの配置) RA 2 名 (研究スペース配分など) 332 号室 センター長裁量経費〔金額 500,000 円〕 運営費交付金（個人研究費）			
ユニットの 目標・目的	本研究ユニットでは、日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業による拠点形成を承けて、日中韓三国及び欧米諸国の相互研究交流を通して、東アジア出版文化をめぐる教育・研究体制を維持し、東アジア諸国に残る様々な出版資料のもとで、近世から近現代の東アジア世界の構造を明らかにするための共同研究を構築する。			
研究の目的と 本年度の成果 ならびに 研究成果の 重要性の概要	東アジア出版文化研究を進めるための共同研究「東アジア近世社会における出版文化の意義」を維持することを中心に、若手研究者育成のための東アジア出版文化研究を推進する。また、出版文化関係の展覧会をオープンキャンパスの折に開き、大学生・高校生及び一般市民へ啓蒙活動を行なう。中国・韓国・アメリカなどの専門家を招へいし、講演会などを企画し、東アジア善本叢刊を発行し、社会に成果を還元する。 本年度では、ユニットを母胎とした共同研究を推進し、若手研究者育成を兼ねて特別推進研究との共同研究会を 4 回開催した他、東アジア善本叢刊 15 集を刊行した。また、ドイツ・ライプチヒ大学やフンボルト大学、トルファン研究所と研究交流を開始した。同時に、スペイン、スウェーデン、台湾及びドイツ六十余大学に研究成果である東アジア善本叢刊及び関連書の未発送分を寄贈し、研究成果の還元を図った。			

ユニットの成果を公表する URL		http://eapub.cneas.tohoku.ac.jp/
東北アジア地域研究としての意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 中国の木版印刷術を核心とした東アジア、北アジアの諸国・民族相互の文化交流と、地域独自文化形成に視点を置いてユニットを構成している。 東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕 〈対象とした国・地域など〉 中国（内モンゴルを含む）・朝鮮半島・日本・ベトナム・琉球 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください 東アジアを中心とした出版文化の効果と影響で、中国からの文化の波及のみならず、それぞれの地域での文化形成を重視している。	
新規性	新規性の有無〔有〕 〈新規性の内容〉 文学・文化及び資料学・東洋史・アジア交渉史から成る研究組織に、研究テーマ・分野の異なる若手研究者を加え、出版文化を多角的に捉える点に新規性がある。	
学際性	文理融合型の研究か〔いいえ〕 〈参加した専門分野〉 中国文学・中国史・チベット史・朝鮮文化・東北アジア史 文系・理系での学際性・連携性の有無〔無〕	
専門性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉 東アジア出版文化 〈内容〉 書誌学・文献学という従前の旧形態的学問からではなく、総合的文化論の一つである出版文化学で社会を考えるという点に特色がある。	
国際性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕 〈国名・研究機関名〉 （韓国）高麗大学校日本研究センター・中国学研究所・中語中文学科、（中国）復旦大学中国古代文学研究センター・古籍整理研究所、（中国）中国社会科学院文学研究所、（中国）中山大学、（中国）北京故宫博物院故宫学研究所、（ドイツ）ライプチヒ大学アジアアフリカ図書館、（台湾）国立成功大学 国外の研究者の参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属・参加形態〉 ・石昌渝（中国社会科学院文学研究所） ・崔溶澈（高麗大学校中語中文学科） ・黄霖（復旦大学中国古代文学研究センター） 学術交流協定活用の有無〔有〕 〈協定の名称〉 （韓国）高麗大学校日本研究センター及び中国学研究所との部局間交流協定 外国語による成果公表の有無〔有〕 〈言語〉 中国語	

教育上の効果	学生の参加による教育上の効果〔有〕 〈参加学生の所属〉 東北大学、東京大学、(中国)中山大學、琉球大学、お茶の水女子大学、早稲田大学、神奈川大学、京都府立大学、埼玉大学、富山大学、金沢大学 〈学生による成果発表〉 ○論文 ・佐々木聡『『白沢図』をめぐる辟邪文化の変遷と受容』、『日本中国学会第一回若手シンポジウム論文集 — 中国学の新局面 — 』、日本中国学会、p45～59、2012年2月 ・熊静「清代内府“九九大慶”戲研究 — 以北京大學圖書館藏《九九大慶》為例」、『東北アジア研究』16号、東北大学東北アジア研究センター、P261～277、2012年2月20日 ○学会・研究会報告 ・佐々木聡「怪異占と辟邪 — 中国中世鬼神観研究の視点から — 」、術数学東京ミーティング2011、2011年9月4日、大正大学 ・熊静「清代内府“九九大慶”戲研究 — 以北京大学圖書館藏《九九大慶》為例」、第9回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会、2011年9月12日、強羅静雲荘 ・佐々木聡「中国近世以降における『開元占経』の流伝と受容について」、第63回日本中国学会大会、2011年10月8日、九州大学 ・佐々木聡「怪異占の諸相と比較分析方法試論 — 鬼神・占ト・辟邪をめぐる — 」、東アジア怪異学会第77回定例研究会・特別企画「東アジアの占いと予言～未来を読む技、語る声～」、2012年3月4日、立教大学 ポスドクの活用の有無〔有〕 〈活用形態〉 RA、研究協力者 教育上の効果についてアピールしてください 他分野の情報を入手出来たこと、研究会で研究成果を発表する機会を得た他、研究会の開催を通して文献調査の機会が得られた。 ・佐々木聡：10月に、九州国立博物館における中国周辺領域関連美術・文献資料調査、九州大学における第63回日本中国学会大会での研究報告・質疑応答・研究者交流、九州国立大学附属図書館における学会同時開催の濱文庫資料調査、太宰府天満宮における宝物館・境内等所蔵天神信仰関連資料及び神獣図像等の視察調査を行った。 ・佐々木聡：12月に、上海図書館と復旦大学において、東アジア出版文化に関する情報交換及び情報収集を行なった。復旦大学では、東アジア出版史における中国の最近の研究情報を入手し、卜占関係書籍の出版・流布に関して知見を深めた。上海図書館では、天文学や術数学に関する書籍の出版・流布についての情報を得ることができた。また、復旦大学陳正宏教授ならびに呉格教授から、東アジア出版資料及び刊本の性格についての助言を頂いた。
--------	---

社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕 〈内容〉 研究会及び出版物を通して、研究成果を国内・国外研究者、若手研究者、及び一般市民にも伝えることが出来た。 社会への成果還元の有無〔有〕 〈還元の形態〉 研究会（公開）
学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕 〈連携部局名〉 附属図書館 学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕
他組織との連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕 〈連携組織名〉 東北大学特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」、早稲田大学 演劇博物館 GCOE「演劇・映像の国際的教育研究拠点」東洋演劇コース 〈連携の形態〉 研究会 国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属〉 京都大学、富山大学、慶應義塾大学、東京大学、東京外国語大学、島根県立大学、埼玉大学、神奈川大学、明治大学、京都府立大学、早稲田大学
成果発表	研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと） 研究会〔4回〕 ・第8回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会、東京国立博物館（東京）2011年6月4日 ・第9回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会、強羅静雲荘（神奈川）、2011年9月12・13日 ・第10回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会、慶應義塾大学三田キャンパス（東京）、2011年12月3日 ・第11回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会、富山大学人文学部（富山）、2012年2月4日 公開の会議・シンポジウム〔0回〕 国際会議〔0回〕 論文・著書 以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。 〔雑誌論文〕 計（0）件 〔学会発表〕 計（0）件 〔図 書〕 計（2）件 ・磯部彰『旅行く孫悟空 — 東アジアの西遊記 —』、塙書房、263頁、2011年9月1日 ・磯部彰 編著『《西遊記》画三種の原典と解題』、特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」班、306頁、2012年3月30日

成果発表	〔その他の公表〕 計（３）件 ・（講演）磯部彰「玄奘取経伝説と明恵上人」、奈良国立博物館夏季講座テーマ「玄奘三蔵とシルクロード」2011年8月24日 ・（講演）磯部彰「西遊記を中心とした浅野文庫漢籍類の特色」、広島市立浅野図書館開館80周年記念講演会、広島市立中央図書館、2011年10月1日 ・（パネリスト）磯部彰、テーマ「平和と共同繁栄の新たな北東アジア時代に向けて」第3セッション（3国協力事務所の発足の意義及び今後の役割について討論）、駐日韓国大使館 韓中日3国協力事務所開所記念国際シンポジウム「『調和』への視座 — 韓日中3国協力事務所の役割」、ソウル、2011年10月19日
共同研究の 全般的成果の アピール	本共同研究は、特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」と共同歩調で進めており、その中で若手研究者の育成も兼ねた研究発表の場を提供した。これからも、歴史・文学・思想等の幅広いジャンルからの参加を求めている。共同研究の推進によって、明清時代を中心とした東アジアの出版文化を含む文化状況をめぐる意見交換や研究者相互交流がアジアに止まらず、ヨーロッパ方面にも拡がり、着実に進展したと思われる。
第三者による 評価・受賞・報道 など	なし
本年度の ユニット活性化 のための具体的 な取り組み	〈科研費申請〉（課題名、種目、目的の概要） （日本学術振興会科学研究費補助金特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」採択期間中（5年間4年度目）のため、一般的な科学研究費補助金の申請が不可。） ・日本学術振興会科学研究費補助金（研究成果公開促進費）学術図書「東アジア典籍文化研究」：東アジアの出版物に関する研究論文を集成したもので、図版入りでの刊行を予定している。単著。中国明清時代に刊行された民間の出版物と版元の書肆についての研究を中心に、同時代の朝鮮朝での翻刻本の性格、明末挙業書を多く受け容れた日本での文化形成を書籍から検証した内容から構成される。本書の刊行は、ユニット活動の継続的成果であり、国際的な情報や活動の発信を目的としている。 （その他資金への申請） ・平成23年度総長裁量経費「明治の群像書簡公開」：明治時代の仙台在住官吏・判事・学者・伊達家、維新関係者、福沢諭吉ら文化人らの書簡集を整理し、デジタルデータ化して、近代日本社会形成期における仙台的果たした役割を明らかにする。 ・教育研究設備整備要望調「宋刊本「唐柳先生文集」存9巻附序」：当該設備は、中国宋代（約1000年前）に印刷出版された宋版と呼ばれる古典籍は、今日伝存する世界最古の唯一のテキストで、東アジア近世社会の文学の手本となった唐宋八大家と呼ばれる文人の一人柳宗元の作品の原型を留める。鎌倉時代のヲコト点もあり、学術価値が極めて高い。もとは鎌倉時代の北条氏が所蔵し「金沢文庫」印がある。重要文化財に指定される可能性が高い文献であり、美術品でもある。なお、当文集の一部が

本年度の ユニット活性化 のための具体的 な取り組み	東京の静嘉堂文庫にあり、今回の分とあわせると完全な状況に近づき、より学術的価値が高まる。 ・平成 24 年度総長裁量経費「ドイツ総合大学アジア研究部門との学術交流の推進と強化 ― 旧東ドイツ 3 大名門大学との研究連携を目指して ―」：アジアアフリカ関係の図書館を持つライプチヒ大学、フンボルト大学、ハレ大学など旧東ドイツ地域の名門総合大学との共同研究や学術交流を進めるべく、東北大学附属図書館協力のもと、日本側からアジア関係研究者・実務担当者の派遣を通して、明治大正の本学との関わり合いを含めた関連資料の調査、研究文献の交換などを行ない、同時に相手方の研究者を招聘し、中国をめぐる日独国際共同研究を開始し、その基盤のもとに学術交流の推進と研究者及び留学生の相互受け入れを目指す。 (その他ユニットの機能を展開するための具体的な活動内容) 〔院生の研究派遣〕 ・上海図書館と復旦大学において、東アジア出版文化に関する情報交換及び情報収集を行なった。復旦大学では、東アジア出版史における中国の最近の研究情報を入手し、卜占関係書籍に関して知見を深めた。上海図書館では、天文学や術数学に関する書籍の出版・流布についての情報を得ることができた。また、復旦大学陳正宏教授ならびに呉格教授から、東アジア出版資料及び刊本の性格についての助言を頂いた。
来年度のユニット 活性化のための 具体的な取り 組みの予定	研究会、及び、国際共同調査の実施、国際学会の開催、ドイツ東部の大学との学術連携と資料情報交換

■ 東北アジア研究センター・プロジェクトユニット研究年度報告書

ユニット名	森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット			
認可期間	2011（平成 23）年度～2013（平成 25）年度（3 年間）			
組 織	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	(代表者) 工藤 純一	東北アジア研究センター 教授	柳澤文孝	山形大学理学部教授 東北アジア研究センター 非常勤講師
	明日香寿川	東北アジア研究センター 教授	河野公一	東北工業大学講師 東北アジア研究センター 非常勤講師
	徳田由佳子	東北アジア研究センター 助手	鳩山紀一郎	東京大学講師 東北アジア研究センター 非常勤講師
	伊藤 正直	東北アジア研究センター 非常勤講師	Kazi A. Kalpoma	東北アジア研究センター 教育研究支援者
研 究 モニター	氏 名		所 属	
	1			
	2			
	3			
	外部評価会の実施			
研 究 経 費	(研究支援者、RA などの配置) (研究スペース配分など) 科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額 300,000 円〕 センター長裁量経費〔金額 500,000 円〕			
ユニットの 目標・目的	地球温暖化の原因となっている二酸化炭素を大幅に削減するために、人為起源の大規模森林火災の抑制を目的としている。主な課題は(1)火災の出火から 1 時間以内に消火活動を行うための技術開発、(2)森林火災から発生する二酸化炭素量の測定方法の開発、(3)森林火災から発生する二酸化炭素排出量取引構想の開発、(4)ロシアをケーススタディとするスキームの開発、(5)研究過程で得られる衛星データ解析の応用研究とする。			

研究の目的と 本年度の成果 ならびに 研究成果の 重要性の概要	本年度は、震災の影響でスタートが約1ヶ月遅れたが、大学院学生を対象に衛星画像処理の講習会を東北工業大学で開催して基礎技術を習得させた。その後、国立環境研究所、立命館大学等の専門家と打ち合わせを重ね、森林火災から排出する二酸化炭素の測定方法および森林火災から発生する二酸化炭素の排出権取引構想について論議し、本研究の方向性ならびに当面の目標を明確にした。 また、ISTC プロジェクト 4010 のコラボレータとしてロシア科学アカデミー極東支部水問題研究所と打ち合わせを行いながら、ロシア極東地域の森林火災について情報を収集し、本研究の基礎データとした。 研究成果については、衛星画像処理により大気汚染のモニタリング方法の開発、黄砂抽出方法等について ACRS2011 国際会議で報告した。また、異なる分解能の衛星画像を融合処理する方法と衛星画像から大気汚染や黄砂を抽出する方法について、それぞれ国際学術誌に投稿中である。さらに、ロシア科学アカデミーシベリア支部（ノボシビルスク）で SBRAS、FEBRAS、シベリア連邦大学等から森林火災研究の専門家を参集させて、TU-SBRAS セミナーを開催した。このセミナーではロシア極東地域からシベリアまでの広範囲に亘る森林火災の実態と研究について報告があった。このセミナーの成果としては、本年9月にロシアウラジオストクで開催される APEC で森林火災をテーマとしたサブミーティングが開催されるので、そこで報告することを検討した
ユニットの成果を公表する URL	なし
東北アジア 地域研究 としての意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 主としてシベリア地域および北アジア地域 東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕 〈対象とした国・地域など〉 ロシア、中国、モンゴル 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください 対象地域がロシア極東地域、および、シベリア、そして、モンゴルから中国北部にかけての広範囲に亘ること。ならびに、その地域で共通のテーマである大気汚染、黄砂、森林火災を扱っていること。その課題の解決に同地域の専門研究者と共同で取り組んでいること。
新 規 性	新規性の有無〔有〕 〈新規性の内容〉 これまで森林火災は自然現象として捉えられ、二酸化炭素の削減対象になっていなかったが、出火原因の80%以上が人為起源であることから、大規模森林火災を二酸化炭素削減対象に入れることを提案した。

学 際 性	文理融合型の研究か〔はい〕 〈参加した専門分野〉 環境分野、経済分野、政策分野等 文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕 〈参加した専門分野〉 環境分野、経済分野、政策分野等
専 門 性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉 〈内容〉 情報科学：衛星画像の融合処理の開発。 政策分野：森林政策
国 際 性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕 〈国名・研究機関名〉 ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部、同極東支部 国外の研究者の参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属・参加形態〉 ロシア科学アカデミーシベリア支部、同極東支部、シベリア連邦大学 主催したセミナーに参加 学術交流協定活用の有無〔有〕 〈協定の名称〉 ・日本国東北大学とロシア科学アカデミー・シベリア支部の国際協力についての協定書 ・ロシア科学アカデミー・シベリア支部 V.N. スカチョフ森林研究所（部局間協定） 外国語による成果公表の有無〔有〕 〈言語〉 英語
教育上の効果	学生の参加による教育上の効果〔有〕 〈参加学生の所属〉 大学院情報科学研究科 〈学生による成果発表〉 ACRS2011 で永谷泉君が発表した。 ポスドクの活用の有無〔有〕 〈活用形態〉 データ整理、論文作成など 教育上の効果についてアピールしてください 既に国際学術誌に2本投稿していることから、研究成果は教育上の効果も出ていると考えられる。

社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕 〈内容〉 地球温暖化の原因とされる二酸化炭素の削減 社会への成果還元の有無〔無〕
学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕 〈連携部局名〉 ロシア交流推進室 学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕
他組織との連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕 〈連携組織名〉 国立環境研究所、立命館大学 〈連携の形態〉 アドバイザー、研究打ち合わせ 国内の研究機関の研究への参加の有無〔無〕
成果発表	研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと） 研究会〔 回〕 公開の会議・シンポジウム〔 回〕 国際会議〔1回〕ポスター添付 論文・著書 以下に分類し 〔雑誌論文〕 計（ ）件 〔学会発表〕 計（1）件 〔図 書〕 計（ ）件 〔その他の公表〕 計（ ）件 Izumi Nagatani , Jun-ichi Kudoh, Three-dimensional histogram method for Asian dust identification using MODIS images, ACRS2011, October 3-7, 2011, Taipei.
共同研究の全般的成果のアピール	本年度は1年目なので際立った成果は未だ出ていない。
第三者による評価・受賞・報道など	なし
本年度のユニット活性化のための具体的な取り組み	〈科研費申請〉（課題名、種目、目的の概要） 平成24年度基盤研究(A)（海外学術調査）、大規模森林火災の抑制によるCO2削減システムの実行可能性を調査する研究
来年度のユニット活性化のための具体的な取り組みの予定	引き続き、本プロジェクト研究を推進して大型予算の獲得を試みる。

(2) 共同研究

プロジェクト研究ユニットとともに、従来型の共同研究も展開されている。本年度は、11 件の共同研究が進行中である。

(A) 2011 年度センター共同研究課題一覧

〔課題名／(研究年度・代表者)〕

*印、ユニット名を付したものは、プロジェクト研究ユニットを主体とする共同研究です。

- 北アジアにおける帝国統治とその遺産に関する研究
／ (2007 年度～ 2011 年度・岡洋樹)
- 客家研究の総括と展望／ (2010 年度～ 2011 年度・瀬川昌久)
- 地域社会の人材としての「外国人花嫁」の共同調査*
／ (2010 年度～ 2011 年度・瀬川昌久・移民ユニット)
- 展示実践を通じた北方人類学における社会還元の可能性の探求*
／ (2010 年度～ 2011 年度・高倉浩樹・シベリア生態ユニット)
- 東日本大震災で被災した三陸沿岸被災資料の保全と研究*
／ (2011 年度～ 2012 年度・平川新・歴史資料ユニット)
- 仙台市沿岸津波被災地の歴史・文化・景観の記録化*
／ (2011 年度～ 2012 年度・平川新・歴史資料ユニット)
- 東アジア近世社会における出版文化の意義*
／ (2010 年度～ 2012 年度・磯部彰・東アジア出版文化ユニット)
- 氷融洪水とその社会的対応からみる極北圏地域社会の比較研究*
／ (2010 年度～ 2012 年度・高倉浩樹・シベリア生態ユニット)
- 東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究*
／ (2011 年度～ 2014 年度・岡洋樹)
- 東日本大震災の被災地における民俗文化の復興をめぐる地方行政とその支援にかかわる方法論の探求／ (2011 年度～ 2013 年度・高倉浩樹)
- 東北アジア民族文字・言語情報処理研究*
／ (2011 年度・栗林均・東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット)

■ 東北アジア研究センター・共同研究報告書

研究 題 目	北アジアにおける帝国統治とその遺産に関する研究			
研究 期 間	2008（平成 20）年度 ～ 2011（平成 23）年度（4 年間）			
研究 組 織	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	(代表者) 岡 洋樹	東北アジア研究センター	佐藤憲行 中村篤志 田淵陽子	東北アジア研究センター 山形大学人文学部 東北学院大学
	上野稔弘	同		
研究 経 費	(配布金額) 刊行費補助			
研究の目的と 本年度の成果 ならびに 研究成果の 重要性の概要	近代東北アジアの歴史を理解する上で前近代における清朝・ロシア・ジュンガルなど北アジアの帝国・国家統治の意義を再評価し、あらたな歴史認識を打ち出すことを目的として研究を進めた。研究遂行に当たって、国内の他大学のモンゴル研究者・協定組織であるモンゴル科学アカデミーの歴史研究所と連携して研究集会・シンポジウムなどによる研究成果・情報の共有を通じた新しい帝国統治理解の導出を目指した。 今年度は、3 月 22 日に研究会を開催し、以下の研究報告 5 件を得た。 中村篤志（山形大学人文学部）「清代モンゴル研究と日記史料：モンゴル王公の北京日記を中心に」 田淵陽子（東北学院大学文学部）「20 世紀モンゴル史における Kh. チョイバルサンの評価をめぐって」 上野稔弘（東北大学東北アジア研究センター）「蒋介石政権の対モンゴル政策構想と英米の視線」 佐藤憲行（東北大学東北アジア研究センター）「乾隆後期モンゴルにおけるモンゴル人と商民の経済関係の一考察：モンゴル人雇工と商民の関係から」 岡 洋樹（東北大学東北アジア研究センター）「清初における『盟』について」（仮題）（16:20-17:50）			
成果を公表する URL				
東北アジア 地域研究 としての 意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 20 世紀東北アジアの歴史展開を考える時、その出発点となった 1911 年に滅亡した清朝の帝国統治の特質の理解が不可欠である。清朝の複合的統治構造が、内地（中国プロパー）と外藩、八旗の三部分からなっており、相互に異なる行政統治構造と国家論的位置づけを持っていたことにより、清朝滅亡以後の歴史過程は、この三部分の解体・変容過程として進行した。本共同研究は、東北アジア地域史における清朝統治の歴史的意義を検討することを目的としている。			

東北アジア 地域研究 としての 意義	東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕 〈対象とした国・地域など〉 モンゴル、中国 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください 17 世紀から 20 世紀初頭に及ぶ清朝の帝国統治を、中国史中心の既存の歴史理解とは異なる八旗・外藩の統治構造の特質を踏まえて理解することにより、20 世紀東北アジアの歴史展開を新たな側面から理解することが可能となる。東北アジア地域の文化的多様性は、前近代における広大な帝国統治の特質に淵源するところが大きい。帝国統治が遺産として残したかかる文化的多様性は、20 世紀における民族問題やこれを利用した日本・ロシアの進出の背景ともなった。それゆえ、本研究は、20 世紀の歴史過程を前近代史との連続性において捉えることを可能とする点に意義がある。
新 規 性	新規性の有無〔有〕 〈新規性の内容〉 東北アジアの歴史を清朝統治の特質との関わりにおいて検討することにより、現在の国家区分を越えた新しい歴史理解を可能とする。
学 際 性	文理融合型の研究か〔いいえ〕 文系・理系での学際性・連携性の有無〔無〕 〈参加した専門分野〉 歴史学（東洋史）
専 門 性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉 東洋史 〈内容〉 近世から近代に至る歴史過程を、中国史やモンゴル史といった国家史・民族史の枠組みを超えた広域の地域史として統合的に明らかにする点で意義がある。
国 際 性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕 〈国名・研究機関名〉 モンゴル国・モンゴル科学アカデミー歴史研究所 中国・内モンゴル師範大学蒙古学研究院 中国・内モンゴル師範大学旅游学院蒙古史研究所 国外の研究者の参加の有無〔有〕 学術交流協定活用の有無〔有〕 〈協定の名称〉 東北大学・モンゴル科学アカデミー（大学間協定） 東北大学東北アジア研究センター・内モンゴル師範大学旅游学院（部局間協定） 東北大学東北アジア研究センター・内モンゴル師範大学蒙古学学院（部局間協定） 外国語による成果公表の有無〔有〕 〈言語〉 モンゴル語

教育上の効果	学生の参加による教育上の効果〔有〕 〈参加学生の所属〉 東北大学大学院環境科学研究科 ポスドクの活用の有無〔有〕 〈活用形態〉 教育研究支援者1名が研究会で研究発表を行った。 教育上の効果についてアピールしてください 今回は学生の発表はなかったものの、研究会での議論に参加することによる教育的効果があった。
社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔いいえ〕 社会への成果還元の有無〔無〕
学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔無〕 学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕
他組織との連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔無〕 国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属〉 山形大学の研究者1名、東北学院大学の研究者1名が共同研究のメンバーとして参加し、研究会で成果報告を行った。
資金	
成果発表	研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと） 研究会〔1回〕 公開の会議・シンポジウム〔 回〕 国際会議〔 回〕 論文・著書 以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。 〔雑誌論文〕計（ ）件 〔学会発表〕計（5）件 〔図 書〕計（ ）件 〔その他の公表〕計（ ）件

共同研究の 全般的成果の アピール	本年度は、本共同研究の最終年度にあたる。過去五年間の研究実施期間において、2008年には2007年度に東北アジア研究センターとモンゴル科学アカデミー歴史研究所が共催した国際シンポジウムの報告論文集の編集を行い、2009年3月に刊行した。また2009年度にモンゴル国ウラーンバートルで国際シンポジウムを開催し、2010年度報告論文集を編集、2011年に入ってからこれを刊行することができた。この国際シンポジウムには、協定締結組織であるモンゴル科学アカデミーの歴史研究所、中国内蒙古師範大学旅游学院、同蒙古学学院の組織的な協力を得たほか、第一回国際モンゴル学者会議開催五十周年行事として、国際モンゴル学者連合の支援を得ることができた。一方国内では年一回の研究集会を開催し、研究分担者と招聘研究者による報告を得た。シンポジウム及び研究会における発表は、日本・モンゴル・中国において、清代及び近代モンゴル史を中心として新たな歴史研究上の視点を提示するものであり、今後この分野の研究の進展が期待される。またこれらの報告には、国内他大学及び学内他部局の若手研究者の報告が含まれている。これらの活動により、東北アジア研究センターの国際的連携態勢の構築に東洋史分野において貢献することができたと考えている。研究分担者による研究成果は、2012年度に東北アジア研究センターから刊行する予定である。
第三者による 評価・受賞・報道 など	特になし

■ 東北アジア研究センター・共同研究報告書

研究題目	客家研究の総括と展望			
研究期間	2010（平成23）年度～西暦2011（平成23）年度（2年間）			
研究組織	氏名	所 属	氏名	所 属
	（代表者） 瀬川昌久 飯島典子 河合洋尚	東北アジア研究センター 広島市立大学 国立民族学博物館研究員	蔡 文高 小林宏至 金 裕美 稲澤 努	神奈川大学研究員 首都大学東京博士課程 宇都宮大学博士課程 東北大学博士課程
研究経費	（配布金額）0 （研究支援者、RAなどの配置）なし （研究スペース配分など）なし （その他の主たる外部資金）科研費・研究成果公開促進費			
研究の目的と 本年度の成果 ならびに 研究成果の 重要性の概要	中国南部を中心に居住する漢族のサブグループのひとつである客家（ハッカ）についての学術研究は、漢族に関する人類学的・民族学的研究史の中でも突出して重要な意味をもつ部分であり、それを総括しつつ、今後の研究の方向性を展望することは、漢族研究、華南地域研究、ひいては中国研究全体にとって、きわめて有用な視座を提供することにつながる。日本国内において客家研究の次世代を担うべき有能な若手研究者が育ちつつある今日、本共同研究は、そうした研究者たちを糾合し、客家研究のこれまで研究史の総括と今後の展望について討論し、それを1冊の学術図書として出版することを目指した。 本年度は、科研費・研究成果公開促進費の採択を受け、昨年度既に完成済みであった原稿の推敲と微調整、校正、索引等の作成作業を行い、2012年2月20日に学術図書『客家の創生と再創生』（瀬川昌久・飯島典子編、風響社刊、全240ページ）を刊行した。			
成果を公表する URL		該当するものはないが、成果図書の版元の HP に当該図書の情報が掲載されている。 http://www.fukyo.co.jp/search/next.html		

東北アジア 地域研究 としての 意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 東北アジア地域の重要部分を構成する中国において、その主要民族たる漢族の中の特色あるサブグループである客家の文化表象やアイデンティティーに焦点を当てた研究である。 東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕 〈対象とした国・地域など〉 中国、台湾、香港、海外華人社会 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください 東北アジア地域の重要部分を構成する中国において、その主要民族たる漢族の中の特色あるサブグループである客家の文化表象やアイデンティティーに焦点を当てた研究である。東北アジア地域、特に東アジア地域では、ナショナリズムの再編、地域的文化的アイデンティティーの再構築、地方文化の資源化等の現象が顕著かつ急激に進行しており、それを分析することは当該地域の理解のためにきわめて有効であるとともに急務でもある。その中でも、客家の事例は突出した事例として注目すべき研究対象であり、他の事例に対する先駆的・モデル的事例研究となり得る意味でも、その価値は極めて高い。
新 規 性	新規性の有無〔有〕 〈新規性の内容〉 従来は客家研究は、客家の文化的・社会的特殊性に関する言説を構築しようとする研究か、またはそれを批判・解体しようとする研究に尽きていた。本研究は、そうした客家特殊論の構築過程および脱構築過程そのものを社会現象の一部として捉え、それを客観的に分析・検討することを通じて、そうした過程の中に存在する真正性構築の文法規則のようなものを解明しようとする研究であり、その新規性は頗る高い。
学 際 性	文理融合型の研究か〔いいえ〕 文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕 〈参加した専門分野〉 文化人類学、中国近現代史学
専 門 性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉 文化人類学、中国近現代史 〈内容〉 上記の「新規性」についての説明と重複するのでそれを参照のこと。

国際性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕 〈国名・研究機関名〉 （いずれも中国）中山大学人類学系、嘉応大学、贛南師範大学、広東省民族研究所、厦門大学 国外の研究者の参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属・参加形態〉 嘉応大学、贛南師範大学。成果図書の執筆（2章、3章）。 学術交流協定活用の有無〔有〕 〈協定の名称〉 広東省民族研究所との部局間協定 外国語による成果公表の有無〔無〕
教育上の効果	学生の参加による教育上の効果〔有〕 〈参加学生の所属〉 大学院生3名（うち他大学2名）がメンバーとして参加しており、研究成果図書を分担執筆している。研究内容はそれぞれの博士論文の基礎として組み込まれている。 ポスドクの活用の有無〔無〕 教育上の効果についてアピールしてください 博士課程在籍者などの若手研究者に学術図書を通じて研究成果の発表の機会を提供することは、博士論文等の執筆を促すためにも重要な効果がある。また、単に研究進展の効果のみならず、大学院によっては博論の提出要件として複数の既刊論文があることを条件としている場合もあるので、こうした条件をクリアーするためにも、このような学術出版物刊行企画に参加させることは有用である。
社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔いいえ〕 社会への成果還元の有無〔有〕 〈還元の形態〉 成果を学術図書として公刊した。この場合の社会還元は、あくまで学術的なコミュニティーを対象とするものであるが、本研究の趣旨からは、それ以外の一般社会への成果還元を意図するようなものではない。
学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔無〕 学内他部局教員の研究への参加の有無〔有〕 〈参加教員の所属〉 教員ではないが、環境科学研究科大学院生がメンバーとして参加している。
他組織との連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕 〈連携組織名〉 広島市立大学 〈連携の形態〉 運営資金である科研費の申請は、広島市立大学を通じて行った。 国内の研究機関研究者の研究への参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属〉 広島市立大学、国立民族学博物館、神奈川大学、首都大学東京、宇都宮大学

資 金	科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額 1,200,000 円〕
成果発表	研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと） 研究会〔1 回〕 公開の会議・シンポジウム〔 回〕 国際会議〔 回〕 論文・著書 以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。 〔雑誌論文〕 計（ ）件 〔学会発表〕 計（ ）件 〔図 書〕 計（1）件 〔その他の公表〕 計（ ）件 瀬川昌久・飯島典子編『客家の創生と再創生』、東京：風響社、2012 年 2 月 20 日刊行。
共同研究の 全般的成果の アピール	従来の客家研究は、客家の文化的・社会的特殊性に関する言説を構築しようとする研究か、またはそれを批判・解体しようとする研究に尽きていた。本研究は、そうした客家特殊論の構築過程および脱構築過程そのものを社会現象の一部として捉え、それを客観的に分析・検討することを通じて、そうした過程の中に存在する真正性構築の文法規則のようなものを解明しようとする研究であり、その新規性は頗る高い。 成果図書においては、いずれの章あるいはコラムも、客家としての意識やその伝統文化とされるものが、近現代社会の文脈の中で比較的新しく創生されたものであることに注目している。ただし、そのことから「客家」や「客家文化」というものの仮構性を批判・暴露することに主眼を置くのではなく、むしろそのような創生が進行していることのもつリアリティに注目し、それを押し進めている政治経済的諸要因、そこに動員されるナラティブの効力や真正性、そしてそれらを成り立たせている文法といったものに関心の照準を定めている。この意味において、本著は客家研究の歴史における新たな転回点の創出を目指すものである。 また、本研究は当初から学術図書の刊行をその主要目的とするものであり、研究成果の速やかかつ確実な公表を実現し得た点も特筆すべきものであると考える。
第三者による 評価・受賞・報道 など	

■ 東北アジア研究センター・共同研究報告書

研究題目	地域社会の人材としての「外国人花嫁」の共同調査			
研究期間	2011（平成23）年度（1年間）			
研究組織	氏名	所 属	氏名	所 属
	（代表者） 瀬川昌久 李 仁子 陳 天璽	東北アジア研究センター・教授 教育学研究科・准教授（センター兼務） 国立民族学博物館・准教授	二階堂裕子 川村千鶴子 渋谷 努	ノートルダム清心女子大学文学部・准教授 大東文化大学環境創造学部・教授 中京大学国際教養学部・教授
研究経費	グローバル COE「社会階層と不平等教育研究拠点」研究プロジェクト			
研究の目的と本年度の成果ならびに研究成果の重要性の概要	本研究は、国際結婚によって日本に移り住んだ女性たちが、「外国人の花嫁」であることから受ける疎外や、異文化に暮らすことから生じる様々な不如意とどのように向き合い、どのように乗り越えようとしてきたかを、東北地方在住の韓国人および中国人女性らを対象にしたフィールドワークと聞き取り調査によって明らかにすることを目的とする。 従来の研究からも明らかなように、彼女らは、外国人であることと、嫁であることとに起因する二重の疎外を受け、文化の差異による人間関係の軋みや生活の不安全感を経験している。しかし、同時に、彼女らの中には、自ら起業して地域に雇用を創出したり、創意と工夫で地域コミュニティの「人材」になっていった人もいる。 これまでの調査によって、彼女らが当初あった疎外や文化の壁を日本語学習や職場での実践を通してどのように乗り越えてきたか、また今あるような地域社会でのつながりや活動をいかなる工夫や支援によって築き上げてきたかが明らかになってきた。ただ、本年度は東日本大震災の影響が大きく、研究会や共同調査の当初の予定は大幅な変更を余儀なくされた。が、その分韓国における女性移民との比較調査を行うことができた。また、大震災の甚大な被災地に暮らす女性移民の協力を得て、彼女らの不自由な暮らしの現場においてフィールドワークを進めることもできた。その結果、大震災による生活環境の激変は、かえって彼女らの活動範囲の拡大や、地域共同体における社会的位置づけの向上に寄与しているケースがとて多いことが明らかになった。 こうした研究成果は、いまだ困難な状況に暮らす多くの女性移民たちに異国での生き方のモデルを提示することにつながり、彼女らの中からさらなる人材を生み出す可能性を高める。また、移民の支援者や研究者たちに対しては、従来の支援やアプローチを見直して女性移民の人材化を目指す方向性も組み込んでいく必要を示すものとなる。			

成果を公表する URL	なし
東北アジア地域研究としての意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 東北アジアの中でも経済的先進地域である日中韓の国際的な女性の人口移動を、移民者自身の生活経験次元から調査分析し、摩擦や葛藤、適応や定着の過程として分析しようとするものであり、東北アジアの経済的コアにおける女性の移動の実態を解明することを目指している。 東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕 〈対象とした国・地域など〉 日本、韓国、中国 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください 東アジアの主要国家である日中韓の間の人口移動をテーマとしたものであり、東北アジアの中でも経済的先進地域であるこれらの地域に生じている最もホットな社会の動きを、その現場に身を置いて解明しようとする研究である。これは、東北アジア地域全体の現在と未来を考察する上で必要欠くべからざる研究である。
新規性	新規性の有無〔有〕 〈新規性の内容〉 これまでの移民研究では、移民側または受け入れ先社会のどちらかに重点を置いた研究が多かったため、現実には起きている両者間の摩擦やせめぎ合い、さらには安定や協同に至る交渉過程といった動きを取り上げることが少なかった。本研究では、移民と受け入れ先との動的な関係に注目し、両者間のせめぎ合いや交渉がまさに繰り広げられている「コンタクト・ゾーン」をフィールドワークの主眼に置き、両者からの聞き取りを重ね、国際結婚をした女性移民たちの中から地域の人材が生まれるプロセスを立体的・複眼的に調査研究しようとしている点に新規性がある。
学際性	文理融合型の研究か〔いいえ〕 文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕 〈参加した専門分野〉 文化人類学、社会学、国際政治学、教育学
専門性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉文化人類学、社会学等における移民研究 〈内容〉 文化人類学や社会学における移民研究の蓄積はかなりのものがあるが、残念ながら日本国内における移民、特に女性移民に関するフィールドワークや聞き取り調査は非常に少ない。また、これまでの女性移民研究では、主としてジェンダー論的なアプローチが採用されており、女性移民を社会的弱者もしくは周縁的存在として捉える傾向が強かった。それに対し、本研究は国際結婚をした女性移民が地域の人材になっていく過程に着目し、それを可能にした諸条件と障碍の乗り越え方を、現地調査によって明らかにするものであり、従来の移民研究に新たな境地を切り開くと同時に、その欠落部分を補うものである。

国際性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔無〕 国外の研究者の参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属・参加形態〉 韓国ソウル大学人類学科・調査協力 韓国済州大学人文学科・調査協力 韓国漢陽大学文化人類学科・調査協力 学術交流協定活用の有無〔無〕 外国語による成果公表の有無〔有〕 〈言語〉 英語
教育上の効果	学生の参加による教育上の効果〔有〕 〈参加学生の所属〉 教育学研究科 〈学生による成果発表〉 なし ポスドクの活用の有無〔有〕 〈活用形態〉 教育研究支援者として雇用、ワークショップの企画・参加。 教育上の効果についてアピールしてください 実際に移民が定着しようとして葛藤しているコンタクト・ゾーンに関する調査研究や当事者参加型のワークショップは、社会学、教育学、文化人類学の学生にとって実践的な研究の場を提供することになる。
社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕 〈内容〉 少なくとも日本国内のコンタクト・ゾーンにおける摩擦や軋轢を軽減し、多文化共生を推し進めるための実践的な方策を見出していくことを目的の一部としている。 社会への成果還元の有無〔有〕 〈還元の形態〉 東北地方の移民に関する調査研究から得られた知見をもとに、財団法人宮城県国際交流協会の評議員として県内の多文化共生事業に助言を与えると同時に、宮城県の多文化共生社会推進審議会の委員として国際交流協会や県の多文化共生事業の運営に関して提言を行った。また、平成 24 年度に仙台市で開催される日本女性会議の多文化共生分科会の部会長に選出されたため、その準備段階から仙台市ならびに宮城県の女性移民の地位向上に向けた取り組みを行なっているところである。(李仁子)
学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕 〈連携部局名〉 教育学研究科 学内他部局教員の研究への参加の有無〔有〕 〈参加教員の所属〉 教育学研究科

他組織との 連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔無〕 国内の研究機関研究者の研究への参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属〉 国立民族学博物館 ノートルダム清心女子大学文学部 大東文化大学環境創造学部 中京大学国際教養学部
資 金	センター長裁量経費 その他〔資金名：グローバル COE「社会階層と不平等教育研究拠点」研究プロジェクト〕
成果発表	研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと） 研究会〔 回〕 公開の会議・シンポジウム〔 回〕 国際会議〔 回〕 論文・著書 以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。 〔雑誌論文〕 計（ ）件 〔学会発表〕 計（ ）件 〔図 書〕 計（ 2 ）件 李仁子「外国人妻の被災地支援 ― 被災地の民族誌に向けた一素描」、川村千鶴子編著『3.11 後の多文化家族 ― 未来を拓く人びと』明石書店、2012、139-161 頁 Inja LEE, “The Development and Use of Resources in Educating Immigrant Children” pp. 196-211 in Naoki Yoshihara (ed.), Global Migration and Ethnic Communities: Studies of Asia and South America. Trans Pacific Press, 2012 〔その他の公表〕 計（ ）件
共同研究の 全般的成果の アピール	東北地方は、いわゆる「外国人花嫁」受け入れの最先端地域であった。その地域の中核研究機関が国際結婚移住を経て長期間日本に暮らしてきた外国人女性たちの現地調査研究を担い、彼女らの半生を跡づけ今を記録することには、歴史的にも大きな意義があろう。また、調査の対象を地域社会の人材になった女性移民に置くことによって、移民たちが地域コミュニティにおいて果たし得る役割や社会貢献の可能性を見出せたことは、多文化共生社会の実現に向けて確実な一歩を進めることに他ならない。さらに、東日本大震災の被災地に暮らす女性移民たちの復興に向けた取り組みをリアルタイムで記録に残すことができたことも、特筆すべき成果である。平常時と非常時との比較調査は、今年度に行えた韓国での現地調査に基づく移民の二国間比較と同様に、移民の比較調査研究に新たな視角をもたらすに違いない。
第三者による 評価・受賞・報道 など	特になし

■ 東北アジア研究センター・共同研究報告書

研究 題 目	展示実践を通した北方人類学における社会還元の可能性の探求			
研究 期 間	2010（平成 22）年度～2011（平成 23）年度（2 年間）			
研究 組 織	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	（代表者） 高倉浩樹 山崎幸治 伊藤敦規 オニスチェンコ ヴャ チェスラヴ	東北アジア研究センター・ 准教授 北海道大学アイヌ・先住民 研究センター助教 日本学術振興会 特別研究 員 PD（国立民族学博物館） 本学国際文化研究科専門研 究員	千葉義人 千葉真弓 齋藤秀一 山口未花子 久保田亮	東北アジア研究センター 客員研究支援者 東北アジア研究センター 客員研究支援者 写真家、元東北アジア研 究センター客員研究支援 者 東北アジア研究センター 教育研究支援者 立教女学院短期大学
研究 経 費	（配布金額）30 万円 （研究支援者、RA などの配置）有り （研究スペース配分など）有り （その他の主たる外部資金）科研費（挑戦的萌芽）（及びカシオ科学財団）			
研究の目的と 本年度の成果 ならびに 研究成果の 重要性の概要	本研究の目的は、展示をもちいた研究成果の社会還元を実践することで、異文化理解の文脈及び人類学の方法論にいかなる効果を理論的探究するというものである。今年度は、とくに(1)展示に関わることによっていかなる研究上のフィードバックがあるのかを方法論・理論のレベルで検討する、(2)震災のため延期となった高倉が行うシベリアでの展示を実施することが目的であった。またアラスカで先住民音声資料の返還事業に関わる久保田亮氏をメンバーに加えることで、文化財の返還と展示という論点を議論できる体制を整えた。 (1)について今年度は9月15日と1月23日に研究会を行った。そのなかでそれぞれのメンバーからの報告を踏まえ、展示実践によって研究の過程そのものを社会に開いていくこと、それが研究の方法論そのものを批判的に再検証することにつらなるとわかった。また展示は、文化的財産の返還という文脈も含むと同時に研究者と被調査者、さらに第三者との間の文化交流を構築するという展で高い公共性を発揮するものであるという知見を得た。これらの検討を踏まえて、日本文化人類学会 2012 年度研究大会で分科会展示による社会的関与は人類学に何をもたらすか：日本・ロシア・北米の先住民調査研究の視座から」を組織することが提起され、査読をへて分科会組織が承認された。またその成果を出版するという合意にも至った。 (2)は 2012 年 3 月 22 日から 24 日においてサハ共和国エヴェノ・ブイタンタイ郡サクリール村で展示を行った。研究資料である民俗写真を現地に返還し、地域の歴史的資料とすること等を行い、当該地域で大きな反響を呼ぶ企画となった。実践を通して、研究資料は資料それ自体として被調査地の歴史記録・文化交流媒体として積極的に利用していくことの意義がきわめて強く明示されたといえる。展示を行った高倉とこの支援をするために同行した千葉義人は、地方行政政府から感謝状が発行された。			

成果を公表する URL	http://www.cneas.tohoku.ac.jp/unit/siberia/html/unit/siberia/display.html http://www.cneas.tohoku.ac.jp/news/2012/news120404.html
東北アジア地域研究としての意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 本研究は北方地域というユーラシア北方とアメリカ北方双方を射程にいられたものである。双方の地域には現存する国家の先住民が暮らしている。シベリア先住民、アイヌ民族は東北アジア地域のなかにいるが、彼らの位置づけを相対的に検討するために、アメリカ先住民も比較の対象としている。このような方法によって、北方地域の先住民という観点から、東北アジア地域研究を捉え直す視座を得ることが出来る。 東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕 〈対象とした国・地域など〉 ロシア、日本、アメリカ合衆国、アラスカ、カナダ 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください 東北アジア地域とくにその北方地域には数多くの先住民が暮らしているが、この地域の人類学的研究において収集されてきた民族誌標本資料、映像資料などを活用した新たな方法論を開拓すると共に、その社会還元について人文系を中心とするフィールド研究が可能なあり方を探求している点。
新規性	新規性の有無〔有〕 〈新規性の内容〉 研究者が可能な展示を単に実践にとどめずに、方法論・理論の探求にまで深めて探求している点、被調査対象社会、研究者の属する地域社会への研究成果の還元の方法を探索している点。
学際性	文理融合型の研究か〔いいえ〕 文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕 〈参加した専門分野〉 文化人類学、博物館学、写真、空間デザイン、コミュニティ・デザイン
専門性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉文化人類学 〈内容〉 フィールドでの資料収集及びそれを利用した展示を促進している点。被調査対象社会を含めた社会還元を実践するとともに、そこから方法論・理論を探求している点。
国際性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕 〈国名・研究機関名〉 ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所 国外の研究者の参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属・参加形態〉 ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所 学術交流協定活用の有無〔有〕 〈協定の名称〉 部局間協定 外国語による成果公表の有無〔有〕 〈言語〉ロシア語、サハ語

教育上の効果	学生の参加による教育上の効果〔有〕 〈参加学生の所属〉 大学院環境科学研究科 〈学生による成果発表〉 なし ポスドクの活用の有無〔有〕 〈活用形態〉 教育研究支援者としての採用
社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕 〈内容〉 被調査地域との連携・交流を模索すると共に、そのあり方を研究者の属する社会に対して提言することで多文化主義を促進する。 社会への成果還元の有無〔有〕 〈還元の形態〉 展示
学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔無〕 学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕
他組織との連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔無〕 国内の研究機関研究者の研究への参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属〉 国際文化研究科
資金	科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額 40 万〕 センター長裁量経費〔金額 30 万〕
成果発表	研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと） 研究会〔2 回〕 公開の会議・シンポジウム〔 回〕 国際会議〔 回〕 東北アジア研究センター共同研究（展示実践）2011 年度第一回研究会 日程 9 月 15 日 16 時から 19 時 場所 東北大学文学部中会議室 (1)「展示に関わり何を得たのか」について報告（全員） (2) 総合討論 日時 2012 年 1 月 23 日 15 時から 17 時半 場所 東北アジア研究センター第二セミナー室 番組 (1) 研究資料の社会還元／再文脈化に向けた取り組み：日本国内のアラスカ先住民民俗音楽資料について：久保田亮（立教女学院大学） (2) 文化人類学学会での分科会についての共同討議（全員） (3) 成果とりまとめについて（全員） (4) 写真展「北にくらす子どもたち」見学：高倉解説 http://www.cneas.tohoku.ac.jp/unit/siberia/html/unit/siberia/display.html

論文・著書

以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。

〔雑誌論文〕 計（3）件

山崎幸治「文化人類学的研究とアイヌ研究：北海道での実践から見えてくる課題」日本文化人類学会、法政大学市ヶ谷キャンパス、2011年6月12日（査読有）

Atsunori ITO "Hopi and Zuni Arts and Crafts in Japanese Market and Museums: Trends in the Collaborative Management of Cultures in Japan." *Ethnoscripts*, 13(2), pp. 140-154, Hamburg, German: Universität Hamburg Institute für Ethnologie, 2011,（査読有り）.

山口未花子 「ビーバーの尻尾とヘラジカの鼻 - カナダ先住民カスカによる自然資源の利用と文化の伝承 - 」(簗島栄記編) pp.192-201 (勉誠出版)『アイヌ史を問いなおす アジア遊学』(139) 2011年3月（査読無）

〔学会発表・展示〕 計（14）件

高倉浩樹「触媒としての研究者：トナカイプロジェクトの経験から考えること」民族自然誌研究会第66回例会「研究をひらく展覧会」京都大学楽友会館、2012年1月21日

高倉浩樹（展示監修）「北にくらす子どもたち」（共催：北海道立北方民族博物館）、東北大学総合図書館本館常設展示場、2012年1月17日から3月1日

高倉浩樹（展示監修）「日本人のみたトナカイ遊牧民：シベリア民俗写真を現地に戻して展示する試み」ロシア連邦サハ共和国エヴェノ・ブイタントタイ郡サクリール（バタガイ＝アリタ）村文化センター、2012年3月22日から24日（ロシア語）

山崎幸治『先住民と国境 — アイヌと境界』主催：北海道大学北海道大学グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」. 共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター. 会場：北海道大学総合博物館. 2011年2月18日～5月8日。（展示責任者・図録編集）

山崎幸治『保莉実写真展カントリーに呼ばれて — オーストラリア・アボリジニとラディカル・オーラル・ヒストリー』主催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター. 共催：北海道大学総合博物館 / 北海道大学北海道大学グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」. 会場：北海道大学総合博物館. 2011年4月8日～5月8日。（展示責任者）

山崎幸治『千島・樺太・北海道 アイヌのくらし — ドイツコレクションを中心に — 』共催：財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 / 北海道開拓記念館（北海道） / 国立民族学博物館（大阪）. 会場：北海道開拓記念館（8月5日～9月25日）、国立民族学博物館（10月6日～12月6日）. 2011年8月～12月。（企画委員・図録編集）

山崎幸治『北米先住民ヤキの世界』主催：早稲田大学オーストラリア研究所、共催：北海道大学北海道大学グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、北海道大学総合博物館。会場：早稲田大学ワセダギャラリー（2012年2月2日～2月16日）。（展示企画委員）

山崎幸治「アイヌ物質文化資料の現代的意義とその活用」、(国際シンポジウム)「温故知新 — アイヌ文化研究の可能性を求めて — 」於：国立民族学博物館. 2011年11月12, 13日.（査読無）

伊藤敦規 「博物館資料の孤児作品化防止に向けて」国際シンポジウム『温故知新 — アイヌ文化研究の可能性を求めて (Learning from the Past: Exploring the Potential for Research on Aynu Culture)』、国立民族学博物館、2011年11月13日、（査読無し）。

伊藤敦規 「重なり合う二つの『伝統』— 米国先住民ホピの宝飾品産業におけるデザインの応用と流用」第53回意匠学会大会シンポジウム『手工芸とデザイン— 伝統的形態と現代的展開』、国立民族学博物館、2011年7月16日、(査読無し)。

伊藤敦規 (実行委員) 『千島・樺太・北海道 アイヌの暮らし— ドイツコレクションを中心に』(会期: 2011年10月6日~12月6日)、国立民族学博物館特別展示室、2011年4月~2012年3月。

伊藤敦規(企画)『第5回ホピ・ズニ作家展』(会期: 2011年11月3日~6日)、すみだ・パークスタジオ、東京都墨田区、2010年12月~2011年11月。

山口未花子 「カナダ先住民カスカの動物食文化」、日本文化人類学会第45回研究大会、東京、2011年6月 (査読有)

山口未花子 (展示企画) 「動物からの贈り物— 北米狩猟民カスカの動物利用—」、『ホネホネサミット2011: ホネホネ発表会』大阪市立自然史博物館、大阪、2011年10月 (査読無)

〔図 書〕 計 (11) 件

山崎幸治 『『民族学研究』におけるアイヌ研究— 終戦から昭和四〇年代まで—』(ヨーゼフ・クライナー編) 『近代〈日本意識〉の成立— 民俗学・民族学の貢献』、pp.360-375、(東京堂出版) 2012年3月 (査読無)

山崎幸治 「古写真の調査方法に関する覚え書き— 千歳地域におけるアイヌ関係古写真調査から—」加藤克 (編) 『大学博物館所蔵古写真の現代的意義に関する研究』[日本学術振興会科学研究費補助金 (2009~2011年度) 基盤研究(B)研究成果報告書]、pp. 37-39. 2012年3月 (査読無)

山崎幸治 「いのる／イノミ」(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編) 『千島・樺太・北海道 アイヌの暮らし— ドイツコレクションを中心に—』、p.112、(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構) 2011年7月 (査読無)

山崎幸治 「ヨーロッパの博物館におけるアイヌ資料」(国立民族学博物館編) 『月刊みんぱく』35(9): 3. 2011年9月 (査読無) .

山崎幸治・伊藤敦規編著 『世界のなかのアイヌ・アート— 先住民族アート・プロジェクト報告書—』2012年3月 (査読無)

Koji Yamasaki, Masaru Kato, Tesuya Amano (eds.) 2012 teetasinrit tekrukoci-The handprints of our Ancestors. Ainu Artifacts Housed at Hokkaido University-Inherited Techniques. Hokkaido University Museum/Hokkaido University Center for Ainu & Indigenous Studies.(総ページ数: 102頁) ※2008年『teetasinrit tekrukoci 先人の手あと 北大所蔵アイヌ資料— 受け継ぐ技—』の英語版

山崎幸治・伊藤敦規 (編著) 2012 『世界のなかのアイヌ・アート— 先住民族アート・プロジェクト報告書—』海道大学アイヌ・先住民研究センター。(総ページ数: 338ページ)

山崎幸治・木山克彦・宇佐見祥子 (編) 2011 『アイヌと境界— グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」第4期展示』北海道大学グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」。(総ページ数: 14頁) ※「アイヌと境界」展示図録

Koji Yamasaki, Katsuhiko Kiyama, Shoko Usami(eds) 2011 Ainu and Boundaries— Global COE program"Reshaping Japan's Border Studies" 4th museum exhibition. Hokkaido University Global COE program"Reshaping Japan's Border Studies". (総ページ数: 14頁) ※「アイヌと境界」展示図録 (英語版)

伊藤敦規 「許可なく撮るべからず」『月刊みんぱく』(第35巻第5号「特集 文化交渉のダイナミズム」)、p.7、国立民族学博物館、2011年5月、(査読無し)。

成果発表	久保田亮 「伝統ダンス進展期における先住民と文化の関係」 高谷紀夫、沼崎一郎編『つながりの文化人類学』、Pp.297-333、東北大学出版会、2012 年 2 月（査読有）。 Yamaguchi Mikako 「A Struggle for Co-existence between the Euro-Canadians and the Kaska First Nations」 (Yamada Takako eds.), pp.211-225, 『Continuity, Symbiosis, and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies』, (Hokkaido University Press) 2011 年（査読無）
共同研究の 全般的成果の アピール	今年度は、展示が研究の方法論にフィードバックがあるという点についてそれぞれの報告をおこなったこと、またこれについて日本文化人類学会での分科会を組織することに至ったのが大きな成果である。また 2010 年度に開催できなかったシベリア現地での展示を実施したのが大きな成果である。
第三者による 評価・受賞・報道 など	報道：「人類学者高倉浩樹が展示を開催」『Bytantai』誌（日刊新聞、2012 年 3 月 24 日）、ロシア連邦サハ共和国エヴェノ・ブイタンタイ郡発行、1 頁

■ 東北アジア研究センター・共同研究報告書

研究 題 目	栗原市一迫 川口地区の歴史資料の所在調査と保全事業			
研究 期 間	2011（平成 23）年度（1 年間）			
研 究 組 織	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	（代表者） 平川 新	東北アジア研究センター・ 教授	佐藤大介	東北アジア研究センター・ 助教
	高橋美貴	東京農工大学大学院准教授	蝦名裕一	東北アジア研究センター・ 教育研究支援者
	大林賢太郎	京都造形芸術大学准教授	天野真志	東北アジア研究センター・ 教育研究支援者
研究 経 費	（配布金額）200,000 円			
研究の目的と 本年度の成果 ならびに 研究成果の 重要性の概要	2011 年 3 月 11 日に発生した東北太平洋沖地震にともなう巨大津波により、東北太平洋沿岸は壊滅的な被害を受けた。同地で被災した歴史資料は、三陸沿岸地域の人々が、海と山林が近接したリアス式海岸の自然環境を生かして独自の生活文化を形成してきたことを明らかにする内容である。震災によりその環境が激変する可能性に直面している状況を踏まえ、地域の歴史記録を将来に継承するための歴史資料保全が喫緊に求められている。 そこで本研究では、津波で被災した古文書史料への応急処置を行い、原資料の劣化を食い止めるとともに、これまでない海水による水損が文化財に与える影響について考察する。その後、被災資料をデジタル撮影し、その画像データを用いて古文書史料目録などの歴史遺産データを再構築する。さらに、主要な史料の解説・解説文、研究論文などの公表を通じて、被災した歴史遺産の内容情報を社会の共有財産として広く共有することを目指す。 本年度は、宮城県女川町の指定文化財でもあった木村家文書、同県石巻市の石峰山石神社古文書など、三陸地域で被災した多くの古文書資料を被災地からレスキューすることが出来た。同時に、関係機関やボランティアの協力を得て、これらの応急処置を進め、中長期的な保存のための本格修覆の準備を調えることが出来た。応急処置の技術的な方法については研究論文などで公表し、「次の災害」に備えた防災対策に資する知見を提示することが出来た。			
成果を公表する URL				

東北アジア 地域研究 としての 意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 江戸時代には、主に江戸など東日本全般への海産物を供給する地域であり、また蝦夷地を通じた北東アジア・北太平洋地域との密接な社会的関連の中で発展してきた、東北地方太平洋沿岸の歴史を解明する歴史資料を保全し、活用する。 東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕 〈対象とした国・地域など〉 日本、東北地方太平洋沿岸 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください 東日本大震災で最も甚大な被害を受けた東北地方太平洋沿岸は、リアス式海岸の地形により海と森林が隣接した自然環境にある。また三陸沖は現在でも世界三大漁場の一つとして位置づけられており、人々はこのような自然環境を生かした固有の生業文化を生み出し、現在まで生活を営んできた。被災地には人々の営みを伝える無数の古文書資料が未整理のまま遺されているが、これらについては1950年代の日本常民文化研究所（現・神奈川大学常民文化研究所）や、宮城県史編さん事業の調査の後、歴史学としての本格的な調査は50年以上行われてこなかった。 同地を対象とする研究は、未知の古文書資料から地域の歴史的事実を確定するとともに、三陸沿岸の人々の営みを通じて、日本の歴史における海と人々との関わりがもつ固有の歴史的特質を解明することに資するといえる。
新 規 性	新規性の有無〔有〕 〈新規性の内容〉 東北地方の歴史像に関する一般的なイメージは、依然として米作中心の農業社会が展開していたというイメージが強く、震災を経て特に注目を集めている東北地方太平洋沿岸について、歴史像についてはその解明の途についたばかりである。その中で震災ではこの地域の古文書資料が無数に被災し、そこから明らかになる歴史自体が消滅の危機に瀕することとなった。レスキューから保全、その後の活用と歴史像の共有という一連の流れを作る事は、歴史学などの専門性を生かした被災地支援となる。
学 際 性	文理融合型の研究か〔はい〕 〈参加した専門分野〉 文化財保存修復科学 津波で被災し海水を浴びた古文書資料の応急処置について、技術的な支援と助言を受けて対応した。 文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕 〈参加した専門分野〉文化財保存修復科学
専 門 性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉歴史学 〈内容〉 三陸沿岸の本格的な歴史研究は、2000年代以降その途についたばかりである。今回レスキューした歴史資料は、そのすべてが未確認・未整理の歴史資料であり、その分析は新たな歴史像の解明に資する。

国際性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔無〕 国外の研究者の参加の有無〔無〕 学術交流協定活用の有無〔無〕 外国語による成果公表の有無〔無〕
教育上の効果	学生の参加による教育上の効果〔有〕 〈参加学生の所属〉 北大学文学部・理学部、東北学院大学、宮城学院女子大学、東京農工大学、京都造形芸術大学、神戸大学。 歴史学や保存科学を専攻する学生を中心に、被災歴史資料の応急処置に多くの学生がボランティアで参加した。活動を通じて、地域の歴史資料を災害から守るという専門分野を生かした活動領域の存在とともに、史料から東北地方太平洋沿岸の人々が持つ多様な営みの一端を学ぶことが出来た。 ポスドクの活用の有無〔有〕 〈活用形態〉 被災地でのレスキューや、仙台市での応急処置において教育研究支援者が実務をになった。 教育上の効果についてアピールしてください 実務を通じて、歴史資料保全の運営を実地に学び、あわせて東北地方太平洋沿岸の歴史像を知るための歴史資料の所在を知り、今後の歴史研究に有用な情報を得ることができた。
社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕 〈内容〉 活動は、被災した歴史資料の保全と記録化、調査成果の地域への提供を含んでいる。 社会への成果還元の有無〔有〕 ○宮城県女川町指定文化財・木村家文書の修履 東北地方太平洋沿岸でレスキューした古文書史料のうち、宮城県女川町指定文化財・木村家文書は、被災した女川町民が発見し、同じく被災した女川町役場の担当職員が応急処置に努めた結果、消滅を免れたものである。一連の過程は、地域社会にとって歴史資料が持つ意味を改めて考える事例となった。これらの史料は女川町教育委員会の委託を受け、本格修履に向け関係機関と連携して対応している。 ○宮城県石巻市雄勝町・石峰山石神社古文書解説文の提供 また、宮城県石巻市雄勝町の石峰山石神社史料は、同神社の歴史を知るだけではなく、現在も正月儀礼で用いられている現用の江戸時代古文書が含まれていた。その解説文を提供し、伝統文化を通じた被災地復興に貢献した。
学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔無〕 学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕

他組織との連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕 〈連携組織名〉 尚絅学院大学、東北芸術工科大学、京都造形芸術大学、奈良文化財研究所 〈連携の形態〉 ○古文書史料の応急処置・本格修履において、真空凍結乾燥処置などの技術的な支援を受けた。 ○活動の広報において、専門学科からの支援を受けた。 国内の研究機関研究者の研究への参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属〉 東京農工大学、京都造形芸術大学
資金	科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額 500,000 円〕 運営費交付金（個人研究費）
成果発表	研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと） 研究会〔0 回〕 公開の会議・シンポジウム〔0 回〕 国際会議〔0 回〕 論文・著書 以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。 〔雑誌論文〕計（1）件 1 天野真志「被災資料保全活動の現在 ― 宮城歴史資料保全ネットワークによる水損資料への対応 ―」『歴史評論』740、2011 年 12 月、査読無（依頼原稿）。 〔学会発表〕計（4）件 1 佐藤大介「3.11 大震災と宮城資料ネットの歴史資料レスキュー ― 活動から見えてきたこと ―」、文化財保存修復学会シンポジウム「文化財をまもる ― 災害から文化財をまもる ― 大規模自然災害における文化財レスキュー 阪神・淡路から東日本大震災」基調講演、2011 年 12 月 3 日、国立民族学博物館（招待）。 2 平川新「歴史資料の救済と保存科学の接点 ― 宮城資料ネットの活動をとおして ―」、平成 23 年度保存科学研究集会研究発表、奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂、2011 年 12 月 21 日（招待） 3 平川新「歴史資料保全のための国家的課題 ― 古文書を千年後まで残すために ―」、人間文化研究機構第 6 回人間文化研究情報資源共有化研究会「人間文化研究情報資源の保全と資源共有化の課題」、人間文化研究機構立川事務所、2011 年 12 月 16 日（招待） 4 佐藤大介「3.11 大震災と宮城資料ネットの歴史資料レスキュー ― 被災地から見えてきたこと ―」、2011 年度福大史学会大会、コラッセふくしま 4F 中会議室（福島県福島市）、2011 年 11 月 23 日（招待） 〔図 書〕計（0）件 〔その他の公表〕計（0）件 ■講演 1 平川新「歴史資料と災害への備え」人間文化研究機構・国立民族学博物館公開シンポジウム「文化遺産の復興を支援する ― 東日本大震災をめぐる活動」、2012 年 3 月 18 日、国立民族学博物館講堂

成果発表

- 2 平川新「歴史文化をめぐる多様性の危機 — 震災の衝撃 —」、グローバルセミナー東北「震災復興と生態適応」、2012年2月16日、東北大学・片平さくらホール。
- 3 平川新「歴史資料のレスキューと東北大学の取り組み」、国立大学附置研究所・センター長会議特別シンポジウム「創造的復興に向けた未来都市のあり方」、2012年2月10日、ウェスティンホテル仙台2Fグラウンドボールルーム竹、
- 4 佐藤大介「3.11大震災 ふるさとの歴史を守る－宮城県での歴史資料レスキューから」大学コンソーシアムひょうご神戸設立5周年記念シンポジウム 震災と復興「人と文化が支える震災復興」、於・神戸大学百年記念館、2012年2月10日
- 5 平川新「歴史資料を守るための取り組み」、史料保存・活用研究会講演会（三重県歴史文化資産保存活用連携ネットワーク）、2012年1月20日、三重県総合文化センター、
- 6 蝦名裕一「大規模災害と歴史資料の保全活動 — 東日本大震災における宮城資料ネットの活動 —、愛知教育大学「平和と人権」、2011年12月20日、愛知教育大学、
- 7 平川新「東日本大震災と歴史資料の救出」、弘前学院大学講演会、2011年12月17日、弘前学院大学、
- 8 平川新「地域の歴史文化と学官民による資料保全活動」、国公立大学フォーラム「地域歴史文化の育成支援拠点としての国公立大学 — 地域歴史遺産の保全・活用と防災 —」、2011年12月11日、神戸大学瀧川記念学術交流会館。
- 9 平川新「大震災を越えて — 歴史遺産を後世に残すためには —」、東北学院大学アジア流域文化研究所学術公開シンポジウム、2011年12月3日、東北学院大学押川記念ホール、
- 10 平川新「東日本（東北・関東）大震災と歴史資料の救出」、資料を語り継ぐ — 平時も、非常時も —（情報保存研究会）、2011年10月25日、江戸東京博物館、
- 11 佐藤大介「3.11大震災での歴史資料保全活動」、平成23年度白石市民大学、2011年10月18日、白石市中央公民館、
- 12 平川新「大震災から歴史遺産を守る！」、東北大学大学院環境科学研究科震災フォーラム、2011年10月8日、仙台国際センター、
- 13 佐藤大介「歴史遺産を未来へ 3.11大震災での歴史資料保全活動」、せんだい豊齢学園ふるさと文化コース第1学年「社会貢献活動へ向けて」、於／仙台市シルバーセンター、2011年9月30日
- 14 平川新「土蔵を残す意義について」、土蔵メモリアル交流会 石巻震災土蔵メモリアル基金中間報告会、2011年9月24日、石巻市門脇町・本間家土蔵、
- 15 平川新「歴史資料の保存はなぜ必要か」、仙台市史セミナー「特別企画 地域の歴史資料を救え」、2011年9月18日、仙台市博物館講堂、
- 16 佐藤大介「3.11震災から文化財を守る — NPO法人宮城歴史資料保全ネットワークの活動 —」、鮎立港まちづくり百年会（気仙沼市唐桑町鮎立）、2011年8月27日、鮎立老人憩いの家、
- 17 平川新「東日本大震災から古文書を守る！ — 史料保全の現場から —」、こうちミュージアムネットワーク研修会、2011年8月5日、高知県立文学館。

成果発表	18 蝦名裕一「東日本大震災における宮城資料ネットの活動」、MULU 第 17 回茶話会「震災後開館第 1 号の図書館にて、震災に強い図書館を考える」、於／岩沼市図書館、2011 年 7 月 30 日 ■公開行事 19 グローバルセミナー東北「震災復興と生態適応」展示、「災害から「ふるさとの歴史」を守る」・「ふるさとの歴史を未来へ」、2012 年 2 月 16 日、東北大学・片平さくらホール、来場者 150 名。 20 仙台市広瀬文化センターホール展示「3.11 地球が震えた日 歴史遺産に未来を」、2011 年 10 月 29 日～11 月 4 日、仙台市広瀬文化センター、来場者数 300 名。(木村家文書レスキューの展示) 21 東北大学片平まつり展示「3.11 地球が震えた日 歴史遺産に未来を」、2011 年 10 月 10 日・11 日、東北大学生命科学研究科棟、来場者数 1300 名。(木村家文書を収納していた茶箱の展示) 22 仙台市博物館での展示「3.11 地球が震えた日 歴史遺産に未来を」、2011 年 9 月 17～25 日、来場者 731 名。(木村家文書および文書を収納していた茶箱の展示) ■パンフレット マンガ「漂流茶箱の冒険」(女川町木村家文書のレスキュー)、千葉真弓作、2011 年 9 月 17 日初版、5000 部。
共同研究の 全般的成果の アピール	今年度の活動は、被災した地域の歴史資料保全が主なものになった。被災地からの一時搬出や、関係機関との協力による応急処置により安定的な状態に保つことができ、消滅寸前にあった地域の歴史そのものを語る史料をひとまず遺すことが出来た。 また、被災地での活動により、歴史資料は単に歴史研究の素材という事に止まらず、地域の共同体の中で「生きた」価値を持つ存在として意義があることを知ることが出来た。被災した歴史資料の保全や、それを分析して歴史像を提示することは、専門性を生かした被災地支援に他ならないという、研究者のあらたな活動領域を開拓することができた。
第三者による 評価・受賞・報道 など	■報道 ・2012 年 3 月 3 日 河北新報朝刊 社会面 土蔵から司馬江漢の油彩 仙台市博物館へ寄贈へ ・2011 年 11 月 15 日 産経新聞夕刊 記録守る 地震大国の団結／文化財レスキュー ・2011 年 10 月 6 日 産経新聞 総合面 被災地の文化財 救われた 110 件／レスキュー活動半年 阪神大震災の 4 倍 ・2011 年 9 月 19 日 新潟日報朝刊 文化面 被災の古文書保全 すすむ全国的な技術交流 ・2011 年 08 月 17 日 読売新聞東京朝刊 宮城 2 津波被害 女川の古文書 奈良での応急処置終える＝宮城 ・2011 年 7 月 5 日 河北新報朝刊 第二社会面 ふんばる 3・11 大震災／宮城歴史資料保全ネットワーク＝NPO 法人、 仙台市＝／地域の歴史を未来へ 津波被害の古文書救う ■雑誌掲載 ・ナショナル・ジオグラフィック日本版

■ 東北アジア研究センター・共同研究報告書

研究 題 目	仙台市沿岸津波被災地の歴史・文化・景観の記録化			
研究 期 間	2011（平成 23）年度（1 年間）			
研究 組 織	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	(代表者) 平川 新	東北アジア研究センター・ 教授	佐藤 大介	東北アジア研究センター・ 助教
	菅野正道	仙台市博物館市史編さん室長	蝦名 裕一	東北アジア研究センター・ 教育研究支援者
	畑井洋樹	仙台市歴史民俗資料館学芸員	天野 真志	東北アジア研究センター・ 教育研究支援者
研究 経 費	(配布金額) 200,000 円 (その他の主たる外部資金) 文部科学省科研費基盤研究(B)「仙台藩と仙台領地域社会の新研究」の一部			
研究の目的と 本年度の成果 ならびに 研究成果の 重要性の概要	仙台市宮城野区および若林区の沿岸地域の集落は、1611 年（慶長 16）に発生した慶長津波で被災した後、1620 年代半ばから、仙台藩の下級藩士により新田開発が行われた結果成立した村落をその始原としている。地域には水田や「イグネ」と呼ばれる屋敷林をめぐらせた家屋が点在し、現在失われつつある、仙台平野独特の村落景観を形成してきた。 これらの集落は、2011 年 3 月 11 日の東北太平洋沖地震における巨大津波で壊滅的な被害を受けた。地域に残されていた古文書や古碑などの歴史遺産も被災するとともに、集落は今後の地域復興のなかで集団移転が現実視される状況であり、400 年間の営為として成立してきた景観も消滅しようとしている。 そのような状況を踏まえ、本研究では津波災害によって失われた人々のくらしと地域の歴史・文化・景観を、歴史学および民俗学の見地から詳細に記録化する。 今年度は、慶長 11 年（1611）に発生した慶長地震津波を文献記録から再検証し、従来の「三陸」津波という名称のイメージとはことなり、「奥州」、すなわち現在の東北地方太平洋沿岸全体に被害をもたらした巨大津波であった可能性を指摘した。 あわせて、仙台市沿岸の被災地において歴史資料レスキューを実施し、地域の歴史資料を保全することが出来た。それらの史料の中には、慶長 11 年（1611）の地震津波後に伊達政宗が推進した被災地での耕地開発の進展を示す古文書があり、現在の集落の直接の前提となった、地域の災害復興の手がかりを得ることができた。			
成果を公表する URL				

東北アジア 地域研究 としての 意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 東日本大震災を契機に大きく変容を遂げようとしている地域社会の一つである、仙台市沿岸部の現代に至る歴史を定点観測的に分析し、地域の記憶を留めるとともに、固有の歴史文化を解明する。 東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕 〈対象とした国・地域など〉 日本、東北地方、仙台市沿岸部 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください 今回の震災で被災した仙台市沿岸部は、これまでの歴史研究においては津波襲来地としての歴史像や、地域の自己認識は全くといっていいほど存在していなかった。ところが、今回の震災により、図らずも現在の集落の形成や、集落と周辺自然环境が一体となって形成された景観の直接的な前提が、400年前の慶長津波後の耕地開発にあることが浮き彫りになった。その歴史像の解明は、一地域の個別研究を越えて、数々の災害との関係で地域を形成してきた日本列島の歴史文化的特質を解明することにつながると思う。
新 規 性	新規性の有無〔有〕 〈新規性の内容〉 研究の直接の動機は、移転による集落自体の消滅という状況に直面した地域住民からの要請に基づいている。研究者サイドの問題関心から研究を立ち上げてその成果を地域住民に与えるのではなく、地域の歴史記録の発掘と分析を、地域住民の問題関心に応えつつ記録化してゆくという点に新規性がある。
学 際 性	文理融合型の研究か〔はい〕 〈参加した専門分野〉 津波工学 現在の仙台市などを襲った400年前の慶長津波地震の被災規模について、文献記録と津波工学のシミュレーション結果を組み合わせる形で再検討した。 文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕 〈参加した専門分野〉 津波工学
専 門 性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉 歴史学 〈内容〉 研究の対象とする仙台市沿岸部での江戸時代初期の耕地開発は、日本列島各地で同時期に行われていた様々の土地開発一事例としてとらえられてきた。ところが、すでに公表されている歴史記録の再検討や、被災後の歴史資料レスキューで確認された古文書史料の検討により、当地を襲った慶長津波からの災害復興という固有の事情があることが明らかになった。
国 際 性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔無〕 国外の研究者の参加の有無〔無〕 学術交流協定活用の有無〔無〕 外国語による成果公表の有無〔無〕

教育上の効果	学生の参加による教育上の効果〔無〕 ポスドクの活用の有無〔有〕 〈活用形態〉 東北アジア研究センターの教育研究支援者 2 名が参加した。 教育上の効果についてアピールしてください 慶長地震津波の再検討については中心的な役割を果たし、
社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕 〈内容〉 慶長地震津波については被災規模の再検討とともに、今回の震災における歴史資料レスキュー活動とも関連させながら、文献記録を保存・継承することの社会的意義について提起した。 また、歴史資料レスキュー活動で確認された関連古文書を実際に展示に活用した。 社会への成果還元の有無〔有〕 市民向け講座、仙台市博物館での展示
学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔無〕 学内他部局教員の研究への参加の有無〔有〕 〈参加教員の所属〉 災害制御研究センター
他組織との連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔無〕 国内の研究機関研究者の研究への参加の有無〔無〕
資金	科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額 500,000 円〕 運営費交付金（個人研究費）
成果発表	研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと） 研究会〔0 回〕 公開の会議・シンポジウム〔0 回〕 国際会議〔0 回〕 論文・著書 以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。 〔雑誌論文〕計（2）件 1 蝦名裕一「慶長大津波と震災復興」、『季刊東北学』29、31-38 頁、2011 年、査読無（依頼原稿） 2 平川新「東日本大震災と歴史の見方」、『歴史学研究』884、2-7 頁、2011 年、査読無（依頼原稿） 〔学会発表〕計（0）件 〔図 書〕計（0）件 〔その他の公表〕計（8）件 ■講演 1 蝦名裕一「慶長奥州地震津波の被害と亘理の復興」、亘理町郷土資料館町民講座「平成 23 年度 ものしり大学院」、於亘理町立郷土資料館 2012 年 3 月 24 日 2 平川新「街道に刻まれた災害の歴史に学ぶ」、全国街道交流会議第 8 回全国大会「浜松大会」、アクトシティ浜松、2011 年 1 月 12 日

成果発表	3 蝦名裕一「1611年慶長奥州地震・津波を読み直す」、慶長地震津波400周年シンポジウム 於／東北大学工学部中央棟大講義室、2011年12月2日 4 平川新「たくましく生きるみちのく ― 歴史に見る東北の力 ―」、広瀬文化センター開館20周年祈念 ― 復興への願いを込めて ―、於／仙台市広瀬文化センターホール、2011年10月29日 5 平川新「災害への備え、戦（いくさ）への構え ― 江戸時代初期の岩沼 ―」、岩沼市震災復興祈念講演会～歴史に探る未来への希望～、於／岩沼市民会館、2011年9月25日 6 蝦名裕一「慶長大津波と岩沼の復興」、岩沼市震災復興祈念講演会～歴史に探る未来への希望～、於／岩沼市民会館、2011年9月25日 7 蝦名裕一「慶長津波と復興過程」、「東北大学による東日本大震災6ヶ月後報告会」研究報告、トラストシティ・カンファレンス仙台、2011年9月13日 ■展示 8 仙台市博物館展示「歴史資料レスキュー展」、2012年3月 日～ 日 展示協力（仙台市沿岸部被災古文書）
共同研究の 全般的成果の アピール	研究活動の契機が、研究者による問題関心や、自治体からの依頼ではなく、震災を契機とする社会変容に自ら直面し、これまで先祖が連綿と受け継いできた地域を生み出した歴史への関心を深めた市民の要請に基づくものであった。このことは、研究者が提示した歴史像を市民が受容するという一方的な関係ではなく、地域の伝承や歴史資料を媒介とした双方の対話に基づく新たな歴史像の構築の方法を考察する重要な機会となった。歴史資料保全に加え、保全した歴史資料から地域の歴史を記録化することも、歴史研究者が専門性を生かした被災地支援の新たな活動領域として浮かび上がらせることが出来た。
第三者による 評価・受賞・報道 など	■新聞報道 ・（蝦名裕一）2012年3月26日 河北新報みやぎ面 津波災害 先人が警鐘／東北大蝦名氏 慶長の記録を検証 ・（蝦名裕一）2012年3月1日 河北新報朝刊1面 歴史検証 重み増す ・（蝦名裕一）2012年1月16日 朝日新聞科学面 地震対策 古文書で探れ ・（平川新・蝦名裕一）2011年12月1日 河北新報朝刊社会面 慶長津波 教訓学ぼう／2日・慶長地震津波400年シンポジウム ・（平川新・蝦名裕一）2011年09月24日 河北新報朝刊みやぎ2面 慶長津波通じて岩沼の未来探る／25日・講演会

■ 東北アジア研究センター・共同研究報告書

研究 題 目	東アジア近世社会における出版文化の意義			
研究 期 間	2010（平成 22）年度～2012（平成 24）年度（3 年間）			
研究 組 織	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	(代表者) 磯部 彰	東北大学東北アジア研究センター	崔溶澈	(韓国) 高麗大学校中語中文学科
	佐々木聡	東北大学大学院文学研究科(院生)・RA	黄霖	(中国) 復旦大学中国古代文学研究センター
	熊 静	東北大学東北アジア研究センター RA(9 月まで)	陳正宏	(中国) 復旦大学古籍整理研究所
			石昌渝	(中国) 中国社会科学院文学研究所
			石 雷	(中国) 中国社会科学院文学研究所
研究 経 費	(配布金額) 300,000 円 (研究支援者、RA などの配置) RA 2 名 (研究スペース配分など) 332 号室 (その他の主たる外部資金) 特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」			
研究の目的と 本年度の成果 ならびに 研究成果の 重要性の概要	本共同研究は、宋代以降の中国を中心とした東アジア出版文化での印刷文化の確立、明代 16 世紀嘉靖時代の出版システムや政策の変更を通して、東アジア世界の知識層の拡大と社会変容につながった点に着目し、研究蓄積の乏しい 15～16 世紀前後の封建体制の転換期における東アジア諸国の出版文化状況を検証する。そして、本研究を通し、東アジア諸国に残る様々な出版資料が、統一的な概念で共通理解が出来るようにし、近世から近現代の東アジア世界の情報伝達システムの形成と知識・情報の蓄積に伴う社会構造の変化を明らかにする。 特別推進研究と共同で本研究テーマに取り組む過程で、若手研究者グループを取りまとめ、東アジアに係る文史哲方面からの研究層をより一層拡充させた。これは、本共同研究を支えるユニットの目的の一つ若手研究者の育成を実現させるためでもある。			
成果を公表する URL		http://eapub.cneas.tohoku.ac.jp/		

東北アジア 地域研究 としての 意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 中国の木版印刷術を核心とした東アジア、北アジアの諸国・民族相互の文化交流と、地域独自文化形成に視点を置いてユニットを構成している。 東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕 〈対象とした国・地域など〉 中国（内モンゴルを含む）・朝鮮半島・日本・ベトナム・琉球 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください 東アジアを中心とした出版文化の効果と影響で、中国からの文化の波及のみならず、それぞれの地域での文化形成を重視している。
新 規 性	新規性の有無〔有〕 〈新規性の内容〉 文学・文化及び資科学・東洋史・アジア交渉史から成る研究組織に、研究テーマ・分野の異なる若手研究者を加え、出版文化を多角的に捉える点に新規性がある。
学 際 性	文理融合型の研究か〔いいえ〕 〈参加した専門分野〉 中国文学・中国史・チベット史・朝鮮文化・東北アジア史 文系・理系での学際性・連携性の有無〔無〕
専 門 性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉 東アジア出版文化 〈内容〉 書誌学・文献学を拡充した出版文化学で社会を考えるという点に特色がある。
国 際 性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕 （韓国）高麗大学校日本研究センター・中国学研究所・中語中文学科、（中国）復旦大学中国古代文学研究センター・古籍整理研究所、（中国）中国社会科学院文学研究所、（中国）中山大学、（中国）北京故宫博物院故宫学研究所、（ドイツ）ライプチヒ大学アジアアフリカ図書館、（台湾）国立成功大学 国外の研究者の参加の有無〔有〕 研究組織メンバー ・石昌渝（中国社会科学院文学研究所） ・石雷（中国社会科学院文学研究所） ・陳正宏（復旦大学古籍整理研究所） ・崔溶澈（高麗大学校中語中文学科） ・黄霖（復旦大学中国古代文学研究センター） 学術交流協定活用の有無〔有〕 〈協定の名称〉 （韓国）高麗大学校日本研究センター及び中国学研究所との部局間交流協定 外国語による成果公表の有無〔有〕 〈言語〉 中国語

教育上の効果	学生の参加による教育上の効果〔有〕 〈参加学生の所属〉 東北大学、東京大学、(中国)中山大學、琉球大学、お茶の水女子大学、早稲田大学、神奈川大学、京都府立大学、埼玉大学、富山大学、金沢大学 〈学生による成果発表〉 ○論文 ・佐々木聡『『白沢図』をめぐる辟邪文化の変遷と受容』、『日本中国学会第一回若手シンポジウム論文集 — 中国学の新局面 — 』、日本中国学会、p45～59、2012年2月 ・熊静「清代内府“九九大慶”戲研究 — 以北京大學圖書館藏《九九大慶》為例」、『東北アジア研究』16号、東北大学東北アジア研究センター、P261～277、2012年2月20日 ○学会・研究会報告 ・佐々木聡「怪異占と辟邪 — 中国中世鬼神観研究の視点から — 」、術数学東京ミーティング2011、2011年9月4日、大正大学 ・熊静「清代内府“九九大慶”戲研究 — 以北京大学図書館藏《九九大慶》為例」、第9回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会、2011年9月12日、強羅静雲荘 ・佐々木聡「中国近世以降における『開元占経』の流伝と受容について」、第63回日本中国学会大会、2011年10月8日、九州大学 ・佐々木聡「怪異占の諸相と比較分析方法試論 — 鬼神・占ト・辟邪をめぐって — 」、東アジア怪異学会第77回定例研究会・特別企画「東アジアの占いと予言～未来を読む技、語る声～」、2012年3月4日、立教大学 ポストクの活用の有無〔有〕 〈活用形態〉 RA、研究協力者 教育上の効果についてアピールしてください 他分野の情報を入手出来たこと、研究会で研究成果を発表する機会を得た他、研究会の開催を通して文献調査の機会が得られた。 ・佐々木聡：10月に、九州国立博物館における中国周辺領域関連美術・文献資料調査、九州大学における第63回日本中国学会大会での研究報告・質疑応答・研究者交流、九州国立大学附属図書館における学会同時開催の濱文庫資料調査、太宰府天満宮における宝物館・境内等所蔵天神信仰関連資料及び神獣図像等の視察調査を行った。 ・佐々木聡：12月に、上海図書館と復旦大学において、東アジア出版文化に関する情報交換及び情報収集を行なった。復旦大学では、東アジア出版史における中国の最近の研究情報を入手し、ト占関係書籍の出版・流布に関して知見を深めた。上海図書館では、天文学や術数学に関する書籍の出版・流布についての情報を得ることができた。また、復旦大学陳正宏教授ならびに呉格教授から、東アジア出版資料及び刊本の性格についての助言を頂いた。
--------	--

社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕 〈内容〉 研究会及び出版物を通して、研究成果を国内・国外研究者、若手研究者、及び一般市民にも伝えることが出来た。 社会への成果還元の有無〔有〕 〈還元の形態〉 研究会（公開）
学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕 〈連携部局名〉 附属図書館 学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕
他組織との連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕 〈連携組織名〉 東北大学特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」、早稲田大学 演劇博物館 GCOE「演劇・映像の国際的教育研究拠点」東洋演劇コース 〈連携の形態〉 研究会も 国内の研究機関研究者の研究への参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属〉 京都大学、富山大学、慶應義塾大学、東京大学、東京外国語大学、島根県立大学、埼玉大学、神奈川大学、明治大学、京都府立大学、早稲田大学
資金	センター長裁量経費〔金額 300,000 円〕 運営費交付金（個人研究費）
成果発表	研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと） 研究会〔4 回〕 ・第 8 回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会、東京国立博物館（東京）2011 年 6 月 4 日 ・第 9 回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会、強羅静雲荘（神奈川）、2011 年 9 月 12・13 日 ・第 10 回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会、慶應義塾大学 三田キャンパス（東京）、2011 年 12 月 3 日 ・第 11 回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会、富山大学人文学部（富山）、2012 年 2 月 4 日 公開の会議・シンポジウム〔0 回〕 国際会議〔0 回〕 論文・著書 以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。 〔雑誌論文〕計（0）件 〔学会発表〕計（0）件 〔図 書〕計（2）件 ・磯部彰『旅行く孫悟空 ― 東アジアの西遊記 ―』、塙書房、263 頁、2011 年 9 月 1 日

成果発表	・磯部彰 編著『《西遊記》画三種の原典と解題』、特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」班、306 頁、2012 年 3 月 30 日 〔その他の公表〕計（3）件 ・（講演）磯部彰「玄奘取経伝説と明恵上人」、奈良国立博物館夏季講座テーマ「玄奘三蔵とシルクロード」2011 年 8 月 24 日 ・（講演）磯部彰「西遊記を中心とした浅野文庫漢籍類の特色」、広島市立浅野図書館開館 80 周年記念講演会、広島市立中央図書館、2011 年 10 月 1 日 ・（パネリスト）磯部彰、テーマ「平和と共同繁栄の新たな北東アジア時代に向けて」第 3 セッション（3 国協力事務所の発足の意義及び今後の役割について討論）、駐日韓国大使館 韓中日 3 国協力事務所開所記念国際シンポジウム「『調和』への視座 — 韓日中 3 国協力事務所の役割」、ソウル、2011 年 10 月 19 日
共同研究の 全般的成果の アピール	本共同研究は、特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」と共同歩調で進めており、その中で若手研究者の育成も兼ねた研究発表の場を提供した。これからも、歴史・文学・思想等の幅広いジャンルからの参加を求めている。共同研究の推進によって、明清時代を中心とした東アジアの出版文化を含む文化状況をめぐる意見交換や研究者相互交流がアジアに止まらず、ヨーロッパ方面にも拡がり、着実に進展したと思われる。
第三者による 評価・受賞・報道 など	なし

■ 東北アジア研究センター・共同研究報告書

研究 題 目	氷融洪水とその社会的対応からみる極北圏地域社会の比較研究			
研究 期 間	2010（平成 22）年度～2013（平成 25）年度（4 年間）			
研究 組 織	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	（代表者） 高倉浩樹 奥村 誠 渡邊 学	東北大学東北アジア研究センター准教授 東北大学東北アジア研究センター教授 JAXA	久保田亮 山口未花子 吉川泰弘	立教女学院短期大学講師 東北大学東北アジア研究センター教育研究支援者 寒地土木研究所研究員
研究 経 費	（研究支援者、RA などの配置）30 万円 （研究支援者、RA などの配置）あり （研究スペース配分など）あり （その他の主たる外部資金）科研基盤(B)（380 万円）			
研究の目的と 本年度の成果 ならびに 研究成果の 重要性の概要	今年度の目的は(1)北米大陸側での本格的人類学的調査を行いシベリアとの比較体制を整える事、(2)春季洪水に関わる在来知に関する人類学的分析、(3)リモートセンシングと現地新聞による洪水の推移の復元、(4)河川工学によるアイスジャム洪水のモデル化についてそれぞれ研究を進める事である。 (1)については、アラスカおよびカナダでの現地調査が行われた。アラスカについては地域洪水史と現地での土地利用形態に関わる知識の関係を調べる事で春季洪水と当該地域社会の関係がわかるのではないかとの見通しを得た。カナダの場合より広域的に調査を進める必要がある事がわかった。(2)についてはサハ語のなかに見られる河川凍結と融解に関わる語彙を体系づけるとともに、それが時間的にどのくらいの間見られるのか現地での聞き取り調査が必要であるとの見通しを得た。(3)は SAR の衛星画像分析で浸水範囲が把握できることが分かり、また新聞記事からは流水の推移情報が復元できることが示された。(4)は氷板厚を計算するソフトが開発され、これによって地域社会においてどのくらいの氷板厚になるのか算出できる見通しとなった。 それぞれの専門分野の調査研究が進捗すると同時にその相互のかみ合わせについて一定の見通しを得られた事が今年度の最も大きな成果である。			
成果を公表する URL		http://www.cneas.tohoku.ac.jp/unit/siberia/html/unit/siberia/flood.html		

東北アジア 地域研究 としての 意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 シベリア研究を機軸として、その自然 — 文化の関係を、北米側とも比較して探求すること 東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕 〈対象とした国・地域など〉 ロシア連邦、アメリカ合衆国、カナダ 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください 歴史文化的世界としてシベリアはヨーロッパロシアやモンゴルや中国などの東アジア世界との連関のなかでとらえられてきた。本研究は北極圏としてのシベリアの特徴をあきらかにしようとするものである。特に北極海に向かって流れる大河川とその流域にくらす集団という共通する生態的特徴のなかで、人間社会の多様性がどのように現れるのかを解明する点に特徴がある。
新 規 性	新規性の有無〔有〕 〈新規性の内容〉 春の氷融洪水という北極圏においてみられる自然現象に、地域社会がどのように対応しているのかを、文化人類学・シベリア民族誌・北米民族誌・土木計画学・環境リモートセンシング・河川工学などの学際的分野が合同でアプローチしている点。
学 際 性	文理融合型の研究か〔はい〕 〈参加した専門分野〉 文化人類学・シベリア民族誌・北米民族誌・土木計画学・環境リモートセンシング・河川工学 文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕 文化人類学・シベリア民族誌・北米民族誌・土木計画学・環境リモートセンシング・河川工学
専 門 性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉 〈内容〉 文化人類学：人類の寒冷地適応についてはこれまで主に生業や衣食住などの物質文化に焦点があてられてきたが、本課題は寒冷地の河川流域という地理的条件と適応の関係を明らかにすることで、寒冷地適応における地理的（生態的）特質の解明が期待される。 環境リモートセンシング：洪水検出（特に都市域）を効率的に行う手法はまだ完全に確立されておらず、本課題を通して明らかにすることで、衛星データによる災害監視手法の確立が期待される。 土木計画学：寒冷地において河川の凍結時期は、交通や飲料水の獲得に大きな影響を与えるが、それに対する地球規模の気候変動の影響の程度が明らかにされてこなかった。これまでの研究で、河川水の凍結融解過程の物理モデルを構築してきたが、寒地の河川工学の専門家との意見交換を通じてモデルの適用範囲と改善点についての示唆を得た。これに基づき、人間活動への影響を定量的に分析できるめどを付けることができた。

専 門 性	河川工学：北方地域における河川の凍結と融解の物理的メカニズムは、現象が広範囲および短時間で現れることから、十分には解明されていない。一方、北海道の河川は、諸外国に比べて流路延長が短く川幅は狭いことから、詳細な現地観測が実施可能である。この現地観測データを解析することにより、北方地域における河川の凍結と融解の現象解明に大きく寄与できる。
国 際 性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕 ロシア ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所（ヤクーツク市） 国外の研究者の参加の有無〔無〕 学術交流協定活用の有無〔有〕 〈協定の名称〉 ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所と東北アジア研究センター部局間協定 外国語による成果公表の有無〔有〕 〈言語〉 英語
教育上の効果	学生の参加による教育上の効果〔有〕 〈参加学生の所属〉 工学研究科土木工学専攻 ポスドクの活用の有無〔有〕 〈活用形態〉 教育研究支援者としての雇用
社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔いいえ〕 社会への成果還元の有無〔無〕
学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔無〕 学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕
他組織との連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔無〕 国内の研究機関研究者の研究への参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属〉 立教女学院短期大学・寒地土木研究所
資 金	科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額 380 万円〕 センター長裁量経費〔金額 30 万円〕
成果発表	研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと） 研究会〔2 回〕 ・ 2011 年度第一回研究会 2011 年 9 月 11 日 13 時から 17 時 東北アジア研究センター 研究発表 1) 山口未花子（東北大学東北アジア研究センター） 「カナダ、ユーコン準州における温暖化の影響と先住民の対応」2) 久保田亮（立教女子学院短期大学） 「アラスカ州南西部沿岸地域における洪水史」

成果発表

研究進捗報告（発表 10 分、質疑 5 分）

- 1) 16:00 ~ 16:15 高倉浩樹（東北大学東北アジア研究センター）
- 2) 16:15 ~ 16:30 奥村誠（東北大学東北アジア研究センター）
- 3) 16:30 ~ 16:45 渡邊学（宇宙航空研究開発機構）
- 4) 16:45 ~ 17:00 吉川泰弘（寒地土木研究所）

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/news/news110831.html>

・ 2011 年度第二回研究会

2 月 16 日 12:30 ~ 18:30 東北大学東北アジア研究センター

- 1) 各自研究進捗状況報告（発表 15 分、質疑 5 分）
 吉川泰弘「アイスジャム発生に関する水理実験」
 渡邊学「衛星データによる洪水域検出」
 山口未花子「カナダ、ユーコン準州における気候変動への対応と先住民」
 久保田亮「アラスカ州南西部先住民の土地認識と洪水との関係について」
 奥村誠「災害リスクマネジメントにおける経験の意義」
 高倉浩樹「新聞記事と GIS からみたレナ川雪解け洪水の動態」

2) 総合討論

3) 来年度に向けての計画

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/unit/siberia/html/unit/siberia/flood.html>

公開の会議・シンポジウム〔0 回〕

国際会議〔0 回〕

論文・著書

以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。

〔雑誌論文〕計（7）件

久保田亮「チュピック村落での生き方と「地球温暖化」」、『アークティック・サークル』81、Pp.4-9、北方文化振興協会、2011 年 12 月

奥村誠・河本憲・サルダーナ ボヤコワ「ロシア連邦サハ共和国の冬道路と地球温暖化の影響」、『運輸政策研究』, Vol.14, No.3, pp.016-023, 2011 年（査読有）.

奥村誠「交通網の連結性を再チェックすべき」、『運輸と経済』, Vol.71, No.8, pp.72-74, 2011 年（査読無）.

奥村誠「東日本大震災を踏まえた道路計画と設計の課題」、『土木学会誌』, Vol.96, No.11, pp.26-29, 2011 年（査読無）.

吉川泰弘, 渡邊康玄, 早川博, 平井康幸: 結氷河川における解氷現象と実用的な氷板厚計算式の開発, 土木学会論文集 B1 (水工学), Vol.68, No.1, pp.21-34, 2012 年 2 月. (査読有)

Yasuhiro YOSHIKAWA, Yasuharu WATANABE, Hiroshi HAYAKAWA, Yasuyuki HIRAI: DEVELOPMENT OF A DISCHARGE ESTIMATION METHOD FOR FROZEN RIVERS, Journal of Hydrosience and Hydraulic Engineering, Vol.29, No.1, pp.81-105, 2011 年 5 月. (査読有)

渡邊学 米澤千夏 高倉浩樹「PALSAR フルポーラリメトリによる洪水範囲検出」『第 50 回（平成 23 年度春季）リモートセンシング学会講演論文集』頁:269-270、(リモートセンシング学会)、2011 年 5 月（査読無）

成果発表

〔学会発表〕計（11）件

山口未花子「カナダ、ユーコン準州における気候変動に対する先住民の認識と対応」、第26回北方民族文化シンポジウム 環境変化と先住民の生業文化：陸域生態系における適応、北方民族博物館、網走、2011年10月

奥村誠「災害後の交通－東日本大震災の被害と復旧過程」、第43回土木計画学研究発表会春大会スペシャルセッション、筑波大学、2011年5月29日、

奥村誠「震災時に道路ネットワークに求められる性能について」、土木学会全国大会研究討論会（リスク評価に基づく道路ネットワークの耐震設計法を目指して）、愛媛大学、2011年9月7日、

古橋峻・奥村誠「長期人口統計における巨大災害の影響抽出の試み」、第44回土木計画学研究発表会、長良川国際会議場、2011年11月25日、

大窪和明・奥村誠・河本憲「震災時における消費者のガソリン購入行動に関する研究」、応用地域学会研究発表会、富山大学、2011年12月3日

ブンボン健人・奥村誠・大窪和明「東日本大震災における救援物資ニーズの時間的变化に関する研究」、土木学会東北支部技術研究発表会、秋田大学、2012年3月3日

岩坂友也・奥村誠・大窪和明「震災時における給油利便性低下の空間的要因分析」、土木学会東北支部技術研究発表会、秋田大学、2012年3月3日

河本憲・奥村誠・大窪和明「震災時ガソリン購入行動に関する研究」、土木学会東北支部技術研究発表会、秋田大学、2012年3月3日

高倉浩樹「The local conceptualization of river ice thawing and the spring flood of Lena River under the global warming」1st International Conference on “Global Warming and the Human-Nature Dimension in Siberia: Social Adaptation to the Changes of the Terrestrial Ecosystem, with an Emphasis on Water Environments”, 京都：総合地球環境学研究所、2012年3月8日

吉川泰弘、渡邊康玄、早川博、平井康幸：2010年2月に渚滑川で発生したアイスジャムに関する研究、土木学会、河川技術論文集、第17巻、pp.353-358、2011年7月（査読有）

橋場雅弘、吉川泰弘、渡邊 康玄：河川結氷時の河水底面形状の現地観測、土木学会北海道支部、年次技術研究発表会論文報告集、第68号、B-36、2012年2月（査読無）

〔図 書〕計（2）件

高倉浩樹・曾我亨『シベリアとアフリカの遊牧民』全201頁、東北大学出版会、2011年12月

高倉浩樹『極北の牧畜民サハ：進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌』昭和堂、2012年1月

〔その他の公表〕計（7）件

奥村誠「交通ネットワークの被害と復旧の状況」、東北大学による東日本大震災1ヶ月後緊急報告会、森トラスト、2011年4月13日

奥村誠「復興と交通」、日本都市計画学会東北支部連携学会震災報告会、エル・ソーラ・仙台、2011年5月7日

奥村誠「交通ネットワークの耐震化に関する研究」、東北アジア研究センター研究発表会、東北大学片平さくらホール、2011年8月10日

成果発表	奥村誠「東北交通ネットワークの被害と今後の課題－土木工学の立場から－」, 国際交通安全学会シンポジウム, 丸ビルホール, 2011年11月3日 奥村誠「東日本大震災後のガソリン途絶への対応行動」, 東北アジア研究センター公開講演会, 仙台復興記念館, 2012年12月3日 奥村誠「震災時の道路の機能とその評価について」, 建設コンサルタント協会東北支部講習会, ハーネル仙台, 2012年1月17日 奥村誠: 土木学会東北支部土木の日特別行事 (防災シンポジウム), コーディネーター, 2012年1月24日, ガーデンパレス仙台
共同研究の 全般的成果の アピール	2年目の共同研究にはいり、それぞれの専門分野での調査研究が本格化し、データの収集と分析が徐々に行われてきた点が特徴である。そのなかでも最も重要なのはシベリアを中心にして、人類学・リモートセンシング・河川工学の接点がより明確になりつつあることである。来年度はその交差を意識してこの領域のさらなる開拓をおこないたい。また北米側の事例についてもより詳細な民族誌的データを収集し、理系との連携分野の可能性を探りたい。
第三者による 評価・受賞・報 道など	

■ 東北アジア研究センター・共同研究報告書

研究 題 目	東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究			
研究 期 間	2011（平成 23）年度～2014（平成 26）年度（4 年間）			
研究 組 織	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	（代表者） 岡 洋樹	東北大学東北アジア 研究センター	井上治	島根県立大学総合政 策学部
	高倉浩樹	東北大学東北アジア 研究センター	馬紅梅	松山大学経済学部
	佐藤憲行	東北大学東北アジア 研究センター	雲和広	一橋大学経済研究所
	今村弘子	富山大学極東地域研 究センター	中村篤志	山形大学人文学部
	堀江典生	富山大学極東地域研 究センター	柳澤明	早稲田大学文学学術院
研究 経 費	（研究支援者、RA などの配置）1 名			
研究の目的と 本年度の成果 ならびに 研究成果の 重要性の概要	本研究は、ロシア・中国という二つの巨大国家の辺境としての特質を持つ東北アジアにおいて人の動きがもたらす地域社会再編を国際情勢が最も激しく変動した二つの時代で比較検討することにより、大国の利害が絡む辺境地域の共生のあり方を考察するプロジェクトである。ふたつの時代とは、19 世紀末から 20 世紀初頭におけるロシアと清の帝国統治崩壊期、20 世紀末から 21 世紀初頭における社会主義体制の崩壊と市場経済化の時期であり、大国の辺境において諸民族の国境を越えた移動が活発になった時期である。国境を越える人の移動に伴い、大国間の国際政治に揺れながら、地域住民の入植者・移民への反発・警戒、そして異質な入植者や移民を受け入れることで形成された新たな地域社会・コミュニティ構築のあり方などが模索された時期である。従来、共時的にしか捉えてこなかった東北アジアという辺境の地域社会・コミュニティ構築のあり方を通時的に捉え直し、東北アジアにおける社会的共生のあり方を考察する試みを、当該地域の歴史学、社会人類学、経済学を含む学際的態勢で取り組む。 本研究は、次の 3 点を明らかにしようとする。第一に人の移動に伴う不安が地域の反発と警戒をどのように引き起こしてきたのか、第二に入植者や移民をどのように包摂してきたかについて二つの変動期での比較検討をおこない、第三に社会的共生の時代間比較による相違点・類似点の解明と将来展望を検討する。本研究は総括班のもとで研究組織は 20 世紀初頭の第一変動期の外モンゴルにおける人口流動による社会秩序形成を研究する第一変動期研究班と、21 世紀初頭におけるシベリア及び中露国境地域における人口流動による社会秩序形成を研究する第二変動期研究班により組織する。それぞれ現地での文献・フィールド調査を実施するが、その際には現地研究機関の協力を得る。 本年度は、研究分担者がそれぞれ対象とする時期と地域について、現地での資料調査・現地フィールド調査を実施した。			
成果を公表する URL				

東北アジア 地域研究 としての 意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 本研究は、19世紀末～20世紀初頭と、20世紀末～21世紀初頭の二つの時期を、東北アジア規模における変動期として捉え、歴史的研究と現在的研究を行うことを目的としている。対象地域は、変動が生じた場によって第一変動期は中国・モンゴルを中心とし、第二変動期はロシアを中心とした組み立てとなっている。このように、本研究は東北アジアという地域枠組を強く意識したものである。 東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕 〈対象とした国・地域など〉 ロシア、モンゴル、中国 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください ロシア、中国、モンゴルの変動期における動向を東北アジア大の視野を確保しながら研究することによって、地域社会のさまざまな動向を、東北アジア地域の課題として把握しようとする点で、東北アジア地域研究の研究枠組みとしての有効性を導き出そうとしている。共同研究では、19世紀末～20世紀初頭を第一変動期、20世紀末～21世紀初頭を第二変動期として捉えているが、これらはいずれも第一変動期では清朝と帝政ロシア、第二変動期では中国・ソ連という広域の巨大国家の統治の変容・解体という特色を共有している。このことは、東北アジア地域を理解する上で、広域国家の変容という視点が不可欠であることを示している。かかる視野を確保した上で、本共同研究は現地地域社会に焦点を当てたミクロな調査研究を実施している。第一変動期に関しては、清朝統治の弛緩によって生じた中国からの人口流出が、流出先のモンゴル高原で発生せしめた流動的状況や、カザフなどの民族移動の様相が取り上げられる。第二変動期では、ソ連社会主義体制の解体と中国の改革・開放政策による市場経済への移行がもたらす人口流動によって、シベリア、極東に生じた経済的諸条件や社会構成の変化を取り上げて調査研究を進めている。このようなアプローチは、地域の現場のミクロな状況を、東北アジア大のマクロな視野のもとに位置づけることを目指すものであり、東北アジア研究に方法的・実証的な基礎を打ち立てるものと言える。
新 規 性	新規性の有無〔有〕 〈新規性の内容〉 東北アジアの二つの変動期を一つの研究枠組において捉え、かつ変動の様相をミクロな地域において実体的に捉えようとするところに方法的新規性がある。
学 際 性	文理融合型の研究か〔いいえ〕 文系・理系での学際性・連携性の有無〔無〕 歴史学（東洋史）、経済学、文化人類学など

専門性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉東洋史 〈内容〉 東洋史分野においては、清末の変動期に生じた人口流動による変動を、帝国統治の弛緩・解体や新たな地域秩序の形成という観点から位置づけ、かつこれを第二変動期において進行中の現在の様相と比較検討しうる点に意義がある。また第二変動期を扱う経済学・社会人類学分野においては、現実に行進しつつある事象に関して、地域の現場における様相を具体的に解明しうる点に意義があると同時に、第一変動期の諸様相との比較において現在を位置づけることが可能となる点に専門的な面での意義がある。
国際性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕 〈国名・研究機関名〉 モンゴル国・モンゴル科学アカデミー歴史研究所 中国・内モンゴル師範大学蒙古学研究院 ロシア・科学アカデミー・シベリア支部 国外の研究者の参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属・参加形態〉 研究分担という形での参加はないが、調査・研究に際して大きな支援を得ている。これは、これまで分担者が構築してきた海外との研究ネットワークを十全に活用したものである。また研究終了までに開催するシンポジウムには、現地からの参加を予定している。 学術交流協定活用の有無〔有〕 〈協定の名称〉 大学間学術交流協定： ロシア科学アカデミー・シベリア支部、モンゴル科学アカデミー 部局間学術交流協定： 内蒙古師範大学旅游学院、同蒙古学学院、内蒙古大学蒙古学学院、ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方先住民族研究所 外国語による成果公表の有無〔有〕 〈言語〉 英語・ロシア語
教育上の効果	学生の参加による教育上の効果〔無〕 ポスドクの活用の有無〔有〕 〈活用形態〉 本共同研究を運営するプロジェクト研究ユニット「21世紀東北アジア地域像の構築に関する研究ユニット」に配置された教育研究支援者1名を活用している。
社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔いいえ〕 社会への成果還元の有無〔無〕 〈還元の形態〉 研究分担者より、一般向けの書籍を刊行している。
学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔無〕 学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕

他組織との連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔無〕 〈連携組織名〉 富山大学極東地域研究センター 島根県立大学北東アジア地域研究センター 〈連携の形態〉 共同研究への参加、調査・研究の実施 両組織とは部局間学術交流協定を締結 国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属〉 松山大学経済学部 一橋大学経済研究所 早稲田大学教育・総合科学学術院 山形大学人文学部
資金	科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額 5600 千円〕
成果発表	研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと） 研究会〔 回〕 公開の会議・シンポジウム〔 回〕 国際会議〔 回〕 論文・著書 以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。 〔雑誌論文〕計（11）件 〔学会発表〕計（12）件 〔図 書〕計（1）件 〔その他の公表〕計（ ）件 岡洋樹 1. 本年度の調査：調査地、調査期間、調査内容 モンゴル（ウランバートル）、2012 年 3 月 8 日～19 日、国立アーカイブで清末モンゴル北部国境地帯に関する文書史料の調査 2. 本科研費に関わる論文・研究発表 内蒙古師範大学「庆祝内蒙古师范大学建校六十周年蒙古学研究系列学术活动蒙古历史文化研讨会」2012 年 3 月 6 日「关于清代蒙古基层社会研究相关问题」 井上治 1. 本年度の調査：調査地、調査期間、調査内容 (1) モンゴル（ウランバートル、バヤンウルギー）、20110905-20110914、国立アーカイブで清代カザフ関連公文書資料の調査とバヤンウルギー県ウルギー市と同県アルタンツグツ郡でのインタビュー調査 (2) モンゴル（ウランバートル）、20111219-20120108、国立アーカイブで清代カザフ関連公文書資料の調査とウランバートル在住カザフ人へのインタビュー 2. 本科研費に関わる論文・研究発表 北東アジア研究会第 3 回例会、2001 年 11 月 17 日、「モンゴル人とムスリムとの共生関係」

成果発表

中村篤志

1. 本年度の調査：調査地、調査期間、調査内容
3月15日～16日：北京、民族大などでの史料収集
2. 本科研費に関わる論文・研究発表
論文：「清朝治下モンゴル社会におけるソムをめぐる～ハルハ・トシェートハン部左翼後旗を事例として」東洋学報 93-3, pp.1-25, 2011, 12
研究発表：「清朝宮城空間とモンゴル王公」近世東アジア比較都城史研究会第4回、平成23（2011）年6月25, 26日 於：山形大学人文学部

柳澤明

1. 本年度の調査：調査地、調査期間、調査内容
3月：モンゴル国立中央アルヒーヴで清代文書調査

堀江典生

1. 本年度の調査：調査地、調査期間、調査内容
調査地：タジキスタン、調査期間：11月22日～12月3日
調査内容：ロシアへの移民送出地域の変容を小規模村落において調査するために、タジキスタンのソグド州の農村においてインタビュー調査を行うとともに、現地で文献収集を行った。
2. 本科研費に関わる論文・研究発表
堀江典生・V. レイマー (2011.10) 「アムール州に見る中ロ経済関係：強まる中国依存に活路はあるか？」『ERINA REPORT』No.102, pp. 14-25.

研究発表

堀江典生、2012.3、「ロシア極東地域農業開発にみる共生の期待と不安」、シンポジウム「中ロ国境地域：共生への期待と不安」、富山大学。

今村弘子

1. 本年度の調査：調査地、調査期間、調査内容
2011年8月7日～12日 中国（ハルビン、瀋陽） 黒竜江社会科学院、遼寧社会科学院、黒竜江省世興貿易有限公司にてヒアリング
2011年11月22日～26日 中国（北京、延吉） 中国社会科学院、北京大学、中国国際問題研究所、延辺大学にてヒアリング
2. 本科研費に関わる論文・研究発表
「中露の経済交流」を「東アジア共生学創成プロジェクト」にて発表

雲 和広

1. 本年度の調査：調査地、調査期間、調査内容
(1)
2012.2.27-3.7. ペテルブルク・モスクワ（ロシア連邦）. ロシアにおける家計内分業と出生行動の分析.（予定）
2011.11.24-12.2. モスクワ（ロシア連邦）・フジャンド（タジキスタン）. World Value Surveys による価値観の決定要因分析, タジク労働移民の海外送金と家計所得との関係の分析.
2011.9.4-8. ウラジオストク・ハバロフスク（ロシア連邦）. ロシアにおける出生率の決定要因とロシア極東地域における人口動態の特質の分析.
2011.8.26-29. 北京（中華人民共和国）. ロシアにおける出生率の決定要因分析.

成果発表

2011.7.28-8.23. モスクワ・エカテリンブルク・ペテルブルク・モスクワ（ロシア連邦）. ロシアにおける出生率の決定要因分析と将来人口予測.

2. 本科研費に関わる論文・研究発表

著書（単著）

『ロシアの人口問題 — 人が減りつづける社会 — 』, 東洋書店 ユーラシア・ブックレット No.167, 2011 年 10 月.

査読付学術論文

1. Demographic Situations and Development Programs in the Russian Far East and Zabaikalye, in Studies on Russia: Time and Space of Risks and Opportunities, Kyong-Wan Lee et al. eds., LIT-Verlag, to be published in 2012.
2. Tajik Labor Migrants and Their Remittances: Is Tajik Migration Pro-Poor?, Post-Communist Economies, vol.24, no.1, February 2012, pp.87-109.
3. 「ロシア長期家計モニタリング調査（Russia Longitudinal Monitoring Survey）からみた居住環境と住宅政策の問題」, 『ロシア・ユーラシアの経済と社会』, 第 952 号, 2011 年 12 月, pp.2-22. （道上真有との共著）
4. 「タジキスタンの国際労働移民と海外送金：タジク移民は貧困削減に親和的か？」, 『経済研究』, 第 62 巻第 2 号, 2011 年 4 月, pp.113-128.

招待論文及び書籍分担執筆

1. Голоса женщин: гендерные исследование в Таджикистане (Women's Voices: Gender Survey in Tajikistan) // Миграционный мост между Центральной Азией и Россией (Migration Bridge between the Central Asia and Russia), Рязанцев, С.В. и Каримов, О.К. ред., Москва, Экон-информ, Oct.31, 2011, стр. 222-230. （五十嵐徳子との共著）
2. Таджикские трудовые мигранты и их денежные переводы (Tajik Labor Migrants and Their Remittances) // Миграционный мост между Центральной Азией и Россией, Рязанцев, С.В. и Каримов, О.К. ред., Москва, Экон-информ, Oct. 31, 2011, стр. 308-315.

Working Papers

1. 「ロシアの死亡動態再考：サーベイ」, Russian Research Center Working Paper No.35, January 2012.
2. 「タジキスタンのジェンダー状況 — タジク女性の声：タジキスタンミクロサーベイより — 」, Discussion Paper A-554, Institute of Economic Research, Hitotsubashi University, Tokyo, October 2011. （五十嵐徳子との共著）

学会・学術研究集会報告

(* denotes invited speeches: airfare or accomodation or both were born by the external [non-Japanese] organizer[s]) *1. Таджикские трудовые мигранты и их денежные переводы, The 3rd International Symposium "A Role of Migration in Modernization and Innovative Development of Economy of the Countries Sending and Accepting Migrants" (Invited Speech), Khujand, Tajikistan, Nov 28, 2011.

*2. Tajik Labor Migrants and Their Remittances: Is Tajik Migration Pro-Poor? Comparative Sociology in Quantitative Perspective,

成果発表	Reporting Conference of the Laboratory for Comparative Social Research, Higher School of Economics, Moscow, Russia (Invited Speech), Nov 25, 2011. 3. Tajik Labor Migrants and Their Remittances: Is Tajik Migration Pro-Poor?, Association for Slavic, East European and Eurasian Studies, Omni Hotel Washington DC, US, Nov 20, 2011. 4. 「ロシアの人口問題：人が減りつづける社会」, 比較経済体制学会第10回秋期大会, 一橋大学, 2011年10月8日. 5. 「ロシアにおける出生規定要因・マイクロデータによる接近」, 比較経済体制学会第51回全国大会, 神戸大学, 神戸, 2011年6月5日. 6. "Tajik Labor Migrants and Their Remittances: Is Tajik Migration Pro Poor?", 比較経済体制学会第51回全国大会, 神戸大学, 神戸, 2011年6月5日. *7. "Tajik Labor Migrants and Their Remittances: Is Tajik Migration Pro Poor?", 2011 WCU Young Researchers' Workshop on Economic Transition and Development, Seoul National University, Seoul, Korea (Invited Speech), May 20, 2011. 馬紅梅 1. 本年度の調査：調査地、調査期間、調査内容 3月13日～25日、中国哈爾浜、黒河、綏芬河、煙台、ロシア・ブラゴヴェシチェンスクでの貿易、投資、労務関係と旅行関係の調査
共同研究の 全般的成果の アピール	科学研究費補助金基盤研究(A)（研究期間：平成23～25年度）により、平成23年度から調査研究を開始している。本年度は初年度で、研究態勢の構築の年として位置づけ、研究分担者がそれぞれのフィールドにおいて現地協力機関の支援を確保しつつ、現地でのフィールド調査を行った。この内、第一変動期班は、モンゴル国立歴史中央アルヒーフにおいて調査を実施し、第二変動期班はロシア、中国でのフィールド調査を実施している。各研究分担者がこれまで独自に実施してきた研究成果を基礎として、内陸アジア辺境における変動の様相を現地に即して解明する作業を進めている。
第三者による 評価・受賞・報 道など	特になし

■ 東北アジア研究センター・共同研究報告書

研究 題 目	東日本大震災の被災地における民俗文化の復興をめぐる地方行政とその支援にかかわる方法論の探求			
研究 期 間	2011（平成 23）年度～2013（平成 25）年度（2 年間）			
研究 組 織	氏 名	所 属	氏 名	所 属
	(代表者) 高倉浩樹 政岡 伸洋 小谷 竜介 赤嶺 淳 植田 今日子 岡田 浩樹	本センター准教授 東北学院大学教授 宮城県文化財保護課 名古屋市立大学人文学部准教授 東北学院大学教養学部講師 神戸大学国際文化研究科教授	金菱 清 木村 敏明 滝澤 克彦 林 勲男 山口 未花子 山口 睦	東北学院大学教養学部講師 本学文学研究科准教授 本学文学研究科専門研究員 国立民族学博物館教授 本センター教育研究支援者 本センター専門研究員
研究 経 費	(配布金額) 30 万円 (その他の主たる外部資金) 宮城県委託調査 626.6 万円			
研究の目的と 本年度の成果 ならびに 研究成果の 重要性の概要	本研究は、東日本大震災での被災した無形民俗文化財に対する地方行政の復興政策を把握するとともに、人類学・民俗学分野によるこれに対して支援について探求するのが目的である。 具体的には、宮城県文化財保護課が中心となって宮城県沿岸部の津波被災地を対象にした無形民俗文化財の被災実態およびその復興の可能性に関わる調査を委託事業として引き受け、その事業を行う中で、地方行政の文化振興政策のあり方、およびこれに対する人類学分野の支援の方法の探求をおこなうという手順で調査を進めていく事となった。 研究組織のメンバーを中心に、さらに関連分野の研究者に呼び掛ける形で調査チームを作成し、11 月から 2 月の間に、宮城県沿岸部の 20 の地区の調査を行い、おおむね 80 人からの聞き取りを行った。その対象者は何らかの形で震災前に無形民俗文化財の伝承・発展に関わっていた人々である。これらを通して、津波被災地における無形民俗文化財の被災状況の全体像を把握する事ができた。また、無形民俗文化財に対する地方行政の関わりとそのネットワークの仕組みについても一定の知見を得る事ができた。			
成果を公表する URL		http://www.cneas.tohoku.ac.jp/staff/takakura2/shinsai/home.html		

東北アジア 地域研究 としての 意義	東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕 〈位置づけの内容〉 日本の民俗文化の研究 東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕 〈対象とした国・地域など〉 日本 東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください 東日本大震災の被災地において民俗芸能などの無形民俗文化財がどのようなかたちで残っているのか、地域社会の復興にどのような役割を果たせるのか、悉皆調査のようなかたちで宮城県沿岸部についての情報を収集している。
新規性	新規性の有無〔有〕 〈新規性の内容〉 人類学的地域研究において震災研究を組み込んだ点。
学際性	文理融合型の研究か〔いいえ〕 文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕 〈参加した専門分野〉文化人類学、日本民俗学、環境社会学
専門性	専門分野内部での意義 〈専門分野名〉文化人類学 〈内容〉 日本民俗学や環境社会学など質的なフィールド調査を行う分野と合同で調査をおこない、災害研究における新たな方法論の開拓を行っている。
国際性	国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔無〕 国外の研究者の参加の有無〔無〕 学術交流協定活用の有無〔無〕 外国語による成果公表の有無〔無〕
教育上の 効果	学生の参加による教育上の効果〔有〕 〈参加学生の所属〉 文学部、文学研究科、環境科学研究科、東北学院大学文学部 ポスドクの活用の有無〔有〕 〈活用形態〉共同研究員
社会還元	社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕 〈内容〉 地域社会における民俗文化の振興、地域文化振興 社会への成果還元の有無〔無〕 〈還元の形態〉 まだ途中のため

学内連携	学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕 〈連携部局名〉 文学研究科 学内他部局教員の研究への参加の有無〔有〕 〈参加教員の所属〉 文学研究科
他組織との連携	国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕 〈連携組織名〉 宮城県 〈連携の形態〉 委託調査 国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕 〈参加研究者の所属〉 東北学院大学、神戸大学、名古屋市立大学、宮城県、共同研究
資金	センター長裁量経費〔金額 30 万円〕 その他〔資金名：宮城委託調査 626.6 万円〕
成果発表	研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと） 研究会〔1 回〕 公開の会議・シンポジウム〔 回〕 国際会議〔 回〕 第一回全体会議 日時 2011 年 11 月 3 日（木曜・祝日） 午後 2 時から 6 時 場所 東北大学文学部 2 階 大会議室 http://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/about/10/about1003/ (22 番の建物) 番組構成 1 趣旨説明 2 自己紹介 3 研究組織と体制 4 調査の方法と成果報告のまとめについての自由討論 論文・著書 以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。 〔雑誌論文〕計（ ）件 〔学会発表〕計（ ）件 〔図 書〕計（ ）件 〔その他の公表〕計（ ）件

共同研究の 全般的成果の アピール	2011 年度の調査は年度末までに 300 頁近くの報告集として刊行した。
第三者による 評価・受賞・報 道など	特になし

(B) 過去に実施した共同研究・プロジェクト一覧

- 中国・モンゴルにおける精神文化と環境の相互作用に関する研究
(1996 年度～ 1997 年度、代表者：瀬川昌久)
- 近代化過程における東北アジア諸地域の変容の諸問題
(1996 年度～ 1998 年度、代表者：吉田忠)
- 東北アジア地域における歴史・文化的背景および経済・技術的変遷からみた環境問題
(1996 年度～ 1999 年度、代表者：宮本和明)
- 日本における北方交流史料の調査と分析
(1996 年度～ 1999 年度、代表者：入間田宣夫)
- 東北アジアにおける交易拠点の比較研究
(1997 年度～ 1999 年度、代表者：山田勝芳)
- 東北アジア研究のためのデータベース構築とシベリア・東北大学衛星ネットワーク利用についての研究
(1997 年度～ 2001 年度、代表者：佐藤源之)
- 東北アジアにおける関帝信仰の歴史的現在の研究
(1997 年度～ 1999 年度、代表者：山田勝芳)
- 東アジア出版文化史を通して見る社会変容の研究
(1997 年度～ 1999 年度、代表者：磯部彰)
- 東アジアの儀礼・芸能における身体と社会の表象
(1997 年度～ 1999 年度、代表者：成澤勝)
- モンゴルの草原に関する総合研究
(1999 年度～ 2000 年度、代表者：岡洋樹)
- 文化のディスプレイと伝統の再編
(1999 年度～ 2000 年度、代表者：瀬川昌久)
- 古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証
(1999 年度～ 2001 年度、代表者：成澤勝)
- ノア・データの利用による東北アジアの環境変動解析とデータベース作成に関する学際的研究
(2000 年度～ 2005 年度、代表者：山田勝芳)
- 中国東北部白頭山の 10 世紀巨大噴火とその歴史効果
(2000 年度～ 2002 年度、代表者：谷口宏充)
- 東北アジアにおける民族移動と文化の変遷
(2000 年度～ 2001 年度、代表者：徳田昌則)
- 東アジア出版文化の研究
(2000 年度～ 2004 年度、代表者：磯部 彰)
- 日露・日ソ関係に関する史的研究
(2000 年度～ 2002 年度、代表者：平川新)

- 東北アジアにおける計量地域研究のための基盤整備
(2001 年度～ 2003 年度、代表者：宮本和明)
- 東北アジアにおける民族の跨境生態史の研究
(2001 年度～ 2002 年度、代表者：柳田賢二)
- 北アジアの環境・文化・歴史に関する総合的研究
(2001 年度～ 2005 年度、代表者：岡洋樹)
- 西シベリア塩性湖チャーニー湖沼群の環境と生物群集に関する研究
(2001 年度～ 2003 年度、代表者：菊地永佑)
- ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究
(2001 年度～ 2002 年度、代表者：高倉浩樹)
- 図們江沿流居民生活誌の通時的共時的研究
(2002 年度～ 2004 年度、代表者：上野稔弘)
- 海南島の地方文化に関する文化人類学的研究
(2002 年度～ 2004 年度、代表者：瀬川昌久)
- 現代韓国及び周辺同胞社会に見る伝統構造・社会動態と民族自我
(2002 年度～ 2004 年度、代表者：成澤勝)
- 図們江沿流域居民生活誌の通時的共時的研究
(2002 年度～ 2005 年度、代表者：上野稔弘)
- モンゴル語資料の文献学的研究
(2003 年度～ 2005 年度、代表者：栗林均)
- 白頭山東部における 10 世紀巨大噴火と遼・高麗王朝への歴史的影響
(2004 年度～ 2005 年度、代表者：谷口宏充)
- 江戸東京博物館における東アジア文化展企画研究
(2005 年度～ 2006 年度、代表者：磯部彰)
- 西シベリア塩性湖チャーニー湖沼群の環境と生物群集に関する研究
(2001 年度～ 2006 年度、代表者：菊地永祐)
- 前近代における日露交流資料の研究
(2000 年度～ 2006 年度、代表者：平川新)
- 東北アジア地域史におけるモンゴルの歴史的位相に関する研究
(2005 年度～ 2007 年度、代表：岡洋樹)
- 東アジア出版文化の総合研究
(2005 年度～ 2007 年度、代表：磯部彰)
- 近未来の宮城県沖地震に備えた歴史資料保存のための調査研究事業
(2005 年度～ 2007 年度、代表：平川新)

- 東北アジアにおけるユートピア思想と地域の在り方
(2005 年度～ 2007 年度、代表：山田勝芳)
- 東北アジア地域ノア画像データベース構築と文系分野への利用研究
(2005 年度～ 2007 年度、代表：工藤純一)
- 東北アジア地域史におけるモンゴルの歴史的位相に関する研究
(2005 年度～ 2007 年度、代表：岡洋樹)
- 旧ソ連を中心とするポスト社会主義世界におけるマイノリティ・ビジネスの展開と私的所有観生成についての学際的研究
(2006 年度～ 2008 年度・高倉浩樹)
- 数理地理モデルによる東北アジア地域の土地利用形態の比較分析
(2006 年度～ 2008 年度・奥村誠)
- 白頭山の火山危機に関する日中韓 3 ヶ国共同研究
(2007 年度～ 2009 年度・谷口宏充)
- 湖沼沿岸生態系植物網の解析的研究
(2008 年度～ 2010 年度・鹿野秀一)
- 西シベリア塩性湖チャニー湖における高次消費者を中心とした生態系解析
(2007 年度～ 2009 年度・鹿野秀一)
- 旧ソ連圏アジア地域の学術・教育におけるアイデンティティ再構築に関する研究
(2007 年度～ 2009 年度・岡洋樹)
- 二十世紀の東北アジアをめぐる中国、ロシア史の課題と展望
(2007 年度～ 2010 年度・寺山恭輔)
- 北アジアにおける帝国統治とその遺産に関する研究
(2007 ～ 2011 年度・岡洋樹)
- 客家研究の総括と展望
(2010 ～ 2011 年度・瀬川昌久)
- 地域社会の人材としての「外国人花嫁」の共同調査
(2010 ～ 2011 年度・瀬川昌久：移民ユニット)
- 仙台藩重臣遠藤家文書の調査研究
(2010 ～ 2011 年度・平川新：歴史資料ユニット)
- 大籠村首藤家文書の調査研究
(2010 ～ 2011 年度・平川新：歴史資料ユニット)
- 東アジア近世社会における出版文化の意義
(2010 ～ 2012 年度・磯部彰：東アジア出版文化ユニット)
- 展示実践を通じた北方人類学における社会還元の可能性の探求
(2010 ～ 2011 年度・高倉浩樹：シベリア生態ユニット)

- ・氷融洪水とその社会的反応からみる極北圏地域社会の比較研究

(2010 ～ 2012 年度・高倉浩樹：シベリア生態ユニット)

(3) 研究紹介発表

東北アジア研究センターでは、センター教員の研究を相互に理解し関連情報を交換するために、毎月1回1人ずつ（持ち時間20分）、センター全体会議（構成員は教授、准教授、助教、助手、研究機関研究員）の開催前にセンター教員による各自の研究紹介をおこなっている。また8月10日には、2010年度のプロジェクト研究ユニットの活動報告会とミニ・シンポジウム「災害を乗り越える：東北アジアのアプローチ」を開催した。

以下は、本年度の具体的な後援者、タイトルなどである。

東北アジア研究センター研究報告会

2011年8月10日（水） 10：30～16：30 片平さくらホール 2F

午前の部 2010年度プロジェクト研究ユニット活動報告

- ・北アジア戦略データベース構築研究ユニット（H19-22、2007-2010 工藤 純一）
- ・東アジアにおける移民の比較研究ユニット（H20-23、2008-2011 瀬川 昌久）
- ・東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット（H22-24、2010-2012 栗林 均）
- ・「東アジア出版文化」研究ユニット（H22-24、2000-2012 磯部 彰）
- ・21世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究（H21 - 27、2009-2015 岡洋樹）

午後の部 ミニ・シンポジウム「災害を乗り越える：東北アジアのアプローチ」

- ・被災文化財の調査と保存（平川 新）
歴史資料保全のための地域連携研究ユニット（H19-23、2007-2011 平川 新）の活動報告
- ・東シベリアレナ川中流域の洪水と人間社会の反応（高倉浩樹）
シベリアにおける人類生態と社会技術の相互研究ユニット（H21-25、2009-2013 高倉浩樹）の活動報告
- ・電磁波による環境計測技術と災害への応用（佐藤源之）
リモートセンシング研究ユニット（H19-23、2007-2011 佐藤源之）の活動報告
- ・交通ネットワークの耐震化に関する研究（奥村 誠）
- ・複数の地震における墓石転倒率の調査から見えてくるもの（石渡 明）

センター会議後の研究紹介

2011年

5月23日（月）

講演者：金 旭（吉林大学教授、センター外国人研究員）

「吉林大学の研究活動の紹介」

6月27日（月）

講演者：高倉浩樹（センター准教授）

「震災時の東北大学人の行動聞き取り調査」

講演者：石渡明（センター教授）

「放射線量の測定結果について」

7月19日（月）

講演者：ハスバートル（黒竜江大学教授、センター客員教授）

「宗教名称 saman（シャーマン）の語源」

10月24日（月）

講演者：スチンバト（センター教育研究支援者）

「三合語録の満州文字表記モンゴル語の研究」

11月28日（月）

講演者：スチンバートル（内蒙古大学教授、センター客員教授）

「モンゴル語辞書の歴史分期問題に関する研究」

12月26日（月）

講演者：大窪和明（センター助教）

「震災時のガソリン購入行動に関する研究」

2012 年

1月23日（月）

講演者：山口未花子（センター教育研究支援者）

「カナダ先住民カスカの自然誌－調査地での経験的観察を通じて」

3月26日（月）

講演者：ジャルガラン・セレーネン（モンゴル科学技術大学教授、センター客員教授）

「モンゴルにおけるオフィオライトの岩石学的及び鉱床学的研究」

(4) 学術協定

(A) 学術協定による海外の学術機関等との連携強化

本学中期計画は、「国際化に関する目標を達成するための措置」として、「国際的ネットワークの形成・展開」（中期計画4頁）を唱っているが、本センターは、主として東北アジア諸国の研究・教育機関との研究交流を行う態勢を構築している。

センターは、大学間学術交流協定や部局間学術交流協定を国内外の研究教育機関と締結し、東北アジア地域研究を遂行するための国際的な研究者連携ネットワークの構

築を進めてきた。締結機関及び締結年月日は表に示した通りである。

平成 23 年度は、9 月に内蒙古師範大学旅游学院との部局間協定が締結されている。

締結年月日	相手国機関名
1992. 8. 10	★ロシア科学アカデミー・シベリア支部
1998. 11. 9	☆タイアジア工科大学院
1999. 1. 12	☆アメリカアラスカ大学
2000. 8. 21	★モンゴル科学アカデミー
2000. 10. 2	◆モンゴル科学技術大学ジオサイエンスセンター
2001. 3. 1	☆中国吉林大学
2001. 6. 25	◆中国広東省民族研究所
2001. 11. 16	★モンゴル科学技術大学
2002. 10. 1	◆ロシア科学アカデミーシベリア支部 V.N. スカフ森林研究所
2002. 10. 1	◆ロシア連邦ユゴラ情報技術研究所
2003. 7. 4	★ロシア連邦ノボシビルスク国立大学
2005. 9. 1	◆ロシア科学アカデミー極東支部経済研究所
2005. 10. 10	◆ロシア連邦 IFTI（国際技術投資振興財団）
2007. 3. 26	◆ロシア連邦サハ共和国科学アカデミー人文科学研究所
2008. 4. 1	◆中国内蒙古師範大学蒙古学学院
2008. 4. 25	◆韓国高麗大学校中国学研究所
2008. 4. 25	◆韓国高麗大学校日本学研究センター
2008. 9. 22	◆中国内蒙古大学蒙古学学院
2009. 8. 21	★イタリアフィレンツェ大学
2009. 9. 30	◆ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所
2011. 3. 1	★中国吉林大学
2011. 9. 28	◆内蒙古師範大学旅游学院

◆部局間協定 ★センターが世話部局となった大学間協定 ☆センターが協力部局となった大学間協定

(B) 共同ラボによる国際的研究支援

ロシア・ノボシビルスクのアカデムゴロドク内で 10 年間に亘り活動してきた東北大学リエゾンオフィス（日本館）は、ロシア連邦法改正の影響により平成 20 年からロシア科学アカデミーシベリア支部（以下 SB RAS）との共同運営体制となった。SB RAS エキシビジョンセンター内に設置された共同ラボには、ロシア人非常勤スタッフが配属され、東北アジア研究センター海外連携室および東北大学ロシア交流推進室と連携して機能している。なお、共同ラボと同じオフィス内に東北大学ロシア代表事務所シベリア支部を開設するため、平成 22 年 9 月には東北大学井上明久総長がノボシビルスクを訪問している。これにより今後は東北大学と SB RAS の交流にとどまらず、日露の高等教育機関間の交流拠点として更なる活動が期待されることとなった。

共同ラボを通じた活動としては訪問講座「日本とアジア」などが挙げられる。センターが主体となりノボシビルスク国立大学東洋学部との合意のもと、平成 20 年度か

ら五年間の予定で実施されている。23 年度は 9 月 21・22 日の両日、講師による講演とロシア人学生による研究発表会が行われた。日本側の参加者および講義テーマは以下である：

参加者：岡洋樹（センター副センター長）

高倉浩樹（センター准教授）

徳田由佳子（センター助手）

佐藤勢紀子（高等教育開発センター教授）

講義テーマ「源氏物語と仏教思想 — 主要人物の人世解釈をめぐって —」

本年度は、講座の開催にあわせて東北大学総長特別補佐木島明博教授と国際教育院ザンペイソフ・ノルボシン准教授がノヴォシビルスクを訪問し、東北大学の紹介を行っている。

またノヴォシビルスク国立大学側も、20 日午後に津波に関するセミナーを開催し、三人の教授による報告が行われている。なお、訪問講座の成果報告書は東北アジア研究センターのホームページに掲載されている。

また、センターでは共同ラボを通じ、主にロシア・シベリアで刊行される文献・資料収集も継続して行われている。

(5) 研究成果公開

(A) 既刊の刊行物

・『東北アジア研究』

東北アジア研究センターが主催する東北アジア地域研究のための学術雑誌。

第 1 号（1997）～ 第 15 号（2011）

<第 16 号>目次

〔論文〕

●日露関係から見た伊藤博文暗殺：両国関係の危機と克服

麻田雅文

●キリル文字正書法確立前のモンゴル語口語辞典の表記について

角道正佳

●梁啓超における中国国家体制の構想：「自治」と「聯邦制」を手がかりに

朱 琳

- 内モンゴルのシャマニズムにおける成巫過程と治療儀礼：東部ホルチン地域のシャマニズム的治療の事例研究
財吉拉胡
- 「大名評判記」における仙台藩伊達家の記述について
蝦名裕一
- 近代モンゴル語辞典の成立過程：清文鑑から『蒙漢字典』へ
栗林 均
- 政府庇護下の日本の農協：仙台秋保町の人類学調査
李 晶
- 清代ハラチン・モンゴルの右翼旗における裁判
額定其勞
- 氏姓のポリティクス：現代中国における文化資源としての族譜とその活用
瀬川昌久
- 内モンゴル自治運動と太平洋戦争期における日本の対内モンゴル政策について：「日華同盟条約」を中心に
ガンバガナ
- The Black Book of the Holy Chingis Khan: Remarks on a 19th Century Mongolian Folklore Source
BIRTALAN, Ágnes
- 清代内府“九九大慶”戲研究：以北京大學圖書館藏《九九大慶》為例
熊 靜

・『東北アジア研究シリーズ』（和文）

1. 平川新編「シンポジウム 変動するアジアと地域研究の課題」（2001）
2. 成澤勝編「公開シンポジウム 21世紀東北アジアの安定と繁栄に果たす日韓の役割」（2001）
3. 朝 克著、丸山宏／上野稔弘編訳「共同研究 ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証 研究集会発表再構成 ツングースの民族と言語」（2002）
4. 岡洋樹／高倉浩樹編「東北アジア地域論の可能性 歴史学・言語学・人類学・政治経済学からの視座（東北アジア地域研究シンポジウム報告集）」（2002）
5. 岡洋樹／高倉浩樹／上野稔弘編「東北アジアにおける民族と政治（東北アジア地域研究シンポジウム報告集）」（2003）
6. 瀬川昌久編「『中国研究』の可能性と課題（東北アジア地域研究シンポジウム報告集）」（2005）

7. 寺山恭輔編「開国以前の日露関係（東北アジア地域研究シンポジウム報告集）」（2006）
8. 明日香壽川編「地域協力から見えてくる地球温暖化」（2007）
9. 高倉浩樹編 地域分析と技術移転の接点：「はまる」「みる」「うごかす」視点と地域理解（2007）
10. 岡洋樹編「内なる他者＝周辺民族の自己認識のなかの「中国」― モンゴルと華南の視座から ―」（2009）
11. 塩谷昌史編「帝国の貿易 18～19世紀におけるユーラシアの流通とキャフタ」（2009）

•『東北アジア研究シリーズ』（英文）

1. 吉田忠／岡洋樹編「東北アジア諸国の変容の諸相」（1998）
2. 寺山恭輔編「ロシアと日本 ― 歴史研究 ―」（1998）
3. 岡洋樹編「東北アジア諸国の変容の諸相Ⅱ」（1998）
4. 寺山恭輔「高温超伝導：新たな物質とその物性」（1999）
5. 工藤純一／山田勝芳編「地球変化に関する国際ワークショップ：ノアから見たシベリア」（2001）
6. 高倉浩樹編「ヤクーチアにおける民俗生態学的実践と文化の伝統」（2003）
7. 岡洋樹編「モンゴル 歴史と民族の諸問題」（2004）
8. 宮本和明編「東北アジアにおける計量地域研究のための基盤整備」（2005）
9. 岡洋樹／オーホノイ・バトサイハン編「1911年モンゴル民族革命の前提条件と国際情勢（モンゴル語）」（2006）
10. Ch. ダシダワー／岡洋樹編「モンゴル史研究の新動向、当面する課題（17～20世紀初頭）（モンゴル語）」（2009）
11. フロリアン・ステムラー／高倉浩樹編「食べるだけでなく、共に暮らすに適するもの ― 北方ユーラシアとアフリカにおける遊動民と動物」（2010）

•『東北アジア研究センター叢書』

1. 山田勝芳編「東北アジアにおける交易拠点の比較研究」（2001）
2. 田中継根編訳「レザーノフ編『露日辞書・露日会話帳』」（2001）
3. 成澤勝編「環中華の儀礼と芸能 ― 朝鮮を軸に ―」（2001）
4. 栗林均／精扎布編「『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引」（2001）
5. K. Litasov, H. Taniguchi, Mantle Evolution beneath the Baikal Rift（2002）
6. 岡洋樹編「モンゴル研究論集 東北大学東北アジア研究センター・モンゴル研究成果報告Ⅰ」（2002）

7. 宮本和明「東アジア3国における自動車保有・利用の実態と社会意識の調査研究 — 経済成長・自動車利用と環境の調和をめざして —」(2002)
8. 瀬川昌久編「文化のディスプレイ」(2003)
9. 磯部彰編「東北大学所蔵 豊後佐伯藩『以呂波分書目』の研究」(2003)
10. 栗林均編「『華夷訳語』(甲種本) モンゴル語全単語・語尾索引」(2003)
11. 鄭永振著, 成澤勝編「古ツングース諸族墳墓の比較研究」(2003)
12. A.A キリチェンコ編「シベリア抑留死亡者名簿」(2003)
13. 黒田卓／高倉浩樹／塩谷昌史編「中央ユーラシアにおける民族文化と歴史像」(2003)
14. 磯部彰編「明治大正期における根岸町子規庵の風景」(2003)
15. 平川新監修「『ロシア史料にみる 18~19 世紀の日露関係』 第一集」(2004)
16. 谷口宏充編「中国東北部白頭山 10 世紀巨大噴火とその歴史効果」(2004)
17. ニコライ・ツェレンピロフ編、ツィムジト・ワンチコワ監修「ロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究モモンゴル語写本・版本 MI コレクション注釈付目録」(2004)
18. S. G. Catane, H. Taniguchi, A. Goto, A. P. Givero and A. A. Mandanas, Explosive Volcanism in the Philippines. (2005)
19. 磯部彰編「慶應義塾図書館所蔵閩斎堂刊『新刻増補批評全像西遊記』の研究と資料 (上)」(2006)
20. 栗林均／呼日勒巴特爾編「『御製滿珠蒙古漢字三合切音清文鑑』 モンゴル語配列対照語彙」(2006)
21. S. V. Rasskazov and H. Taniguchi, Magmatic Response to the Late Phanerozoic Plate Subduction beneath East Asia (2006)
22. 山田勝芳／工藤純一編「ノア・データの利用による東北アジアの環境変動解析とデータベース作成に関する学際的研究」(2006)
23. 磯部彰編「慶應図書館閩斎堂刊 西遊記の研究と資料 (下)」(2006)
24. N. Tserempilov, “ANOTATED CATALOGUE of the collection of Mongolian manuscripts and xylographs MII of the Institute of Mongolian, Tibetan and Buddhist studies of Siberian Branch of Russian Academy of Sciences”, (2006)
25. 瀬川昌久編「海南島の地方文化に関する文化人類学的研究」(2007)
26. 平川新監修「ロシア史料にみる 18 ~ 19 世紀の日露関係 第2集」(2007)
27. 岡洋樹編「モンゴルの環境と変容する社会」(2007)
28. L. Kondrashov and J.Kudoh, “Monitoring of Vegetation Fires in Northeast Asia” (2008)

29. 磯部彰編「東北アジア研究センター蔵「新刻京本全像三国志伝（費守斎刊）」の研究と資料」（2008）
 30. 栗林均／呼日勒巴特尔編「『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』満洲語配列対照語彙」（2008）
 31. 平川新監修「ロシア史料にみる 18 ～ 19 世紀の日露関係 第 3 集」（2008）
 32. 寺山恭輔「1930 年代ソ連の対モンゴル政策 — 満洲事変からノモンハンへ —」（2009）
 33. 栗林均編「『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙」（2009）
 34. 李仁子／金谷美和編「自己言及的民族誌の可能性」（2009）
 35. 工藤純一「東北アジア地域ノア画像データベース構築と文系分野への利用研究報告書」（2009）
 36. 平川新監修、寺山恭輔／畠山禎／小野寺歌子編「ロシア史料にみる 18 ～ 19 世紀の日露関係 第 4 集」（2009）
 37. 栗林均編「『蒙文総彙』— モンゴル語ローマ字転写配列 —」（2010）
 38. 佐藤大介編「18 ～ 19 世紀仙台藩の災害と社会 別所万右衛門記録」（2010）
 39. 平川新監修、寺山恭輔／畠山禎／小野寺歌子編「ロシア史料にみる 18 ～ 19 世紀の日露関係 第 5 集」（2010）
 40. 磯部彰編「清初刊教派系宝卷二種の原典と解題 — 『普覆週流五十三参宝卷』と『姚秦三蔵西天取清解論』 —」（2010）
 41. 谷口宏充編「白頭山火山とその周辺地域の地球科学」（2010）
 42. 磯部彰編「高岡市立中央図書館蔵鄭雲林刊『全像三国志伝』原典と解題（上）」（2011）
 43. 瀧澤克彦編「ノマド化する宗教 浮遊する共同性 現代東北アジアにおける『救い』の位相」（2011）
 44. 磯部彰編「高岡市立中央図書館蔵鄭雲林刊『全像三国志伝』原典と解題（上）」（2011）
 45. 岡洋樹編「歴史の再定義 — 旧ソ連圏アジア諸国における歴史認識と学術・教育 —」（2011）
 46. 栗林均編「『達斡爾語詞彙』蒙古文語索引（附満洲文語索引）」（2011）
 47. 栗林均編「『元朝秘史』漢語傍訳索引」（2011）
- ・『東北アジア アラカルト』
- 第 1 号 徳永昌弘／徳田昌則編「ノヴォシビルスクは今」（1999）
 - 第 2 号 寺山恭輔編訳「シベリアの過去と未来」（1999）
 - 第 3 号 徳永昌弘／徳田昌則編「エリツィン時代のロシアとその後：日露関係の

- 展望」(2000)
- 第4号 伊賀上菜穂編「新世紀の東北アジア ― 日中露三国をめぐる国際関係の歴史と将来 ― 」(2001)
- 第5号 キム・レチュン講演、柳田賢二編「老子とトルストイ」(2001)
- 第6号 寺山恭輔・塩谷昌史編「東北アジアの共生とユートピア」(2002)
- 第7号 東北アジア研究センター開設5周年記念特刊「新しい地域研究を求めて ― 東北アジア研究センターの現在と明日への展望 ― 」(2002)
- 第8号 平川新／A.A. キリチェンコ「日本とロシア ― その歴史を振り返る ― 」(2003)
- 第9号 吉田忠／磯部彰「東アジアの本とさし絵」(2004)
- 第10号 山田勝芳編「『東北アジア』“Northeast Asia”の現在・未来を考える ― 日本における『東北アジア』関係機関の集い ― 」(2004)
- 第11号 磯部彰編「市民フォーラム 2003 明治大正期の根岸町子規庵界限とその後」(2004)
- 第12号 徳田由佳子編「シベリア通信 2000 年 ― 2004 年」(2004)
- 第13号 山田勝芳編「人口・労働問題から見た東北アジアと東南アジア ― ASEAN+3 の行方を人口・労働問題から見る ― 」(2004)
- 第14号 徳田由佳子編「新技術開発ダイジェスト 2001 年 ― 2004 年」(2005)
- 第15号 磯部彰編「東北アジア研究センター共同研究『東アジア出版文化の総合研究』研究成果報告『東アジア出版文化の研究』に係る研究成果等の社会公表」(2006)
- 第16号 セルゲイ・パプコフ／寺山恭輔／畠山禎「三人の大統領とソ連・ロシア：ペレストロイカ、ソ連崩壊、再興」(2006)
- 第17号 磯部彰編「東シナ海近世現代出版文化研究（「東アジア出版文化の総合研究」報告書Ⅱ）」(2007)
- 第18号 山田勝芳編「松本健一「アジア主義と大東亜戦争 ― 北一輝・大川周明・石原莞爾・中野正剛 ― （東北アジアにおけるユートピア思想と地域の在り方研究会 講演会記録）」(2007)
- 第19号 工藤純一編「東北大学・ロシア科学アカデミーシベリア支部学術交流協定締結 15 周年記念シンポジウム報告書」(2008)
- 第20号 斎藤由佳／前田ひろみ翻訳、寺山恭輔編集「ロシアの北太平洋進出と日本 ― 『ロシア領アメリカの歴史』より ― 」(2009)
- 第21号 徳田由佳子編「シベリア通信 2 2004 年～2008 年」(2009)
- 第22号 徳田由佳子編「新技術開発ダイジェスト 2 2004 年～2008 年」(2009)
- 第23号 寺山恭輔編「ロシア極東の形成 ― N.I. ドゥビーニナ著『プリアムール

総督』三部作より —」(2010)

第 24 号 千葉真弓／徳田由佳子／高倉浩樹編「トナカイ！トナカイ！！トナカイ!!!
研究成果を市民に還元する自主展示の試み」(2010)

•『東北アジア研究センター報告』

第 1 号 高倉浩樹「日本人のみたトナカイ遊牧民 シベリア民俗写真を現地に戻し
て展示する試み」(2011)

第 2 号 チョローン・ダシダワー、チンゲルト、岡洋樹編「モンゴル史研究と史料」
(モンゴル文) (2011)

第 3 号 平川新／佐藤大介編「歴史遺産を未来へ」(2011)

第 4 号 平川新編「よみがえる町の記憶 — 通町・堤町・北山界隈の歴史 —」(2011)

•『東北アジア研究センター ニュースレター』

第 1 号 (1999) ～ 第 52 号 (2012)

年 4 回、本研究センターの活動状況や諸情報を採録した「東北アジア研究セン
ターニュースレター CNEAS」を出版している。学内外の機関等に配布のほか、
本センターの活動に協力いただく個人に配布している。2011 年度は以下のとお
り発行した。

第 49・50 号／2011 年 7 月 31 日発行

第 51 号／2011 年 7 月 31 日発行

第 52 号／2012 年 3 月 26 日発行

• 東北アジア学術読本 (東北大学出版会刊)

1. 高倉浩樹・曾我亨『シベリアとアフリカの遊牧民 — 極北と砂漠で家畜とと
もに暮らす —』(2011 年)

2. 石渡明・磯崎行雄『東北アジア 大地のつながり』(2011 年)

• 東北アジア研究専書

1. 瀬川昌久『近現代中国における民族認識の人類学』昭和堂刊、2011 年

2. 高倉浩樹『極北の牧畜民サハ：進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌』昭
和堂刊、2011 年

• 科学研究費補助金特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究成果集

I：磯部祐子『東北大学附属図書館蔵「如是観等四種」原典と研究』(2009)

II：高橋智編、金文京著『慶応義塾図書館蔵「四郎探母等四種」原典と解題』(2009)

Ⅲ：磯部彰『上海図書館所蔵『江流記』原典と解題』（2010）

磯部彰編『東アジア出版文化研究 にわらずみ』（2004）

磯部彰編『東アジア出版文化研究 こはく』（2004）

磯部彰編『東アジア出版文化研究 ほしづくよ』（2010）

- 図録

磯部彰編『第1回東アジア出版文化に関する国際学術会議 古典籍史展示会解説図録 ― はなしが違う！！絵も違う！ ―』（2001）

磯部彰編『第2回東アジア出版文化に関する国際学術会議 アジアむかしの本のもものがたり 富山展覧会図録解説 ― 同じ本なのに、はなしがちがう！絵もちがう！ ―』（2002）

磯部彰編『国宝「史記」から漱石原稿まで』（2003）

磯部彰編『東アジアのむかしの本のもものがたり シンポジウム 東アジアの出版と地域文化』（2006）

- 『ナオ・デ・ラ・チーナ Nao de la China』

第1号：

第2号：2002年2月22日発行

第3号：2002年3月25日発行

第4号：2003年4月5日発行

第5号：2004年1月31日発行

第6号：2004年8月15日発行

第7号：2004年12月25日発行

第8号：2005年1月15日発行

第9号：2005年1月30日発行

第10号：2009年4月30日発行

第11号：2010年3月10日発行

- その他

斎藤秀一・高倉浩樹編『デジタル写真と人類学 東北アジア研究センター写真ワークショップの記録 2008-2009』（2009）

- 東北アジア学術交流懇話会ニューズレター「うしとら」

第49号／2011年4月30日発行

第50号／2011年8月20日発行

第51号／2012年3月5日発行

第52号／2012年3月30日発行

(B) 2011 年度に実施された公開講演、共同研究会等

2011 年

6 月 4 日（土）10:00 ～ 16:30

第 8 回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会

特別推進研究の内容と進捗状況

研究発表 I 「連台大戯如意宝冊について」 小松謙（京都府立大学）

研究報告 a（磯部祐子・高橋智・陳仲奇）

研究発表 II 『楊家将演義』のモチーフと『昭代簫韶』 鈴木陽一（神奈川大学）

研究発表 III 「清代モンゴル王侯と清朝文化 — 年班と王府 — 」

中見立夫（東京外国語大学）

研究報告 b（加藤徹・大塚秀高・磯部彰）

6 月 24 日（金）16:00 ～ 1:30

東北アジア学術交流懇話会講演会

場所：東北大学 東京分室

テーマ

「溥儀の忠臣・工藤忠と 20 世紀前半の激動 — 辛亥革命 100 年、満洲事変 80 年の年に東北アジア近代史を考える — 」

講師：山田勝芳（東北大学名誉教授、東北アジア学術交流懇話会 元理事長）

8 月 10 日（水）10:00 ～ 16:30

2010 年度プロジェクト研究ユニット活動報告

会場：東北大学片平キャンパス さくらホール 2 階

司会：奥村 誠 副センター長

- ・北アジア戦略データベース構築研究ユニット（代表：工藤純一）
- ・東アジアにおける移民の比較研究ユニット（代表：瀬川昌久）
- ・東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット（代表：栗林 均）
- ・「東アジア出版文化」研究ユニット（代表：磯部 彰）
- ・21 世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究（代表：岡 洋樹）

午後の部

- ・ミニ・シンポジウム「災害を乗り越える：東北アジアのアプローチ」
- ・被災文化財の調査と保存（平川新）— 歴史資料保全のための地域連携研究ユニット（代表：平川新）の活動報告
- ・「東シベリアレナ川中流域の洪水と人間社会の反応（高倉浩樹）— シベリアにおける人類生態と社会技術の相互研究ユニット（代表：高倉浩樹）の活動

報告

- ・電磁波による環境計測技術と災害への応用（佐藤源之）— リモートセンシング研究ユニット（代表：佐藤源之）の活動報告
- ・交通ネットワークの耐震化に関する研究（奥村誠）
- ・複数の地震における墓石転倒率の調査から見えてくるもの（石渡明）

9月1日（木）13:00～17:00

東北アジア研究センター共同研究

「氷融洪水とその社会対応から見る極北圏地域社会の比較研究」

2011年度第1回研究会

- 1) 山口未花子（東北大学東北アジア研究センター）
「カナダ、ユーコン準州における温暖化の影響と先住民の対応」
- 2) 保田亮（立教女子学院短期大学）
「アラスカ州南西部沿岸地域における洪水史」（仮）

研究進捗報告（発表10分、質疑5分）

高倉浩樹（東北大学東北アジア研究センター）

奥村誠（東北大学東北アジア研究センター）

渡邊学（宇宙航空研究開発機構）

吉川泰弘（寒地土木研究所）

9月12日（月）14:00～17:20、9月13日（火）9:30～14:30

第9回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会 — 若手研究協力者の成果公表

会場：文部科学省共済組合箱根宿泊所 四季の湯

強羅静雲荘（神奈川県足柄下郡箱根町強羅1320）

< 9月12日（月） >

研究発表Ⅰ「明代における楊家将故事盛行の一背景 — 明代六合楊氏を手がかりに」松浦智子（埼玉大学特別研究員）

研究発表Ⅱ「明刊本『西遊記』版本問題の再検討」上原究一（東京大学院生）

研究発表Ⅲ「清代内府“九九大庆”戏研究 — 以北京大学图书馆藏《九九大庆》为例」熊静（中国中山大学院生）

< 9月13日（火） >

研究発表Ⅳ「清代における萬壽盛典の挙行と演劇規制」村上正和（東洋文庫特別研究員）

研究発表Ⅴ「清朝の対外接待における宮廷演劇 — ドライラマ・パンチェンラ

マとの会見を例として —」柳静我（お茶の水女子大学外国人特別研究員）
研究発表Ⅴ「太平天国における戯曲政策散論」水盛涼一（東北大学院生）
総括

10月9日（日）14：00～15：00

東北大学片平まつり 2011 記念講演会「海底ドリリングで地震・火山を調べる」

会場：東北大学 片平キャンパス 生命科学プロジェクト総合研究棟（1階講義室）
共催：「日本地球掘削科学コンソーシアム IODP（統合国際深海掘削計画）普及
キャンペーン」

「東北地方太平洋沖地震を掘れ」

講師：日野亮太（東北大学理学部附属地震・噴火予知研究観測センター准教授）

「火山はどこで発生するの？ ～海底火山を掘って考える～」

講師：平野直人（東北大学東北アジア研究センター助教）

11月29日（火）18：00～19：30

**「シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用ユニット」特別講演会「ロシア
葬礼泣き歌に現れる他界観：北部地方とシベリア・レナ川地方の泣き歌をてが
かりに」**

共催：大学院環境学研究科環境社会人類学分野

「ロシア葬礼泣き歌に現れる他界観：北部地方とシベリア・レナ川地方の泣き
歌をてがかりに」

講師：中堀正洋（慶応義塾大学 非常勤講師）

12月3日（土）14：30～17：00

東北大学東北アジア研究センター公開講演会

「途絶する交通、孤立する地域～人と地域の対応」

会場：仙台市戦災復興記念館

藤原 潤子（総合地球環境学研究所）

「途絶化するシベリアの村：社会変化と環境変化」

植田今日子（東北学院大学教養学部）

「橋が架かったシマの再離島化 —沖縄県今帰仁村古宇利島の事例—」

奥村 誠（東北大学東北アジア研究センター）

「東日本大震災後のガソリン途絶への対応行動」

コメント 神谷 大介（琉球大学工学部）

「討議：沖縄県離島の台風時の交通途絶の事例を踏まえて」

12月3日（土）10：00～16：00

第10回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会

会場：慶應義塾大学三田キャンパス北館3階大会議室

共催・後援：日本学術振興会科学研究費補助金特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」、センター研究ユニット・共同研究

開会（明清内府本・宮廷演劇本及び特別推進研究の報告）磯部彰（東北大学）

研究発表Ⅰ「『中国地方戯曲集成』の編集出版について」陳仲奇（島根県立大学）

斯道文庫所蔵文献共同調査

研究発表Ⅱ「節戯について」磯部祐子（富山大学）

研究発表Ⅲ「清宮蔵書について」高橋 智（慶應義塾大学）

総括

2012年

2月4日（土）14：00～17：00

第11回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会

研究発表Ⅰ「清朝宮廷大戯『鼎峙春秋』について」

小松謙（京都府立大学）

研究発表Ⅱ「明清宮廷の視覚文化 — 全像金字西遊記絵本をめぐって —」

磯部彰（東北大学）

総括 磯部彰

2月19日（日）13：00～18：00

東北大学東北アジア研究センターシンポジウム「聖典とチベット — 仏のことはを求めて」

会場：東北大学片平さくらホール2階

講演(1) 奥山直司（高野山大学）

「河口慧海による梵語・チベット語仏典の収集とその意義」

講演(2) 長岡龍作（東北大学）

「日本美術史研究者にとっての河口コレクション」

発表(1) 高本康子（群馬大学）

「多田等観関連資料の現在」

発表(2) 菊谷竜太（東北大学）

「インド仏教聖典の翻訳とチベット大蔵経の形成」

発表(3) 井内真帆（日本学術振興会）

「蔵外文献をめぐる学界動向と日本所蔵蔵外文献の活用に対する提案」

発表(4) 吉崎一美（ネパール研究家）
「河口コレクションとネパール仏教」
パネリストによるセッション

3月10日（土）13：00～17：00

**東北大学東北アジア研究センター講演会「文化財保護のための科学技術 — 3.11
地震・津波、フィレンツェ洪水を乗り越えて」**

会場：仙台市商工会議所

主催：東北大学東北アジア研究センター

後援：イタリア文化会館 イタリア大使館

「1966 フィレンツェの洪水と文化財保護活動」

フィレンツェ大学 Massimiliano Pieraccini

「絵画の構造調査、歴史的建造物の振動調査」

フィレンツェ大学 Massimiliano Pieraccini

「テラヘルツ波による初期ルネッサンス絵画の調査と修復」

（協力：ウフィッツィ美術館）

情報通信研究機構（NICT） 福永香

「電波科学による遺跡保護、防災・減災技術」

東北大学東北アジア研究センター 佐藤源之

「東北大学・フィレンツェ大学レーダによる栗原市大規模地滑りモニタリング」

佐藤 + Pieraccini

「地中レーダーによる遺跡保存技術について（仮題）」

奈良文化財研究所 金田明大

「日本の文化財保存における科学技術の応用」

奈良文化財研究所 高妻洋成

パネルディスカッション

3月16日（金）13：00～17:30

シンポジウム「中口国境地域：共生への期待と不安」

場所：富山大学経済学部大会議室

主催：富山大学東アジア「共生」学創成の学際的融合研究（CEAKS）

共催：富山大学極東地域研究センター・一橋大学経済研究所ロシア研究センター

後援：東北大学東北アジア研究センター、島根県立大学北東アジア研究センター、
北海道大学グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・
ユーラシアと世界」

3月18日（日）15：00～17：00

講演会「仙台・亶理と伊達市との連携を強める」

東北大学東北アジア研究センター・伊達市噴火湾文化研究所第3回学術交流連携

会場：だて歴史の杜カルチャーセンター 2F 視聴覚室

講演1：「震災と電波科学」― 防災・減災技術と遺跡調査への応用 ― 東北アジア
研究センター長 教授 佐藤源之

講演2：「明恵上人と西遊記物語」― 日本と中国・朝鮮半島の心の交流 ― 東北ア
ジア研究センター 教授 磯部彰

3月21日（水）13：30～18：20

共同研究「北アジアにおける帝国統治の遺産に関する研究」研究会

場所：東北大学川内北キャンパス 東北アジア研究センターさくら棟2階会議室

共同研究の総括と今後の計画（岡洋樹）（13：30～14：00）

中村篤志（山形大学人文学部）

「清代モンゴル研究と日記史料：モンゴル王公の北京日記を中心に」

田淵陽子（東北学院大学文学部）

「20世紀モンゴル史における Kh. チョイバルサンの評価をめぐって」

上野稔弘（東北大学東北アジア研究センター）

「蒋介石政権の対モンゴル政策構想と英米の視線」

佐藤憲行（東北大学東北アジア研究センター）

「乾隆後期モンゴルにおけるモンゴル人と商民の経済関係の一考察：モンゴ
ル人雇工と商民の関係から」

岡 洋樹（東北大学東北アジア研究センター）

「清初における『盟』について」

(C) センターが作成し公開中または公開予定のデータベース

データベース名	公開方法
* 東北大学ノア画像データベース ・ シベリア画像データベース ・ モンゴル画像データベース ・ 日本画像データベース	東北大学東北アジア研究センター HP (http://asiadb.cneas.tohoku.ac.jp/)

組織運営活動

(1) 人員配置と業務分担

(A) 教員等の配置、研究組織構成状況（2011 年 4 月現在）

部門	分野	職位／在職期間	氏 名	専 門 領 域
基礎 研 究 部 門	ロシア・シベリア研究	准教授 1996.12-	寺山 恭輔	ロシア・ソ連史、日露・日ソ関係史
		准教授 2000.10-	高倉 浩樹	社会人類学、シベリア民族誌
		助 教 1999.2-	塩谷 昌史	ロシア経済史、ロシアとアジアとの経済関係
		助 手 2005.4-	徳田由佳子	科学技術、シベリア地域研究
	モンゴル・中央アジア研究	教 授 1999.10-	栗林 均	言語学・音声学、モンゴル語学
		教 授 2006.4-	岡 洋樹	東洋史、モンゴル史
		准教授 1997.4-	柳田 賢二	言語学、ロシア語学、言語接触の研究
	中国研究	教 授 1996.10-	磯部 彰	中国文学、東アジア文化史
		教 授 1996.5-	瀬川 昌久	文化人類学、華南地域研究
		教 授 2004.4-	明日香壽川	環境政策論
		准教授 2001.4-	上野 稔弘	中国現代史、中国民族学
	日本・朝鮮半島研究	教 授 1996.5-	平川 新	日本近世政治経済史
		准教授 2004.10-	石井 敦	国際関係論、科学技術社会学
	地域生態系研究	准教授 1997.4-	鹿野 秀一	微生物生態学、システム生態学
	地球化学研究	教 授 2008.4-	石渡 明	岩石学、地質学
		助 教 1999.2-	後藤 章夫	火山物理学、マグマ物性
		助 教 1997.5-	宮本 毅	火山岩岩石学、火山地質学
		助 教 2008.12-	平野 直人	地質学、岩石・鉱物・鉱床学、地球宇宙科学
	地域計画科学研究	教 授 2006.4-	奥村 誠	土木計画学、交通計画
		助 教 2009.4-	大窪 和明	地域計画学、物流計画、静脈物流
	環境情報科学研究	教 授 2001.4-	工藤 純一	環境情報学、デジタル画像理解学
	資源環境科学研究	教 授 1997.4-	佐藤 源之	電磁波応用工学
		助 教 2010.4-	横田 裕也	マイクロ波イメージング、リモートセンシング
研究支援部門	防災科学研究拠点	助 教 2010.4-	佐藤 大介	日本近代史、歴史資料保全

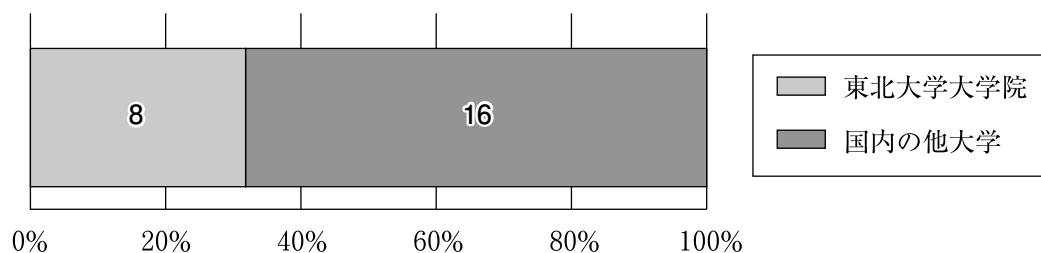
プロジェクト研究	ユ ニ ッ ト 名	代 表 者	期 間
	歴史資料保全のための地域連携研究ユニット	平川 新	2007-2011
	リモートセンシング研究ユニット	佐藤 源之	2007-2011
	東アジアにおける移民の比較研究ユニット	瀬川 昌久	2008-2011
	シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット	高倉 浩樹	2009-2013
	21 世紀東北アジア地域像の構築に関する研究ユニット	岡 洋樹	2009-2015
	東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット	栗林 均	2010-2012
	東アジア近世社会における出版文化の意義	磯部 彰	2010-2012
	森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット	工藤 純一	2011-2013

部門	分野	職位／在職期間	氏 名	専 門 領 域
研究支援部門	学術交流	准教授 2011.4 -	鳩山純一郎 (東京大学)	交通学・都市工学
		教 授	外国人研究員 (客員教授)	→ 別表参照
	情報拠点 (海外連携室)	国際交流委員長 助 手	奥村 誠 徳田由佳子	国際的学術交流推進

(B) 現職専任教員等の年齢、勤続年数、博士号取得状況

区 分	教 授	准 教 授	助教・助手
教員の平均年齢 (2012 年 3 月現在)	55.9 歳	47.2 歳	38.1 歳
教員の平均勤続年数 (〃)	12 年 8 月	12 年 6 月	7 年 7 月
博士号取得者数 (〃)	9 人	3 人	6 人

(C) 専任教員の最終出身大学院



(D) 研究支援組織の整備・機能状況 (2012 年 3 月現在)

所 属	職 名	氏 名
事 務 室	文学部事務長	佐藤 克義
	専 門 員	須田 仁
	主 任	伊藤亜紀子
	事務一般職員	森田 史哉
	事務補佐員	前川 順子
	事務補佐員	及川 二美
	事務補佐員	村岡 響子
	事務補佐員	阿部由比子
図 書 室	事務補佐員	佐々木理都子
	事務補佐員	海口 織江
そ の 他	技術補佐員	岩山 健三

(E) 教育研究支援者受け入れ状況

氏 名	期 間	受入プロジェクトユニット名	受入教員
蝦名 裕一	2011.4.1 ～ 2012.3.31	歴史資料保全のための地域連携研究ユニット	平川 新
斯 欽 巴 図	2011.4.1 ～ 2012.3.31	東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット	栗林 均
城戸 隆	2011.4.1 ～ 2011.9.30	リモートセンシング研究ユニット	佐藤 源之
鈴木健太郎	2011.4.1 ～ 2012.10.31	東アジアにおける移民の比較研究ユニット	瀬川 昌久
佐藤 憲行	2011.4.1 ～ 2012.3.31	21世紀東北アジア地域像の構築に関する研究ユニット	岡 洋樹
山口未花子	2011.4.1 ～ 2012.3.31	シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット	高倉 浩樹
kazi A.kalpoma	2011.4.1 ～ 2012.3.31	森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット	工藤 純一

(F) 客員教授（海外）受け入れ状況

※太字が本年度招聘者

〔氏名／在任期間：所属〕

カザンツェフ, セルゲイ・V. / 1996.10.1 ～ 1996.12.31

：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部 経済産業技術研究所副所長

石 昌渝 (セキ ショウユ) / 1997.1.1 ～ 1997.6.30

：中国、中国社会科学院大学院教授

オチル, アユーダイ / 1997.10.1 ～ 1998.3.31

：モンゴル、モンゴル科学アカデミー歴史研究所所長

李 仁遠 (リ インウォン) / 1997.12.1 ～ 1998.3.31

：韓国、韓国弘益大学校都市土木工学科教授

セリベルストフ, ビャチェスラフ / 1998.4.1 ～ 1998.6.30

：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部経済・産業管理技術研究所副所長

スミルノワ, タマラ / 1998.5.1 ～ 1998.8.31

：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部 無機化学研究所主任研究員

許 志宏 (キョ シコウ) / 1998.8.1 ～ 1998.11.30

：中国、中国科学院冶金研究所 上級教授

ゲレル, オチル / 1998.9.1 ～ 1998.12.25

：モンゴル、モンゴル技術大学教授

朴 星來 (パク ソンネ) / 1999.1.1 ～ 1999.3.31

：韓国、韓国外国語大学校人文大学史学科教授

クズネツォフ, フョードル, A. / 1999.1.1 ～ 1999.3.31

：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部 無機化学研究所長

劉 世徳 (リュウ セトク) / 1999.4.10 ~ 1999.7.9
 : 中国、中国社会科学院文学研究所教授
 イワノフ, ヴィクトル / 1999.5.1 ~ 1999.8.31
 : ロシア、ロシア科学アカデミー極東支部 火山研究所教授
 朝 克 (チョウ コク) / 1999.8.1 ~ 1999.10.31
 : 中国、中国社会科学院民族研究所教授
 セナラス, ユダヤ ガミニ / 1999.9.1 ~ 1999.11.30
 : スリランカ、モラツワ大学上級講師
 鄭 在貞 (チョン ジェジョン) / 1999.12.2 ~ 2000.3.5
 : 韓国、ソウル市立大学校教授
 ブラック, ジョン アンドルー / 1999.12.1 ~ 2000.3.31
 : オーストラリア、ニューサウスウェールズ大学教授
 キム・レチュン / 2000.4.1 ~ 2000.6.30
 : ロシア、ロシア科学アカデミー世界文学研究所首席研究員
 モシキン, ミハイル / 2000.4.1 ~ 2000.7.31
 : ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部 動物分類・生態学研究所教授
 李淵昊 (ソ ヨノ) / 2000.7.1 ~ 2000.9.30
 : 韓国高麗大学教授
 イローヒン, ゲナディ / 2000.8.1 ~ 2000.11.30
 : ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部
 確精扎布 (チョイジンジャブ) / 2000.10.1 ~ 2001.1.15
 : 中国内蒙古大学教授
 高 哲煥 (コー チュルワン) / 2000.12.1 ~ 2001.2.28
 : 韓国、ソウル大学校海洋学部教授
 馬 建釗 (マー チエンチャオ) / 2001.2.10 ~ 2001.5.31
 : 中国広東省民族研究所所長
 劉嘉麒 (リユー ジャーチ) / 2001.4.1 ~ 2001.6.30
 : 中国科学院地質学地球物理学研究所所長
 タマーラ エセノヴァ / 2001.6.1 ~ 2001.9.15
 : ロシアカルムイク国立大学
 ミカエル エポフ / 2001.7.1 ~ 2001.10.31
 : ロシア科学アカデミーシベリア支部地球物理科学研究所副所長
 恩和巴図 / 2001.9.16 ~ 2002.2.28
 : 内蒙古大学蒙古語文研
 Dendevin Badarch / 2001.11.1 ~ 2002.2.14
 : モンゴル科学技術大学学長
 Victor Okurgin / 2002.2.15 ~ 2002.6.14
 : ロシア科学アカデミー極東支部 火山学研究所

鄭 永振／2002.3.31～2002.8.31
 ：中国延辺大学・渤海史研究所教授

Fan-Niang Kong／2002.6.15～2002.10.14
 ：ノルウエー土木研究所

アレクセイ A. キリチェンコ／2002.9.1～2003.1.10
 ：ロシア科学アカデミー東洋学研究所

ウラジミール ロマノビッチ ベロスロドフ／2002.10.15～2003.2.14
 ：ロシア科学アカデミーシベリア支部 無機化学研究所教授

王満特嘎／2003.1.11～2003.5.14
 ：モンゴル中央民族大学言語学院 蒙古語文学部

Wolfgang-Martin Boerner／2003.2.17～2003.6.14
 ：イリノイ大学シカゴ校教授

ツイムジト プルブエワ ワンチコワ／2003.5.16～2003.9.30
 ：ロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴル学チベット学仏教学研究

金 旭／2003.6.15～2003.10.14
 ：中国吉林大学・地球探測科学興技術学院教授

朴 承憲／2003.10.1～2004.1.31
 ：中国・延辺大学東北亜研究院院長

レオポルド イサク チェルニャフスキー／2003.11.10～2004.2.29
 ：ロシア科学アカデミーシベリア支部 無機化学研究所情報研究部部長

ネリー レシチェンコ／2004.2.2～2004.5.31
 ：ロシア科学アカデミー東洋学研究所・上級研究員

サンドラ ジェロニモ カテーン／2004.3.7～2004.6.30
 ：ファイリピン大学国立地質学研究所助教授

S. V. Rasskazov／2004.7.1～2004.10.31
 ：イルクーツク州立大学教授

尹 豪／2004.6.1～2004.9.30
 ：吉林大学東北亜研究院・副院長

ミン・ビョンウク／2004.10.1～2005.2.10
 ：釜山大学校師範大学国語教育科教授

ウラジミール ロマノビッチ ベロスロドフ／2004.11.1～2005.2.28
 ：ロシア科学アカデミーシベリア支部無機化学研究所固体統計熱力学研究部門教授

フゲジルト／2005.2.11～2005.5.31
 ：内蒙古大学教授 兼副学長

A. Yurlov／2005.3.1～2005.6.30
 ：ロシア科学アカデミーシベリア支部動物分類学生態学研究所主任研究員

銭 杭 (チエン・ハン)／2005.6.1～2005.9.30
 ：中国 上海社会科学院歴史研究所研究員

金 喜俊／ 2005.7.1 ～ 2005.10.31
 ：釜山大学教授

S. A. Papkov ／ 2005.10.1 ～ 2006.1.31
 ：ロシア科学アカデミーシベリア支部歴史研究所上級研究員

金 亜秋／ 2005.11.1 ～ 2006.2.28
 ：中国 復旦大学教授

S. Bouterey ／ 2006.2.13 ～ 2006.6.30
 ：カンタベリー大学言語文化学部助教授・学部長

N. Yurlova ／ 2006.3.1 ～ 2006.6.30
 ：ロシア科学アカデミーシベリア支部動物分類学生態学研究所上級研究員

魏 海泉／ 2006.7.1 ～ 2006.10.31
 ：中国 地震局地質研究所副研究員

S. Formanek ／ 2006.7.17 ～ 2006.11.30
 ：オーストリア国立学術アカデミーアジア文化・思想史研究所上級研究員

劉 財／ 2006.11.3 ～ 2007.2.28
 ：中国 吉林大学教授・地球探測科学与技術学院長、地球物理研究所長

ダシダワー, チョローン／ 2006.12.2 ～ 2007.3.15
 ：モンゴル科学アカデミー歴史研究所長

L. Kondrashov ／ 2007.3.13 ～ 2007.6.30
 ：ロシア ハバロフスク州立自然環境管理訓練所長

ツオルモン, ソドノム／ 2007.3.16 ～ 2007.6.30
 ：モンゴル科学アカデミー歴史研究所 シニア・サイエンティスト

Ignatyeva Vanda ／ 2007.7.1 ～ 2007.9.30
 ：ロシア サハ共和国アカデミー人文科学研究所政治学社会学部門部長

Belosludov Vladimir ／ 2007.7.2 ～ 2007.10.31
 ：ロシア科学アカデミーシベリア支部無機化学研究所教授

特木爾巴根／ 2007.10.1 ～ 2008.1.15
 ：中国 内蒙古師範大学蒙古語言文学研究所教授

Voytishkek Elena ／ 2007.11.5 ～ 2008.2.29
 ：ロシア ノボシビルスク国立大学准教授

Yadrenkina Elena ／ 2008.1.16 ～ 2008.5.15
 ：ロシア科学アカデミーシベリア支部動物分類学生態学研究所上級研究員

白音門徳／ 2008.3.1 ～ 2008.6.30
 ：中国 内蒙古大学蒙古言語研究所教授

Jan Olof Svantesson ／ 2008.5.19 ～ 2008.8.31
 ：スウェーデン ルンド大学教授

飯坂 譲二／ 2008.7.1 ～ 2008.10.31
 ：カナダ ビクトリア大学地理学科教授

布仁巴图／2008.9.1～2009.1.15
 ：中国 内蒙古大学蒙古学学院教授
 Black John Andrew／2008.11.1～2009.3.31
 ：オーストラリア シドニー大学建築、設計計画学部教授
 Stammer Florian／2009.1.16～2009.7.15
 ：フィンランド ラップランド大学北極センター上級研究員
 Dubinina Nina／2009.4.1～2009.6.30
 ：ロシア ハバロフスク国立教育大学教授
 Dashi D. Darizhapov／2009.7.1～2009.12.31
 ：ロシア科学アカデミー・シベリア支部ブリヤート科学センター物理学部リモートセンシング研究室長
 Erdene Purevjav／2009.8.1～2009.11.30
 ：モンゴル科学アカデミー言語文化研究所言語研究部門主任
 嘎日迪／2009.12.1～2010.3.31
 ：内蒙古師範大学蒙古学学院教授
 曹三相／2010.1.1～2010.5.31
 ：韓国 釜山大学韓国研究所 研究員
 Boyakova Sardana／2010.4.11～2010.7.15
 ：ロシア ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所 20-21 世紀歴史学部門部長
 朴慶洙／2010.6.1～2010.8.30
 ：韓国 江陵大学校人文大学日本学科教授
 那順烏日图／2010.8.1～2010.11.30
 ：中国 内蒙古大学蒙古学学院教授
 李晶／2010.9.1～2011.1.31
 ：中国 広東海洋大学外国語学院教授
 ウラジミール・ヤクボフ／2010.12.1～2011.3.31
 ：ロシア トムスク国立大学教授
 セルゲイ・ソコロフ／2011.2.1～2011.2.28
 ：ロシア科学アカデミー地質研究所教授・所長代理
 金 旭／2011.3.1～2011.6.30
 ：中国 吉林大学教授
 哈琴巴特爾／2011.6.11～2011.9.30
 ：中国 黒竜江大学・教授
 Boerner Wolfgang-Martin／2011.7.1～2011.9.29
 ：アメリカ イリノイ大学シカゴ校・名誉教授
 斯琴巴特爾（スチンバートル）／2011.10.1～2012.1.31
 ：中国 内蒙古大学・教授

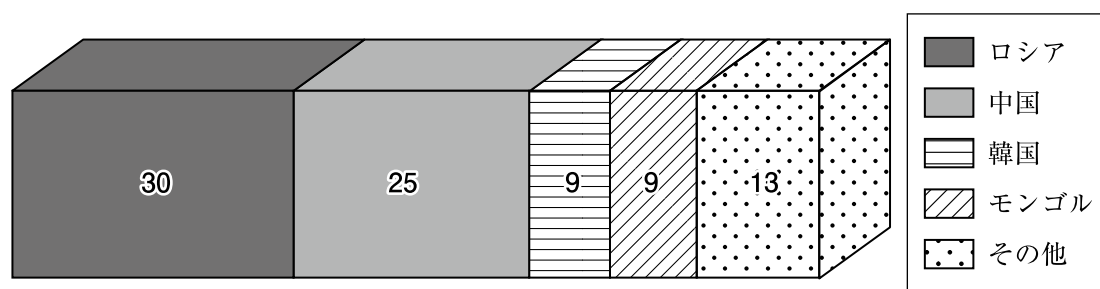
敖 特根／ 2012.2.1 ～ 2012.5.31

：中国 西北民族大学・教授

Sereenen JARGALAN ／ 2012.2.1 ～ 2012.4.30

：モンゴル モンゴル科学技術大学・教授

〔客員教授の出身国（1996 年度～ 2011 年度）〕



(G) 兼務教員受け入れ状況（2012 年 3 月現在）

阿子島 香	文学研究科 教授（考古学、先史学）
李 仁子	教育学研究科 准教授（文化人類学）
鈴木 三男	学術資源研究公開センター 教授（植物形態学）
占部城太郎	生命科学研究科 教授（群集生態分野）
大谷 栄治	理学研究科 教授（実験岩石学、高压地球物理学）
山田 仁史	文学研究科 准教授
高橋 一徳	理学研究科 COE 助教（応用電波工学）

(H) 非常勤講師受け入れ状況（2012 年 3 月現在）

柳澤 文孝	山形大学理学部（地球化学、環境動態解析）
河野 公一	東北工業大学（情報通信工学、データベース）
伊藤 正直	日本ゲームカード(株)（ロシア経済政策）
園田 潤	仙台電波工業高校専門学校（計算電磁気学）

(I) 東北アジア研究センターフェロー

氏 名	所 属
Fedor A. Kuznetsov	ロシア科学アカデミー正会員、元ロシア科学アカデミー・シベリア支部無機化学研究所長
和田 春樹	東京大学名誉教授
渡辺 之	元日本鋼管取締役・技監、元東北アジア研究センター環境技術移転寄附研究部門教授

(J) その他研究員

客員研究員

※太字は現職

氏 名	期 間	研 究 課 題
劉 四新	2007.7.5 - 2007.10.1	ボアホールレーダの数値計算並びに実験
キム ギョンホ	2007.7.25 - 2007.8.25	近世韓日の科学技術史と科学技術政策の政治思想的特性に関する比較研究
包 聯群	2007.4.1 - 2010.3.31	モンゴル語と周辺言語との言語接触の研究
ハーリッド フォウド アブド エルワケール	2007.5.1 - 2010.3.31	陸域生態系の物質循環における土壌動物の役割に関する研究
アンナ ステムラー ゴスマン	2009.1.16 - 2009.7.15	北方におけるコミュニティ適応・脆弱性とレジリエンス、境界領域の関係と交易に関する比較研究
王 三 慶	2009.5.27 - 2009.8.26	日本の漢文小説研究
ハタンバーナル ナツァグ ドルジ	2009.6.10 - 2009.8.29	エルデニ・ゾー寺院の歴史
ダリチャポフ プラット	2009.9.18 - 2009.12.31	日本企業のシベリアへの投資に関する研究
カジ エ カレポマ	2009.11.1 - 2011.3.31	人工衛星の画像処理とデータベース構築
恩 和	2010.6.1 - 2010.6.30	福沢諭吉にみる民族主義思想の形成
チョローン ダシダワー	2011.8.23 - 2012.6.30	モンゴルにおける日本人抑留兵（1945-1947 年）
シャルグラノワ オリガ	2012.3.15 - 2013.3.14	東北アジアにおけるモンゴル系移民の民族的統合の構築：民族社会学と宗教の諸要素

中国政府派遣研究員

氏 名	期 間	研 究 内 容
胡 日 査	2010.10.1 - 2011.9.30	近代内モンゴルの宗教と社会に関する研究

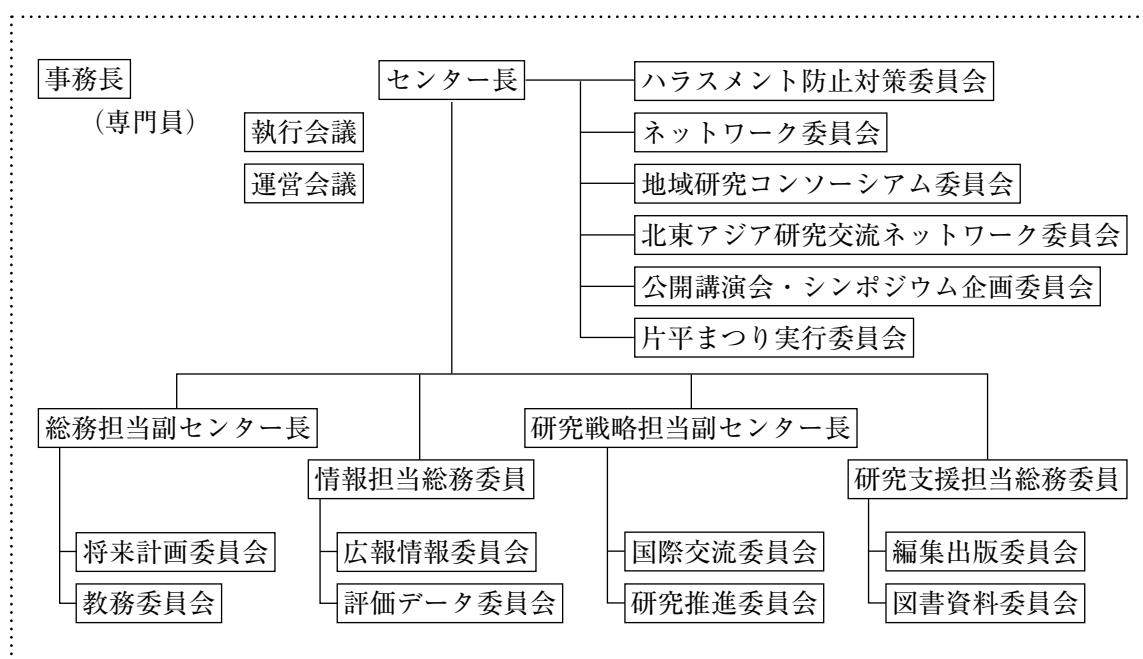
専門研究員

氏 名	期 間	専 門 分 野
中村 知子	2008.4.1 - 2012.3.31	文化人類学
八島 隆之	2008.4.1 - 2012.3.31	経済哲学
山口 睦	2009.4.1 - 2013.3.31	文化人類学・日本研究
岡野 淳一	2009.4.1 - 2011.5.31	河川生態・動物行動
張 政	2010.4.1 - 2014.3.31	文化人類学
青木 雅浩	2011.4.1 - 2013.3.31	モンゴル近現代史・東北アジア国際関係史
トゥルムンフ オドントヤ	2011.4.1 - 2013.3.31	文化人類学・モンゴル研究

学振特別研究員

氏 名	期 間	受 入 教 員	
小関 悠一郎	2009.4.1 - 2012.3.31	平川 新教授	PD
金本 圭一朗	2011.4.1 - 2014.3.31	明日香壽川教授	DC1

(K) センター内委員会構成図（2011 年 4 月改正）



(L) 委員会名簿（2011 年度）

<学内各種委員会>

委 員 会 名	委員氏名	任 期	備 考
教育研究評議会	センター長	211.4.1 ～ 2013.3.31	評議員
部局長連絡会議	センター長	211.4.1 ～ 2013.3.31	部局長
研究所長会議	センター長	211.4.1 ～ 2013.3.31	部局長 / 研究所長会議 代表
入学試験審議会	センター長	211.4.1 ～ 2013.3.31	研究所長会代表
国立大学附置研究所・センター長会議	センター長	211.4.1 ～ 2013.3.31	全国研究所長会議
教養教育改革会議	センター長	2007.10.16 ～	
文系部局長連絡協議会	センター長	211.4.1 ～ 2012.3.31	部局長
総長特任補佐	奥村 誠	211.4.1 ～ 2012.3.31	
キャンパス将来計画委員会	センター長	211.4.1 ～ 2013.3.31	
広域交通計画等検討委員会	奥村 誠	2007.1 ～	
研究推進審議会	奥村 誠	211.4.1 ～ 2013.3.31	
研究倫理専門委員会	奥村 誠	211.4.1 ～ 2013.3.31	
評価分析室	工藤純一	211.4.1 ～ 2013.3.31	(本部推薦)
広報連絡員	石渡 明	211.4.1 ～ 2013.3.31	
ロシア交流推進室員	センター長	211.4.1 ～ 2013.3.31	(顧問)
	工藤純一	〃	(副室長)
	高倉浩樹	〃	
	寺山恭輔	〃	
	塩谷昌史	〃	
	徳田由佳子	〃	
学生生活協議会	高倉浩樹	211.4.1	協議員
	奥村 誠	～ 2012.3.31	予備協議員
学務審議会	明日香壽川	2010.4.1 ～ 2012.3.31	
全学教育科目委員会			
	外国語（ロシア語）	柳田賢二	専門委員
	外国語（中国語）	上野稔弘	専門委員

片平まつり実行委員会	石渡 明	211.4.1 ～ 2013.3.31	5 研究所と東北アジアの開催
コラボレーション・オフィス運営委員会	瀬川昌久	211.4.1 ～ 2013.3.31	人文社会系諸部局
情報シナジー機構 情報システム利用連絡会議	栗林 均	2010.4.1 ～ 2012.3.31	
国際高等研究教育機構運営審議会	センター長	211.4.1 ～ 2013.3.31	部局長
学際科学国際高等研究センター運営委員会	奥村 誠	211.4.1 ～ 2013.3.31	
附属図書館商議会	平川 新	211.4.1 ～ 2013.3.31	
貴重図書等委員会	栗林 均	211.4.1 ～ 2013.3.31	
学友会全学協議会	高倉浩樹	211.4.1 ～ 2013.3.31	
運輸交通専門委員会	奥村 誠	211.4.1 ～ 2013.3.31	(本部推薦)
入試実施委員会			研究所群から 2 人
男女共同参画委員会	明日香壽川	211.4.1 ～ 2013.3.31	
大学情報データベース委員会	石渡 明 鹿野秀一 後藤章夫		(運用責任者) 石渡教授 伊藤亜紀子 (事務室)
研究教育基盤技術センター運営専門委員会	石渡 明	2010.4.1 ～ 2012.3.31	
埋蔵文化財調査室運営委員会	佐藤 源之	2010.4.1 ～ 2012.3.31	
埋蔵文化財調査室運営専門委員会	平川 新	2005.7.1 ～任期なし	
埋蔵文化財調査室運営専門委員会調査部会	平川 新	2005.7.1 ～任期なし	
研究所連携プロジェクト GL 会議	奥村 誠	2009.4.1 ～	第 3 期プロジェクト
六カ所村センター検討委員会	明日香壽川	2011.4.1 ～ 2012.3.31	
学術資源研究公開センター運営専門委員会	栗林 均	2010.4.1 ～ 2012.3.31	
川内キャンパス整備委員会	センター長	2011.4.1 ～ 2013.3.31	
川内北キャンパス協議会	センター長	2010.4.1 ～ 2012.3.31	
川北合同研究棟管理委員会	佐藤源之	任期なし	
安全保障輸出管理委員会	横田裕也	2010.4.1 ～	
産学連携推進会議	奥村 誠	2010.10.26 ～	副センター長(研究戦略担当)

文系サマープログラム実施 WG 委員	岡 洋樹	2011.2.1 ～	
災害科学国際研究所（仮称）設置準備委員会	センター長 平川 新	2011.9 ～	部局長 委員長
災害科学国際研究所（仮称）設置準備委員会専門委員会	平川 新	2011.9 ～	委員長

<センター内各種委員会>

委 員 会 名	委員氏名	任 期	備 考
センター長	佐藤源之	2011.4.1 ～ 2013.3.31	
副センター長			
副センター長（総務担当）	岡 洋樹	2011.4.1 ～ 2013.3.31	
副センター長（研究戦略担当）	奥村 誠	2011.4.1 ～ 2013.3.31	
執行会議	センター長	2011.4.1 ～ 2013.3.31	
	副センター長 2 名	2011.4.1 ～ 2013.3.31	
	総務委員 2 名		
	事 務 長		
執行会議の参議	専門員及び関係教員が必要に応じて参加		
総務委員			
研究支援担当総務委員	高倉浩樹		
情報担当総務委員	石渡 明		
総務担当副センター長（岡）が担当して、委員長を兼任する委員会			
将来計画委員会	瀬川昌久		副委員長
	佐藤源之		
	岡 洋樹		
	奥村 誠		
	高倉浩樹		
教務委員会	磯部 彰		留学生・学生発表会担当
	柳田賢二		
研究戦略担当副センター長（奥村）が担当して、委員長を兼任する委員会			
国際交流委員会	上野稔弘		
	高倉浩樹		
	栗林 均		
	塩谷昌史		
	平野直人		
	徳田由佳子		

研究推進委員会	石渡 明		
	磯部 彰		
	明日香寿川		
	寺山恭輔		
	鹿野秀一		
	佐藤大介		
情報担当総務委員（石渡）が担当して、委員長を兼任する委員会			
広報情報委員会	高倉浩樹		
	寺山恭輔		
	柳田賢二		
	横田裕也		
	大窪和明		
	徳田由佳子		
評価データ委員会	岡 洋樹		(部局評価責任者) 石渡教授
研究支援担当総務委員（高倉）が担当して、委員長を兼任する委員会			
編集出版委員会	瀬川昌久		
	栗林 均		
	上野稔弘		
	石井 敦		
	平野直人		
	上野稔弘		
図書資料委員会	塩谷昌史		
	平川 新		
	徳田由佳子		
センター長直属の専門委員会			
ハラスメント防止対策委員会	センター長		
	副センター長 2 名		
	事務長		
ネットワーク委員会	栗林 均		委員長
	平野直人		
	横田裕也		
片平まつり実行委員会	磯部 彰		委員長
	寺山恭輔		
	佐藤大介		
地域研究コンソーシアム委員会	上野稔弘		委員長
	塩谷昌史		
	高倉浩樹		
北東アジア研究交流 ネットワーク委員会	平川 新		委員長
	岡 洋樹		
	石井 敦		
公開講演会・シンポジウム 企画委員会	岡 洋樹		委員長
	磯部 彰		

文学研究科等安全衛生委員会	明日香寿川		
	佐藤大介		
	柳田賢二		
その他			
ハラスメント相談窓口	石井 敦		
	徳田由佳子		
	伊藤亜紀子		
親睦会	鹿野秀一		
	後藤章夫		
	佐藤大介		

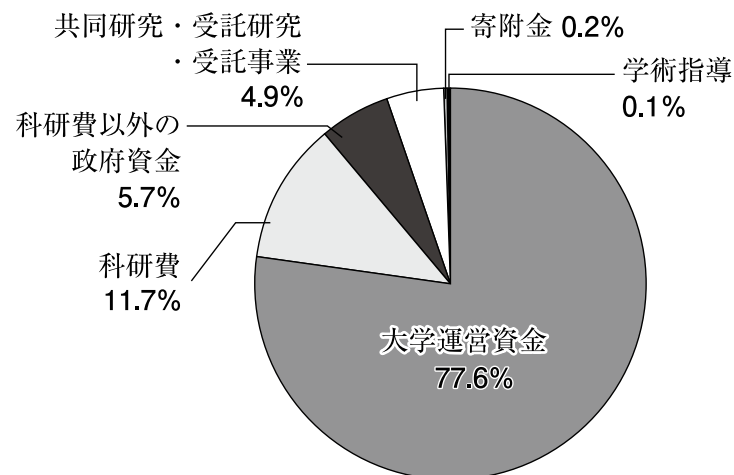
(2) 研究資金

(A) 経費総額

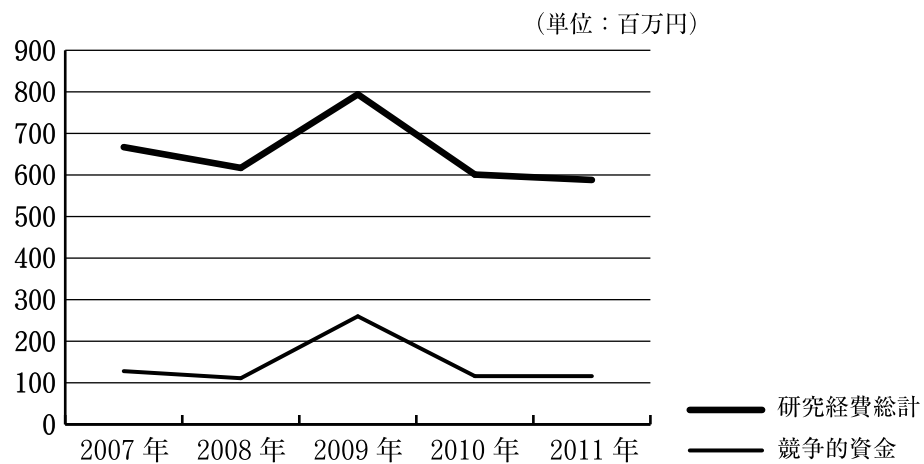
※ 2009（平成 21）年度は見込額（単位：百万円）

区 分		2007	2008	2009	2010	2011
大学運営資金		539	506	534	485	472
競争的資金	科学研究費補助金	67	82	78	78	78
	科学研究費補助金以外の政府資金	50	0	136	0	0
	民間等との共同研究	0	12	13	15	8
	受託研究	4	7	20	17	29
	受託事業	6	6	11	4	0
	寄附金	1	3	1	1	1
	学術指導	0	1	1	1	0
総 計		667	617	794	601	588
総計に占める競争的資金の割合		19%	18%	33%	19%	20%

研究活動関連経費の構成（2007～2011年度の平均）



経費総額と競争的資金の推移



(B) 歳出決算額（国立学校特別会計／大学運営資金・寄付金）

（単位：百万円）

区 分		2007 年度	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度
人件費	運営費交付金	358	310	299	285	290
物件費	運営費交付金	160	179	204	134	159
	その他	21	17	31	20	23
計		539	506	534	439	472

(C) 科研費の申請・採択状況

<種目別実績>

（単位：百万円）

研究種目	2007 年度		2008 年度		2009 年度		2010 年度		2011 年度		計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
特別推進	(1) 0	0	(1) 1	26	(1) 1	24	(2) 1	28	(2) 1	28	(7) 4	106
特定領域	(3) 0	0									(3) 0	0
新学術領域							(1) 1	1	(1) 1	1	(2) 2	2
基盤 (S)	(1) 1	18	(1) 1	17	(1) 1	15	(1) 1	16			(4) 4	66
基盤 (A)	(1) 1	6	(2) 1	7			(1) 0	20	(2) 2	19	(6) 4	52
基盤 (B)	(8) 7	28	(9) 5	17	(11) 6	23	(7) 6	6	(8) 5	15	(43) 29	89
基盤 (C)	(9) 6	7	(13) 9	11	(15) 10	9	(13) 7	6	(9) 5	5	(59) 37	38
萌芽・若手	(14) 4	5	(15) 5	4	(22) 4	3	(22) 6	5	(22) 8	10	(95) 27	27
研究成果 公開促進	(2) 1	3	(3) 0	0	(2) 1	1	(4) 0	0			(11) 2	4
計	(39) 20	67	(44) 22	82	(52) 23	75	(51) 22	82	(44) 22	78	(230) 109	384

※件数の上段（ ）書は申請件数、下段は採択件数。金額は採択された金額を表す。

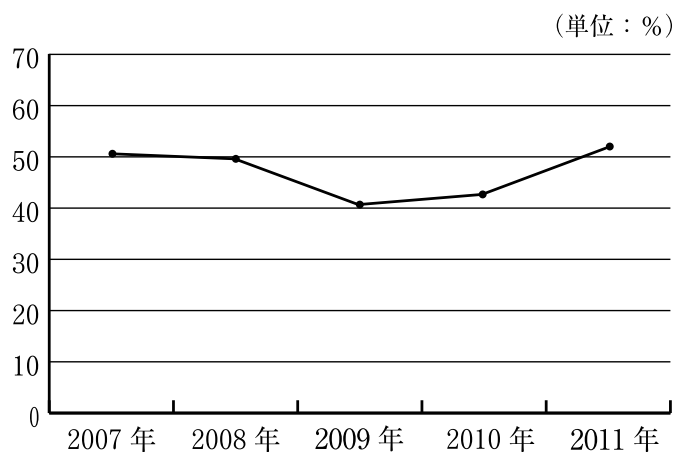
<一人当たりの申請率（申請件数／教員数）>

2007 年度 (教員数 24 名)	2008 年度 (教員数 23 名)	2009 年度 (教員数 23 名)	2010 年度 (教員数 24 名)	2011 年度 (教員数 24 名)	計
1.63	1.91	2.43	2.12	1.92	2.00

<一人当たりの獲得額（採択金額／教員数）>（単位：百万円）

2007 年度	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2010 年度	計
2.79	3.56	3.39	3.41	3.16	3.26

<科研費採択率実績（2007 年度～ 2011 年度）>



(D) 外部資金受入状況

<民間等との共同研究、受託研究、奨学寄付金受け入れ状況>

（金額単位：千円）

区 分		2007 年	2008 年	2009 年	2010 年	2011 年
民間等との共同研究	件数		1	2	2	2
	金額		12,025	13,152	15,352	7,100
受 託 研 究	件数	2	3	5	7	8
	金額	4,460	7,409	20,329	16,778	29,085
受 託 事 業	件数	1	1	4	2	0
	金額	5,500	5,500	10,570	4,260	0
寄 附 金	件数	1	4	2	1	1
	金額	300	3,420	1,181	1,000	300
学 術 指 導	件数		1	2	1	0
	金額		500	1,210	500	0
計	件数	4	10	15	13	11
	金額	10,260	28,854	46,442	37,890	36,485

＜科研費以外の外部資金明細＞

(金額単位：千円)

区分	2006 年度		2007 年度		2008 年度	
	金額	受 入 先	金額	受 入 先	金額	受 入 先
共同研究					12,025	東北電力(株)研究開発センター
受託研究	5,000	科学技術振興事業団	5,000	科学技術振興事業団	2,860	科学技術振興機構
					2,500	日本学術振興会
					2,049	埼玉大学
受託事業					5,500	日本学術振興会
寄 附 金	2,200	住友財団	2,200	住友財団	220	村田学術振興財団
	2,000	合同資源産業(株)	2,000	合同資源産業(株)	700	日本科学協会
	1,930	平和中島財団	1,930	平和中島財団	2,150	高速道路関連社会
	1,500	JFE 21 世紀財団	1,500	JFE 21 世紀財団		貢献協議会
	1,418	(株)ジャパンエナジー他 4 件	1,418	(株)ジャパンエナジー他 4 件	350	斎藤報恩会
学術指導	1,000	(株)ジャパンエナジー	1,000	(株)ジャパンエナジー	500	三菱電機特機システム(株)

区分	2009 年度		2010 年度		2011 年度	
	金額	受 入 先	金額	受 入 先	金額	受 入 先
共同研究	12,052	東北電力(株)研究開発センター	14,252	東北電力(株)研究開発センター	6,000	東北電力(株)研究開発センター
	1,100	三菱電機特機システム(株)	1,100	三菱電機特機システム(株)	1,100	三菱電機特機システム(株)
受託研究	5,900	科学技術振興機構	2,230	科学技術振興機構	1,300	科学技術振興機構
	7,865	金沢大学	1,300	科学技術振興機構	760	宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団
	1,300	埼玉大学	7,099	金沢大学	6,744	金沢大学
	4,264	福島大学	1,199	埼玉大学	3,215	福島大学
	1,000	宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団	950	宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団	6,500	科学技術振興機構
			3,500	福島大学	3,800	栗原市
			500	三菱電機(株)	500	三菱電機
					6,266	宮城県
受託事業	5,500	日本学術振興会	2,010	日本学術振興会		
	2,490	日本学術振興会	2,250	日本学術振興会		
	2,300	日本学術振興会				
	280	日本学術振興会				
寄 附 金	1,000	カシオ科学振興財団	1,000	稲森財団	300	野村財団研究助成
	181	日本科学協会				
学術指導	1,000	鹿島建設(株)土木設計本部	500	鹿島建設(株)土木設計本部		
	210	日本ガス協会				

< 科研費以外の外部資金一覧 (2011 年度) >

(金額単位：円)

名 称 ・ 題 目	研究者	相手方・委託者・寄附者	金 額
民間等との共同研究			
地中レーダー利用に関する研究	佐藤源之	東北電力(株)研究開発センター	6,000,000
地中レーダー技術を応用した検査機器構築のための技術開発	佐藤源之	三菱電機特機システム(株)	1,100,000
受託研究			
気候変動と社会環境変化に対する水資源管理適応策の総合評価 ― 地球規模課題対応国際科学技術協力事業 ―	奥村 誠	科学技術振興機構	1,300,000
湖沼の生物多様性の復元並びに地域水産資源の回復に向けた外来魚防除・魚類相復元技術の開発」のうち「食物網解析」 ― 平成21 年度新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業委託事業 ―	鹿野秀一	宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団 (農林水産省よりの再委託)	760,000
大気汚染物質削減交渉に資するコベネフィットアプローチの制度設計に関する研究 ― 地球環境研究総合推進費 ―	明日香壽川	金沢大学 (環境省地球環境局よりの再委託)	6,744,000
マイクロコズムを用いた農薬・有機物負荷等の生態系へ及ぼす解析評価 ― 環境研究・技術開発推進費 ―	鹿野秀一	福島大学 (環境省地球環境局よりの再委託)	3,215,000
衛星画像データベース再開と黄砂の可視化	工藤純一	科学技術振興機構	6,500,000
荒砥沢ダム崩落地安全対策モニタリング事業	佐藤源之	栗原市	3,800,000
レーダ画像利用技術の海外技術動向調査	佐藤源之	三菱電機(株)	500,000
東日本大震災に伴う民俗文化財調査	高倉浩樹	宮城県	6,266,000
受託事業			
寄附金			
野村財団研究助成金	石井 敦	石井敦 (野村財団)	300,000
学術指導			

<補助金間接経費>

(金額単位：百万円)

区 分		2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度
補助金間接 経 費	件 数	23	27	26	22
	金 額 (百万円)	12	11	12	12
受入該当費目		特別推進、 基盤研究 S、A、B、C 若手 B	特別推進、 基盤研究 S、A、B、C 若手 B 挑戦的萌芽	特別推進、 基盤研究 S、A、B、C 若手 B	特別推進、 基盤研究 S、A、B、C 若手 B 萌芽

< 2011 年度獲得科研費一覧>

(金額単位：千円)

No.	研究 種目	代表者氏名 (研究者番号)	区 分	研究 期間	研究課題名（課題番号）	交付額	間接 経費
1	特別 推進	磯部 彰 (90143841)		2008- 2012	清朝宮廷演劇文化の研究（20001001）	27,700	8,310
2	新学術 領域	奥村 誠 (00194514)		2010- 2011	健康地域格差の発生・拡大機構の地域 統計科学的解明（22119502）	1,400	420
3	基盤 A	佐藤源之 (40178778)		2011- 2013	最適空間サンプリングによる地雷探 知用レーダイメージングの効率化 (23246076)	12,900	3,870
4	基盤 A	岡 洋樹 (00223991)		2011- 2014	東北アジア地域における辺境地域社会 再編と共生様態に関する歴史的・現在 的研究（23251003）	5,600	1,680
5	基盤 B	奥村 誠 (00194514)	一 般	2009- 2012	国土交通マネジメントのための都市間 交通分析方法論の確立（21360239）	3,200	960
6	基盤 B	高倉浩樹 (00305400)	一 般	2010- 2013	ミクロ環境史の復元手法による北極圏 における温暖化の先住民社会への影響 分析（22310148）	3,800	1,140
7	基盤 B	栗林 均 (30153381)	一 般	2010- 2013	中世モンゴル語研究の統合（22320076）	3,200	960
8	基盤 B	平川 新 (90142900)	一 般	2010- 2014	仙台藩と仙台領地域社会の新研究 (22320125)	2,600	780
9	基盤 B	上野稔弘 (10333907)	海 外	2009- 2013	1920-40 年代の中国・ソ連における民族 政策の比較研究（21401006）	1,700	510
10	基盤 C	瀬川昌久 (00187832)	一 般	2008- 2011	中国南部少数民族の族譜に関する文化 人類学的研究（20520700）	400	120
11	基盤 C	明日香壽川 (90291955)	一 般	2010- 2012	排出量取引制度が企業の国際競争力に 与える影響の分析（22510040）	1,000	300
12	基盤 C	山田勝芳 (20002553)	一 般	2011- 2013	「工藤忠関係資料」による東北アジア近 代史研究（23520858）	800	240
13	基盤 C	塩谷昌史 (70316284)	一 般	2011- 2013	ユーラシアにおける流通ネットワーク の再編－ロシア製綿織物輸出の観点よ り－（23530402）	1,000	300
14	基盤 C	石渡 明 (90184572)	一 般	2011- 2013	日本の古生代オフィオライトの多様性 と沈み込み帯プロセス（23540554）	1,300	390

No.	研究 種目	代表者氏名 (研究者番号)	区 分	研究 期間	研究課題名（課題番号）	交付額	間接 経費
15	挑戦的 萌芽	高倉浩樹 (00305400)		2010- 2012	デジタル映像技術を導入した人類学 フィールド調査方法論の探求 (22652077)	400	120
16	挑戦的 萌芽	工藤純一 (40186408)		2011- 2012	森林火災管理による CO2 排出量取引の シナリオ (23651032)	1,600	480
17	若手 B	石井 敦 (30391064)		2008- 2009	炭素隔離技術のマスメディア報道に関 する定量的・定性的研究 (22710041)	600	180
18	若手 B	宮本 毅 (90292309)		2010- 2012	堆積物として残らないごく小規模噴火 の痕跡を火山灰土中から検出する試み (22710170)	1,300	390
19	若手 B	平野 直人 (00451831)		2010- 2011	プチスポット火山の普遍性 (22740350)	1,200	360
20	若手 B	大窪 和明 (50546744)		2010- 2011	循環型社会の構築に伴う企業集積に関 する研究 (22760381)	500	150
21	若手 B	斯欽巴図 (70590199)		2011- 2012	『初学指南』の満州文字表記モンゴル語 の研究 (23720194)	1,000	300
22	若手 B	佐藤憲行 (50534179)		2011- 2013	漢人商業地域「売買城」から見る清代 モンゴルの経済構造 (23720341)	1,300	390
23	学術 図書	斯欽巴図 (70590199)		2011	(刊行物の名称：『三合語録』の満州文 字表記モンゴル語の研究)	1,400	0
24	特別研究員 奨励費	小関悠一郎		2009- 2011	近世日本の改革政治と為政者像－大名 明君像の政治史的研究－ (21・5176)	900	0
25	特別研究員 奨励費	金本圭一朗		2011- 2013	国際制度間の相互連携に関する研究： クリーン開発メカニズムを事例に (23・ 8456)	400	0
26	基盤 S	平川 新 (90142900)		分担金	大規模自然災害時の史料保全論を基礎 とした地域歴史資料学の構築（神戸大・ 奥村教授）(21222002)	1,530	459
27	基盤 A	高倉浩樹 (00305400)	海外	分担金	「先住民」のアイデンティティの交渉 (広島大・窪田准教授) (20251009)	300	90
28	基盤 A	栗林 均 (30153381)	海外	分担金	地球化時代において急速に変容・消滅 するアルタイ諸語に関する総合的調査 研究（九大・久保教授）(21251006)	900	270
29	基盤 A	石井 敦 (30391064)	一般	分担金	レジームコンプレックスとしての国際 漁業資源管理：意思決定要因と有効性 分析（早稲田大・太田教授）(23243031)	2,067	620
30	基盤 B	塩谷昌史	海外	分担金	所有者－経営者－従業員関係からみた ロシア業：企業統治の変化と労務管理 (大阪市立大・田畑教授) (21402025)	590	177
31	基盤 C	中村 知子 (80513887)	一般	分担金	モンゴル高原における土地利用制度と 移動牧畜の実践をめぐる実証的研究 (22510270)	250	75
合 計						82,837	24,041

教員の研究活動

(2011)

寺山 恭輔 TERAYAMA Kyosuke 准教授

生年月日 / 1963 年 07 月 18 日

東北アジア研究センター基礎研究部門ロシア・シベリア研究分野

出身学校

京都大学・文学部・現代史学科 1987 年卒業

出身大学院

京都大学・文学研究科・西洋史（現代史学）博士課程 1993 年単位取得満期退学

取得学位

博士（文学）京都大学 1996 年

略歴

1992 年～1995 年 サンクトペテルブルグ大学歴史学部 研究員
 1995 年～1996 年 九州大学大学院比較社会文化研究科 助手
 1996 年～2007 年 東北大学東北アジア研究センター 助教授
 1999 年～1999 年 英国バーミンガム大学ロシア東欧研究センター 客員研究員
 2007 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 准教授（職階名変更による）

研究経歴

1992 年～現在 スターリン体制下のソ連
 2000 年～2010 年 18～19 世紀の日本人漂流民と日露関係
 2002 年～2004 年 ロシアにおける中国学、モンゴル学の歩みと史料収集
 2002 年～2006 年 ソ連における日本人抑留者問題
 2003 年～現在 プーチン体制下の新生ロシア
 2008 年～現在 ソ連における検閲
 2009 年～現在 ソ連における民族問題

所属学会

ロシア史研究会、日本西洋史学会

学会活動

ロシア史研究会 1992 年～現在
 西洋史学会 1996 年～現在

所属クラスター

21 世紀人間・社会クラスター

専門分野

ロシア・ソ連史、日露・日ソ関係史、地域研究

学内活動（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

ロシア交流推進室委員 2009 年 12 月～現在

研究キーワード

スターリン体制 日露日ソ関係 ソ連政治史

担当授業科目（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

（全学教育）

歴史学 2005 年～現在

（大学院教育）

ユーラシア文化史研究演習 2000 年～現在

ユーラシア文化史特論 2000 年～現在

本年度の仕事

今年度は震災の影響で、連休明けに附属図書館に居室を与えられ、10 月 31 日に川北構内のプレハブさくら棟に移るまで研究を続けた。さくら棟でやっと附属図書館における時間的制約を受けずにすむようになった。2012 年度もさくら棟に居住中。

6 月 15 日～7 月 8 日、科研の経費（基盤研究 B：「1920-40 年代の中国・ソ連における民族政策の比較研究」代表上野稔弘）でモスクワに出張し、ロシア連邦国家アルヒーフ及びロシア国立政治社会史アルヒーフにおいて、ソ連の対新疆政策に関する史料を追加的に収集し、旧レーニン図書館では日本で入手できない論文・書籍の収集につとめた。今年度は本テーマに関して収集した日本語・英語・ロシア語の文献を解説することに専念し、上野氏とともに専書『スターリン、蒋介石と中国新疆』として出版申請した。

拙稿「日本・アジアから見たスターリン体制のソ連」（南塚信吾、秋田茂、高澤紀恵編『新しく学ぶ西洋の歴史』ミネルヴァ書房、2012 年）は、ソ連のスターリン体制を日本や中国（モンゴルや新疆も含む）から考察する視点を提示したもの。

書評「島田顕『ソ連・コミンテルンとスペイン内戦』れんが書房新社、2011 年」『ロシア史研究』（90 号）は、同時代のスペインに対するソ連の関与をアジアへの関与と比較して考察したもの。

高倉 浩樹 TAKAKURA Hiroki 准教授

生年月日 / 1968 年 07 月 20 日

東北アジア研究センター基礎研究部門ロシア・シベリア研究分野

出身学校

上智大学・文学部・史学科 1992 年卒業

出身大学院

東京都立大学・社会科学研究科修士課程 1994 年修了

東京都立大学・社会科学研究科・社会人類学博士課程 1998 年単位取得満期退学

取得学位

学士（史学）上智大学 1992 年

修士（社会人類学）東京都立大学 1994 年

博士（社会人類学）東京都立大学 1999 年

略歴

1997 年～1998 年 日本学術振興会 特別研究員（DC2）
 1998 年～2000 年 東京都立大学人文学部 助手
 2000 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 助教授／准教授
 2002 年～現在 東北大学文学部 非常勤講師
 2002 年～2003 年 東北大学大学院文学研究科 非常勤講師
 2003 年～2004 年 ケンブリッジ大学スコット極地研究所 客員研究員
 2004 年～2008 年 国立民族学博物館先端人類科学研究部 客員助教授／客員准教授
 2004 年～2006 年 国立民族学博物館先端人類科学研究部 客員助教授
 2006 年～2008 年 国立民族学博物館 特別客員教員（助教授／准教授）
 2009 年～現在 北海道立北方民族博物館 研究協力員

研究経歴

1998 年～2002 年 極北先住民に見られる生業経済と人－動物関係
 2000 年～2002 年 1990 年代以降のポスト社会主義圏における人類学研究の展開について
 2001 年～2004 年 脱社会主義過程下のヤクーチア先住民社会における家畜預託と土地所有
 2002 年～2004 年 ロシアにおけるナショナリズムと先住民運動
 2004 年～2006 年 ロシア民族学史と民族誌知識人：ネイティブ人類学概念をめぐって
 2006 年～2008 年 シベリア先住民のマイノリティ・ビジネスと社会経済分析

2007 年～ 2010 年	シベリア先住民の歴史認識と文化的アイデンティティの位相
2007 年～現在	シベリアの環境変動と先住民の生態適応
2008 年～現在	民族誌映像の展示実践と地域社会との連携
2010 年～現在	映像人類学の方法と人類学写真史の探求

所属学会

日本文化人類学会、国際極北社会科学学会、ロシア史研究会

学会活動

日本文化人類学会・第 24 期理事・評議員 2010 年～ 2012 年

所属クラスター

地球・環境クラスター、基礎・萌芽研究クラスター

専門分野

文化人類学（含民族学・民俗学）、地域研究

研究課題

シベリア・ヤクーチアにおけるトナカイ飼育民の近代化
 シベリア・ヤクーチアにおけるサハ人による馬群再生産過程についての人類的研究
 ロシアにおけるエスニック・ナショナリズム研究－サハを中心として
 サハ人の馬飼養と食文化の実態についての社会経済的研究
 サハ人の土地利用と所有観についての人類的考察
 トナカイ飼育における群管理技術に関する民族誌的記述と理論的展望
 ロシア人類学史における民族知識人の役割と評価
 北アジア生業類型論再考
 サハリン先住民をめぐる歴史叙述についての人類的考察
 シベリアを中心とする比較先住民研究
 シベリアの環境変動と住民の生態適応
 人類学調査方法と映像媒体

研究キーワード

生業経済論、民俗知識、シベリア、ロシア、北極、生態人類学、先住民と国家関係論、人－動物関係論

学外の社会活動（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

- ・日本文化人類学会第 24 期理事・評議員
- ・北海道立北方民族博物館特別展示『北にくらす子どもたち』（展示会 2011 年 2 月～ 4 月）
- ・日本人のみたトナカイ遊牧民：シベリア民俗写真を現地に戻して展示する試み（展

示会) 2012 年 3 月

行政機関・企業・NPO 等参加 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

Verlag der Kulturstiftung Sibirien | SEC Publications Member of Editorial Board
of Studies in Social and Cultural Anthropology 2011 年 4 月～現在

北海道立北方民族博物館 (地方公共団体) 第 26 回北方民族文化シンポジウム運営委
員会 運営委員 2011 年 6 月～ 3 月

学内活動 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

ロシア交流推進室室員 2009 年 12 月～現在

担当授業科目 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

(学部教育)

文化人類学各論 2002 年～現在

(大学院教育)

地域環境・社会システム学博士研修 2003 年～現在

地域環境・社会システム学セミナー 2003 年～現在

地域環境・社会システム学修士研修 2003 年～現在

博士インターンシップ研修 2003 年～現在

地域環境・社会システム学研修 2003 年～現在

東北アジア民族誌論 2003 年～現在

東北アジア社会人類学 2003 年～現在

東北アジア歴史人類学 2005 年～現在

文化人類学特論 2010 年～現在

国際会議 発表・講演 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

- The local conceptualization of river ice thawing and the spring flood of Lena River under the global warming[1st International Conference on “Global Warming and the Human-Nature Dimension in Siberia: Social Adaptation to the Changes of the Terrestrial Ecosystem, with an Emphasis on Water Environments”] (2012 年 3 月 7 日～ 2012 年 3 月 9 日、日本国、京都) 口頭 (基調)

国内会議 発表・講演 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

- 触媒としての研究者 ― トナカイプロジェクトの経験から考えること [民族自然誌研究会第 65 回定例会] (2012 年 1 月 20 日～ 2012 年 1 月 20 日、京都) シンポジウム、ワークショップ パネル (指名)

その他研究活動 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

- 東北大学震災体験記録プロジェクト：とうしんろく (その他) 2011 年

- ・東日本大震災にともなう被災した民俗文化財調査（宮城県委託調査）（その他）
2011 年～ 2013 年
- ・シベリア人類学に関わるフィールドワーク（ロシア連邦サハ共和国エヴェノ _ ブイ
タントアイ郡）（フィールドワーク）2012 年
- ・写真展：日本人のみたトナカイ遊牧民：シベリア民俗写真を現地に戻して展示する
試み」（ロシア語）（その他）2012 年

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

（挑戦的）萌芽研究 2010 年 4 月～ 2013 年 3 月

〔デジタル映像技術を導入した人類学フィールド調査方法論の探究〕

基盤研究(B) 2010 年 4 月～ 2014 年 3 月

〔ミクロ環境史の復元手法による北極圏における温暖化の先住民社会への影響分析〕

その他の競争的資金獲得実績（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

第 27 回（平成 21 年度）カシオ科学振興財団研究助成金 2010 年 1 月～ 2011 年 12 月

〔シベリア映像民族誌をめぐるトラベリング・ミュージアムの実践と研究支援網の構築〕

著書（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

- 1) シベリアとアフリカの遊牧民 — 極北と砂漠で家畜とともに暮らす（執筆担当部分）まえがき：i-ix 頁、2 章：75-162 頁、あとがき：197-203 頁。〔東北大学出版会、（2011）12 月〕 高倉浩樹 曾我 亨
- 2) 極北の牧畜民サハ — 進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌。〔昭和堂、（2012）1 月〕 高倉浩樹
- 3) 聞き書き 震災体験、東北大学 90 人が語る 3.11。〔新泉社、（2012）3 月〕 高倉浩樹 木村敏明監修とうしんろく（東北大学震災体験記録プロジェクト）編
- 4) 東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査 2011 年度報告集。〔東北大学東北アジア研究センター、（2012）3 月〕

研究論文（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

- 1) Politics and Religion in Pursuit of a History: Nationalism in the Sakha Republic in the 1990s.. [H. Oka ed. Redefining History: Historiography and Historical Understanding of Asian States in the Former Soviet Bloc (CNEAS Monograph Series 45), (2011), 241-259] Hiroki Takakura

総説・解説記事（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

- 1) 学生たちは何を学んだのか？人類学フィールド調査の観点から能登実習の効果を考える。〔新泉社赤嶺淳ほか編『島にいきる 能登島大橋架橋のまえとあと』、

(2012)、175-179] 高倉浩樹

- 2) 地球温暖化の人類学における適応概念メモランダム。[総合地球環境学研究所平成 23 年度 FR3 研究プロジェクト報告 温暖化するシベリアの自然と人、(2012)、108-113]

2011 年度研究のまとめ

本年度の成果は大きく別けて、3 つある。第一の点は、シベリア人類学の分野に関して、民族誌研究、比較牧畜論、シベリア研究の教科書の刊行というかたちで著しい成果を挙げたことである。第二の点は、2011 年の東日本大震災のからんだ被災に関わる人類学調査事業を実施した事である。第三に、研究成果の社会還元絡んで、調査地での写真展示会を開催したことである。

第一の点に絡んでは、まず特筆すべきは 2000 年以降行ってきたサハ人の生態人類学的研究について、その成果を単著『極北の牧畜民サハ — 進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌』[昭和堂、(2012)] という形でまとめた事である。また、シベリアのトナカイ牧畜とアフリカのラクダ牧畜の比較研究については、『シベリアとアフリカの遊牧民 — 極北と砂漠で家畜とともに暮らす』[東北大学出版会、(2011)] を、曾我亨（弘前大学）との共著の形でまとめた。この本については、学会誌『文化人類学』76-4 巻（2012 年 3 月）で書評が掲載され、その取り組みの可能性が極めて高く評価されるなど、関連学会で着目されている。さらに、著者が代表を務めるユニットに関連させる形で、『極寒のシベリアに生きる』[新泉社、(2012)] を編著として出版した。これは考古・歴史・民族・社会とさらに自然に関わる本邦初のシベリア研究入門であり、また文系研究者だけでなく、理学・工学研究者も巻き込んだシベリア研究のための教科書である。

第二の点は、学内の教員・学生を巻き込む形でつくった東北大学震災体験記録プロジェクトを共同代表として運営し、その成果を『聞き書き 震災体験、東北大学 90 人が語る 3.11』[新泉社、(2012)] として、共同監修者の一人として刊行した事である。さらに宮城県からの委託事業として津波被災地の無形民俗文化財調査を行った。この事業では国内 20 名の研究者を組織し、県内の沿岸部 20 地区、延べ人数にして 133 人から聞き取りを行い、それを A4 の 300 頁の報告集としてまとめ、PDF として刊行した。震災に絡んで調査隊を組織的に構成し、体系的な民俗学的調査をおこなった事例としては先駆的な位置づけにある。

第三に、筆者自身が最初に長期調査をおこなったロシア連邦サハ共和国エヴェノ・ブイタントイ郡サクリール村で、「日本人のみたトナカイ遊牧民：シベリア民俗写真を現地に戻して展示する試み」と題する写真展を開催したことである。展示の趣旨は(1)研究資料としての写真を当地の人々に返却することで、彼らにとっての記憶と記録

に変換する、(2) 2008 年にセンターが行った仙台市でのシベリア写真展において、来場者が書いた感想＝「シベリアの手紙」を翻訳し現地に届ける事で、市民の間の文化交流を実施するというものだった。なおこの展示実施においては、本センター客員研究支援者千葉義人氏を同行して実施するなど、研究の成果の方法についても挑戦的な取り組みとなっている。その結果エヴェノ・ブイタンタイ郡の首長およびサクリール村から感謝状が発行された。

第一の点では、人類学の実証的研究を単独で行う事、また共同研究を組織することに関する成果だと言える。第二の点は、調査事業を組織的に運営するという点で従来筆者が行ってこなかった研究領域を開拓したといえる。第三の点は、調査成果の社会還元を現地で行うとともに、筆者の暮らす仙台市と調査地を結びつけるという点は国内外においても例を見ない先駆的な成果と言えるだろう。

塩谷 昌史 SHIOTANI Masachika 助教

生年月日 / 1968 年 07 月 03 日

東北アジア研究センター基礎研究部門ロシア・シベリア研究分野

出身学校

滋賀大学・経済学部・経済学科 1993 年卒業

出身大学院

大阪市立大学・経済学研究科・経済政策博士課程 1999 年単位取得満期退学

取得学位

経済学修士大阪市立大学

略歴

1999 年～ 2006 年 東北大学助手

2007 年～現在 東北大学助教

所属学会

社会経済史学会、土地制度史学会、American Association for the Advancement of Slavic Studies、比較経済体制学会、経営史学会

所属クラスター

地球・環境クラスター、21 世紀人間・社会クラスター、基礎・萌芽研究クラスター

専門分野

経済史

研究課題

- ・グローバル・ヒストリーへの試み — アジア綿織物市場の観点より
- ・所有者－経営者－従業員関係から見たロシア企業
- ・ユーラシア大陸におけるアジア商人のネットワーク

研究キーワード

市場、アジア商人、嗜好、ロシア経済

その他研究活動（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

森永貴子著『イルクーツク商人とキャフタ貿易 — 帝政ロシアにおけるユーラシア商業』（書評）2012 年

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

基盤研究(B) 2009 年 4 月～2013 年 3 月

[所有者－経営者－従業員関係からみたロシア企業：企業統治の変化と労務管理]

基盤研究(C) 2011 年 4 月～2014 年 3 月

[ユーラシアにおける流通ネットワークの再編 — ロシア製綿織物輸出の観点より —]

研究論文（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

- 1) ロシア イヴァノヴォ市における産業構造転換。[経済学雑誌（大阪市立大学経済学会）、112（1）、（2011）、31-47] 田畑理一、塩谷昌史
- 2) 19 世紀前半におけるロシアの綿織物輸出とアジア商人のネットワーク。[歴史と経済、（214）、（2012）、32-47] 塩谷昌史
- 3) ロシアの製造業の競争力 — 輸入浸透率と輸出依存度 — 。[経済学雑誌（大阪市立大学経済学会）、112（4）、（2012）、37-52] 田畑理一、塩谷昌史

総説・解説記事（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

- 1) 東北アジアにおける蒸気機関の導入と流通の革新（1800-1905）。[近現代東北アジア地域史研究会 NEWSLETTER、（23）、（2011）、120-121] 塩谷昌史
- 2) ロシアのインターネット事情。[昭和堂 SEEDer、（6）、（2012）、44-45] 塩谷昌史

本年度の研究活動等成果・意義など

本年度は、近年の研究を一つの論文に集約し、学会誌『歴史と経済』（政治経済学・経済史学会）に「19 世紀前半におけるロシアの綿織物輸出とアジア商人のネットワーク」として発表し、ユーラシアを跨ぐアジア商人の流通網を明らかにした。これは、最近、関心の高まっている、グローバル・ヒストリーの研究に寄与した。

また、東北大学とモスクワ大学との共催で、昨年 12 月 8 日と 9 日に「日露人文社会フォーラム」をモスクワ大学で開催したが、全体のコーディネーターを務めた。このような企画が日露間で行われるのは初めてであったが、大成功を収めた。詳細はセンターホームページに掲載した。

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/news/news111128_01.html

徳田 由佳子 TOKUDA Yukako 助手

生年月日 / 1969 年 09 月 13 日

東北アジア研究センター基礎研究部門ロシア・シベリア研究分野

出身学校

愛知学院大学・文学部・歴史学科 1993 年卒業

出身大学院

東北大学・情報科学研究科・修士課程 2011 年修了

取得学位

修士（情報科学）東北大学 2011 年

略歴

1997 年～2005 年 東北大学東北アジア研究センター技官

2005 年～現在 東北大学東北アジア研究センター助手

2011 年 10 月～ 東北大学情報科学研究科大学院博士課程後期在学中

所属学会

情報知識学会、日本データベース学会

所属クラスター

21 世紀人間・社会クラスター

研究課題

- ・シベリアのポテンシャルに関する研究
- ・ロシアのメディアに関する研究

研究キーワード

地域研究（シベリア）、科学技術、経済産業、ロシアメディア

学外の社会活動（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

法人シベリア研究所（NPO）（2006 ～）

学内活動（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

ロシア交流推進室室員

その他（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

- ・ロシア新聞データベースの構築とその有効利用に関する研究〔修士論文（2011）〕
- ・平成 23 年度ノボシビルスク訪問講座「日本とアジア」の開催〔東北アジア研究セ

- ンター東北アジアニュースレター No.51 (2011)]
- ・「ロシアから日本への短期留学実現」[東北アジア学術交流懇話会ニュースレター (2011)]

本年度の活動

昨年同様、本年もロシアの新聞を利用したデータベースの構築に取り組んだ。最終的にはロシア語を理解しない研究者にも利用できるような、社会科学的研究の支援システムの構築を目指している。また本年はロシア新聞スクラップのデータベースを所有しているロシア科学アカデミーシベリア支部科学技術図書館を訪問し、データベースの有効利用に関する共同研究の提案、来年度からの協力体制に向けた打合せを行った。

ロシア交流推進室室員としての活動では、ロシア科学アカデミー極東支部との大学間学術交流協定締結、極東連邦大学との大学間学術交流協定締結、国立ノボシビルスク大学における大学説明会、モスクワ大学における第1回日露人文社会フォーラム、東北大学における第3回日露学長会議等、大学主動のロシア関連業務に携わった。

栗林 均 KURIBAYASHI Hitoshi 教授

生年月日 / 1951 年 05 月 16 日

東北アジア研究センター基礎研究モンゴル・中央アジア研究分野

出身学校

東京外国語大学・外国語学部・モンゴル語学 1975 年卒業

出身大学院

一橋大学・社会学研究科・社会学博士課程 1982 年単位取得満期退学

取得学位

文学修士東京外国語大学

略歴

1982 年～1983 年 一橋大学助手

1984 年～1987 年 日本学術振興会奨励研究員

1990 年～1993 年 日本大学講師

1993 年～1999 年 日本大学助教授

所属学会

日本言語学会、日本音声学会、日本語学会、日本モンゴル学会

所属クラスター

地球・環境クラスター、21 世紀人間・社会クラスター

専門分野

モンゴル語学、日本語音声学

研究課題

- ・モンゴル系諸言語の研究
- ・現代日本語のアクセントの研究
- ・モンゴル語文献学の研究

研究キーワード

モンゴル語、文献学、音声学

学外の社会活動（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所運営委員会委員

社団法人・日本モンゴル協会理事

学内活動 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

学術資源研究公開センター運営専門委員会委員

情報公開・個人情報開示等委員会委員、

東北アジア研究センターネットワーク委員会委員長、編集出版委員会委員、国際交流委員会委員

学位授与数 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

博士前期課程 2 (東北大学、主査 1、副査 1)

担当授業科目 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

言語表現論

(全学教育)

内陸アジア文献研究

地域環境・社会システム学修士セミナー

地域環境・社会システム学博士セミナー

(以上環境科学研究科)

国内会議 発表・講演 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- ・「『御製滿珠蒙古漢字三合切音清文鑑』(1780)におけるモンゴル語の漢字切音表記について」(ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会、2012 年 2 月 18 日、長崎外国語大学)

国外会議 発表・講演 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- ・「近代蒙古語词典の発展と演変」(第二屆双辺蒙古民俗民間文化學術研究会、2011 年 11 月 4-5 日、中央民族大学)
- ・「《蒙古秘史》中記音漢字的使用特点」(中央民族大学蒙古語言文学系講演、2011 年 10 月 20 日)

著書 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- 1) 『『達斡爾語詞彙』蒙古文語索引 附：滿洲文語索引』(東北大学東北アジア研究センター、2012 年 1 月、300 頁)
- 2) 『『元朝秘史』傍訳漢語索引』(東北大学東北アジア研究センター、2012 年 1 月、582 頁)

研究論文 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- 1) 「近代モンゴル語辞典の成立過程 — 清文鑑から『蒙漢字典』へ」(東北大学東北アジア研究センター『東北アジア研究』第 16 号、2012 年 2 月、127-147 頁)
- 2) 「『御製滿珠蒙古漢字三合切音清文鑑』中以漢字転写の蒙古語特征」(中国語)《首届中国少数民族古籍文献国际學術研討会論文集》民族出版社、2012 年月、258-265 頁。

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見などについて

研究論文「近代モンゴル語辞典の成立過程 — 清文鑑から『蒙漢字典』へ」においては、18世紀清朝の時代から、20世紀前半に至るまでの期間に編纂されたいくつかの「モンゴル語辞典」の内容と体裁を比較することによって、「近代モンゴル語辞典」が成立していく過程を明らかにした。「近代モンゴル語辞典」の成立に対しては、満洲帝国の国家事業として編纂された「清文鑑」と呼ばれる満洲語の辞典が重要な役割を果たしている。「清文鑑」にはいくつかの種類があるが、中でも重要なのは、満洲語とモンゴル語および漢語（中国語）の対訳辞典であり、初期の「モンゴル語辞典」は「清文鑑」の内容をそのまま継承しながらモンゴル語を見出し語にすることによって作られたものであった。モンゴル語史の中で、清朝の時代のモンゴル語の言語実態はほとんど知られていないのが実情であるが、本研究は具体的な文献資料によりながら辞書編纂史と語彙研究の分野に光を当てることによって、新たに近代モンゴル語研究の領域を開拓した。

岡 洋樹 OKA Hiroki 教授

生年月日 / 1959 年 07 月 21 日

東北アジア研究センター基礎研究部門モンゴル・中央アジア研究分野

出身学校

早稲田大学・文学部・東洋史学科 1984 年卒業

出身大学院

早稲田大学・文学研究科・史学（東洋史）博士課程 1991 年単位取得満期退学

取得学位

修士（文学）早稲田大学 1986 年

博士（文学）早稲田大学 2005 年

略歴

1990 年～1992 年 早稲田大学文学部 助手
 1992 年～1993 年 群馬大学教育学部 非常勤講師
 1992 年～1996 年 早稲田大学第二文学部 非常勤講師
 1993 年～1996 年 日本学術振興会 特別研究員（PD）
 1996 年～1996 年 日本国外務省研修所 講師
 1996 年～1996 年 日本大学法学部 非常勤講師
 1996 年～1996 年 東京外国語大学 非常勤講師
 1996 年～2006 年 東北大学東北アジア研究センター 助教授
 1997 年～現在 東北大学大学院国際文化研究科 助教授
 2000 年～2001 年 東北学院大学文学部 非常勤講師
 2005 年～2008 年 尚絅学院大学総合人間科学部 非常勤講師
 2006 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 教授

研究経歴

1997 年～1999 年 「比丁冊」をつうじて見た清代モンゴルの盟旗制度の実態に関する研究
 1997 年～2000 年 モンゴルにおける交易拠点の研究
 1997 年～2000 年 モンゴルにおける関帝信仰の研究
 1999 年～2001 年 清代公文書史料による内モンゴル旗社会の研究
 2001 年～2002 年 戦間期モンゴルの政治・社会システムの研究
 2002 年～現在 モンゴルにおける環境変動と遊牧社会の研究

2007 年～ 2009 年 モンゴルにおける歴史記述に関する研究

所属学会

史学会、内陸アジア史学会、東方学会、日本モンゴル学会、早稲田大学東洋史懇話会、東北大学国際文化学会、満族史研究会

所属クラスター

21 世紀人間・社会クラスター、基礎・萌芽研究クラスター

専門分野

モンゴル史

研究課題

- ・清代モンゴルの行政制度
- ・前近代モンゴルの社会構造の研究
- ・古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証
- ・モンゴルにおける歴史的環境変動と遊牧社会の研究
- ・モンゴルにおける歴史認識と学術・教育動向の研究
- ・戦間期モンゴルの政治・社会システムの改編

研究キーワード

モンゴル、清朝、社会構造

担当授業科目（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

（全学教育）

モンゴル語Ⅱ 2002 年～現在

モンゴル語Ⅰ 2002 年～現在

基礎ゼミ 2009 年～現在

歴史学 2010 年度

（大学院教育）

内陸アジア地域史論 2003 年～現在

内陸アジア文献研究 2003 年～現在

地域環境・社会システム学修士研修 2003 年～現在

博士インターンシップ研修 2003 年～現在

地域環境・社会システム学セミナー 2003 年～現在

地域環境・社会システム学博士セミナー 2003 年～現在

地域環境・社会システム学博士研修 2003 年～現在

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

基盤研究(A) 2011 年 4 月～ 2015 年 3 月

〔東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的現在的研究〕

本年度の活動

昨年度は、地震の発生にともなう大学暦の変更により、前期の活動は大きく制約された。昨年度の活動は以下である。

- (1) 科研費基盤研究(A)による中国・モンゴルでの資料調査。現地研究者との研究交流。
- (2) 2012 年 3 月 6 日中国内蒙古師範大学主催「慶祝内蒙古師範大学建校六十周年蒙古学研究系列学術活動蒙古歴史文化研討会」において「关于清代蒙古基层社会研究相关问题」にて発表。
- (3) 2012 年 3 月 5 日内蒙古師範大学歴史学院で講演
- (4) 2012 年 3 月 7 日内蒙古大学蒙古学学院において「天聰 8 年 10 月のションホルにおける八旗・外藩会盟に関する一考察 — 牧地劃定の問題を中心に — 」と題して講演。
- (5) 2012 年 3 月 21 日、共同研究「北アジアにおける帝国統治とその遺産に関する研究」研究会において「清初における『盟』について」と題して発表。

柳田 賢二 YANAGIDA Kenji 准教授

生年月日 / 1960 年 08 月 15 日

東北アジア研究センター基礎研究部門モンゴル・中央アジア研究分野

出身学校

東京外国語大学・外国語学部・ロシア語学科 1983 年その他

出身大学院

東京大学・人文科学研究科・露語露文学博士課程 1989 年単位取得満期退学

取得学位

文学修士東京大学 1986 年

略歴

1992 年～1993 年 東北大学教養部講師
 1993 年～1995 年 東北大学言語文化部講師
 1995 年～1997 年 東北大学言語文化部助教授
 1997 年～2007 年 東北大学東北アジア研究センター助教授
 2007 年～現在 東北大学東北アジア研究センター准教授（注：法改正による職名変更）

研究経歴

2001 年～2002 年 科研費（基盤研究(C)(2)）「旧ソ連高麗人の民族文化の継承と変遷に関する研究」研究代表者
 2005 年～2006 年 科研費（基盤研究(C)）「現代中央アジア少数民族における言語接触に関する研究」研究代表者
 2007 年～2009 年 科研費補助金（基盤研究(C)）「現代中央アジア諸国における民族間共通語としてのロシア語の地位に関する比較研究」研究代表者

所属学会

日本ロシア文学会、朝鮮学会

学会活動

日本ロシア文学会 東北支部事務局 2003 年～現在
 日本ロシア文学会 ロシア語教育委員 2008 年～現在

所属クラスター

21 世紀人間・社会クラスター、基礎・萌芽研究クラスター

専門分野

言語学、社会言語学、ロシア語学

研究課題

- ・現代ロシア語の音韻論的研究
- ・中央アジア多言語社会における言語接触に関する研究

研究キーワード

言語接触、中央アジア、ロシア語、クレオール、音韻論、音声学、朝鮮語

学内活動

学務審議会外国語委員会ロシア語教科部会長

全学男女共同参画委員（2009年4月～2011年3月）

担当授業科目（2011年4月～2012年3月）

（全学教育）

基礎ロシア語Ⅰ 2011年4月～2011年9月

展開ロシア語Ⅰ 2011年4月～2011年9月

展開ロシア語Ⅲ 2011年4月～2011年9月

基礎ロシア語Ⅱ 2011年10月～2012年3月

展開ロシア語Ⅱ 2011年10月～2012年3月

展開ロシア語Ⅳ 2011年10月～2012年3月

（大学院教育）

地域環境・社会システム学セミナー 2003年～現在

地域環境・社会システム学修士研修 2004年～現在

東北アジア対照音韻論（隔年開講） 2003年～2007年

言語システム論（隔年開講） 2008年～現在

地域環境・社会システム学博士セミナー 2006年～現在

その他研究活動（2011年4月～2012年3月）

現代中央アジア諸国における民族間共通語としてのロシア語に関するフィールドワーク（フィールドワーク）

本年度の研究成果の研究史上の意義・新発見

中心的な研究課題である中央アジア多言語社会でのロシア語の研究について言うと、2010年末頃、それまで親身の協力をいただいていたウズベキスタン国立タシケント東洋学大学日本語講座の教員集団と同大学当局との間で紛争が生じ、それまで交際のあった日本語教員全員が休職ないし辞職してしまうという不幸な事態が起こって

しまったことに触れざるを得ない。同大学は長期休職に入った Ibragimova 専任講師の後任として日本語を全く解さず、しかも腐敗の噂の絶えない者を日本語講座長に任ずるという驚くべき挙に出たとのことであり、まことに残念ながら、少なくとも Ibragimova 氏が復権するまでは同大学との縁は切れてしまったと言わざるを得ない。

こうした不幸な状況を現地協力者からのメールで聞いていたものの、2011 年 9 月下旬にはタシケントを訪れ、ウズベキスタン科学アカデミー附属基盤図書館での資料収集を中心とする現地研究を行った。この資料収集は、中央アジアでのロシア語教育において「誤り」とされ、排除ないし矯正の対象とされてきた現象と現在の中央アジア多言語社会において民族間共用語（リングァフランカ）として用いられ続けているロシア語に固有の諸特徴との関係について今後具体的な文字資料に基づき解明するために行ったものである。同図書館においては同館所蔵の学校教員向け雑誌『言語と文学の教育法』（タシケント刊）および『民族学校におけるロシア語』（モスクワ刊）についてソ連時代の 1950 年代から 1991 年のウズベキスタン独立を経て 2000 年代に至るまでの全号の目次頁を撮影することができ、また、同館には僅かしか所蔵されていないが、ソ連時代に同地の地方出版物として『ウズベク語学校でのロシア語』というこの研究において最も重要な資料となる可能性のある雑誌が存在した事実を確認した。

ソ連時代のタシケントにおいて現地のロシア語教師向けの雑誌が刊行されていたことを事前に予想したので今回は図書館における資料収集を中心としたのであるが、この現地調査によって確かにそうした雑誌が存在したことが確認され、また、そのうちの大部分について掲載論文の検索と現地協力者を通じての文献複写が可能となった。上出の『ウズベク語学校でのロシア語』については 1960 年代の数分しかその内容を確認できなかったが、この雑誌には研究上重要な資料が掲載されている可能性が最も高いので、次回調査時に同国最大の図書館である国立ナヴォイ図書館（2011 年秋には移転・改築のため閉館中であった）および同国文化省図書館において所蔵全号の目次を撮影し、研究上必要な論文については複写する意向である。

さらに、教え子である浅村卓生・駐タシケント日本大使館二等書記官の紹介によりタシケント世界言語大学のカユーモヴァ准教授の知遇を得ることができ、中央アジア・ロシア語に関する研究計画についての意見と助言を得るとともに、今後の研究への協力を約していただくことができた。

以下では、東日本大震災後 1 年間の教育活動について言及する。平成 23（2011）年度は震災直後の大混乱の中で始まった。川北合同棟が激しく被災したため本来の研究室への立ち入りが半年以上もの間原則禁止とされて図書館内の小部屋を仮研究室とせざるを得ず、その後プレハブの「さくら棟」に十分な面積の仮研究室を得ることができたものの、現在に至るまで本来の研究室と資料室にあった文献資料類を整理する

ことすらできずにいる。春から夏にかけては震災ストレスのため胃を患って体力がひどく落ちたが、このような状況にあればこそ、「震災を理由に学生教育の質を落とすことだけは絶対にしてはならない」ということを基本方針として校務に対処した。

大学院環境科学研究科における柳田の指導学生は休学中の1名のみであり、無事を確認した上で2カ月に1回程度面談して復学に向けての態勢を話し合うこと以外の指導は不要であったため、これについては本来の研究室から図書館内と「さくら棟」内の仮研究室内に持ち出した重要文献類だけで何とか事足りた。また、全学教育を行っている講義棟は幸い3年ほど前に耐震補強工事を行ったばかりであるため目立った被害はなく、全学教育ロシア語の諸科目については授業開始が1ヶ月遅れ、夏休みを大きく削減したタイトな学年歴に沿って行わねばならなかったにもかかわらず学年末には各学年とも前年度と同じ到達目標まで達することができ、また、学生の成績も平年と全く変わらぬ良好さを保つことができた。この点で上記基本方針を採ったことは正しく、また、被災直後の1年間において実に多くの不便さの中で教育の質を落とさず学生に対する責任を全うすることができたことは、それ自体が成果であったと考えている。

平成23年度の学生への教育について特筆すべきは、このような大災害の直後であったにもかかわらず、「自由聴講科目」とされて卒業単位に算入し得ないという扱いを受けている学部3・4年次学生向け「展開ロシア語Ⅲ・Ⅳ」の履修者がその前年の2名から5名へと急増したことである。本学でロシア語を学ぶ学生は理系学部も含めて選択必修である1年次においてさえ毎年20名程度であることを考えると2年次までに卒業要件を満たした上でロシア語の学習を継続する者が5名も残るということ自体がかなり驚くべきことであるが、このことは、露語・露文学の専攻が学士課程に一切ない本学においてもロシアやロシア文学に対して関心を持つ学生の潜在数は決して少なくないことを示す事実であると言えることができる。この学生たちに対しては学年末の2～3月に至るまで自主ゼミの形で補講を行い、ドストエフスキーの原文の文体を損なわず短縮編集された『白夜』のテキストを講読する段階にまで導くことができた。また、この科目の履修者のうち1名はロシア史研究を志して大学院文学研究科に進学した。ちなみに現時点で開講している平成24年度「展開ロシア語Ⅲ」についても前年と同じく5名の履修者がいるが、うち4名が文学部学生であり、さらにうち2名は言語学専修であるので、この科目が本学における露語・露文学およびロシア研究に対する関心の向上に寄与する可能性が表出してきたものと考えられるであろう。

以上

磯部 彰 ISOBE Akira 教授

生年月日 / 1950 年 08 月 07 日

東北アジア研究センター基礎研究部門中国研究分野

出身学校

東京学芸大学・教育学部・中等教員養成課程社会科 1973 年卒業

出身大学院

東北大学・文学研究科・中国学博士課程 1981 年単位取得退学

取得学位

文学博士東北大学 1995 年

文学修士東北大学

略歴

1981 年～1984 年 富山大学人文学部専任講師
 1982 年～1983 年 福井大学教育学部（非常勤）
 1984 年～1993 年 富山大学人文学部助教授
 1987 年 東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター（非常勤）
 1993 年～1996 年 富山大学人文学部教授
 1994 年 東北大学文学部（非常勤）
 1995 年 福井大学教育学部（非常勤）
 1996 年 信州大学人文学部（非常勤）
 1996 年～現在 東北大学東北アジア研究センター教授
 2001 年～2001 年 琉球大学法文学部（非常勤）
 2010 年～現在 早稲田大学演劇博物館客員研究員

研究経歴

1975 年～現在 西遊記の成立とその東アジアにおける展開の研究
 1977 年～1978 年 三春藩秋田家文書の研究
 1981 年～1986 年 大聖寺藩の漢学と漢籍の研究
 1985 年～現在 中国の宗教文学と地域文化に関する研究
 1987 年～1990 年 中国地方劇の成立と現況についての研究
 1993 年～現在 富山藩の漢学の研究
 1996 年～現在 上山藩藩校明新館の研究
 1997 年～2003 年 朝鮮版文選の版本研究

- 1998 年～ 2007 年 東アジア出版文化の研究
 2000 年～現在 明代宝巻に関する研究
 2002 年～ 2005 年 明治大正文学者芸術家関係資料の研究・編集
 2007 年～ 2010 年 東アジア出版文化国際研究拠点形成
 2008 年～現在 清朝宮廷演劇文化の研究

所属学会

日本中国学会、東方学会、日本道教学会、密教図像学会、東北中国学会

学会活動

日本道教学会 理事 2003 年～現在
 東方学会 評議員 2005 年～ 2011 年
 東方学会 学術委員 2012 年～現在

所属クラスター

基礎・萌芽研究クラスター

専門分野

近世中国の演劇と小説、明清の出版文化、日本伝存漢籍及び漢学研究

研究課題

- ・西遊記の東アジア展開研究
- ・富山藩及び上山藩旧蔵漢籍漢学の研究
- ・東アジア出版文化の研究
- ・明代教派系宝巻の物語摂取の研究
- ・明代嘉靖年間の出版システム
- ・明代嘉靖年間の出版と文学活動
- ・東アジア出版文化国際研究拠点形成事業
- ・清朝宮廷演劇文化の研究

研究キーワード

東アジア、出版文化、版本、地域文化、中国小説、絵本、儒仏道三教、西遊記、清朝
 内府演劇

学外の社会活動（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

東アジア出版文化の展示会（その他）2000 年 12 月～現在
 東北アジア研究センター・伊達市噴火湾文化研究所連携講演会（講演会・セミナー）
 2007 年 6 月～現在

行政機関・企業・NPO 等参加 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

中国社会科学院 (その他) 中国古代小説研究編集委員会 編委 2004 年 9 月～現在
高麗大学校中国学研究所編集委員 2008 年 5 月～現在

学内活動 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

東北アジア研究センター片平まつり実行委員会委員長 2011 年 4 月～2012 年 3 月

担当授業科目 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

(大学院教育)

比較文化史学課題研究 2000 年～現在

ユーラシア文化史特論Ⅲ・Ⅳ 2011 年 4 月～2010 年 3 月

ユーラシア文化史研究演習Ⅲ・Ⅳ 2011 年 4 月～2010 年 3 月

国際会議 発表・講演 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- ・第 3 セッション「[調和] への視座 — 韓日中 3 国協力事務所の役割」(パネルディスカッション) [2011 年 10 月 19 日、駐日韓国大使館韓中日 3 国協力事務所開所記念国際シンポジウム「平和と共同繁栄の新たな北東アジア時代に向けて」、ソウル新羅ホテル] 口頭 (招待・特別)

国内会議 発表・講演 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- ・玄奘取経伝説と明恵上人 [第 40 回奈良国立博物館夏季講座「玄奘三蔵とシルクロード」] (2011 年 8 月 24 日、奈良県文化会館国際ホール) 口頭 (特別)
- ・西遊記を中心とした浅野文庫漢籍類の特色 [広島市立中央図書館 (旧広島市立浅野図書館) 開館 80 周年記念講演会] (2011 年 10 月 1 日、広島市立中央図書館) 口頭 (特別)
- ・明清宮廷の視覚文化 — 全像金字西遊記絵本をめぐって — [第 11 回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会] (2012 年 2 月 4 日、富山大学人文学部) (一般)
- ・「明恵上人と西遊記物語」 — 日本と中国・朝鮮半島の心の交流 — [東北大学東北アジア研究センター・伊達市噴火湾文化研究所第 3 回学術交流連携講演会 — 仙台・亘理と伊達市との連携を強める —] (2012 年 3 月 18 日、だて歴史の杜カルチャーセンター) 口頭 (特別)

国内会議主催・運営 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- ・第 8 回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会 (2011 年 6 月 4 日、東京国立博物館平成館小講堂) [主催]
- ・第 9 回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会 (2011 年 9 月 12・13 日、箱根 強羅静雲荘) [主催]
- ・第 10 回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会 (2011 年 12 月 3 日、東京慶應義塾大学三田キャンパス北館 3 階大会議室・附属研究所斯道文庫) [主催]

- ・第11回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会（2012年2月4日、富山富山大学人文学部）[主催]

その他研究活動（2011年4月～2012年3月）

- 富山藩漢学・漢籍及び藩学校の資料調査と研究（その他）1982年～現在
- 東アジア出版文化の調査研究（その他）1999年～現在
- 清朝宮廷演劇の調査研究（その他）2008年～現在

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2011年4月～2012年3月）

- 特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」（研究代表者）2008年6月～現在

その他の競争的資金獲得実績（2011年4月～2012年3月）

- 東北アジア研究センター・プロジェクト研究部門・研究ユニット「東アジア出版文化」研究ユニット 2010年～現在
- 東北アジア研究センター・共同研究「東アジア近世社会における出版文化の意義」2010年～現在

著書（2011年4月～2012年3月）

- 1) 旅行く孫悟空 — 東アジアの西遊記 — （執筆担当部分）全体。[塙書房、2011年9月] 磯部彰
- 2) 『西遊記』画三種の原典と解題（執筆担当部分）全体。[特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」班（代表：磯部彰）、2012年3月] 磯部彰

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」では、数度の研究会を経て連台大戯（長編戯曲作品）五種及び節戯類の大要がまとめられた。連台大戯の作品は、明代小説の繁本を底本とするが、関連する元明の雜劇などを組み入れて内容を充実する傾向にあることが明らかにされた。昇平署の檔案からは、内廷承応戯で用いられる劇本は、連台大戯から抜粋した折子戯が中心で、国家事業での演目とは区別されることが多い点も判明している。また、南府・昇平署演劇本には総本などの用途に応じたテキストがあり、今回その分類が定義づけられた。この他、「中国地方戯曲集成」の編集と人民共和国の文教政策の係わり合いも明らかにされた。革命的京劇も単なる現代ペキンオペラではなく、清朝宮廷演劇の言わば現代版であり、国家権力と深い関係にあると分析された。

ユニット研究の東アジア出版文化関係では、広島市立中央図書館浅野文庫本の総合調査が実施され、出版と社会形成の関係についてのデータ収集が行なわれた。この結果、浅野家初代から三代まで、長政・幸長・長晟は、朝鮮戦線のために地理書を収集する一方、豊臣政権から徳川政権に移行する際、大義名分・忠君思想を検証するため

に儒学書を幅広く収集したことが判明した。とりわけ、朱子学系の儒教書以外、王学左派の李卓吾の著書や三教合一思想関係の書籍も収集したことから、豊臣・徳川両権力構造での浅野家の立場を儒学的見地から位置づけようとしたことが蔵書構成から裏付けられるのではないかという仮説が立てられるに到った。つまり、大名家の蔵書の書目分類から、時に国家権力における家門のあり方や位置を窺い知ることが出来るのではないか、という視点が導き出された。この仮説を証明するには資料的、蔵書残存量などで制約も多いが、江戸初期から続く大藩の例を比較すると、大枠として捉えられる可能性もある。興味深いのは浅野家と伊達家、前田家という豊臣家と特異な関係にある大藩の場合、蔵書構成が類似する点が見て取れ、伝本の多寡は別としても、朝鮮本、儒学書、兵法書などの面で共通する傾向が窺われる。初期の林大学頭家も似た蔵書構成を取ることは、当時の漢学に対し、戦国大名や武士団からの一つの期待、つまり主従関係の名分化への要望があったと推測される。

瀬川 昌久 SEGAWA Masahisa 教授

生年月日 / 1957 年 09 月 10 日

東北アジア研究センター基礎研究部門中国研究分野

出身学校

東京大学・教養学部・教養学科・文化人類学 1981 年卒業

出身大学院

東京大学・社会学研究科・文化人類学修士課程 1983 年修了

東京大学・社会学研究科・文化人類学博士課程 1986 年中退

取得学位

教養学士東京大学 1981 年

社会学修士東京大学 1983 年

学術博士東京大学 1989 年

略歴

1986 年～1989 年 国立民族学博物館助手

1989 年～1993 年 東北大学教養部助教授

1993 年～1996 年 東北大学文学部助教授

1993 年～1996 年 東北大学大学院国際文化研究科助教授

1996 年～現在 東北大学東北アジア研究センター教授

1996 年～2003 年 東北大学大学院国際文化研究科教授

2007 年～2009 年 東北大学東北アジア研究センター長

所属学会

日本文化人類学会（日本民族学会より 2004 年 4 月に名称変更）

学会活動

日本文化人類学会（日本民族学会より 2004 年 4 月に名称変更）評議員（1994～1995、2002～2003、2006～2010）1994 年～2010 年

日本文化人類学会（日本民族学会より 2004 年 4 月に名称変更）理事（1994～1995、2002～2003、2006～2009）1994 年～2010 年

所属クラスター

21 世紀人間・社会クラスター

専門分野

文化人類学

研究課題

- 宗族組織の人類学的研究
- 華南漢族のエスニシティー
- 中国の「民族」の文化人類学的研究

研究キーワード

親族、エスニシティー、華南、地方文化

学外の社会活動（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

京都大学地域研究統合情報センター運営委員（その他）2007 年 4 月～現在

東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所運営委員（その他）2009 年 4 月～現在

学内活動（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

大学情報データベース部局作業班会議委員 2003 年 12 月～ 2007 年 3 月

コラボレーションオフィス運営委員会（文系所部局連携）2009 年 4 月～現在

学位授与数（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

博士 1 人

修士 1 人

担当授業科目（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

（全学教育）

文化人類学 1989 年～現在（2004 年以降は原則隔年）

（大学院教育）

東北アジア地域社会論・環境社会人類学セミナー 2003 年～現在

地域環境・社会システム学セミナー 2003 年～現在

東北アジア社会人類学 2003 年～現在

地域環境・社会システム学博士研修 2003 年～現在

（他大学）

岩手大学（文化人類学普通講義） 1996 年～現在（隔年）

東北文化学園大学（文化人類学） 1999 年～現在

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

基盤研究(C) 2008 年 4 月～ 2012 年 3 月 [中国南部少数民族の族譜に関する文化人類学的研究]

著書（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

- 1) 近現代中国における民族認識の人類学（執筆担当部分）全体編集（270 頁）、執筆（はじめに、第 1 章、第 7 章、おわりに）。[昭和堂、(2012) 1 月] 瀬川昌久、曾士才、

西澤治彦、松岡正子、塚田誠之、長谷川清、菊池秀明、上野稔弘

- 2) 客家の創生と再創生（執筆担当部分）全体編集、序論、第1章。[風響社、(2012)2月] 瀬川昌久、飯島典子（共編）

研究論文（2011年4月～2012年3月）

- 1) 氏姓のポリティクス — 現代中国における文化資源としての族譜とその活用。[東北アジア研究、16、(2012)、199-216] 瀬川昌久

本年度の研究成果

- ① 『近現代中国における民族認識の人類学』（瀬川昌久編、昭和堂、2012年1月30日発行、270頁）を出版した。同書は一昨年度終了の科研費プロジェクト（基盤研究(B)「中国の民族理論と民族間関係の動態 — 文化人類学的視点からの検証」）ならびにセンター共同研究プロジェクト（「中国の民族理論とその政策的実践の文化人類学的検証 — 中華民族多元一体構造論を中心に — 」）の成果である。中国の民族学者＝社会人類学者・費孝通の民族理論を批判的に検証しつつ、民族接触の現場における民族認識のあり方を具体事例に基づきつつ分析したものであり、これまでの文化人類学的中国研究においては類例のない画期的な研究成果である。
- ② 『客家の創生と再創生』（瀬川昌久・飯島典子編、風響社、2012年2月20日発行、240頁）を出版した。同書は本センターの共同研究「客家研究の総括と展望」の研究成果であり、また本年度の科研費・研究成果公開促進費に採択されたものである。従来の客家研究は、客家の文化的・社会的特殊性に関する言説を構築しようとする研究か、またはそれを批判・解体しようとする研究に尽きていたが、本研究はそうした客家特殊論の構築過程および脱構築過程そのものを社会現象の一部として捉え、それを客観的に分析・検討することを通じて、そうした過程の中に存在する真正性構築の文法規則のようなものを解明しようとする研究であり、その新規性は頗る高い。客家研究およびエスニシティー研究一般における新たなパラダイム創出を目指した意欲的な研究である。
- ③ 本センターのプロジェクト研究ユニット「東アジアにおける移民の比較研究ユニット」を主催し、本学大学院教育学研究科の李仁子准教授とともに同研究を推進した。同プロジェクトは最終年度であり、研究成果のとりまとめのほか、外部評価者からの評価も実施した。
- ④ 本センターが編集発行する学術雑誌『東北アジア研究』の編集主任を務め、原稿募集から査読者との交渉、著者との編集連絡、印刷所との交渉等にあたり、学術論文13篇からなる同誌第16号を完成させた。本誌の原稿の完全公募化第1号であり、本格的学術雑誌としての編集体制と内容を確認することができた。

明日香 壽川（張 壽川） ASUKA Jusen（CHO Jusen） 教授

生年月日 / 1959 年 10 月 26 日

東北アジア研究センター基礎研究部門中国研究分野

出身学校

東京大学・農学部・農芸化学 1984 年その他

出身大学院

東京大学・工学系研究科・先端学際工学博士課程 1996 年単位取得満期退学

取得学位

農学修士東京大学 1986 年

経営学修士欧州経営大学院 1990 年

学術博士東京大学 2000 年

略歴

1987 年～1988 年 スイス実験外科医学研究所 研究員

1990 年～1992 年 ファルマシア・バイオシステムズ(株)日本支社 企画管理部経営企画課プロジェクトマネージャー

1996 年～1997 年 電力中央研究所

1997 年～2004 年 東北大学東北アジア研究センター 助教授

2002 年～2003 年 京都大学経済研究所 客員助教授

2004 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 教授

所属学会

環境経済・政策学会、環境社会学会、国際アジア共同体学会、アジア政経学会、計画行政学会、国際開発学会

学会活動

中国環境問題研究会（代表）2006 年～現在

所属クラスター

地球・環境クラスター

専門分野

環境エネルギー安全保障、環境エネルギー政策、アジアの環境問題

研究課題

経済発展が目覚ましいアジア地域の環境問題およびエネルギー問題に関して、その実態および歴史的経過を解明するとともに、現在この地域でどのような国際協力が可能か、などの問いについて総合的かつ多角的に研究を行う。特に、地球温暖化問題や越境大気汚染問題のような、一国だけでは解決できない問題における条約、協定、議定書、そして環境税や排出量取引などの国内外における具体的な制度設計や政策のあり方に関して、政治学、経済学、経営学、社会学、哲学、倫理学などの社会科学の側面から追求し評価する。

研究キーワード

国際エネルギー環境協力、地球温暖化問題、排出量取引、クリーン開発メカニズム、環境 ODA、中国の環境エネルギー問題

学外の社会活動（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

Climate Policy 査読

エネルギー・資源学会誌 査読

Environmental Economics and Policy Studies 査読

行政機関・企業・NPO 等参加（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

地球環境戦略研究機関気候変動グループ ディレクター

(社) 海外環境協力センター (理事)

朝日新聞朝日アジアネットワークフェロー (2008 年～)

環境省：中央環境審議会地球環境部会排出量取引制度小委員会 (2010 年～)

環境省：柔軟性メカニズムプロジェクト支援委員会 (2010 年～)

環境省：気候変動影響統計整備ワーキング・グループ委員 (2010 年～)

環境省：特定者間完結型カーボン・オフセット検討会委員会委員 (2010 年～)

環境省 (国) 地球温暖化問題将来枠組地球環境戦略機関 (IGES) ワーキンググループ委員 2005 年 4 月～現在

環境省 (国) CDM/JI プロジェクト支援委員会委員 2007 年 3 月～現在

(社) 海外環境協力センター (その他) 理事 2007 年 4 月～現在

日本郵便 (その他) カーボン・オフセット年賀寄附金審査委員 2007 年 4 月～現在

学内活動（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

学務審議会委員

入試実施委員会

学位授与数（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

1 名 (修士)

担当授業科目 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

全学教育「科学技術とエネルギー」

環境科学研究科「環境科学政策論」

文学研究科「環境科学社会政策論」

国際会議 発表・講演 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

China-Japan Workshop on Climate Policies towards a Low Carbon Future, Jan 2011. 北京 ほか

国内会議 発表・講演 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

2011 年度 環境経済・政策学会など

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

基盤研究(C) 2010 年 4 月～現在

[排出量取引制度が企業の国際競争力に与える影響の分析]

研究論文 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

明日香壽川、2012、日本の環境外交の死んだ日、『世界』、岩波書店、2012 年 4 月号、p.57-66

総説・解説記事 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

Asuka, Jusen. 2011/11. Hayama Proposal: Post 2013 International Framework on Climate Change.

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

本年度は、1) 中国の温暖化政策の評価、2) 温暖化国際交渉の展開、3) 炭素制約と国際競争力、4) 再生可能エネルギーのポテンシャル、5) 温暖化対策と大気汚染の共便益、などについて検討を行い、文章や論文を発表した。特に、中国に関しては、その温暖化政策に関して、国際交渉という側面から詳細に議論した。また、企業の国際競争力に関しては、国境税調整などの具体的な政策の効果および効率についてモデルを使って議論した。さらに、温暖化対策と大気汚染の共便益に関しては、中国などの途上国においては、日本などの先進国と比較して、温暖化対策よりも大気汚染対策の優先順位のより高いことが定量的な費用便益分析で明らかにした。

上野 稔弘 UENO Toshihiro 准教授

生年月日 / 1965 年 09 月 11 日

東北アジア研究センター基礎研究部門中国研究分野

出身学校

筑波大学・比較文化学類・比較・地域文化学 1988 年卒業

出身大学院

筑波大学・歴史・人類学研究科・東洋史博士課程 1997 年単位取得満期退学

取得学位

文学士筑波大学 1988 年

文学修士筑波大学 1990 年

略歴

1997 年～1998 年 千葉大学非常勤講師

1997 年～2001 年 文部省初等中等教育局 教科書調査官心得

1998 年～2001 年 東京女学館短期大学非常勤講師

2001 年～2007 年 東北大学東北アジア研究センター 助教授

2007 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 准教授（職階名変更による）

所属学会

日本現代中国学会、歴史人類学会、アジア政経学会、社会文化史学会、東アジア地域研究学会

所属クラスター

21 世紀人間・社会クラスター、基礎・萌芽研究クラスター

専門分野

中国現代史、地域研究、文化人類学（含民族学・民俗学）

研究課題

- ・中国現代史における民族問題
- ・公文書活用による中国民族問題研究

研究キーワード

中国、民族、民族問題、少数民族、民族政策、民族関係、民族史

学内活動（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

外国語委員会中国語・朝鮮語部会委員 2001 年 4 月～現在

外国語委員会学習環境専門部会委員 2001 年 4 月～現在
外国語委員会中国語・朝鮮語部会長 2006 年 4 月～現在
外国語委員会カリキュラム専門部会委員 2006 年 4 月～現在

担当授業科目 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

(全学教育)

基礎中国語Ⅰ (工学部 1-5 組対象) 2005 年～現在
展開中国語Ⅰ (経済学部対象) 2010 年～現在
基礎中国語Ⅰ (経済学部 5・10 組対象) 2010 年～現在
基礎中国語Ⅱ (工学部 1-5 組対象) 2005 年～現在
基礎中国語Ⅱ (経済学部 5・10 組対象) 2010 年～現在
展開中国語Ⅱ (経済学部対象) 2010 年～現在

(大学院教育)

地域環境・社会システム学修士セミナー 2003 年～現在
地域環境・社会システム学修士研修 2003 年～現在
博士インターンシップ研修 2003 年～現在
地域環境・社会システム学博士研修 2003 年～現在
地域環境・社会システム学博士セミナー 2003 年～現在

その他研究活動 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

台湾における民国期民族政策文献の検索・収集 (フィールドワーク) 2003 年～現在
米国研究機関等所蔵の中国民国期民族政策文献の検索・収集 (フィールドワーク)
2008 年～現在
英国諸機関所蔵の中国边疆民族問題関係資料の検索収集 (フィールドワーク) 2010
年～現在

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

基盤研究(B) 2009 年 4 月～現在 (研究代表者)
[1920-40 年代の中国・ソ連における民族政策の比較研究]

著書 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

- 1) 近現代中国における民族認識の人類学 (執筆担当部分) 第Ⅱ部第 9 章中国の国家民族論の系譜における中華民族多元一体構造論の位置づけについて 253 頁～ 26 頁。[昭和堂、(2012) 1 月] 瀬川昌久、曾士才、塚田誠之、西澤治彦、松岡正子、長谷川清、菊池秀明、上野稔弘

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2011 年度は昨年度に引き続き海外での調査活動による民国期中国の边疆民族問題に関する資料収集を精力的に進めた。英国立公文書においては新疆・モンゴルをめぐる中ソ関係に関連する英国政府外交文書を閲覧・収集する機会を得た。また米国では国立公文書館所蔵の戦後中国の边疆民族問題に関する公文書史料を収集したほか、議会図書館が所蔵するオーウェン・ラティモア文書の中から彼が蒋介石の顧問として中国に赴任した際に提出した边疆民族問題に関する提案書の英文原稿などを閲覧した。これらの一次史料により、中国国内での公文書館の利用制限により未解明の部分が多い中華民国期の边疆民族問題についての理解・分析が促進することが期待される。これら閲覧・収集した史料群については、成果公表に向け整理・分析も並行して進めている。

平川 新 HIRAKAWA Arata 教授

生年月日 / 1950 年 10 月 22 日

東北アジア研究センター基礎研究部門日本・朝鮮半島研究分野

出身学校

法政大学・文学部・史学科 1976 年卒業

出身大学院

東北大学・文学研究科・国史学専攻修士課程 1980 年修了

取得学位

文学修士東北大学 1980 年

博士（文学）東北大学 1995 年

略歴

1981 年～1983 年 東北大学文学部 助手

1983 年～1985 年 宮城学院女子大大学 講師、助教授

1985 年～1993 年 東北大学教養部 助教授

1993 年～1996 年 東北大学文学部 助教授

1996 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 教授

2005 年～2007 年 東北アジア研究センター長

研究経歴

1981 年～現在 日本近世交通史・流通史の研究

1985 年～現在 伝説・伝承の研究

1989 年～現在 日本近世の官僚論・地域社会論

1998 年～現在 日露関係史の研究

2003 年～現在 歴史資料保全研究と実践

所属学会

歴史学研究会、日本史研究会、歴史科学協議会、東北史学会、交通史研究会、史学会、
地方史研究協議会

学会活動

交通史研究会委員 1983 年～

東北史学会評議員 1985 年～

所属クラスター

21 世紀人間・社会クラスター

専門分野

江戸時代史

研究課題

江戸時代史、日口関係史、歴史資料保全

研究キーワード

江戸時代史、地域社会論、民意政治、日口関係史、漂流民

学外の社会活動（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

- 東北大学による東日本大震災 1 ヶ月後緊急報告会、東北大学防災科学研究拠点主催、
トラスティシティ カンファレンス・仙台、2011 年 4 月 13 日
論題「3.11 大震災と歴史遺産の被害」
- 東日本大震災『森は海の恋人運動』を緊急支援する研究会 国際日本文化研究センター安田喜憲研究室、一関ホテルサンルート、2011 年 5 月 1 日
論題「歴史と伝統文化の立場から」
- 東北大学サイエンスカフェ 河北新報社 1 階ホール 2011 年 5 月 13 日
論題「大震災から歴史遺産を守る」
- 史料保存利用問題シンポジウム、日本歴史学協会・日本学術会議史学委員会主催、
学習院大学、2011 年 6 月 25 日
論題「東北関東大震災と歴史資料の救出」
- 東日本被災文化資料救援活動「水損資料の取扱いに関するワークショップ」、仙台
市埋蔵文化財センター（向田文化財整理展示室）、7 月 2 日
論題「被災史料のレスキュー」
- 仙台豊齢学園、2011 年 7 月 4 日
論題「山本周五郎『樅ノ木は残った』と伊達騒動」
- でんでん宮城いきいきネット、7 月 14 日
論題「政宗の仙台防衛戦略と徳川幕府」
- こうちミュージアムネットワーク研修会、高知県立文学館、8 月 5 日
論題「東日本大震災から古文書を守る！ ― 史料保全の現場から ―」
- いろは姫の会、五郎八姫の里まつり、落合市民センター、2011 年 9 月 4 日
論題「いろは姫の婿・松平忠輝と伊達政宗」
- 仙台豊齢学園、2011 年 9 月 16 日
論題「伊達政宗と仙台城下町の成り立ち」
- 仙台市史セミナー「特別企画 地域の歴史資料を救え」、2011 年 9 月 18 日
論題「歴史資料の保存はなぜ必要か」

- 土蔵メモリアル交流会、石巻市門脇町本間家土蔵前、2011 年 9 月 24 日
論題「土蔵を残す意義について」
- 岩沼市講演会 震災復興祈念講演会、岩沼市民会館、2011 年 9 月 25 日
論題「災害への備え、戦への構え」
- 東北大学大学院環境科学研究科 震災フォーラム、仙台国際センター、2011 年 10 月 8 日
論題「大震災から歴史遺産を守る！」
- 津山洋学資料館 2011 年 10 月 23 日、日本人再発見シリーズ 岡山県津山市
論題「江戸時代の日本は『帝国』だった」
- 情報保存研究会シンポジウム「資料を護り継ぐ」、江戸東京博物館、2011 年 10 月 25 日
論題「東日本大震災と歴史資料の救出」
- 広瀬文化センター開館 20 周年祈念「平川新歴史講演会 & アニバーサリーコンサート 復興への願いをこめて」、2011 年 10 月 29 日
論題「たくましく生きるみちのく ― 歴史に見る東北の力 ―」
- 東北大学附属図書館創立百周年祈念企画展講演会、2011 年 10 月 30 日
論題「江戸時代の日本は『帝国』だった」
- 地域研究コンソーシアム、平成 23 年度 JCAS 年次集会シンポジウム、大阪大学、2011 年 11 月 5 日
論題「東日本大震災と歴史資料のレスキュー」
- 広瀬郷土史探訪会、2011 年 11 月 22 日、広瀬市民センター
論題「伊達政宗の仙台防衛戦略と徳川家康」
- 東北学院大学シンポジウム「大震災を越えて」、2011 年 12 月 3 日、東北学院大学
アジア流域文化研究所、パネラー
- 国公立大学フォーラム「地域歴史文化の育成支援拠点としての国公立大学」、神戸大学、2011 年 12 月 11 日
論題「東北大学の取り組み」
- 人間文化研究機構第 6 回人間文化研究情報資源共有化研究会「人間文化研究情報資源の保全と資源共有化の課題」、人間文化研究機構立川事務所、2011 年 12 月 16 日
論題「歴史資料保全のための国家的課題 ― 古文書を千年後まで残すために ―」
- 弘前学院大学講演会、2011 年 12 月 17 日
論題「東日本大震災と歴史資料の救出」
- 平成 23 年度保存科学研究集会「被災文化財のレスキュー ― 保存科学の果たすべき役割と課題 ―」、奈良文化財研究所、2011 年 12 月 21 日
論題「歴史資料の救済と保存科学の接点」

- 史料保存・活用研究会講演会、三重県歴史文化資産保存活用連携ネットワーク、三重県総合文化センター、2012年1月20日
論題「歴史資料を守るための取り組み」
- 全国街道交流会議第8回全国大会「浜松大会」アクトシティ浜松、2011年1月12日
論題「街道に刻まれた災害の歴史に学ぶ」
- 国立大学附置研究所・センター長会議、特別シンポジウム「創造的復興に向けた未来都市のあり方」、2012年2月10日、ウェスティンホテル仙台
論題「歴史資料のレスキューと東北大学の取り組み」
- 国連大学セミナー グローバルセミナー東北「災害復興と生態適応」、東北大学さくらホール 2012年2月16日
論題「歴史文化をめぐる多様性の危機」
- 高森市民センター 高森塾、2012年2月24日
論題「歴史にみる みちのくの力 ― 苦難を乗り越えて未来へ ―」
- 国立教育政策研究所 「地域教育力を高めるボランティアセミナー」、同研究所、2012年3月2日
論題「未来へつなぐ地域の歴史」
- 国立歴史民俗博物館公開シンポジウム「文化遺産の復興を支援する」、2012年3月18日
論題「歴史資料と災害への備え」
- 東京都杉並区文化財保護ボランティア研修会、2012年3月20日、杉並区立郷土博物館
論題「来るべき震災から歴史資料を守るために」
- 文化庁主催シンポジウム「文化財レスキュー事業の今後を考える」、パネラー、2012年3月24日、文部科学省東館講堂

行政機関・企業・NPO 等参加（2011年4月～2012年3月）

- 仙台市史編集専門委員会委員 1995年4月～現在
- NPO 地域研究応用センター（NPO）理事 2003年4月～現在
- 東北歴史博物館協議会委員 2005年9月1日～2011年8月31日
- 同 副委員長 2010年2月～2011年1月
- 同 委員長 2012年2月～現在
- 北東アジア研究交流ネットワーク副代表幹事 2006年1月～現在
- 国際日本文化研究センター共同研究会研究員 2006年4月～2012年3月
- NPO 宮城歴史資料保全ネットワーク理事長 2007年2月～現在
- 仙台城跡調査指導委員会委員 2008年10月～現在

東北芸術工科大学：文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「東北地方における生業・環境・技術に関する歴史動態的総合研究」外部評価委員 2009 年 5 月～2012 年 3 月

瑞巖寺修理専門委員会委員 2010 年 2 月～現在

宮城県慶長使節船ミュージアム企画運営委員 2010 年 4 月～2012 年 3 月

仙台市史編集専門委員会委員長（2010 年 4 月～）

仙台市史編纂委員会委員（2010 年 4 月～）

宮城県地域伝統文化活性化推進委員会委員（2010 年 8 月～2012 年 3 月）

文部科学省文化審議会文化財部会専門委員（2011 年 2 月 27 日～2012 年 2 月 28 日）

学内活動（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

東北大学防災科学研究拠点 代表

担当授業科目（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

（全学教育）

歴史と人間社会 2001 年～現在

（大学院教育）

東アジア歴史論 2003 年～現在

地域環境・社会システム学修士研修 2003 年～現在

博士インターンシップ研修 2003 年～現在

地域環境・社会システム学研修 2003 年～現在

地域環境・社会システム学博士研修 2003 年～現在

日本社会史論 2003 年～現在

地域環境・社会システム学セミナー 2003 年～現在

著書（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

1) 『歴史遺産を未来へ』（佐藤大介と共編著）、全 99 頁、東北アジア研究センター、2011 年 12 月

2) 『よみがえる町の記憶 — 通町・堤町・北山界隈の歴史 —』（編）、全 138 頁、東北アジア研究センター報告 4 号、2012 年 2 月

研究論文（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

1) 「東日本大震災と歴史の見方」『歴史学研究』884 号、歴史学研究会、2011 年 10 月

2) 「古文書を千年後まで残すための取り組み」『歴史遺産を未来へ』（佐藤大介と共編著）、全 99 頁、東北アジア研究センター、2011 年 12 月

平成 23 年度の活動の特色

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災をうけて、東北アジア研究センターの歴史資料保全研究プロジェクト、および東北大学防災科学研究拠点の歴史資料保全プロジェクトは、NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワークおよび文化庁のもとに設置された被災文化財等救援委員会と連携して、被災地全般において歴史資料や文化財のレスキュー事業を展開した。

石井 敦 ISHII Atsushi 准教授

生年月日 / 1974 年 09 月 25 日

東北アジア研究センター基礎研究部門日本・朝鮮半島研究分野

出身学校

東京工業大学・工学部・機械科学科 1997 年卒業

出身大学院

筑波大学・社会工学研究科・都市・環境システム専攻博士課程 2001 年中退

取得学位

経済学修士（経済学）筑波大学 1999 年

略歴

2001 年～2004 年 独立行政法人国立環境研究所 アシスタントフェロー

2004 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 准教授

研究経歴

1997 年～現在 地球温暖化対策のための国際交渉についての研究に従事

1997 年～2001 年 温室効果ガス削減のための国際協力プロジェクトについての研究に従事

2000 年～現在 国際環境レジームの科学アセスメントについての研究に従事

2003 年～現在 捕鯨の国際管理の問題に関する研究に従事

2004 年～現在 炭素隔離技術に関する政策研究に従事

2005 年～現在 地球温暖化に関連する政策的相互連関に関する研究に従事

2008 年～現在 地球温暖化の科学に関するマスメディアの研究に従事

2011 年～現在 国際漁業資源ガバナンスについての研究に従事

所属学会

環境経済・政策学会、科学技術社会論学会、日本国際政治学会、環境科学会、Society for Social Studies of Science、International Studies Association、International Association for Media and Communication Research

学会活動

環境経済 政策学会 理事 2012 年～2014 年

所属クラスター

地球・環境クラスター

専門分野

国際関係論、科学社会学・科学技術史、環境影響評価・環境政策

研究課題

- ・日本と北朝鮮との国際環境協力のあり方に関する研究
- ・国際環境レジームの科学アセスメントに関する研究
- ・日本の捕鯨外交と国際捕鯨管理の問題に関する研究
- ・地球温暖化の科学を報道するマスメディアに関する社会構築主義的研究
- ・炭素隔離技術に関する技術アセスメントと関連政策に関する研究
- ・地球温暖化に関連する政策的相互連関に関する研究に従事

研究キーワード

国際環境問題、科学アセスメント、科学技術社会学、外交科学、北朝鮮の環境問題、炭素隔離技術、マスメディア

学外の社会活動

気仙沼高校生徒の大学体験会（主催：気仙沼地域教育支援プロジェクト；共催：東北大学、東北大学地域復興プロジェクト“HARU”）において模擬授業（「魚は本当に食卓からなくなるのか」）と模擬ゼミ（「メディア報道を疑ってみる」）を実施 2011年11月

学内活動（2011年4月～2012年3月）

東北アジア研究センター 編集出版委員会 2004年10月～現在

東北大学東北アジア研究センター ハラスメント等相談員 2005年4月～現在

東北大学東北アジア研究センター 北東アジア研究交流ネットワーク委員会 2006年4月～現在

環境科学研究科 地域環境 社会システム学コース 副コース主任 2011年4月～現在

担当授業科目（2011年4月～2012年3月）

（全学教育）

自然論 2005年～現在

（大学院教育）

地域環境・社会システム学修士セミナー 2005年～現在

地域環境・社会システム学修士研修 2005年～現在

科学技術論特論Ⅱ 2005年～現在

地域環境・社会システム学博士セミナー 2006年～現在

地域環境・社会システム学博士研修 2011年～2012年

国際会議 発表・講演 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- Where have all the climate skepticism gone? A discourse analysis of Japanese newspaper coverage on the IPCC[International Association for Media and Communication Research 2011] (2011 年 7 月 13 日～2011 年 7 月 17 日、トルコ、イスタンブール) 口頭 (一般)
- Japan as a Technocratic State: Analyzing Social Construction of Carbon Capture and Storage in Japan[2011 Annual Meeting of the Society for Social Studies of Science](2011 年 11 月 2 日～2011 年 11 月 5 日、アメリカ合衆国、オハイオ州クリーブランド) 口頭 (一般)

国内会議 発表・講演 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- 政策統合を目指して：日本とノルウェーの炭素隔離技術政策を評価する [環境経済政策学会 2011 年大会] (2011 年 9 月 23 日～2011 年 9 月 24 日、長崎市) 口頭 (一般)
- 排出量取引をめぐる日本の新聞報道の言説分析 [環境経済政策学会 2011 年大会] (2011 年 9 月 23 日～2011 年 9 月 24 日、長崎市) 口頭 (一般)
- 鯨類管理レジームの制度的相互連関：分析枠組みの再構築とその検証 [環境経済政策学会 2011 年大会] (2011 年 9 月 23 日～2011 年 9 月 24 日、長崎市) 口頭 (一般)

その他研究活動 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

第 18 回みなみまぐろ保存委員会 (フィールドワーク) 2011 年

第 22 回大西洋クロマグロ類保存国際委員会 (フィールドワーク) 2011 年

第 8 回中西部太平洋漁業委員会 (フィールドワーク) 2012 年

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

若手研究(B) 2010 年 4 月～2012 年 3 月

[炭素隔離技術のマスメディア報道に関する定量的定性的研究]

基盤研究(A) 2011 年 4 月～現在

[レジームコンプレックスとしての国際漁業資源管理：意思決定要因と有効性分析]

その他の競争資金獲得実績 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

その他寄附金 [気候変動の国際交渉における日本の環境外交とマスメディア報道との相互作用に関する分析] 2011 年 12 月～2013 年 1 月

著書 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- 1) 解体新書「捕鯨論争」.[新評論、(2011) 5 月] 石井敦
- 2) 生物多様性をめぐる国際関係 (執筆担当部分) 第 2 章 (生物多様性における科学と政治 — サメ類の資源管理を事例に —).[大学教育出版、(2011) 5 月] 石井敦

研究論文 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- 1) 地球温暖化の科学とマスメディア：新聞報道による IPCC 像の構築とその社会的含意。[科学技術社会論研究、(8)、(2011)] 朝山慎一郎、石井敦
- 2) Scientists Learn not only Science but also Diplomacy: Learning Processes in the European Transboundary Air Pollution Regime. [Governing the Air: Science-Policy-Citizens Dynamics in International Environmental Governance, (2011)] Atsushi Ishii
- 3) The Social and Political Complexities of Learning in CCS Demonstration Projects. [Global Environmental Change, (2011)] Nils Markusson, Atsushi Ishii, Jennie C. Stephens
- 4) 鯨類管理レジームの制度的相互連関：分析枠組みの再構築とその検証。[国際政治、(166)、(2011)] 大久保彩子、真田康弘、石井敦
- 5) Exploring framing and social learning in demonstration projects of carbon capture and storage. [Energy Procedia, 4, (2011), 6248-6255] Jennie C. Stephens, Nils Markusson, Atsushi Ishii
- 6) Toward policy integration: Assessing carbon capture and storage policies in Japan and Norway. [Global Environmental Change, 21 (2), (2011)] Atsushi Ishii, Oluf Langhelle
- 7) 捕鯨問題の「見取り図」。[解体新書「捕鯨論争」(新評論)、(2011)] 石井敦
- 8) マスメディア報道が伝える「捕鯨物語」。[解体新書「捕鯨論争」(新評論)、(2011)] 佐久間淳子、石井敦
- 9) 日本の捕鯨外交を検証する。[解体新書「捕鯨論争」(新評論)、(2011)] 石井敦、大久保彩子

総説・解説記事 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- 1) Japan and the whaling issue: A viewpoint based on a review of "Whaling in Japan: Power, Politics, and Diplomacy" by Jun Morikawa. [Ocean and Coastal Management, (2011)] Atsushi Ishii

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2011 年度は、Elsevier 社が発行している Global Environmental Change 誌に査読付き論文 2 篇を掲載することができた。同誌は 2010 年度の Thomson ISI Impact Factor が 4.918 であり、地理学と環境学でもっとも権威ある雑誌である。このうちの 1 篇は *Nature Climate Change* 誌でレビューされた。日本語の業績として、新評論から『解体新書「捕鯨論争」』を出版し、その書評は、朝日新聞、サンデー毎日などに掲載された。また、Japan Times でも取り上げられ、文藝春秋社の『日本の論点

2012』では推薦図書に挙げられている。さらに、日本の国際政治学でもっとも権威のある論文誌である『国際政治』にも査読付き論文1篇、学生指導の成果として査読付き論文1篇を『科学技術社会論』誌に掲載することができた。

鹿野 秀一 SHIKANO Shuichi 准教授

生年月日 / 1954 年 01 月 01 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地域生態系研究分野

出身学校

東北大学・理学部・生物学 1977 年卒業

出身大学院

東北大学・理学研究科・生物学博士課程 1982 年修了

取得学位

理学博士東北大学 1982 年

略歴

1982 年～1986 年 東北大学理学部 教務系技官
 1986 年～1995 年 東北大学理学部 助手
 1995 年～1997 年 東北大学大学院理学研究科 助手
 1997 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 助教授
 2007 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 准教授

所属学会

日本生態学会、日本微生物生態学会、日本陸水学会、米国陸水海洋学会

所属クラスター

ライフサイエンスクラスター、地球・環境クラスター

専門分野

微生物生態、環境動態解析、分子系統解析

研究課題

- ・マイクロコズムにおける環境変化に対する相互作用の影響
- ・細菌群集の系統的多様性
- ・湖沼の環境と食物網

研究キーワード

群集、生態系、環境、湖沼、湿地

学外の社会活動（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

（地方公共団体）

宮城県・伊豆沼・内沼自然再生協議会 委員 2008 年 4 月～現在

担当授業科目 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

(学部教育)

動物生態学実習 1992 年～現在

生物学演習 I 2004 年～現在

環境生物学 2005 年～現在

(大学院教育)

地域生態学特論 2001 年～現在

生態学合同講義 2008 年～現在

国内会議 発表・講演 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

- ・水田生態系における細菌群集の放射線に対する応答 [第 27 回日本微生物生態学会大会] (2011 年 10 月 8 日～ 2011 年 10 月 10 日、京都) ポスター (一般)
- ・ゼニタナゴとタイリクバラタナゴの競争実験 [第 6 回伊豆沼内沼研究集会] (2012 年 2 月 12 日～ 2012 年 2 月 12 日、栗原市) 口頭 (一般)
- ・浅い湖沼伊豆沼における抽水植物群落の食物網への影響：炭素窒素安定同位体比を用いた解析 [第 6 回伊豆沼 内沼研究集会] (2012 年 2 月 12 日～ 2012 年 2 月 12 日、栗原市) 口頭 (一般)

その他研究活動 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

西シベリア塩性湖チャニー湖沼群の環境と生物群集の調査 (フィールドワーク)
2001 年～現在

宮城県伊豆沼における環境と食物網解析 (フィールドワーク) 2006 年～現在

その他の競争的資金獲得実績 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

環境省 環境研究・技術開発推進費 2009 年 7 月～ 2012 年 3 月

[マイクロコズムを用いた農薬・有機物等負荷等の生態系へ及ぼす解析評価]

新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業 2009 年 7 月～ 2012 年 3 月

[食物網解析]

研究論文 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

- 1) Size-dependent ontogenetic diet shifts to piscivory documented from stable isotope analyses in an introduced population of largemouth bass. [Environ. Biol. Fish, 93, (2012), 255-266] Yasuno N, Chiba Y, Shindo K, Fujimoto Y, Shimada T, Shikano S, and Kikuchi E.
- 2) Seasonal increase of methane in sediment decreases $\delta^{13}\text{C}$ of larval chironomids in a eutrophic shallow lake. [Limnology, 13, (2012), 107-116], Yassuno N, Shikano S, Muraoka A, Shimada T, Ito T, and Kikuchi E.

- 3) 伊豆沼におけるオオユスリカ幼虫の餌資源推定：炭素安定同位体比と脂肪酸分析による解析。[伊豆沼 内沼研究報告、5、(2011)、21-35] 安野翔、山中寿朗、嶋田哲郎、鹿野秀一、菊地永祐

本年度の研究活動等成果・意義など

本年度は、昨年度に引き続き西シベリアのチャニー湖に生息する多様な宿主－寄生虫について炭素・窒素安定同位体比を測定し、寄生虫が宿主の体のどの部分を利用しているか推定を行った。特に、本年度は鳥類とその寄生者である吸虫類の間の関係について安定同位体比のデータを多く蓄積することができ、寄生虫の種類によって鳥類の体の利用箇所が異なることが明らかになった。これまでの巻き貝、魚類、鳥類と吸虫類の安定同位体分析の結果から、生態系の食物網における寄主－寄生者関係をリンクする研究の新たな方向性を得ることができた。

浅い湖沼である宮城県伊豆沼とその周辺のため池の食物網解析の一環として、ゼニタナゴとタイリクバラタナゴの飼育実験を行い、両者の間の食性の重なり度を推定することができ、絶滅危惧種であるゼニタナゴの保全に関して基礎的な知見を得ることができた。

水界モデルシステムであるマイクロコズムへの農薬・有機物負荷に対して、溶存酸素濃度変化からシステムの生産量と呼吸量を測定する実験を行い、環境評価として負荷に対する構成生物の個体数変化だけでなく、生産量や呼吸量を考慮する必要性が明らかになった。

石渡 明 ISHIWATARI Akira 教授

生年月日 / 1953 年 04 月 01 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地球化学研究分野

出身学校

横浜国立大学教育学部地学科 1975 年卒業

出身大学院

金沢大学大学院理学研究科地学専攻修士課程 1978 年修了

東京大学大学院理学系研究科地質学専攻博士課程 1981 年修了

取得学位

理学博士東京大学 1981 年

略歴

1981 年～1982 年 東京都立明正高等学校教諭

1982 年～1985 年 キュリー夫妻（パリ第 6）大学構造地質学会客員主任助手

1986 年～1988 年 金沢大学理学部助手

1988 年～1992 年 金沢大学理学部講師

1992 年～2003 年 金沢大学理学部助教授

2003 年～2008 年 金沢大学理学部教授

2008 年～現在 東北大学東北アジア研究センター教授

研究経歴

1973 年～現在 日本、アルプス、ロシア極東のオフィオライトの地質学と岩石学

所属学会

日本地質学会、日本鉱物科学会、日本地球惑星科学連合、日本火山学会、東京地学協会、地学団体研究会、地学教育学会、米国地質学会、米国地球物理連合

学会活動

日本鉱物科学会 1986 年～現在、学会誌「岩石鉱物科学」編集委員 1995 年～現在、評議員 1995 年～現在、同「Journal of Mineralogical and Petrological Sciences」編集委員 2009 年～現在

日本地質学会 1975 年～現在、地質学雑誌編集委員 1999 年～2003 年、評議員 2002 年～2008 年、執行理事 2009 年～現在、評議員会議長 2004 年～2006 年、英文学術誌「Island Arc」編集委員長 2004 年～2007 年、同誌編集顧問 2008 年～現在

地学団体研究会 1978 年～現在、全国運営委員 1989 ～ 1992、北陸支部長 2006 ～ 2008

Geological Society of America 2001 年～現在

「GSA Bulletin」編集委員 2006 年～ 2008 年

日本地球惑星科学連合 理事 2009 年～現在

所属クラスター

地球・環境クラスター

専門分野

岩石・鉱物・鉱床学、地質学、地球宇宙化学

研究課題

- ・造山帯のオフィオライトの地質学的研究
- ・中部・東北日本の第三紀島弧火山岩によるマントル・プローブ
- ・アジア北東端のオフィオライトと随伴岩類：北極圏東部の岩石、構造、広域地質対比

行政機関・企業・NPO 等参加（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

Integrated Ocean Drilling Program 理事 2011 年 06 月 – 現在

学内活動（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

理学部オープンキャンパス（公開授業講演）2011 年 7 月～ 2011 年 7 月

東北大学附置研究所等一般公開「片平まつり」（公開授業講演）2011 年 10 月～ 2011 年 10 月

学位授与数（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

修士 6 人

論文博士 1 人

担当授業科目（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

（全学教育）

セミナーⅡ 2008 年～現在

地球物質科学 2008 年～現在

地球環境科学概論 2011 年

セミナーⅡ 2011 年～ 2012 年

（学部教育）

地球の科学 2008 年～現在

セミナーⅠ 2008 年～現在

火山物理化学 2008 年～現在

岩石学実習Ⅱ 2010 年～現在

地球の科学 2011 年

セミナー I 2011 年

岩石学実習 II 2011 年

地球物質科学 2011 年～2012 年

岩石地質学 2011 年～2012 年

(大学院教育)

変成岩特論 I 2008 年～現在

セミナー 2008 年～現在

課題研究 2008 年～現在

変成岩特論 II 2008 年～現在

セミナー 2011 年

変成岩特論 I 2011 年

課題研究 2011 年～2012 年

変成岩特論 II 2011 年～2012 年

国際会議 発表・講演 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- Chemical comparison between terrestrial ferropicrites and Martian shergottites and soils[Japan Geoscience Union Meeting 2011 (Makuhari), International Symposium] (2011 年 5 月 22 日～2011 年 5 月 27 日、日本国、Chiba) 口頭 (一般)
- Oceanic plateau accretion viewed from greenstones in the Permian and Jurassic accretionary complexes in Japan: A review.[Japan Geoscience Union Meeting 2011 (Makuhari), International Symposium] (2011 年 5 月 22 日～2011 年 5 月 27 日、日本国、Chiba) 口頭 (一般)
- Japanese ferropicrites and Martian rocks: geochemical comparison.[2011 Planetary Exploration Research Center, Chiba Institute of Technology, Planetary Geology Field Symposium, (Kita-Kyushu International Conference Center, Kita-Kyushu)] (2011 年 11 月 5 日～2011 年 11 月 6 日、日本国、北九州) 口頭 (一般)

国内会議 発表・講演 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- 花崗岩体の上側で形成される直閃石を産しない蛇紋岩の超低圧接触変成帯。[日本地球惑星科学連合 2010 年大会](2010 年 5 月 23 日～2013 年 5 月 28 日、幕張メッセ) 口頭 (一般)
- ロシア極東ウスチベラヤオフィオライトのかんらん岩中の鉱物の主要微量元素組成。[日本地球惑星科学連合大会] (2011 年 5 月 22 日～2011 年 5 月 27 日、千葉) 口頭 (一般)

- M9 巨大地震とオフィオライト高圧変成帯の衝上 [日本地質学会日本鉱物科学会 2011 年年会合同学術大会] (2011 年 9 月 9 日～2011 年 9 月 11 日、水戸) 口頭 (一般)
- 北陸～東北の中新世火山岩のマグマ成因 [日本地質学会日本鉱物科学会 2011 年年会合同学術大会] (2011 年 9 月 9 日～2011 年 9 月 11 日、水戸) 口頭 (一般)
- 仙台市西部に産する FeO* に富む後期中新世玄武岩質安山岩マグマの成因 [日本地質学会日本鉱物科学会 2011 年年会合同学術大会] (2011 年 9 月 9 日～2011 年 9 月 11 日、水戸) 口頭 (一般)
- 宮城県北部岩手県南部の中期中新世の石越安山岩：“洪水安山岩”との比較 [日本地質学会日本鉱物科学会 2011 年年会合同学術大会] (2011 年 9 月 9 日～2011 年 9 月 11 日、水戸) 口頭 (一般)
- 未分化玄武岩と極端に分化した玄武岩 [日本地質学会日本鉱物科学会 2011 年年会合同学術大会] (2011 年 9 月 9 日～2011 年 9 月 11 日、水戸) 口頭 (一般)
- 東北地方中央部の小規模超苦鉄質岩体中に見られるクロムスピネル [日本地質学会日本鉱物科学会 2011 年年会合同学術大会] (2011 年 9 月 9 日～2011 年 9 月 11 日、水戸) 口頭 (一般)
- 上越帯の中ノ岳変斑れい岩体の岩石学的研究 [日本地質学会日本鉱物科学会 2011 年年会合同学術大会] (2011 年 9 月 9 日～2011 年 9 月 11 日、水戸) 口頭 (一般)
- ロシア極東、Ust'-Belaya オフィオライトのマントルかんらん岩から見えてきた前弧域かんらん岩の多様性 [日本地質学会日本鉱物科学会 2011 年年会合同学術大会] (2011 年 9 月 9 日～2011 年 9 月 11 日、水戸) 口頭 (一般)
- 2011 年 3 月 11 日東北地方太平洋沖地震による仙台付近の墓石転倒率分布と大槌石巻などの津波による墓石被大：まとめと問題点 [日本地質学会東北支部 2009～2010 年度総会個人講演会 (福島大学)] (2011 年 12 月 17 日～2011 年 12 月 18 日、福島) 口頭 (一般)
- 東北日本各地の蛇紋岩体中のスピネルと堆積物中のスピネルから見えてくると [変成岩などシンポジウム 2012] (2012 年 3 月 23 日～2012 年 3 月 25 日、京都) 口頭 (一般)
- Is the low-grade metamorphism of the middle Paleozoic Mongolian seamount resembles with that of the late Cretaceous seamount of southern Pacific? [変成岩などシンポジウム 2012] (2012 年 3 月 23 日～2012 年 3 月 25 日、京都) 口頭 (一般)

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

基盤研究(C) 2011 年 4 月～2014 年 3 月

[日本の古生代オフィオライトの多様性と沈み込み帯プロセス]

その他の競争的資金獲得実績 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

日露二国間共同研究 2009 年 4 月 2011 年 3 月

[アジア北東端のオフィオライトと随伴岩類：北極圏東部の岩石、構造、広域地質
対比]

著書 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- 1) 東北アジア大地のつながり (執筆担当部分) まえがき is iii、第 2 章 27-90、あと
がき 91～93。[東北大学出版会、(2011) 12 月] 石渡 明、磯崎行雄

研究論文 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- 1) U-Pb Zircon Age of Gabbroids of the Ust'-Belaya Mafic-Ultramafic Massif
(Chukotka) and Its Interpretation.
[GEOCHEMISTRY INTERNATIONAL, 50 (1), (2012), 44-53]
Ledneva, G. V. Bazylev, B. A. Lebedev, V. V. Kononkova, N. N. Ishiwatari, A.

総説・解説記事 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- 1) 2011 年 3 月 11 日の東北地方太平洋沖地震による仙台地域の墓石転倒率について。
[日本地質学会地質学会 News、14 (4)、(2011)、9-11] 石渡 明、宮本 毅、平
野直人
- 2) 津波で墓石が丸くなった！岩手県大槌の墓石の津波による侵食について。[日本地
質学会日本地質学会 News、14 (8)、(2011)、11-12] 石渡 明
- 3) 紹介: Geological Map of Asia (アジア地質図) 1:5,000,000 寺岡易司奥村公男著。[日
本地質学会日本地質学会 News、14 (8)、(2011)、5-6] 石渡 明
- 4) 東日本の太平洋沿岸各市町村の 2011.3.11 津波による人的被害について。[日本地
質学会日本地質学会 News、14 (10)、(2011)、12-13] 石渡 明
- 5) 磁鉄鉱系チタン鉄鉱系花崗岩の帯磁率の境界値：鬼首カルデラ周辺の例。[日本地
質学会日本地質学会 News、14 (11)、(2011)、44-45] 石渡 明、佐藤勇輝、久保
田将、濱木健成
- 6) 中国と日本のジオパーク。[日本地質学会日本地質学会 News、15 (1)、(2012)、
17-18] 石渡 明
- 7) 水星の地質について。[日本地質学会日本地質学会 News、15 (2)、(2012)、8-9]
石渡 明

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見などについて

平成 23 年度は 3 月 11 日の大地震・津波とそれに起因する福島原発事故の余波が
続く中で始まった。当センターも被災し、10 月までは学生とともに理学部に避難し
て研究を続けた。実際の揺れの大きさの分布を知るために仙台周辺の墓石転倒率調査

を行い、津波被災地域の墓石被害も調査して学会誌に報告した。仙台周辺の放射線量を測定し、ホームページで公表した。その中で6人の修士学生の研究を指導し修了させるとともに、学術誌に専門分野の研究論文を公表した。

後藤 章夫 GOTO Akio 助教

生年月日 / 1966 年 06 月 15 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地球化学研究分野

出身学校

北海道大学・理学部・地球物理 1990 年卒業

出身大学院

北海道大学・理学研究科・地球物理学博士課程 1997 年修了

取得学位

博士（理学）北海道大学

略歴

1999 年～2006 年 東北大学東北アジア研究センター 助手

2007 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 助教（職階名変更による）

研究経歴

1990 年～現在 マグマレオロジーの実験的研究

1999 年～現在 爆発的火山噴火の実験的研究

2003 年～現在 火山無人探査システムの開発

2006 年～現在 爆発的火山噴火の観測

所属学会

日本火山学会、日本鉱物科学会

所属クラスター

物質・材料クラスター

地球・環境クラスター

専門分野

火山学

研究課題

マグマのレオロジー

火山爆発

研究キーワード

マグマ、レオロジー、火山、爆発

担当授業科目 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

(全学教育)

転換教育 地球の科学 1999 年～現在

自然科学総合実験 2004 年～現在

(学部教育)

夏季フィールドセミナー 1999 年～現在

地球惑星物質科学実習 V 2007 年～現在

国内会議 発表・講演 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

- ・チリ・ビラリカ火山で観測された低周波空振の発振機構 [日本地球惑星科学連合 2011 年大会] (2011 年 5 月～ 2011 年 5 月、千葉) ポスター (一般)
- ・ストロンボリ火山で収録された空振波形の周波数解析 [日本火山学会秋季大会] (2011 年 10 月～ 2011 年 10 月) ポスター (一般)

研究成果の研究史上の意義・新知見など

ここ数年、火山が発する空気の振動（空振）の研究を、実験及び観測に基づき行っている。空振は火山活動を理解する道具として、近年その観測が精力的に行われている。しかしその解釈はモデル依存が大きいのが現状である。世界で最もよく研究されている火山の一つである、イタリア・ストロンボリ火山の空振を解析したところ、広く受け入れられている従来の説が疑わしいことが見いだされた。

ストロンボリ式噴火はマグマ表面で大きな気泡が破裂することで生じるという考えが主流だった。その根拠の一つが空振で、これはマグマ中を上昇した気泡が破裂前にマグマ表面で振動することで起こるとされ、その周波数は可聴域（20Hz 以上）より低い帯域が主体とされていた。しかし高周波数まで収録できるシステムで得られた観測データを解析したところ、ほとんどの噴火では可聴域の 100Hz 付近が卓越していることがわかった。ストロンボリ火山ではこれまで、可聴域が卓越する噴火は報告されていない。また、衝撃波と思われる波も捉えられ、これもストロンボリ火山ではこれまで報告がない。

空振の解釈がモデル依存の状況を打開するため、気泡の振動や破裂に伴う空振を直接測定する実験の準備を開始した。この実験は、加圧容器に入れた水飴に単気泡を注入し、それが水飴の表面付近に到達したところで容器圧力を解放し、気泡の内外に大きな圧力差を与えられる工夫をしたことに特徴がある。但し、これまで行った予備の実験では、気泡は減圧に際して表面が波打ちながら膨張するだけで、一気に破裂したり、膨張後に収縮に転じたりすることはなかった。水飴の粘性をより高める、水飴の変わりにシリコンオイルを用いるなどの変更を検討している。

宮本 毅 MIYAMOTO Tsuyoshi 助教

生年月日 / 1970 年 07 月 01 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地球化学研究分野

出身学校

東北大学・理学部・地学科地学第二 1993 年卒業

出身大学院

東北大学・理学研究科・地学博士課程 1997 年中退

取得学位

修士（理学）東北大学 1995 年

略歴

1997 年～2007 年 東北大学東北アジア研究センター 助手

2007 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 助教

所属学会

日本火山学会、日本岩石鉱物鉱床学会

所属クラスター

数物質・材料クラスター、地球・環境クラスター

専門分野

火成岩岩石学、自然災害科学、火山地質学

研究課題

- ・霧島火山群の地質学的・岩石学的研究
- ・白頭山巨大噴火の火山学的研究
- ・中国・白頭山における火山伝承に関する研究
- ・白頭山の噴火年代に関する研究
- ・火山灰土壤中から小規模噴火の痕跡を読む試み

研究キーワード

火成岩岩石学、火山地質

担当授業科目（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

（全学教育）

自然科学総合実験 2004 年～現在

(学部教育)

野外調査演習 1997 年～現在

地学実験 2007 年～現在

地球物質科学実習Ⅰ 2007 年～現在

地殻岩石学実習Ⅰ 2007 年～現在

夏季フィールドセミナー 2010 年

その他研究活動 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

白頭山 10 世紀噴出物調査 (フィールドワーク) 1999 年～現在

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

若手研究(B) 2010 年 4 月～現在

[堆積物として残らないごく小規模噴火の痕跡を火山灰土中から検出する試み]

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見などについて

2011 年度は、本年 1 月に 300 年ぶりにマグマの噴出を行った南九州・霧島火山群新燃岳の噴出物について岩石学的研究を行った。新燃岳の過去の噴火を検討することで、この 2011 年噴火が今後どのように推移をするかを予測するうえでの知見を与えることがその目的である。2011 年噴火の推移は 300 年前の享保噴火 (1716-17 年) と類似していることが指摘されていたが、比較対象とした享保噴火の岩石学的検討はほとんどなされていなかったが、本研究により享保噴火の噴出物をもたらしたマグマの特徴について明らかとなった。その結果として今回の 2011 年噴火と享保噴火をもたらしたマグマは同じものであり、また、噴出物から推定されるマグマの進化過程も享保噴火の噴火初期ときわめて類似していた。このことから今後も享保噴火では活動休止を伴いつつ 1 年程度活動が続いたが、これと同様に活動が再度活発化する可能性が高いことが推定された。

また、本年度はこれまで行ってきた白頭山研究の成果についてまとめ、学位論文として「白頭山火山の噴火史」を提出した。

平野 直人 HIRANO Naoto 助教

生年月日 / 1973 年 08 月 28 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地球化学研究分野

出身学校

山形大学理学部地球科学科 1996 年卒業

出身大学院

筑波大学大学院博士課程地球科学研究科 2001 年修了

取得学位

博士（理学）

略歴

2001 年～2002 年 東京大学海洋研究所
 2002 年～2004 年 東京大学地震研究所
 2002 年～2006 年 東京工業大学理学部・理工学研究科
 2006 年～2007 年 カリフォルニア大学スクリプス海洋研究所
 2007 年～2008 年 東京大学理学部地殻化学実験施設
 2008 年～2008 年 金沢大学フロンティアサイエンス機構
 2008 年～現在 東北大学東北アジア研究センター

研究経歴

1995 年～2002 年 マリアナ海溝に沈み込む海山の年代層序
 1996 年～2003 年 房総半島南部嶺岡帯の玄武岩類による第三紀プレート配置の復元
 2000 年～現在 環伊豆衝突帯のオフィオライト岩類によるプレート配置の復元
 2001 年～現在 新種の火山・プチスポットの成因
 2002 年～現在 西太平洋プレート上の海山群の年代学

所属学会

日本鉱物科学会、日本地球化学会、American Geophysical Union、日本地質学会

学会活動

日本地球化学会 評議員 2010 年～現在

所属クラスター

地球・環境クラスター

専門分野

地球宇宙化学、岩石・鉱物・鉱床学、地質学、固体地球惑星物理学

研究課題

太平洋プレート上の新種の火山・プチスポット海底火山

研究キーワード

火山・プレート・玄武岩・海山・太平洋

学外の社会活動（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

- ・太平洋プレート上の新種の火山 プチスポット海底火山
- ・新種の火山から放出される地球の炭素循環
- ・沈み込むプレートの変形と火山発生

研究キーワード

火山・プレート・玄武岩・海山・太平洋

学外の社会活動（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

東北大学附置研究所等一般公開「片平まつり 2011」記念講演会における一般講演（講演会・セミナー）2011 年 10 月

担当授業科目（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

（学部教育）

野外調査演習 2009 年～現在

野外調査演習 2010 年～現在

地球と物質のダイナミックス 2011 年

野外調査演習 2011 年

国内会議 発表・講演（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

- ・南鳥島の形成史、および周辺海域の海洋底調査[日本地球惑星科学連合 2011 年大会]（2011 年 5 月～ 2011 年 5 月、千葉）ポスター（一般）
- ・グリーンタフ時代の太平洋側火山活動とプチスポット [日本地質学会第 118 年学術大会日本鉱物科学会 2011 年年会合同学術大会]（2011 年 9 月～ 2011 年 9 月、水戸）口頭（一般）

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

若手研究(B) 2010 年 4 月～ 2012 年 3 月

[プチスポット火山の普遍性]

研究論文 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- 1) Direct evidence for upper mantle structure in the NW Pacific Plate: microstructural analysis of a petit-spot peridotite xenolith. [Earth and Planetary Science Letters, 302, (2011), 194-202] Yumiko Harigane, Tomoyuki Mizukami, Tomoaki Morishita, Katsuyoshi Michibayashi, Natsue Abe, Naoto Hirano
- 2) Role of plutonic and metamorphic block exhumation in a forearc ophiolite mélange belt: An example from the Mineoka belt, Japan. [In: J. Wakabayashi & Y. Dilek (eds.) Mélanges: Processes of Formation and Societal Significance, Geological Society of America, Special Paper, 480, (2011), 95-116] Ryota Mori, Yujiro Ogawa, Naoto Hirano, Toshiaki Tsunogae, Masanori Kurosawa, Tae Chiba
- 3) Retentivity of CO₂ in fluid inclusions in mantle minerals. [European Journal of Mineralogy, 23, (2011), 805-815] Junji Yamamoto, Kazuhiko Otsuka, Hiroaki Ohfuji, Hidemi Ishibashi, Naoto Hirano, Hiroyuki Kagi

総説・解説記事 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- 1) Petit-spot volcanism: a new type of volcanic zone discovered near a trench. [Geochemical Journal, 45 (2), (2011), 157-167] Naoto Hirano
- 2) 海洋プレートの進化と海底火山を理解するための Ar-Ar 年代測定。[東京大学アイソトープ総合センターアイソトープ総合センターニュース、42 (1)、(2011)、10-16] 平野直人
- 3) New kind of volcano on the Earth — Geochronological studies of neutron-irradiated lavas erupted on the sea floor — . [Institute for Materials Research, Tohoku University KINKEN Research Highlights, 2011, (2011), 77-77] Naoto Hirano

アピール

<研究タイトル>

新種の火山・プチスポット火山の深海底と陸上における普遍性

<研究目的と成果概要>

沈み込むプレートの屈曲に起因する応力場の変化に伴う火山活動とされ、三陸沖の日本海溝や北西太平洋で発見されている新種の火山・プチスポット海底火山 (Hirano *et al.*, 2006, *Science*) の世界的普遍性および成因解明に関する研究を進めた。2010 年 5 月に行われた JAMSTEC 調査船「よこすか」「しんかい 6500」を用いた小笠原諸島東方沖、南鳥島周辺海域の水深 5000m 深海底の潜航調査や、洋上からの地球物理学的調査によるデータ、および 2009 年 3 月に施行された同調査船「み

らい」によるチリ沖の調査、両海域での同火山の存在が確認され、これらデータの解析と得られた溶岩試料の化学分析や年代測定を進めた。これらデータから解明されるマグマの成因やプレートの亀裂に関わる発生要因は、マグマの発生場所であるアセノスフェアの化学組成、プレートの動きが規制する変動現象の解明おにもつながる。

プレート屈曲に起因するこの火山について、Hirano (2011) *Geochem. J.* では、溶岩の化学組成が地球内部（アセノスフェア）の情報をもたらす貴重な物質であることを主張した。また、同溶岩がもたらすマントル捕獲岩から太平洋プレート中深部の異方性を初めて見いだしたことも貴重な研究となった（Yamamoto *et al.*, 2011, *European J. Mineral.* および Harigane *et al.*, 2011, *EPSL*）。さらに、過去数千万年前以前に深海底を構成していた地質が現在房総半島南部から静岡県中部にかけて露出しているが、これら地域の発達史を論じると共に、これらの地質の中にプチスポット様溶岩も存在していることも判明した（Mori *et al.*, 2011, *Geol. Soc. Am., Special Paper*）。更に、東北大学片平キャンパス・生命科学プロジェクト総合研究棟で行われた東北大学附置研究所等一般公開「片平まつり 2011」記念講演会において、「火山はどこで発生するの？～海底火山を掘って考える～」と題した一般向け講演を行った。同講演では、直径数 km ほどのプチスポット海底火山と、日本国土面積に匹敵するほどの海底巨大火山、シャツキー海台を対比させ、火山の不思議さを強調する講演を行い、大きな反響があった。

奥村 誠 OKUMURA Makoto 教授

生年月日 / 1962 年 01 月 15 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地域計画科学研究分野

出身学校

京都大学・工学部・交通土木工学科 1984 年卒業

出身大学院

京都大学・工学研究科・交通土木工学専攻修士課程 1986 年修了

取得学位

工学士 京都大学 1984 年

工学修士 京都大学 1986 年

博士（工学） 京都大学 1991 年

略歴

1987 年～ 1992 年 京都大学工学部 助手

1992 年～ 1995 年 京都大学工学部 講師

1992 年～ 1993 年 ボストン大学 エネルギー環境研究所 研究員

1995 年～ 2001 年 広島大学工学部 助教授

2001 年～ 2006 年 広島大学大学院工学研究科 助教授

2001 年～ 2002 年 ブラジリア大学都市交通人材開発センター 国際協力事業団専門家

2006 年～ 2012 年 東北大学東北アジア研究センター 教授

所属学会

土木学会、応用地域学会、日本都市計画学会、Eastern Asia Society for Transportation Studies、日本地域学会、交通工学研究会、日本計画行政学会、Regional Science Association International

学会活動

土木学会土木計画学研究委員会委員兼春大会代表幹事

応用地域学研究編集委員長

日本都市計画学会東北支部副支部長

所属クラスター

地球・環境クラスター

専門分野

交通工学・国土計画、社会システム工学・安全システム

研究課題

- ・災害時の緊急支援物資と燃料の輸送に関わる研究
- ・大規模地震による重傷者の輸送を考慮した耐震化計画
- ・交通サービスの遅延・途絶の評価に関する研究
- ・公共施設配置と都市構造の利便性に関する研究
- ・都市の階層性のモデル化と都市間交通網整備の影響

研究キーワード

土木計画学、交通計画、地域計画、土地利用

行政機関・企業・NPO 等参加（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

国土交通省東北運輸局（国）東北地方交通審議会委員、政策検討部会長 2007 年 3 月～現在

国土交通省（国）第 5 回（2010 年）全国幹線旅客純流動調査委員会委員兼幹事
2009 年 5 月～現在

国土交通省（国）社会資本整備審議会道路分科会専門委員 2010 年 10 月～現在

国土交通省東北地方整備局（国）仙台空港復旧のあり方検討委員会・委員長 2011 年 7 月～現在

宮城県（地方公共団体）大規模公共事業評価委員会専門委員 2009 年 3 月～現在

仙台市（地方公共団体）都市計画審議会委員長代理 2008 年 4 月～現在

仙台市（地方公共団体）大規模小売店立地専門委員会委員 2009 年 3 月～現在

学内活動（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

東北アジア研究センター副センター長 2009 年 4 月～ 2012 年 3 月

東北大学総長特任補佐 2010 年 4 月～ 2012 年 3 月

学位授与数（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

修士 3 人

学士 2 人

担当授業科目（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

（学部教育）

都市システム計画演習Ⅱ 2010 年～現在

都市と交通のシステム 2008 年～現在

地域・都市計画 2011 年

（大学院教育）

行動計量分析 2009 年～現在

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2011年4月～2012年3月）

基盤研究(B) 2009年4月～現在

[国土交通マネジメントのための都市間交通分析方法論の確立]

新学術領域研究 2010年4月～2012年3月

[健康地域格差の発生・拡大機構の地域統計科学的解明]

その他の競争的資金獲得実績（2011年4月～2012年3月）

地球規模課題対応国際科学技術協力事業 2009年8月～現在

[氷河減少に対する水資源管理適応策モデルの開発] 研究機関部局代表者

研究論文（2011年4月～2012年3月）すべて査読あり

- 1) 多階層最適企業組織配置モデルに関する研究、[土木学会論文集 D3、Vol.67、(2011)、No.4、408-421] 奥村誠・高田直樹・大窪和明
- 2) 全国幹線旅客純流動調査の鉄道サンプル拡大方法に関する研究、[土木学会論文集 D3、Vol.67、(2011)、No.5、911-918] 奥村誠・山口裕通・大窪和明
- 3) 高齢者を含む社会的ネットワークにおける情報交換から得られる知識の性質、[土木学会論文集 D3、Vol.67、(2011)、No.5、399-406] 大窪和明・奥村誠
- 4) 活動ダイアグラムを考慮した送迎交通サービスの定量的評価手法の提案、[土木学会論文集 D3、Vol.67、(2011)、No.5、947-955] 山下和哉・塚井誠人・桑野将司・奥村誠
- 5) ロシア連邦サハ共和国の冬道路と地球温暖化の影響、[運輸政策研究、Vol.14、(2011)、No.3、016-023] 奥村誠・河本憲・サルダーナ ボヤコワ
- 6) ネットワークインフラの運用・維持コストに関する統計分析 ― 東北地方市町村の上水道を対象として ―、[都市計画論文集、Vol.46、(2011)、No.3、223-228] 奥村誠・田中大司
- 7) Statistical Analysis on Multivariate Expressway Traffic Series Under the Different Toll Policies, [Journal of the Eastern Asia Society for the Transport Studies, (2011),] Tsukai, M., Inoue, S., Kuwano, M. and Okumura, M.

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見

ここ数年、最適施設配置問題に用いられている、離散的な変数を含む数理最適化問題（特に求解がやさしい混合整数計画法問題）の実際的な問題への適用を試みている。昨年度までに施設の配置とその間の輸送を一元的に扱う数理計画問題を定式化して実用的な解を求める方法を開発し、震災負傷者最適搬送と道路、病院の耐震化問題、リサイクル施設の配置計画問題、大学生居住地域と通学交通手段の割り当て問題への適用例を示してきた。本年度はこれを企業の支店配置問題に適用し、複数の設定パラメー

タに対応する立地解を求めた。さらに、それらの解が適切な割合で混合した結果として、現実社会の従業者の分布と賃金の分布を同時に説明するモデルの開発を行った(研究成果1)。その際、混合比をベイズ統計学で用いられている MCMC 手法を用いて計算する手法を提案したことが特徴的である。

平成 21 年度から都市間交通マネジメントのための交通分析方法論の確立というテーマで科学研究費(基盤研究(B))を取得し、学内 1 名、学外 3 名の研究者との研究チームを構築して 4 年間の共同研究を実施しているが、その成果が得られつつある。上記の研究のほか、既存の都市間交通サンプル調査の問題点とその解決方法を提案した論文を公表している(研究成果2)。また都市間交通量の時間的変動パターンの分析に関する共同研究を進め、連名でその成果を公表している(研究成果7)。

地域の高齢化とそれに対応する社会システムのあり方の研究は、日本をはじめとする東アジア諸国の今後を考える上で重要な課題である。これらについて引き続き共同研究者と議論しながら成果の公開につとめている(研究成果3、4)。

このほか各種の外部資金による研究プロジェクトにも引き続き力を入れている。シベリアの冬季道路に関する研究を、センター内プロジェクト研究ユニットおよび総合地球環境学研究所のプロジェクト研究として進めている(2009 年～2013 年までの 5 年間)が、その成果を専門雑誌に公表するとともに(研究成果5)、一般向けの啓蒙的書籍出版の準備を行った。ボリビア氷河の消失と水資源管理に関する JST / JICA 国際課題共同研究(2009 年～2013 年までの 5 年間)において、水資源管理モデルの構築と研究成果の社会実装を担当している。これに関連して、水道事業の効率性に関する統計分析の成果を発表した(研究成果6)最後に平成 22 年度から、地域の健康格差の統計的研究について、文部科学省科学研究費(新学術領域研究)を取得し 2 年間のプロジェクトを行っているが、震災の発生に伴い、震災時の地域間格差の発生に関する考察を進めており、次年度の公表に向けて準備を進めている。

大窪 和明 OKUBO Kazuaki 助教

生年月日 / 1982 年 07 月 21 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地域計画科学研究分野

出身学校

東北大学工学部土木工学科 2005 年卒業

出身大学院

東北大学・情報科学研究科修士課程 2006 年修了

東北大学・情報科学研究科博士課程 2009 年修了

取得学位

2009 年 3 月 東北大学博士（学術）取得

略歴

2009 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 助教

所属学会

Eastern Asia Society for Transportation Studies、土木学会、日本経済学会、環境
経済政策学会

所属クラスター

地球・環境クラスター

専門分野

地域計画、物流計画、交通工学・国土計画

研究課題

リサイクル産業の在庫と市場の変動メカニズムの解析

廃棄物の都市間輸送と企業の立地行動の解析

社会的ネットワークを通じた知識形成メカニズムに関する研究

研究キーワード

地域計画、物流計画、静脈物流

担当授業科目（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

（学部教育）

都市システム計画演習Ⅰ 2009 年～現在

都市システム計画演習Ⅱ 2009 年～現在

都市システム計画コース研修 A 2009 年～現在

都市システム計画コース研修 B 2009 年～現在

(大学院教育)

土木工学修士研修 2009 年～現在

国内会議 発表・講演 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- 平聖也、奥村誠、大窪和明：小型家電リサイクルに対するロバスト在庫計画アプローチ [平成 23 年度土木学会東北支部技術研究発表会] (2012 年 3 月 3 日、日本国、秋田市) 口頭 (一般)
- 河本憲、奥村誠、大窪和明：震災時ガソリン購入行動に関する研究 [平成 23 年度土木学会東北支部技術研究発表会] (2012 年 3 月 3 日、日本国、秋田市) 口頭 (一般)
- 岩坂友也、奥村誠、大窪和明：震災時ガソリン購入行動に関する研究 [平成 23 年度土木学会東北支部技術研究発表会] (2012 年 3 月 3 日、日本国、秋田市) 口頭 (一般)
- ブンボン健人、奥村誠、大窪和明：東日本大震災における救援物資ニーズの時間的変化に関する研究 [平成 23 年度土木学会東北支部技術研究発表会] (2012 年 3 月 3 日、日本国、秋田市) 口頭 (一般)
- 田中大司、奥村誠、大窪和明：地域における水資源状況に関する概略的把握 [平成 23 年度土木学会東北支部技術研究発表会] (2012 年 3 月 3 日、日本国、秋田市) 口頭 (一般)
- 大窪和明、奥村誠、河本憲：震災時における家計のガソリン購入行動に関する研究 [応用地域学会・富山大会] (2011 年 12 月 3 日～2011 年 12 月 4 日、日本国、富山市) 口頭 (一般)
- 大窪和明、奥村誠、平聖也：災害発生物の頑健な在庫管理方策に関する研究 [第 44 回土木計画学研究発表会] (2011 年 11 月 21 日～2011 年 11 月 23 日、日本国、甲府市) 口頭 (一般)
- 大窪和明、奥村誠：使用済み製品回収システムの変動リスクに対する反応 [第 43 回土木計画学研究発表会] (2011 年 5 月 28 日～2011 年 5 月 29 日、日本国、筑波市) 口頭 (一般)
- 山口裕通、奥村誠、大窪和明：都市間交通サンプル調査における鉄道サンプルの拡大方法 [第 43 回土木計画学研究発表会] (2011 年 5 月 28 日～2011 年 5 月 29 日、日本国、筑波市) 口頭 (一般)
- 奥村誠、大窪和明、石山翔、Huseyin Tirtom：超高速リンクの整備が都市間交通ネットワークに及ぼす影響のシミュレーション [第 43 回土木計画学研究発表会] (2011 年 5 月 28 日～2011 年 5 月 29 日、日本国、筑波市) 口頭 (一般)

科学研究費補助金獲得実績（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

若手研究(B) 2011 年 4 月～ 2012 年 3 月

[循環型社会の構築に伴う企業集積に関する研究]

研究論文（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

- 1) 平聖也、奥村誠、大窪和明：小型家電リサイクルに対するロバスト在庫計画アプローチ、平成 23 年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集、CD-ROM、2012。
- 2) 河本憲、奥村誠、大窪和明：震災時ガソリン購入行動に関する研究、平成 23 年度東北支部技術研究発表会講演概要集、CD-ROM、2012。
- 3) 岩坂友也、奥村誠、大窪和明：震災時ガソリン購入行動に関する研究、平成 23 年度東北支部技術研究発表会講演概要集、CD-ROM、2012。
- 4) ブンボン健人、奥村誠、大窪和明：東日本大震災における救援物資ニーズの時間的变化に関する研究、平成 23 年度東北支部技術研究発表会講演概要集、CD-ROM、2012。
- 5) 田中大司、奥村誠、大窪和明：地域における水資源状況に関する概略的把握、平成 23 年度東北支部技術研究発表会講演概要集、CD-ROM、2012。
- 6) 大窪和明・奥村誠、高齢者を含む社会的ネットワークにおける情報交換から得られる知識の性質、土木学会論文集 D3、Vol.67、no.5、2011。
- 7) 奥村誠・山口裕通・大窪和明、全国幹線旅客純流動調査の鉄道サンプル拡大方法に関する研究、土木学会論文集 D3、Vol.67、no.5、2011。
- 8) 奥村誠・高田直樹・大窪和明、多階層最適企業組織配置モデルに関する研究、土木学会論文集 D3、Vol.67、no.4、pp.408-421、2011。
- 9) 大窪和明：携帯情報端末と地図情報、The Journal of Survey 測量、Vol.61、no.10、p.27、2011。
- 10) 大窪和明：クローズドループリサイクルにおける施設配置パターンの解析、財団法人建設工学研究振興会年報、Vol.46、pp.15-22、2011。
- 11) 大窪和明、奥村誠：使用済み製品回収システムの変動リスクに対する反応、土木計画学研究・講演集、Vol.43、CD-ROM、2011。
- 12) 山口裕通、奥村誠、大窪和明：都市間交通サンプル調査における鉄道サンプルの拡大方法、土木計画学研究・講演集、Vol.43、CD-ROM、2011。
- 13) 奥村誠、大窪和明、石山翔、Huseyin Tirtom：超高速リンクの整備が都市間交通ネットワークに及ぼす影響のシミュレーション、土木計画学研究・講演集、Vol.43、CD-ROM、2011。

本年度の研究活動等成果・意義など

2011 年度は科研費の獲得により、使用済み製品の排出量は製品の寿命や消費者の

消費行動に依存するため、リサイクルする側が使用済み製品の質や量について予測するのは難しく、リサイクル企業が立地を決める上で、使用済み製品が十分な回収量が得られるかは重要な課題である。そのような中、小型家電製品のリサイクルなどにおいて自治体を中心となって使用済み製品を回収しリサイクル企業に有償で売却する地域が見られるようになった。リサイクルの促進やリサイクル企業の集積を考える上で、こうした市場を通じた回収が回収システムの違いがリサイクル企業にもたらす影響を分析し、安定的な回収量を維持する上で有効な回収システムを明らかにした。

また不確実性を考える上で、頑健性に着目した研究を行った。2011年3月11日の東日本大震災によって発生した膨大な災害廃棄物の処理が問題となっている中で、将来的なリサイクル技術の進歩、再生資源価格の変動などの不確実性に対して頑健な災害発生物の在庫管理方策を分析するための枠組みを提示した。はじめに自動車、家電に関するリサイクル技術の動向から、将来、資源として有効利用が見込める災害発生物を把握する。さらに将来の不確実性に対するリサイクル企業の見通しや知識に着目し、貴重な資源の在庫を未来に残すための条件を明らかにする。

また東日本大震災においてガソリン不足の深刻化に鑑み、震災時の特徴として、将来のガソリン供給量の低下、不確実性の増大や消費者の悲観的な見通しが、消費者のガソリンスタンドへの殺到を引き起こすことを示した。さらに、震災時における整理券の発行や消費者一人当たりの購入量制限といった販売政策が、消費者の購入行動にもたらす影響を分析し、これらの販売政策が必ずしも消費者のガソリンスタンドへの殺到を防ぎ、期待効用を増加させるわけではないことを明かし、物資不足の中での効率的または公平な配分を行う仕組みを考える必要があることが明らかになった。

工藤 純一 KUDOH Jun-ichi 教授

生年月日 / 1955 年 12 月 28 日

東北アジア研究センター基礎研究部門環境情報科学研究分野

出身学校

秋田大学・鉱山学部・金属材料 1980 年卒業

出身大学院

東北大学・工学研究科・金属工学博士課程 1987 年修了

取得学位

工学修士秋田大学 1982 年

工学博士東北大学 1987 年

略歴

1986 年～ 1987 年 東北大学選鉱製錬研究所 助手

1991 年～ 1996 年 東北大学大型計算機センター 助手

1996 年～ 2001 年 東北大学大型計算機センター 助教授

2001 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 教授

所属学会

電子情報通信学会、情報処理学会、IEEE、計測自動制御学会、画像電子学会

学会活動

IEEE TGARS 論文誌査読員 2004 年～現在

所属クラスター

情報・通信クラスター、地球・環境クラスター

専門分野

情報システム学（画像処理）、環境動態解析

研究課題

- ・ 森林火災から発生する二酸化炭素削減研究
- ・ シベリア画像データベースシステムの構築
- ・ 東アジア地域の大気汚染解析
- ・ シベリア森林火災検出システムの構築
- ・ リアルタイムシベリア環境モニタリングシステム
- ・ 1 メートル級の衛星画像処理

- ・衛星画像を用いた黄砂の抽出
- ・大規模森林火災の管理による二酸化炭素削減構想

研究キーワード

ノア、MODIS、NPP、画像処理、リモートセンシング、シベリア、森林火災、二酸化炭素削減

行政機関・企業・NPO 等参加 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

NPO 法人シベリア研究所 (NPO) 理事長 2006 年 2 月～現在

学内活動 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

ロシア交流推進室副室長 2009 年 12 月～現在

評価分析室員 2004 年 4 月～現在

片平・雨宮地区等移転整備専門委員会 2004 年 4 月～現在

学位授与 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

修士 1 名

担当授業科目 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

(大学院教育)

コンピュータアーキテクチャ特論 1996 年～現在

画像理解学 2001 年～現在

情報基礎科学ゼミナール 2001 年～現在

情報基礎科学研修 A 2001 年～現在

情報基礎科学 B 2001 年～現在

博士基盤研修 2001 年～現在

博士専門研修 A 2001 年～現在

博士専門研修 B 2001 年～現在

博士ゼミナール 2001 年～現在

国際会議 発表・講演 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

TU-SBRAS Seminar jointly ISTC Project Seminar -Forest Monitoring System-
(2011 年 11 月 25 日～2011 年 11 月 25 日、ロシア、ノボシビルスク) 口頭 (招待 特別)

国際会議 主催・運営 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

第 3 回日露学長会議

(2012 年 3 月 19 日～2012 年 3 月 20 日、日本国、仙台) [運営] 実行委員

国際会議 主催・運営 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

TU-SBRAS Seminar jointly ISTC Project Seminar -Forest Monitoring System-
(2011 年 11 月 25 日～2011 年 11 月 25 日) [主催] 共同主催

その他研究活動 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

森林火災の管理による CO2 排出量取引構想 (フィールドワーク) 2009 年～現在
森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット (フィールドワーク) 2011 年～
現在

科学研究費補助金獲得実績 (文科省・学振) (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

(挑戦的) 萌芽研究 2011 年 4 月～2013 年 3 月
[森林火災管理による CO2 排出量取引のシナリオ]

その他の競争資金獲得実績 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

研究シーズ探索プログラム 2011 年 5 月～2012 年 3 月
[衛星画像データベースシステム公開継続と黄砂の可視化]
平成 23 年度第 3 次補正予算 2011 年 9 月～2012 年 3 月
[衛星観測解析システム修理]

研究論文 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- 1) Three-dimensional histogram method for Asian dust identification using MODIS images. [the 32nd Asian Conference on Remote Sensing (ACRS2011), (2011)] Izumi Nagatani and Jun-ichi Kudoh
- 2) CO2 Reduction System by the Huge Forest Fires Control. [TU-SBRAS Seminar jointly ISTC Project Seminar-Forest Monitoring System-, (2011)] J.Kudoh and M.Ito
- 3) CO2 Reduction System by the Management of Forest Fires. [TU-SBRAS Seminar jointly ISTC Project Seminar-Forest Monitoring System-, (2011)] J.Kudoh and M.Ito

本年度の研究成果・新知見など

本年度は東日本大震災のために当初計画に変更が生じたが、研究を含めインフラ活動の主な成果は次の通りである。

- ・東北大学ーロシア科学アカデミーセミナー 開催 (2011 年 11 月 25 日、ノボシビルスク)
- ・日露人文社会フォーラム準備 (2011 年 12 月 8～9 日、モスクワ大学)
- ・日露大学合同説明会実施 (2011 年 12 月 8 日、モスクワ大学)
- ・東北大学とロシア科学アカデミー極東支部 大学間学術交流協定締結 (2012 年 1 月 23 日)

- ・ 東北大学とニジェゴロド大学 大学間学術交流協定締結（2012 年 3 月 19 日）
- ・ 東北大学と極東連邦大学 大学間学術交流協定締結（2012 年 3 月 19 日）
- ・ 第 3 回日露学長会議の実施（2012 年 3 月 19-20 日、東北大学）
- ・ ISTC PJ#4010 研究推進、科研費・PJ 研究推進
- ・ 衛星観測解析システムの復旧

この中で特筆すべきことは、モスクワ大学、ならびに、極東地域の研究機関と大学間でさらに強固な信頼関係が構築できたことである。これにより、大学教育と研究の両面にわたり広大なロシアで極東、シベリア、モスクワの重要地域と学術インフラの整備ができたことになる。

佐藤 源之 SATO Motoyuki 教授

生年月日 / 1957 年 12 月 15 日

東北アジア研究センター基礎研究部門資源環境科学研究分野

出身学校

東北大学・工学部・通信工学科 1980 年卒業

出身大学院

東北大学・工学研究科・情報工学専攻 博士後期課程 1985 年修了

取得学位

工学博士東北大学

工学修士東北大学

略歴

1985 年～1989 年 東北大学 助手（工学部）
 1989 年～1990 年 東北大学 講師（工学部）
 1990 年～1997 年 東北大学 助教授（工学部）
 1997 年～現在 東北大学 教授（東北アジア研究センター）
 2008 年～2011 年 東北大学 ディスティングイッシュトプロフェッサー
 2009 年～現在 東北大学 東北アジア研究センター長

研究経歴

1985 年～1990 年 地熱開発のための地下計測技術
 1990 年～現在 地中レーダ（GPR）の開発
 1997 年～現在 合成開口レーダ（SAR）の応用
 2002 年～現在 人道的地雷除去技術に関する研究と現場応用
 2005 年～現在 バイスタティック小型レーダの開発
 2009 年～現在 GB-SAR(地表設置型)-SAR による地滑り面の計測
 2008 年～現在 3DGPR（3次元地中レーダーシステム）を用いた遺跡調査

所属学会

電子情報通信学会、The Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE)、物理探査学会、日本地熱学会、資源・素材学会、Society of Exploration Geophysicists (SEG)、European Association of Geoscientists & Engineers (EAGE)、Applied Computational Electromagnetic Society、日本文化財探査学会、石油検層学会 (SPWLA)

学会活動

IEEE Geoscience and Remote Sensing Society 学会本部幹事 (AdCom member)
2006 年～現在

所属クラスター

情報・通信クラスター、地球・環境クラスター

専門分野

電磁波応用計測、リモートセンシング、地下計測工学

研究課題

- ・ 地中レーダ、ボアホールレーダによる環境計測
- ・ リモートセンシング・合成開口レーダによる環境計測

研究キーワード

地中レーダ、地下計測、リモートセンシング、レーダ技術、人道的地雷検知、減災・防災

学外の社会活動 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- ・ 金属鉱業事業団 鉱物資源探査に係る研究会委員 (その他) 1995 年 2 月～現在
- ・ 電子情報通信学会電磁界理論研究会専門委員 (その他) 1996 年 10 月～現在
- ・ Editorial Board, The International Journal of Subsurface Sensors and Applications (その他) 1999 年 7 月～現在
- ・ 物理探査学会理事 (その他) 2004 年 5 月～現在
- ・ 出前授業 (小中高との連携) 2004 年 11 月～現在

行政機関・企業・NPO 等参加 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- ・ 宮城県自然環境保全審議会委員 (その他) 2000 年 10 月～現在
- ・ (独) 石油天然ガス・金属鉱物資源機構 (その他) 金属資源探査技術開発研究会委員 2005 年 4 月～現在
- ・ 環境省 (国) 国内における毒ガス弾等に関する総合調査検討会 委員 2006 年 5 月～現在

学内活動 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- ・ 学友会陸上競技部部長 2004 年 4 月～現在
- ・ 教育研究評議会 評議員 2009 年 4 月～現在

担当授業科目 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

(学部教育)

電磁気学Ⅰ 1991 年～現在

電磁気学Ⅱ 2005 年～現在

機械知能・航空研修Ⅰ 2004 年～現在

機械知能・航空研修Ⅱ 2004 年～現在

卒業研究 2004 年～現在

(大学院教育)

環境リモートセンシング学 2002 年～現在

地球環境計測学特論 2003 年～現在

地球システム・エネルギー学修士セミナー 2003 年～現在

地球システム・エネルギー学修士研修 2003 年～現在

修士インターンシップ 2003 年～現在

地球システム・エネルギー学概論 2003 年～現在

博士インターンシップ研修 2003 年～現在

地球システム・エネルギー学博士セミナー 2003 年～現在

地球システム・エネルギー学博士研修 2003 年～現在

(他大学)

石巻専修大学（電磁波工学） 1998 年～現在

その他研究活動 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

東北アジアにおける電磁波地下計測（フィールドワーク） 1997 年～現在

地中レーダによるウランバートルの地下水計測（フィールドワーク） 1999 年～現在

カンボジアにおける地雷除去活動（フィールドワーク） 2009 年～現在

受賞・その他特記事項 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

ハイテク技術を駆使して埋蔵物の存在を明らかにする、地中レーダ探査（河北新聞・河北抄 2012 年 3 月 22 日）

国際会議 主催・運営 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

IEEE Geoscience and Remote Sensing Symposium (IGARSS) 2011

(2011 年 7 月 25 日～ 2011 年 7 月 29 日、カナダ、バンクーバー) [主催] General Chair

国内会議 主催・運営 (2011 年 4 月～ 2012 年 3 月)

第 11 回地下電磁計測ワークショップ (2011 年 11 月 23 日～ 2011 年 11 月 25 日、奈良)
[主催] 委員長

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

基盤研究(A) 2011 年 4 月～2014 年 3 月

[最適空間サンプリングによる地雷検知用レーダイメージングの効率化]

その他の競争資金獲得実績（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

戦略的国際科学技術協力推進事業 2008 年 1 月～2011 年 12 月

[地中レーダ (GPR) による高精度地下 3 次元可視化]

著書（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

- 1) Subsurface Sensing（執筆担当部分）Ch.11.8 758-769. [Wiley, (2011) 9 月] Motoyuki Sato

研究論文（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

- 1) Estimation of Biomass of Tree Roots by High Accuracy Ground Penetrating Radar. [Proceeding of the 124th SEGJ Conference, (2011), 291-294] Y. Yokota, A. Gaber, M. Masayoshi, and M. Sato
- 2) Robust estimation of dielectric constant and layer thickness by GPR antenna array. [Proceeding of the 124th SEGJ Conference, (2011), 143-146] Hai Liu, Motoyuki Sato
- 3) フラクタル構造における電磁波透過特性の実験的検証。[信学技報、AP2011-12、(2011)、37-42] 園田潤、丹治紀彦、海野啓明、佐藤源之、林直樹、小幡常啓、若原昭浩
- 4) Near-Surface 3D Imaging of Buried Metallic Objects Using Real-Time Data Fusion of GPR and IGPS. [JpGU International Symposium, (2011)] A. Gaber, Y. Yokota, M. Masayoshi, and M. Sato
- 5) Characterizing subsurface fractures based on forward modeling of EM scattering from synthesized fractal fractures. [JpGU International Symposium, (2011)] Khamis Mansour, Motoyuki Sato
- 6) Fermi GPU を用いたディレクティブによる FDTD 高速計算。[GTC Workshop Japan 2011, (2011), P07-P07] 園田潤、佐藤源之
- 7) FDTD 法を用いた GPR シミュレーションの GPU 実装による高速化。[信学技報、EMCJ2011-50, (2011), 37-42] 小関勇氣、園田潤、昆太一、佐藤源之
- 8) New challenges of Ground Penetrating Radar for Archaeological Survey. [Proc. The Safeguard of Cultural Heritage: A Challenge from the Past for the Europe of Tomorrow, (2011), 189-191] Motoyuki Sato
- 9) Estimation of Biomass of Tree Roots By GPR With High Accuracy Positioning System. [Geoscience and Remote Sensing Symposium (IGARSS), 2011 IEEE]

- International, (2011), 190-193] Yuya Yokota, Masayoshi Matsumoto, Ahmed Gaber, Mark Grasmueck, Motoyuki Sato
- 10) Data interpolation and resampling for a synthetic aperture radar data. [Geoscience and Remote Sensing Symposium (IGARSS), 2011 IEEE International, (2011), 652-655] Shunichi Kusano, M. Sato, Y. Yokota
 - 11) Robust estimation of dielectric constant by GPR using an antenna array. [Geoscience and Remote Sensing Symposium (IGARSS), 2011 IEEE International, (2011), 178-181] Hai Liu, Motoyuki Sato
 - 12) Wideband stepped-frequency ground penetrating radar. [Geoscience and Remote Sensing Symposium (IGARSS), 2011 IEEE International, (2011), 55-58] Takashi Kido, Yuya Yokota, Fumika Kawahara, Motoyuki Sato
 - 13) Application of 3-D migration algorithm to GPR on an irregular ground surface. [Geoscience and Remote Sensing Symposium (IGARSS), 2011 IEEE International, (2011), 870-873] Andrey Klovov, Motoyuki Sato
 - 14) Detection of Inapl contaminated soils by GPR. [Geoscience and Remote Sensing Symposium (IGARSS), 2011 IEEE International, (2011), 842-845] Qi Lu, Xuan Feng, Cai Liu, Hong-Li Li, Motoyuki Sato
 - 15) Model-based polarimetric decomposition using PolInSAR coherence. [Geoscience and Remote Sensing Symposium (IGARSS), 2011 IEEE International, (2011), 1087-1090] Si-Wei Chen, Motoyuki Sato
 - 16) Analysis of electromagnetic wave scattering from a dielectric dihedral structure by polarimetric GB-SAR. [Geoscience and Remote Sensing Symposium (IGARSS), 2011 IEEE International, (2011), 1417-1420] Masayoshi Matsumoto, Motoyuki Sato
 - 17) Assessing The Potential of Groundwater Resources West of Aswan, Egypt, Using ALOS/PALSAR Polarimetric Information. [Geoscience and Remote Sensing Symposium (IGARSS), 2011 IEEE International, (2011), 2761-2764] Ahmed Gaber, Magaly Koch, and Motoyuki Sato
 - 18) Compressive Sensing Applied to Imaging By Ground-Based Polarimetric SAR. [Geoscience and Remote Sensing Symposium (IGARSS), 2011 IEEE International, (2011), 2861-2864] Riafeni Karlina, Motoyuki Sato
 - 19) Moisture & roughness estimation algorithm over permafrost area. [Geoscience and Remote Sensing Symposium (IGARSS), 2011 IEEE International, (2011), 2598-2601] Manabu Watanabe, Keiji Kushida, Koichiro Harada, Masami Fukuda, Motoyuki Sato

- 20) March 11th Japan earthquake and tsunami, beyond the frontiers: what we observed by radar polarimetry. [Geoscience and Remote Sensing Symposium (IGARSS), 2011 IEEE International, (2011)] Motoyuki Sato, Si-Wei Chen
- 21) SAR Remote Sensing of Buried Faults: Implications for Groundwater Exploration in the Western Desert of Egypt. [Sensing and Imaging, (2011)] Ahmed Gaber, Magaly Koch, M. Helmi Griesh, and Motoyuki Sato
- 22) SfM システムを用いた実環境 FDTD 数値モデルの構築。[電子情報通信学会ソサイエティ大会講演論文集、(2011)、225-225] 藤原脩、園田潤、金澤靖、佐藤源之
- 23) IPv6 ユビキタス PC クラスタ自動再構成システムの開発と評価。[電子情報通信学会ソサイエティ大会講演論文集、(2011)、234-234] 園田潤、小野和宗、佐藤源之
- 24) Fermi GPU を用いた GPR シミュレーションの高速化の検討。[電子情報通信学会ソサイエティ大会講演論文集、((2011)、49-49] 小関勇気、園田潤、昆太一、佐藤源之
- 25) ALOS / PALSAR Subsurface Imaging of A Buried Foundation in the Western Desert, Egypt. [Geological Society of America, Abstracts with Programs, 43 (5), (2011), 140-140] GABER, Ahmed, KOCH, Magaly, SATO, Motoyuki, and ELBAZ, Farouk
- 26) Scattering mechanism analysis and deorientation effect investigation for oriented built-up areas using ALOS/PALSAR PolInSAR data sets. [3rd ALOS-2/3 Workshop, (2011)] Si-Wei Chen, Motoyuki Sato
- 27) FDTD 法における丸め誤差伝播の定量化。[電学研資、EMT-11-107、(2011)、7-11] 小関勇気、園田潤、昆太一、佐藤源之
- 28) New GPR system for accurate velocity and thickness estimation of snow and ice on a frozen lake. [Proceedings of the 10th SEGJ International Symposium, (2011), 247-250] Hai Liu, Motoyuki Sato
- 29) Land subsidence damage detection and imaging using 3D-GPR in Iwaki city, Japan. [Proceedings of the 10th SEGJ International Symposium, (2011), 380-383] A. Gaber, Y. Yokota, and M. Sato
- 30) Velocity spectrum analysis for dynamic groundwater level detection by GPR. [信学技報, (2011), 59-64] Hai Liu, Yuya Yokota, Motoyuki Sato
- 31) 3D GPR Signal Processing for Detecting Natural Disaster Damages. [信学技報, 111 (312), (2011), 71-75] A. Gaber, Y. Yokota, and M. Sato
- 32) Hand-Held GPR Imaging Using Migration for Irregular Data. [IEEE Journal

- of Selected Topics in Applied Earth Observations and Remote Sensing, 4 (4), (2011), 799-803] Xuan Feng, , Motoyuki Sato, Cai Liu
- 33) SAR Remote Sensing of Buried Faults: Implications for Groundwater Exploration in the Western Desert of Egypt. [Sensing and Imaging: An International Journal, 12 (3), (2011), 133-151] Ahmed Gaber, Magaly Koch, M. Helmi and Motoyuki Sato
- 34) Acceleration of FDTD Method Using a Novel Algorithm on the Cell B.E.. [IEICE Trans. Inf. & Syst, E94-D (12), (2011), 2338-2344] S.Endo, J.Sonoda, M. Sato, and T. Aoki
- 35) Humanitarian demining sensor ALIS and its deployment in Cambodia. [International conference on Microwaves, Antenna, Propagation & Remote sensing, (2011)] Motoyuki Sato
- 36) SfM システムで構築した実環境 FDTD 数値モデルと GPU による高精度高速電波環境解析。[信学技報、PRMU2011-162、(2012)、167-172] 小関勇気、藤原脩、園田潤、金澤靖、佐藤源之
- 37) 3 次元 MW-FDTD 並列計算を用いた大規模都市モデルの雷放電電磁界解析。[信学技報、EST2011-86、(2012)、17-22] 及川貴瑛、園田潤、本間規泰、池川豊年、佐藤源之
- 38) GPU を用いたディレクティブによる FDTD 法的高速化と室内電波環境解析への応用。[信学技報、EMCJ2011-114、(2012)、19-24] 園田潤、佐藤源之
- 39) ALOS / PALSAR full polarimetric observations of the Iwate–Miyagi Nairiku earthquake of 2008. [International Journal of Remote Sensing, 33 (4), (2012), 1234-1245] Manabu Watanabe, Chinatsu Yonezawa, Joji Iisaka & Motoyuki Sato
- 40) 3 次元 MW-FDTD 並列計算を用いた雷放電電磁界における放電回路角度依存性の解析。[電子情報通信学会総合大会講演論文集、(2012)、335-335] 及川貴瑛、園田潤、本間規泰、佐藤源之
- 41) GPU を用いた FDTD 法によるポインティングベクトル分布のリアルタイム可視化。[電子情報通信学会総合大会講演論文集、(2012)、356-356] 小関勇気、園田潤、金澤靖、佐藤源之
- 42) Kinect による室内電波環境解析のための FDTD 数値モデル構築。[電子情報通信学会総合大会講演論文集、(2012)、357-357] 嶺岸琢磨、小関勇気、園田潤、金澤靖、佐藤源之
- 43) GPU クラスタにおけるモデル分割を用いた FDTD 法による地中レーダシミュレーションの高速化。[電子情報通信学会総合大会講演論文集、(2012)、S10-S11] 園田潤、小関勇気、昆太一、佐藤源之

総説・解説記事（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

- 1) 広帯域レーダによる埋設物イメージング：カンボジア地雷除去への適用。[電気学会電気学会論文誌 A、132（1）、（2012）、1-4] 佐藤源之

本年度の研究成果

震災に際して、我々の開発するレーダ技術を利用したいいくつかの社会貢献をめざした。その一つが福島県いわき市からの要望による異常出水の地中レーダによる原因究明である。2011 年 4～7 月に現地での計測を数回行い、過去の鉱山活動との関連が認められるが、当面の危険はないことを市役所を通じて現地住民に説明を行った。

SAR（合成開口レーダ）は通常衛星に搭載され、地上の観測を行うリモートセンシングに使われているが GB-SAR（地表設置型合成開口レーダー：GB-SAR ジービーサー と発音）は地表に設置した合成開口レーダー装置である。我々は地表面や崖面の画像を 3 次元的に作成するのに利用している。時間をおいて繰り返し GB-SAR 計測をすることで、微小な地表面の変位計測が可能になる。これを干渉測定（インターフェロメトリ計測）と呼ぶ。干渉計測を適用すれば地肌が露出する崖面について、1cm 以下の変位も計測が可能である。

我々は岩手・宮城内陸地震によって発生した地滑で被災した車両の搜索を現地で行うなど、宮城県・栗原市と協力して実践的な電波科学による防災・減災技術の検証を行ってきた。栗原市では同市荒砥沢地域の大崩落現場をジオパークとして保存することなどを想定しながら、2 次災害防止のための崖面モニタリングの方法について検討していたが、GB-SAR がこの目的にふさわしいことが分かった。東北大学は栗原市と連携協力協定を締結し、GB-SAR による地滑り計測手法の有効性を検証する目的で、荒砥沢地区をモデルケースとしたリアルタイム連続モニタリングシステムを 2011 年 11 月に設置した。

GB-SAR による崖面モニタリングの初期実験では高さ 100m、幅 400m 程度の範囲を繰り返し計測した。3 日間に見られた地表面の変位では 0.2mm 程度の変化が捉えられた。

GB-SAR は従来手法に比べ以下の利点がある。

- ・GPS、反射鏡を利用するレーザー計測、ひずみ計、伸張計など従来手法では、計測ポイントが固定される。
- ・レーザー計測では濃霧の場合計測不能である。
- ・GB-SAR はすべての位置の面的な情報が得られる。

本活動は今後 5 年間程度の継続を栗原市と協力して実施することを予定している。

本技術を利用して女川町の津波被災地域での地盤変位を計測し、潮位変化が地盤に与える影響を検討した。

横田 裕也 YOKOTA Yuya 助教

生年月日 / 1982 年 4 月 13 日

東北アジア研究センター基礎研究部門資源環境科学研究分野

出身学校

九州大学・情報工学部 2005 年卒業

出身大学院

九州大学・総合理工学府・量子プロセス理工学専攻修士課程 2007 年修了

九州大学・総合理工学府・量子プロセス理工学専攻博士課程 2010 年修了

取得学位

工学博士九州大学 2010 年

略歴

2010 年～現在 東北大学東北アジア研究センター 助教

研究経歴

「高精度地中レーダを用いた樹根計測によりバイオマス推定の研究」2010 年 4 月～現在

「超短パルス反射計を用いた LHD プラズマの密度分布測定の研究」2007 年 4 月～
2010 年 3 月

所属学会

物理探査学会

所属クラスター

情報・通信クラスター、地球・環境クラスター

専門分野

電磁波応用計測、リモートセンシング、地下計測工学

研究課題

- ・リアルタイム画像処理合成開口レーダの実用化に関する技術開発
- ・最適空間サンプリングによる地雷検知用レーダイメージングの効率化

研究キーワード

地中レーダ、合成開口レーダ

国際会議 発表・講演 (2011 年 4 月～2012 年 3 月)

- ・IEEE Geoscience and Remote Sensing Symposium (2011 年 7 月 24 日～2011 年

7月29日、Vancouver、Canada) 口頭発表 (一般)

- ・ 10th SEGJ international conference (2011年11月20日～2011年11月23日)
口頭 (一般)

国内会議 発表・講演 (2011年4月～2012年3月)

- ・ 物理探査学会 第124回学術講演会 (2011年5月10日～2011年5月12日)
口頭 (一般)
- ・ 物理探査学会 第125回学術講演会 (2011年9月13日～2011年9月15日)
口頭 (一般)

研究論文 (2011年4月～2012年3月)

- 1) ESTIMATION OF BIOMASS OF TREE ROOTS BY GPR WITH HIGH ACCURACY POSITIONING SYSTEM [IEEE Geoscience and Remote Sensing Symposium, (2011)] Yuya Yokota, Masayoshi. Matsumoto, Ahmed Gaber, Mark Grasmueck, Motoyuki Sato
- 2) WIDE BAND STEPPED-FREQUENCY GROUND PENETRATING RADAR. [IEEE Geoscience and Remote Sensing Symposium, (2011)] Takashi Kido, Yuya Yokota, Fumika Kawahara, Motoyuki Sato

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見などについて

地中レーダは電磁波の地下物体からの反射を利用した地下計測方法であり、地下構造を高速かつ高精度に可視化できる手法として研究が進められている。二次元走査を行う場合、走査平面を数十 cm 間隔に数 cm の誤差でアンテナを走査する必要があるが、従来の測距方法では難しかった。レーザを用いた測距システムと地中レーダを組み合わせた 3DGPR により高精度な走査が可能になり、より明瞭な地中イメージを得ることが可能になった。我々のグループは 3DGPR を使用して古墳での計測を行い、地中にある構造物のイメージングに成功した。発掘許可がおりない古墳にとっては、発掘することなく内部構造を可視化できる 3DGPR は有効な測定方法である。

3DGPR を用いて、樹根のバイオマス推定を行った。二酸化炭素排出問題に関して森林バイオマスの評価が必要であり、これまで衛星 SAR を利用した森林のバイオマス計測が研究されてきた。樹根には、地表部に匹敵するバイオマスがあると指摘されながらこれまで正確な計測手法が無かった。

3DGPR を用いて樹根を計測した場合でも、実際の根の分布を知ることができないため、これまで確かめることができなかった。2010年11月に開発した地中レーダシステムの樹根測定に対する精度を確かめるために測定した樹根の掘り上げを行った。3DGPR を使って計測することにより、これまででは難しかった、樹根の水平方向へ

の広がりを実測することができた。直径が5cm以上の樹根には対応した位置で信号が得られていることが分かった。土壌の条件や根の分布状況にも左右されるが3直径cm以上の根は計測できる予想され、30パーセント程度の誤差でバイオマス推定が可能である。

佐藤 大介 SATO Daisuke 助教

生年月日 / 1974 年 1 月 17 日

東北アジア研究センター防災科学研究拠点

出身学校

東北大学・文学部・国史学科 1996 年 3 月卒業

東北大学・文学研究科・博士後期課程 2003 年 11 月退学

取得学位

博士（文学）東北大学 2005 年

略歴

2004 年～2006 年 東北大学大学院文学研究科 COE フェロー

2006 年～2007 年 東北大学大学院文学研究科専門研究員

2007 年～2010 年 東北大学東北アジア研究センター教育研究支援者

研究経歴

1996 年～現在 近世羽州村山郡における地域リーダー層の社会活動とネットワークの研究

1999 年～現在 旧仙台藩領・東北地方における実践を踏まえた歴史資料保全学の構築

2000 年～現在 仙台藩領における地域リーダー層の社会活動の研究

2007 年～現在 近世近代移行期の奥羽間における地域間交流の研究

2007 年～現在 19 世紀仙台藩領における災害と社会史・政治史の研究

所属学会

歴史学研究会 日本史研究会 東北史学会

学会活動

歴史学研究会 1996 年～現在

日本史研究会 1996 年～現在

東北史学会 1996 年～現在

所属クラスター

日本近世史

専門分野

地域史、地域間交流史、災害史、歴史資料保全学

研究課題

- ・ 18 世紀末～ 19 世紀奥羽地方における地域リーダーの社会的役割
- ・ 19 世紀仙台藩での災害を踏まえた社会史・政治史の研究
- ・ 近世・近代移行期奥羽両国間の峠道・新道開削事業の社会的背景と意義
- ・ 旧仙台藩領を中心とする東北地方での実践を踏まえた歴史資料保全学の構築

研究キーワード

地域リーダー、災害と社会、地域間交流、歴史資料保全

学外の社会活動（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

旧仙台藩領の宮城県および岩手県南部での歴史資料保全活動（2003 年～現在）

行政機関・企業・NPO 等参加（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク 事務局長（2007 年 4 月～現在）

相馬市史 近世史部会 調査専門員

学内活動（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

東北アジア研究センター研究推進委員会（2010 年 4 月～現在）

東北アジア研究センターシンポジウム企画委員会（2010 年 4 月～現在）

国内会議 発表・講演（2011 年 4 月～ 2012 年 3 月）

- ・ 佐藤大介「歴史遺産に未来を — 東日本大震災における歴史資料レスキュー —」、歴史学研究会大会緊急集会、2011 年 5 月 22 日、青山学院大学青山キャンパス、査読無。
- ・ 佐藤大介「東日本大震災と歴史資料保全」、山梨県ミュージアムネットワーク会議研修会、於・山梨県立博物館、2011 年 6 月 2 日、査読無。
- ・ 佐藤大介「3.11 大震災での歴史遺産レスキュー — NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワークの活動」、大崎家供養会、2011 年 6 月 26 日 於・加美町長興寺、査読無。
- ・ 佐藤大介「歴史遺産を未来へ 3.11 大震災での歴史資料保全活動」、せんだい豊齢学園ふるさと文化コース第 1 学年「社会貢献活動へ向けて」、於／仙台市シルバーセンター、2011 年 9 月 30 日、査読無。
- ・ 佐藤大介「遠藤家文書「発見」の経緯 450 年の時を越えて」、歴史シンポジウム in 白石「南奥羽の戦国世界 ～新発見！遠藤家文書に見る戦国大名の外交～」、於／白石市文化体育活動センターホワイトキューブ、2011 年 12 月 10 日、査読無。
- ・ 佐藤大介「3.11 大震災での歴史資料保全活動」、平成 23 年度白石市民大学、於・白石市中央公民館、2011 年 10 月 18 日、査読無。
- ・ 佐藤大介「3.11 大震災と宮城資料ネットの歴史資料レスキュー — 活動から見えてきたこと —」、文化財保存修復学会シンポジウム「文化財をまもる — 災害から文

化財をまもる — 大規模自然災害における文化財レスキュー 阪神・淡路から東日本大震災」基調講演、2011 年 12 月 3 日、国立民族学博物館、査読無（依頼）。

- 佐藤大介「さむらいたちの天保飢饉 — 藩士と藩主から見る」、せんだい豊齢学園ふるさと文化コース第 2 学年「仙台藩の武士と暮らし」、於・仙台市シルバーセンター、2012 年 2 月 6 日、査読無。
- 佐藤大介「3.11 大震災 ふるさとの歴史を守る — 宮城県での歴史資料レスキューから」大学コンソーシアムひょうご神戸設立 5 周年記念シンポジウム 震災と復興「人と文化が支える震災復興」、於・神戸大学百年記念館、2011 年 2 月 10 日、査読無。

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

若手研究(B)研究代表者 2008 年度～2010 年度

[18～19 世紀における奥羽両国の地域間交流と地域形成に関する社会史研究]

著書（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

- 1) 平川新・佐藤大介編『歴史遺産を未来へ』、東北大学東北アジア研究センター報告 3 集、全 99 頁、2011 年、査読無。

研究論文（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

- 1) 佐藤大介「歴史遺産を未来へ — 東日本大震災における歴史資料レスキュー」、『歴史学研究』884 号、27-29 頁、2011 年、査読無（依頼原稿）。
- 2) 佐藤大介「歴史学における過去の清算 — 仙台版「古文書返却の旅」」、平川新・佐藤大介『歴史遺産を未来へ』所収、19-30 頁、2011 年、査読無。
- 3) 佐藤大介「菊田源兵衛家の社会的ネットワーク — 「壁紙文書」の発見と分析を通じて」、平川新編『よみがえる町の記憶 — 通町・堤町・北山界隈の歴史 — 』東北アジア研究センター報告 4 号、83-102 頁、2012 年、査読無。
- 4) 佐藤大介「天保から幕末の通町 — 東昌寺門前・菊田源兵衛家の社会活動」、平川新編『よみがえる町の記憶 — 通町・堤町・北山界隈の歴史 — 』東北アジア研究センター報告 4 号、51-82 頁、2012 年、査読無。

総説・解説記事（2011 年 4 月～2012 年 3 月）

- 1) 佐藤大介「通町・検断屋敷「壁紙文書」」、平川新編『よみがえる町の記憶 — 通町・堤町・北山界隈の歴史 — 』東北アジア研究センター報告 4 号、103-138 頁、2012 年、査読無。
- 2) 佐藤大介「三. 一一大震災から歴史資料を守る — 宮城資料ネットの活動」、『歴史教育・社会科教育年報 東日本大震災と民主主義の課題』、47-56 頁、2012 年、査読無（依頼）

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見などについて

2011 年度は、東北アジア研究センター「歴史資料保全のための地域連携」プロジェクト研究ユニット（2007～11 年度）の事務代表者として、東日本大震災で被災した地域の歴史資料に対するレスキュー活動に取り組んだ。被災地で 87 回の状況確認調査と、51 回のレスキュー活動を実施し、44 件の個人所蔵の歴史資料を仙台市に一次搬出して応急処置に当たっている。

活動に当たっては、これまでのプロジェクト研究で築いてきた所蔵者、地元行政や市民との関係を通じて、被災した歴史資料の情報を迅速に収集し、多くの歴史資料を保全する事が出来た。このことは、プロジェクト研究ユニットで体系化してきた地域の歴史資料保全論の有効性を実地に証明した結果となった。

この経験を踏まえ、全国各地における保全活動とネットワーク構築の必要性を、関連学会や市民講座で発表し、「次の災害」に備えた地域歴史資料保全の新たな手法について普及に努めた。

東北大学東北アジア研究センター

〒980-8576

仙台市青葉区川内 41

TEL / 022-795-6009 FAX / 022-795-6010

センター長・佐藤 源之

編集担当・岡 洋樹

2012 年 3 月 31 日発行

無断転載を禁ずる

